西新町遺跡Ⅸ

－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第22次調査報告書－

福岡県文化財調査報告書　第221集

西新町遺跡第22次調査地遠景（西から）

1号住居跡出土朝鮮半島系土器

タタキ痕拡大

巻頭図版２

西新町遺跡出土　朝鮮半島系土器

1．玉鋳型

4．石錘

2．青銅器

5．飯蛸壺

3．勾玉・玉未製品

6．製塩土器

西新町遺跡出土　特殊遺物

1．西新町遺跡出土
高取焼　碗類

2．同上　鉢類

3．同上　瓶類

4．同上　皿類

序

本書は、福岡県立修猷館高等学校校舎改築事業に伴い、福岡県教育委員会が平成19年度に発掘調査を実施した西新町遺跡の調査記録です。

西新町遺跡は、博多湾に沿って形成された砂丘上に営まれた、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡です。昭和49年にはじめて発掘調査が行われて以降、朝鮮半島や近畿・山陰地方などに由来する遺物が多数発見されました。とくに、竪穴住居に設けられた竈の導入は列島内でも最古段階に位置づけられます。こうした成果から、現在では国内外の諸地域と活発な交流を行っていた遺跡として、全国的に注目を集めています。

今回報告する第22次調査でも、朝鮮半島系あるいは近畿・山陰系の遺物が出土し豊かな交流の様子を改めて確認するとともに、これまで考えられていた集落の範囲がさらに広がることが明らかとなり、当時の景観が徐々に復元できるようになってきました。

残念ながら今回の調査地は記録保存となりましたが、本書を通じて往時の人々の暮らしの一端に触れ、歴史への憧憬を深めていただければ幸いです。さらに、教育や学習の資料として活用され、文化財愛護思想を高めていただければと存じます。

最後になりましたが、発掘調査や整理作業、報告書作成に際して、地元の方々をはじめ関係各位の皆様に御支援・御協力いただいたことに、深く感謝いたします。

平成21年3月31日

福岡県教育委員会教育長
森山　良一

例　言

1．本書は、平成19年度に福岡県教育委員会が実施した、福岡県立修猷館高等学校改築事業に係る埋蔵文化財の発掘調査報告書で、同校敷地内における埋蔵文化財発掘調査報告書の9冊目にあたる。
2．本書に掲載した遺跡は、福岡市早良区西新6－1－10に所在する西新町遺跡で、福岡市教育委員会実施の埋蔵文化財発掘調査を含めると第22次調査にあたる。福岡市教育委員会の調査番号は0757である。
3．本書に掲載した遺構写真は、下原幸裕のほか小田和利・岡寺未幾が撮影し、空中写真は有限会社空中写真企画に委託し気球撮影を行った。また、遺物写真は北岡伸一が撮影した。
4．本書に掲載した遺構図は下原・小田・吉村靖徳・重藤輝行（現・佐賀大学文化教育学部）・岡寺・城門義廣のほか、小嶋篤（福岡大学大学院）・夏木大吾（福岡大学）・高橋茂子・野北祐子・宮里好子・宮原邦子・山田ヤス子・渡邊廣子が作成した。遺物の実測図は岸本圭・下原・城門のほか、荒川妙・栗林明美・坂田順子・田中典子・棚町陽子・寺岡和子・中村洋子・橋之口雅子・久富美智子・平田春美・堀江圭子・若松三枝子が作成した。また、製図は城門・豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓・安永啓子・山田智子・辻清子がこれを補助した。
5．本書で使用した座標は国土座標第Ⅱ系に拠っている。
6．本書で使用した方位はいずれも磁北で、座標北からは西偏約6°40′である。
7．本書で使用した標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準とする。
8．図版中の遺物に付した数字は、本文中の実測図番号に対応する。
9．本書で使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「福岡」及び福岡市発行の1/2,500遺跡分布図を改変したものである。
10. 本書に掲載した図面・写真・出土遺物は、九州歴史資料館及び福岡県教育庁文化財保護課で保管・管理している。
11. 本書の執筆は第2部以外を下原が行った。第2部は以下に記した各氏が担当し、複数による執筆の場合は文末に文責を示した。なお、第2部第1・2・7節は佐賀大学文化教育学部　重藤輝行氏、同第6節は前原市教育委員会　平尾和久氏より玉稿を賜った。記して謝意を表します。

第2部第1章第1節…重藤輝行
第2節…重藤・吉田東明・吉村靖徳
第3節…吉田
第4節…岡寺　良（九州歴史資料館）
第5節…大庭孝夫（九州歴史資料館）
第6節…平尾和久
第7節…重藤・下原幸裕
第8節…下原
第2章第1・2節…秦　憲二

12. 本書の編集は岸本・坂本真一の協力を得て下原が行い、巻頭図版は大庭孝夫・秦憲二・坂本が、図版は岸本が行った。

目　次

第１部　第 22 次調査の報告

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　調査・整理報告書作成の組織 …… 3

第２章　西新町遺跡の地理的・歴史的環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
　第３節　既往の調査 …… 7

第３章　調査の内容 …… 9
　第１節　調査の概要 …… 9
第２節　弥生・古墳時代の遺構と遺物 …… 10
　　第１項　竪穴住居跡と出土土器 …… 10
　　第２項　その他の出土土器 …… 44
　　第３項　竪穴住居跡出土の石器 …… 46
　第３節　近世以降の遺構と遺物 …… 48
　　第１項　主要な遺構と出土遺物 …… 48
　　第２項　窯道具 …… 62
　　第３項　土製・陶製品 …… 62
　　第４項　石器・石製品 …… 64
　　第５項　金属製遺物 …… 64
第４章　小　結 …… 67

第２部　総　括

第１章　古墳時代篇 …… 68
　第１節　西新町遺跡出土の土師器の編年 …… 68
　第２節　西新町遺跡出土の朝鮮半島系遺物について …… 82
　第３節　西新町遺跡の竪穴住居作りつけカマド …… 95
　第４節　西新町遺跡出土の玉製品・玉生産関連遺物 …… 103
　第５節　西新町遺跡出土石錘について …… 107
　第６節　蛸壺と製塩土器 …… 117
　第７節　古墳時代集落の展開 …… 127
　第８節　まとめ …… 134
第２章　近世・近代篇 …… 135
　第１節　西新町遺跡出土の土器・陶磁器 …… 135
　第２節　その他の近世・近代遺物 …… 153

図版目次

巻頭図版１　上段．調査地遠景（西から）　中段．１号住居跡出土朝鮮半島系土器
　　下段．タタキ痕拡大
巻頭図版２　西新町遺跡出土朝鮮半島系土器
巻頭図版３　西新町遺跡出土特殊遺物
　　１．玉鋳型　２．青銅器　３．勾玉・玉未製品　４．石錘　５．蛸壺　６．製塩土器
巻頭図版４　１．西新町遺跡出土高取焼碗類　２．同上鉢類　３．同上瓶類　４．同上皿類
図版１　１．調査区遠景（東から）　２．調査区近景（南から）
図版２　１．Ⅰ・Ⅲ区完掘状況（上が北）　２．Ⅰ区全景（上が北）〔左〕
　　３．Ⅲ区全景（上が北）〔右〕
図版３　１．Ⅱ区全景（上が北）　２．竪穴住居跡群全景（上が北）
図版４　１．１号竪穴住居跡検出状況（南東から）
　　２．１号竪穴住居跡カマド遺物出土状況（南西から）
　　３．１号竪穴住居跡半島系土器出土状況（南西から）
　　４．１号竪穴住居跡カマド完掘状況（南西から）
図版５　１．２号竪穴住居跡（北西から）　２．３・６号竪穴住居跡（西から）
　　３．４号竪穴住居跡（西から）
図版６　１．３・５・６号竪穴住居跡（南から）　２．７号竪穴住居跡（北東から）
図版７　１．８号竪穴住居跡（南東から）　２．８号竪穴住居跡カマド（南から）
　　３．９・１０号竪穴住居跡（南東から）
図版８　１．12 号土坑（北から）　２．15 号土坑（西から）　３．17 号土坑（北西から）
図版９　１．22 号土坑（西から）　２．23 号土坑（北から）　３．31 号土坑（南から）
図版10　１．34 号土坑（南から）　２．42 号土坑（南西から）　３．45 号土坑（北から）
図版11　１．１・２号ピット（北から）　２．３号ピット（西から）
　　３．４号ピット（北から）　　４．５号ピット（西から）
図版12　１．１号溝土層（西から）　２．２号溝土層（東から）　３．４号溝土層（西から）
　　４．６号溝土層（東から）
図版13　１～３号竪穴住居跡出土土器
図版14　３～６号竪穴住居跡出土土器
図版15　６・７号竪穴住居跡出土土器
図版16　８・10 号竪穴住居跡及びその他の出土土器
Fig. 1　その他の近世陶磁器１…… 153
Fig. 2　その他の近世陶磁器２…… 153
Fig. 3　土製品１…… 155
Fig. 4　土製品２…… 155
Fig. 5　土製品３…… 155
Fig. 6　土製品４…… 155
Fig. 7　ミニチュア土製品…… 155
Fig. 8　貯金箱１…… 156
Fig. 9　貯金箱２…… 156
Fig. 10　ガラス瓶…… 156
Fig. 11　石　硯…… 156
Fig. 12　その他の近代遺物…… 156

挿図目次

第 1 図　西新町遺跡の位置 …… 1
第 2 図　遺跡分布図（1/50,000） …… 6
第 3 図　調査地周辺図（1/6,000） …… 8
第 4 図　調査区配置図（1/2,000） …… 9
第 5 図　調査区区割図（1/500） …… 10
第 6 図　西新町遺跡第 22 次調査遺構配置図（1/500） …… 11
第 7 図　1 号竪穴住居跡及びカマド実測図（1/60・1/30） …… 12
第 8 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3） …… 13
第 9 図　2 ・ 3 号竪穴住居跡実測図（1/60） …… 14
第 10 図　2 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 （1/3） …… 15
第 11 図　2 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 （1/3・1/4） …… 16
第 12 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 （1/3・1/4・1/6） …… 18
第 13 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 （1/3・1/4） …… 20
第 14 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図 3 （1/3） …… 21
第 15 図　4 ・ 5 号竪穴住居跡実測図（1/60） …… 23
第 16 図　4 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 （1/3） …… 24
第 17 図　4 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 （1/3） …… 25
第 18 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 （1/3） …… 26
第 19 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 （1/3） …… 27
第 20 図　6 号竪穴住居跡実測図（1/60） …… 28
第 21 図　6 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3） …… 29
第 22 図　7 ・ 8 号竪穴住居跡実測図（1/60） …… 31
第 23 図　7 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 （1/3・1/4・1/6） …… 32
第 24 図　7 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 （1/3・1/4） …… 33
第 25 図　7 号竪穴住居跡出土土器実測図 3 （1/3） …… 34
第 26 図　8 号竪穴住居跡カマド実測図（1/30） …… 37
第 27 図　8 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 （1/3・1/4） …… 38
第 28 図　8 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 （1/3） …… 40
第 29 図　8 号竪穴住居跡出土土器実測図 3 （1/3） …… 42
第 30 図　9 ・ 10 号竪穴住居跡実測図（1/60） …… 43
第 31 図　9 ・ 10 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3） …… 44
第 32 図　その他の出土土器実測図（1/3） …… 45
第 33 図　竪穴住居跡出土石器実測図（1/1・1/2） …… 47
第 34 図　12・15・17 号土坑実測図（1/30） …… 49
第 35 図　22・23・31・34・45 号土坑実測図（1/30） …… 50
第 36 図　土坑出土土器実測図（1/3・1/4・1/6） …… 51
第 37 図　34 号土坑出土土器実測図（1/3・1/4） …… 52
第 38 図　42・43 号土坑実測図（1/60） …… 53
第 39 図　45 号土坑出土土器実測図 1 （1/3） …… 54

第 40 図　45 号土坑出土土器実測図 2（1/3・1/4）…… 55
第 41 図　1 ～ 5 号ピット実測図（1/30）…… 56
第 42 図　その他の出土土器実測図 1（1/3）…… 57
第 43 図　その他の出土土器実測図 2（1/3・1/4）…… 59
第 44 図　窯道具実測図（1/3）…… 61
第 45 図　土製・陶製品実測図（1/2）…… 63
第 46 図　石器・石製品実測図（1/1・1/2）…… 65
第 47 図　金属製品実測図及び銭貨拓本（1/1・1/2）…… 66
第 48 図　西新町遺跡出土の小形丸底壺、小形丸底鉢の型式分類（1/3）…… 70
第 49 図　時期区分の指標として取り上げたその他の器種（1/6）…… 72
第 50 図　精製器種を中心とした西新町遺跡出土土師器編年（1/6）…… 75
第 51 図　福岡平野周辺出土の手焙形土器（1/6）…… 75
第 52 図　西新町遺跡出土朝鮮半島系土器（1）（1/6）…… 83
第 53 図　西新町遺跡出土朝鮮半島系土器（2）（1/3・1/6）…… 84
第 54 図　西新町遺跡出土朝鮮半島系土器（3）（1/6）…… 85
第 55 図　朝鮮半島における類例（1）（1/6）…… 86
第 56 図　朝鮮半島における類例（2）（1/6）…… 87
第 57 図　全羅南道海南郡新今遺跡Ⅱ段階の土器（1/6）…… 89
第 58 図　朝鮮半島系土器タタキ文様例の拓影（原寸大）…… 91
第 59 図　タタキ文様等の時期別比率等グラフ …… 91
第 60 図　その他の朝鮮半島系遺物（貨幣は実大、ミニチュア鉄器 1/2、鉛片が 2/3）…… 93
第 61 図　西新町遺跡カマドの分類 …… 96
第 62 図　西新町遺跡に並行する時期の朝鮮半島のカマド …… 100
第 63 図　西新町遺跡出土玉・玉生産関連遺物（1）…… 105
第 64 図　西新町遺跡出土玉・玉生産関連遺物（2）…… 106
第 65 図　西新町遺跡出土石錘分類図（1/3・1/4）…… 108
第 66 図　西新町遺跡出土石錘分布図（1/3,000）…… 110
第 67 図　西新町遺跡出土石錘の型式・時期別グラフ …… 110
第 68 図　17 次 7 号住居跡石錘出土状況（1/20）…… 111
第 69 図　17 次 7 号住居跡石錘群の法量 …… 111
第 70 図　漁業用石錘の民俗例 …… 112
第 71 図　Ⅰ類石錘の重量推移 …… 114
第 72 図　Ⅰ類石錘の溝幅推移 …… 114
第 73 図　Ⅰ類石錘のバリエーションと瀬戸内系石錘（1/3）…… 115
第 74 図　飯蛸壺編年表（1/8）…… 118
第 75 図　飯蛸壺形態分類表（上．胴部、下．底部）…… 122
第 76 図　飯蛸壺形態別出土傾向 …… 123
第 77 図　時期別竪穴住居跡数 1〔全体〕…… 127

第 78 図　時期別竪穴住居跡数 2〔県調査分〕 …… 128
第 79 図　西新町遺跡竪穴住居跡の時期別分布図 1（1/2,000） …… 129
第 80 図　西新町遺跡竪穴住居跡の時期別分布図 2（1/2,000） …… 130
第 81 図　藤崎遺跡方形周溝墓配置図（1/1,500） …… 132
第 82 図　土師質小皿・高取焼小皿・椀・鉢編年図（1/8・1/12） …… 136
第 83 図　高取焼仏花瓶・ペコカン徳利・中型甕編年図（1/8・1/12） …… 138
第 84 図　高取焼摺鉢・片口付鉢・片口付摺鉢編年図（1/12） …… 140
第 85 図　高取焼実測図 1（1/6・1/12・1/18） …… 143
第 86 図　高取焼実測図 2（1/12・1/18・1/36） …… 146
第 87 図　土師質土器・軟質施釉陶器実測図（1/6・1/12・1/18） …… 149
第 88 図　須恵焼実測図（1/6） …… 151
第 89 図　その他の近世陶磁器実測図（1/4） …… 153
第 90 図　土製品実測図（1/4） …… 155
第 91 図　近代遺物実測図（2/3・1/4） …… 156

表目次

第 1 表　西新町遺跡調査一覧 …… 8
第 2 表　西新町遺跡 12 ～ 15・17・20・22 次調査における各器種型式の共伴関係 …… 71
第 3 表　周辺遺跡における各器種型式の共伴関係 …… 73
第 4 表　西新町遺跡における在地系土器から外来系土器への転換 …… 76
第 5 表　西新町遺跡弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡等とその時期（1）…… 78
第 6 表　西新町遺跡弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡等とその時期（2）…… 79
第 7 表　西新町遺跡弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡等とその時期（3）…… 80
第 8 表　西新町遺跡弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡等とその時期（4）…… 81
第 9 表　西新町遺跡カマドの時期別比率 …… 98
第 10 表　西新町遺跡カマドの設置別比率 …… 99
第 11 表　西新町遺跡出土石錘一覧 …… 109
第 12 表　玄界灘沿岸地域Ⅰ類石錘出土遺跡一覧 …… 112
第 13 表－ 1　飯蛸壺・製塩土器出土遺構一覧表① …… 120
第 13 表－ 2　飯蛸壺・製塩土器出土遺構一覧表② …… 121
第 14 表　一括資料出土遺構の時期比定根拠 …… 135
第 15 表　第 82 図掲載土器・陶磁器観察表 …… 137
第 16 表　第 83 図掲載土器・陶磁器観察表 …… 139
第 17 表　第 84 図掲載土器・陶磁器観察表 …… 141
第 18 表－ 1　第 85 図掲載土器・陶磁器観察表 …… 144
第 18 表－ 2　第 85 図掲載土器・陶磁器観察表 …… 145
第 19 表－ 1　第 86 図掲載土器・陶磁器観察表 …… 147
第 19 表－ 2　第 86 図掲載土器・陶磁器観察表 …… 148
第 20 表　土師質土器・軟質施釉陶器観察表 …… 150
第 21 表　須恵焼観察表 …… 151
第 22 表　その他の近世陶磁器（Fig. 1・2、第 91 図、巻頭図版 4）観察表 …… 154
第 23 表　土製品・ミニチュア土製品観察表 …… 157
第 24 表　近代遺物観察表 …… 157

第1部　第22次調査の報告
第1章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

県立修猷館高校では、平成10年度より8ヵ年計画で校舎改築事業が実施されてきた。高校の敷地やその周辺の発掘調査により、弥生時代から古墳時代にいたる集落遺跡がひろがり、その上層には近世高取焼関連の遺構を含む近世期の集落遺跡の存在が把握されている。とくに弥生時代終末に位置づけられる土器が、早くに「西新式土器」として学界に紹介されて以降、識者の注目を集めるところとなった。その後の調査で朝鮮半島系土器が多数出土し、列島内でも最初期段階に位置づけられるカマドを有する竪穴住居跡も発見されたこともあって、国内外を問わず「西新町遺跡」の名は認識されるようになった。

こうした中で、平成19年2月に入り福岡県教育庁教育企画部施設課と総務部文化財保護課との間で、平成19年度の改築事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。事業の対象となる旧第二体育館は、平成14年度に既に新たな体育館が建設されているため、今回は解体のみ実施して運動場にするとのことであった。

しかし、解体に伴いコンクリート基礎を撤去する工事も計画されており、遺構を破壊する恐れがあることから、事前に試掘調査を行った。その結果、対象地の北東側では地表から180cmの高さで、南西部では地表から120cmの高さで遺構面を確認し、とくに体育館の西半分に関しては基礎を撤去する際に遺構面を確実に破壊されることが判明した。

そこで、福岡県建築都市部営繕課及び福岡土木事務所と具体的に協議を行い、まず上部構造のみ解体した状態で発掘調査を実施し、調査終了後に基礎を撤去することで合意した。ただし、修猷館高校の改築事業は平成19年度で終了するため、校舎の改築と併行して実施されていた外構工事も年度内に完了させなければならず、工事工程も勘案した上で平成19年11月末から翌年2月までのおよそ3ヶ月間を調査予定期間とすることになった。調査の対象面積は、旧第二体育館の敷地面積に限定したが、おおよそ1,257㎡に及ぶ。

第1図　西新町遺跡の位置

第2節　調査の経過

発掘調査は、体育館の解体が平成19年11月の中旬に終了したことから、11月末から実施することとなった。

まず、11月29日に重機を搬入し、表土の掘削を開始した。前節で述べたように遺構面への影響を勘案し体育館の基礎を残した状態になっているので、その間をグリッド状に掘

削することになった。掘削に伴う排土の置き場が確保できないことから、調査対象地を西からⅠ・Ⅱ・Ⅲ区に分け、第1段階としてⅠ・Ⅲ区の表土を中央のⅡ区に盛り上げ、両区の発掘調査が終了した後に一度埋め戻し、第2段階にⅡ区の発掘調査をすることとした。基礎が残った状態で表土剥ぎを行ったことから、日数を要するかと思われたが、12月1日までの三日間で掘削作業を終了した。

そして、12月1日に調査地である修猷館高校と隣接する西南学院大学に調査の説明を行い、6日に文化財保護課甘木事務所より発掘機材の搬入行い、同日現場にユニットハウスとトイレ、コンテナの搬入・設置を行った。

本来であれば、表土剥ぎが終了した後、すぐに遺構の発掘作業にとりかかる予定であったが、作業員の確保が困難であったことから、10日に作業員の投入となった。しかし、約20名の作業員のうち半数が全くの未経験者であったため、スムーズな作業が行えるようになるまでの程度の期間を要した。

まず、12月10日から19日までは、Ⅰ区において表土剥ぎの際に基礎に阻まれて重機の掘削が及ばなかった部分について掘削を行った。西側から徐々に東側へと作業を進めていったが、進むにつれて重機による表土掘削が実は遺構面のさらに上層の近世期の包含層(整地層)までしか達していなかったことが判明した。この結果をもとに、Ⅲ区ではサブトレンチを設け下層まで掘り進めたところ、やはりⅢ区においても近世の遺物を有する包含層までしか表土掘削が及んでいないことが判明した。Ⅰ区については体育館の基礎の間隔が狭く、複雑であることから、人力で遺構面まで掘り下げた。しかし、この作業にかなりの手間と時間を要したことから、基礎の間隔が広いⅢ区では年が明けた1月7日から改めて重機による掘削を行った。

この表土剥ぎの間、12月11日に光波を用いた基準点測量とレベルによるレベル移動を行った。Ⅰ区での表土掘削は25日に概ね終了したが、この作業と併行して遺構検出と遺構掘削を行ったので、1月9日にはⅠ区の近世遺構の掘削を終えた。この過程でカマドを有する古墳時代の竪穴住居跡を検出したが、ほとんど現代の撹乱により破壊されており、辛うじてカマド部分が残るような状況であった。重機による掘削がこの部分まで及んでおれば、確実にカマドまで削平していたところで、まさに間一髪という状況であった。

Ⅲ区については1月7日から9日にかけて重機による再掘削を行い、Ⅰ区での作業を終えた作業員を順次投入し、遺構の検出と掘削を行った。Ⅲ区では近世の遺構が比較的密に分布しており、掘削と図面作成に手間を要したが、胞衣壺とみられる壺も出土した。

砂丘上に立地する遺跡であるため遺構が崩落しやすく、作業は困難を極め、遺構の写真と図化のために何度も同じ遺構を掘削することもあり、常に時間・風・雨・乾燥との戦いであった。また、Ⅰ区の西部は地表から1m程度で遺構面に達するが、Ⅰ区の東側やⅢ区では地表から2m近くも下がるため、掘削による排土の搬出は困難を極めた。当初ベルトコンベヤーの使用も考慮したが、コンクリート基礎に阻まれ設置が困難であること、高低差があるため相当な危険を伴うことから、断念せざるを得なかった。

それでも、1月30日にはⅠ区とⅢ区のバルーンによる空撮を実施することができた。

Ⅰ区については南半分で弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての住居跡が、遺構検出の時点で確認できていたので、空撮が終了した30日から掘削を開始した。その結果、8軒の竪穴住居跡が重複して営まれていることが判明した。この住居群の箇所を除いて埋め戻しをはじめ、続いてⅡ区の調査

に入る予定であったが、２月５日から９日にかけて、ちょうど隣接する西南学院大学で大学・大学院入学試験が行われていたことから、重機を使用することができなかった。そのため、この間は住居群の調査に専念した。

入学試験が過ぎた２月 12 日からはⅡ区で重機による表土剥ぎを開始した。すでに残された調査期間も少なくなったことから、少々危険を伴ったが作業効率を考え重機による掘削と同時に遺構検出も行った。Ⅰ・Ⅲ区の調査で発掘担当者・作業員ともに要領を得たため、重機による掘削や人力による遺構掘削もスムーズになったが、さらに作業効率を上げるため 18 日から発掘作業員を 10 名追加した。それが功を奏し、22 日に空撮を行うことができた。

空撮終了後には、Ⅱ区で新たに検出した竪穴住居跡を含めた住居群の掘削と写真撮影、図化を行い、２月 28 日に現地での調査を終了し、同日中に現場の撤収作業を行った。調査地については 29 日に施設課に明け渡し、翌日改築工事を実質的に担当する福岡土木事務所に、さらに３月１日には修猷館高校と西南学院大学に調査完了の報告を行った。

なお、これまで文化財保護課で行ってきた西新町遺跡の発掘調査では、修猷館高校の学生やＯＢを対象とした発掘調査の体験や、一般の市民を対象とした現地説明会、調査期間中に調査概要を周知する資料の配布などを行ってきた。しかし、今回の調査では限られた期間内に作業を終えることに専念したため、そのような普及活動を実施することができなかった。高校側からも惜しまれる声が寄せられたが、これに応えることができなかったことは、調査担当者としての力量が及ばなかったことを悔やむばかりである。

第３節　調査・整理報告書作成の組織

第 22 次調査は発掘調査を平成 19 年度に、その後整理作業と報告書作成作業を平成 20 年度に行った。それぞれの組織は次のとおりである。

総括		平成 19 年度	平成 20 年度
福岡県教育委員会	教育長	森山　良一	森山　良一
	教育次長	楠崎洋二郎	楠崎洋二郎
教育企画部	部　長	杉光　誠	杉光　誠
施設課	課　長	今田　義雄	今田　義雄
	課長補佐	濱武　文雄	田中　和敏
	課長技術補佐	栗山　公典	栗山　公典
	施設係長	高山　裕明	木村　武彦
総務部	部　長	大島　和寛	荒巻　俊彦
文化財保護課	課　長	磯村　幸男	磯村　幸男
	副課長	佐々木隆彦	池邊　元明
	参　事	新原　正典	新原　正典
	参事兼課長技術補佐	池邊　元明	小池　史哲
		小池　史哲	伊崎　俊秋

庶務	管理係長	井手　優二	富永　育夫
	主任主事	湯上　大輔	近藤　一崇

調査・報告書作成

文化財保護課	参事補佐兼調査第一係長	小田　和利	小田　和利
	主任技師	岡寺　未幾	
	主任技師	下原　幸裕（調査）	下原　幸裕（報告書）
	参事補佐兼調査第二係長	飛野　博文	飛野　博文
	参事補佐	濱田　信也（整理）	濱田　信也（整理）
	主任技師	城門　義廣	
	大規模遺跡対策班		
	技術主査	重藤　輝行	
	新九州歴史資料館対策班		
	技術主査	吉村　靖徳	

発掘作業員

石井純子・井上節子・岩浅晉治・上田サヨミ・大橋善平・金子由利子・河田茂彦・河端秀子・倉光京子・小嶋篤・小柳和子・境尚子・柴田勝子・柴田徳平・鈴木誠・高橋茂子・鳥飼祐太・夏木大吾・野北祐子・野崎賢治・馬奈木敏光・三角章夫・三角チエ子・御園尾宏治・宮里好子・宮原邦子・本松教恵・柳井順子・山田ヤス子・横溝恵美子・吉田勝善・渡邊廣子

整理作業員

江上佳子・栗林明美・坂田順子・田中典子・棚町陽子・辻清子・土山真弓美・寺岡和子・豊福弥生・中川真理子・中川陽子・中村洋子・橋之口雅子・原カヨ子・久富美智子・平田春美・堀江圭子・安永啓子・山田智子・若松三枝子

調査に際しては、修猷館高校の西村政俊事務長・濱田和雄事務次長に多大な御配慮をいただいた。また、発掘作業員手配では福岡市教育委員会の藏富士寛・山崎龍雄の各氏に御尽力をいただき、現地指導では小田富士雄福岡大学名誉教授および福岡市教育委員会の力武卓治・宮井善朗・菅波正人・今井隆博の各氏に御指導いただいた。また、調査期間中には韓国中原文化財研究院の車勇杰所長のほか20名を超える研究員の方々が視察に訪れ、短時間ではあったが熱心な御指導をいただいた。記して感謝の意を表します。

〔『西新町遺跡』Ⅷの訂正〕

上記の報告書において、図版25の102－7に誤りがありましたので、本書図版16にて訂正いたしますとともに、お詫び申し上げます。

第２章　西新町遺跡の地理的・歴史的環境

当遺跡に関する地理的・歴史的環境については、文末に挙げた既刊の報告書で詳述しているため、ここでは概要を述べるにとどめる。

第１節　地理的環境

西新町遺跡は福岡市の中央部にある早良平野の東北端に位置する。早良平野は、中央部を北流する室見川などにより形成された沖積平野で、規模は南北約８km、東西約 4.5km である。東は油山から北へ派生する飯倉丘陵・平尾丘陵、南は脊振山地、西は脊振山地から北へ派生する飯森山・叶ヶ岳に囲まれ、逆三角形を呈する。遺跡は平野北縁部の砂丘上に立地する。

この砂丘は地質学的には「箱崎砂層」と呼ばれ、石英質や真砂質が主体となる粗砂層である。砂丘は微地形でみると三列からなり、砂丘と砂丘間低地がある。ここでは便宜的に形成過程を考慮し、陸側から第一砂丘、第二砂丘、第三砂丘と呼ぶ。西新町遺跡は第二砂丘上と、第二砂丘と第三砂丘の間にある砂丘間低地にかけて形成されている。最も海に近い第三砂丘はちょうど元寇防塁の線上に位置し、中世以降に形成されたと推定されており、西新町遺跡が営まれた時代には目の前に海が広がっていたことになる。

第２節　歴史的環境

ここでは西新町遺跡（１）が営まれた弥生・古墳時代と、近世期の遺跡を中心に概述する。

早良平野では弥生時代前期末から中期にかけて、西新町遺跡・姪浜遺跡（７）・有田遺跡群（20）・吉武遺跡群（17）・重留遺跡群（27）・東入部遺跡（28）など平野の隅々にまで集落遺跡の展開がみられる。なかでも吉武遺跡群では当該期の拠点集落が営まれ、甕棺墓群や墳丘墓の発掘により銅剣・銅矛・銅戈・銅鏡などが多種多様な青銅製品が出土した。平野内では他に、飯倉遺跡群〔銅剣〕（22）・姪浜遺跡〔漢式三翼鏃〕・有田遺跡群〔銅戈〕・野方久保遺跡〔銅剣〕（13）・東入部遺跡〔銅剣・銅釧〕などで青銅製品が出土した。海浜部の砂丘地帯では姪浜遺跡のほか、西新町遺跡や西に近接する藤崎遺跡（２）でも甕棺墓地が形成される。ちなみに、西新町遺跡の第８次調査で出土した弥生時代中期のガラス製容器は舶載品である。

弥生時代後期から終末になると、西新町遺跡・飯倉遺跡群・吉武遺跡群・野方中原遺跡（12）・野方久保遺跡などで集落が営まれる。野方中原遺跡では楕円形（長軸 110 m以上、短軸 90 m）と方形（30 m× 25 m）の２つの環濠がみられ、墓地からは獣帯鏡や内行花文鏡などの銅鏡が出土した。なお、宮ノ前遺跡（10）で調査されたＣ地点１号墳は長軸 14 m、短軸 12 mの不正楕円形を呈する墳丘墓で、墳頂に１基、墳裾に３基の箱式石棺が営まれ、古墳成立前夜の一様相をみることができる。

古墳時代前期には西新町遺跡・有田遺跡群・野方久保遺跡・入部遺跡などで弥生時代以来の集落が継続している。この中で、西新町遺跡は朝鮮半島系の土器が豊富に出土し、弥生時代終末に遡ってカマドが導入されるなど、国際交流の門戸として発展した様子が窺える。さらには、畿内系・山陰系・吉備系など多様な地域の土器が搬入され、その模倣品も多く製作されるなど国内的にも活発な交流の場であったことが読み取れる。

1. 西新町遺跡
2. 藤崎遺跡
3. 東畑山窯跡
4. 西畑山窯跡
5. 元寇防塁
6. 能古焼窯跡
7. 姪浜遺跡
8. 五島山古墳
9. 拾六町ツイジ遺跡
10. 宮ノ前遺跡
11. 広石C遺跡
12. 野方中原遺跡
13. 野方久保遺跡
14. 野方塚原遺跡
15. 羽根戸遺跡群
16. 太田遺跡
17. 吉武遺跡群
18. 城田遺跡
19. 浦江遺跡
20. 有田遺跡群
21. 原遺跡
22. 飯倉遺跡群
23. 野芥遺跡群
24. 免遺跡
25. 次郎丸遺跡
26. 田村遺跡
27. 重留遺跡
28. 東入部遺跡

第2図　遺跡分布図（1/50,000）

前期の古墳は非常に限られるが、室見川左岸の独立丘陵上に五島山古墳〔円墳・径28ｍ〕（８）が築かれ、銅鏡・銅剣・銅鏃が出土した。藤崎遺跡では方形周溝墓群が形成され、第３次調査の６号方形周溝墓では割竹形木棺を主体部とし三角縁二神二車馬鏡と素環頭大刀などが出土した。高塚古墳とは異なるが、海浜部の首長墓として位置付けられる。他の方形周溝墓からも仿製三角縁二神龍虎鏡・方格渦文鏡・珠文鏡・変形文鏡などが出土している。西新町遺跡に隣接することから、集落域の西新町遺跡、墓域の藤崎遺跡という位置づけが想定されている。

さて、古墳時代中期になると西新町遺跡では住居群が消滅するが、有田遺跡群では集落が継続し、陶質土器・軟質土器などの半島系土器や初期須恵器がみられるようになり、海浜部の集団は平野中部へ後退したとみられる。また、吉武遺跡群においても陶質土器や初期須恵器が多く出土し、弥生時代以来の拠点集落としての位置を保っている。

このように、西新町遺跡は古墳時代前期のうちに終焉を迎え、その後の時代については散発的な遺構・遺物が確認される程度となる。中世には遺跡のすぐ北側に元寇防塁（５）が営まれ、国際危機の最前線に立つことになるが、その後の居住域としての利用はなく、近世になってようやく生活の痕跡がみられるようになる。近世以降で注目されるのは、高取焼系の東皿山窯（３）・西皿山窯（４）が開窯することである。福岡市教育委員会により西皿山の物原の一部が発掘調査され、多数の陶磁器や窯道具などが出土している。今回の調査でも同様の遺物が出土しており、距離的にも近い東皿山窯との関連が考えられる。

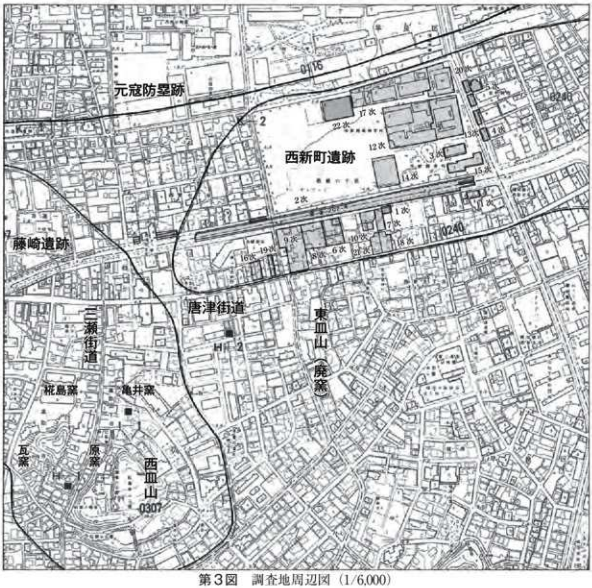
第３節　既往の調査

西新町遺跡の調査は今回で22次を数え、調査面積は報告書が未完であるため詳細が不明な第１次調査を除いても28,781㎡に達している。また、1947年に第１次発掘調査が実施されてからちょうど60年を経て第22次調査を行ったことになり、その間にも周辺は都市開発により風景が大きく様変わりしている。

各調査で発見された主要遺構は第１表に挙げたが、ほとんどの調査で弥生時代から古墳時代に至る集落遺跡の遺構を発見し、集落の様相が徐々に明らかになってきた。しかし、あくまで点的な調査が主体であり、例えば第18・21次調査などで確認された縄文時代の包含層の広がりについては不明な点も多い。さらには古墳時代中期から近世に至るまでの時代の遺構・遺物が皆無に等しく、周辺遺跡の調査を含めて今後に大きな課題が残っている。

〔参考文献〕

小林茂・磯望・佐伯弘次・高倉洋彰編　1988『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
福岡県教育委員会 1985『西新町遺跡』福岡県文化財調査報告書第72集
福岡県教育委員会 2000『西新町遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第154集
福岡県教育委員会 2001『西新町遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第157集
福岡県教育委員会 2002『西新町遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第168集
福岡県教育委員会 2003『西新町遺跡Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第178集
福岡県教育委員会 2005『西新町遺跡Ⅵ』福岡県文化財調査報告書第200集
福岡県教育委員会 2006『西新町遺跡Ⅶ』福岡県文化財調査報告書第208集
福岡県教育委員会 2008『西新町遺跡Ⅷ』福岡県文化財調査報告書第218集



第３図　調査地周辺図（1/6,000）

調査次数	所在地	調査原因	調査主体	調査面積（㎡）	調査年	報告書	特記事項
1	旧西新町町内	民間開発	福岡市		1947	未報告	
2	西新６丁目	地下鉄建設	福岡市	6230	1976・1978	市第 79 集	弥生終末～古墳初頭住居 57 軒
3	西新６丁目１-10	高校改築	福岡県	700	1984	県第 72 集	古墳前期住居７軒
4	西新３丁目	道路拡幅	福岡市	800	1986	市第 203 集	古墳前期住居８軒
5	西新３丁目 606・4	病院増築	福岡市	303	1992	市第 375 集	弥生終末～古墳初頭住居９軒
6	西新５丁目 643・4 他	民間開発	福岡市	1041	1994	市第 483 集	弥生終末～古墳初頭住居９軒
7	西新５丁目 638・9	民間開発	福岡市	369	1994	市第 483 集	弥生終末～古墳初頭住居２軒
8	西新５丁目 644・1・2	民間開発	福岡市	610	1994	市第 484 集	弥生中期住居１軒、弥生終末～古墳初頭住居３軒
9	西新５丁目 394 他	民間開発	福岡市	920	1995	市第 505 集	弥生中期住居 11 軒、弥生終末～古墳初頭住居８軒
10	西新５丁目 641・3	共同住宅建設	福岡市	462	1995・1996	市第 683 集	弥生終末～古墳初頭住居７軒
11	西新５丁目 632・6	店舗建設	福岡市	52	1997	市平報 12	古墳時代前期土坑２基
12	西新６丁目１-10	高校改築	福岡県	5214	1998	県第 154・157 集	弥生終末～古墳初頭住居 158 軒
13	西新６丁目１-10	高校改築	福岡県	2800	2000・2001	県第 168・178 集	弥生終末～古墳初頭住居 86 軒、井戸１基
14	西新６丁目１-10	高校改築	福岡県	1110	2001・2002	県第 200 集	弥生終末～古墳初頭住居 29 軒、井戸１基
15	西新６丁目１-10	高校改築	福岡県	1800	2002	県第 230 集	近世遺構
16	高取１丁目 105	共同住宅建設	福岡市	395	2003	市第 846 集	弥生中期住居 22 軒、弥生中期ガラストンボ玉
17	西新６丁目１-10	高校改築	福岡県	1990	2003・2004	県第 236 集	弥生終末～古墳前期住居 39 軒他
18	西新５丁目 372 他	共同住宅建設	福岡市	345	2005	市第 939 集	縄文前期包含層、古墳初頭住居３軒
19	高取１丁目 111 他	民間開発	福岡市	164	2006	市第 984 集	弥生中期住居８軒
20	西新６丁目１-10	高校改築	福岡県	1850	2006	県第 218 集	古墳初頭住居 45 軒
21	西新５丁目 372・2	共同住宅建設	福岡市	369	2006	市第 985 集	縄文包含層、弥生～古墳住居３軒、井戸２基、古修正中に Aso4 確認
22	西新６丁目１-10	高校改築	福岡県	1257	2007・2008	本書	弥生終末～古墳初頭住居 10 軒、近世遺構

第１表　西新町遺跡調査一覧

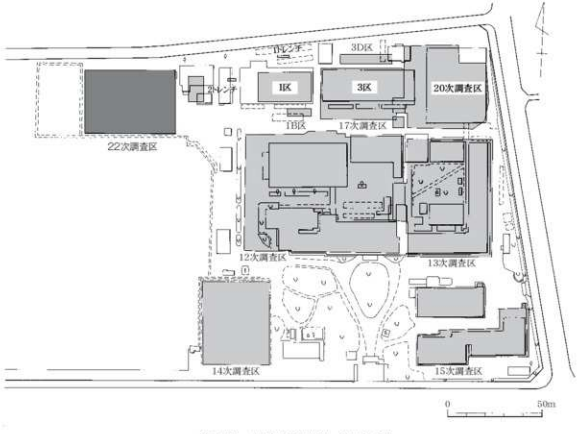
第３章　調査の内容

第１節　調査の概要

今回の調査地は修献館高等学校の敷地の北側に位置する。東側のプールの工事に先立ち実施された第17次調査では近世以降の遺構しか発見されておらず、当初は弥生時代から古墳時代の集落の範囲には該当しないと想定されていた。ところが、調査の結果、弥生時代終末～古墳時代前期にかけての集落と、近世以降の集落を検出した。残念ながら、以前に建設されていた体育館のコンクリート基礎の工事による破壊も大きく、本来の姿を留めていない遺構も少なくなかったが、多様な遺構を確認した。

基本層序　今回の調査地は既述のように体育館基礎により大きく攪乱されていたが、基本的な層序は次のとおりである。まず、現在の地表（標高3.9 m）から1.2 mさがった標高2.7 mまでの茶褐色砂や暗灰褐色砂などは近代から現代に至るまでの整地層、さらに標高2.7 mからの明褐色砂は近世期の町屋が形成された際の整地層で近世以前の遺物も幾らか包含する。この整地層下の標高2.5 mからは元々の砂丘を形成していたやや粒が粗い黄白色砂層があり、これが地山となる。調査区西側では、標高3.3 ～ 3.4 mで地山面が確認できる。

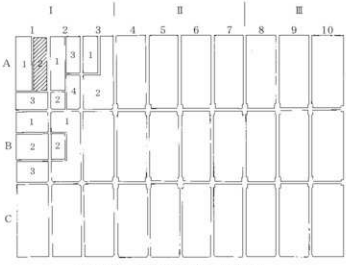
なお、近世期の整地層については調査区全体でみると、元々の砂丘の標高が高い南西部ではほとんど皆無に等しかったが、それ以外の北側や東側は砂丘面自体が下がっていたため整地層が厚く堆積し



第４図　調査区配置図（1/2,000）

ていた。近世以降の遺構はいずれもこの整地層の上面から掘り込んでいる。本来ならば整地層上面で遺構検出を行うべきであるが、掘削にかなりの時間と手間を要するため、表土掘削の段階で地山面まで下げて検出を行った。

検出遺構　調査で確認した遺構は、弥生時代終末の竪穴住居跡８軒、古墳時代前期の竪穴住居跡２軒、近世から近代にかけての溝、土坑、井戸、ピット多数である。



第５図　調査区区割図（1/500）

弥生・古墳時代の住居群はいずれも住居相互の切り合いや後世の攪乱により全貌を知り得ないが、古墳時代の住居２軒にはカマドが伴っていた。住居跡は調査区の南西部に集中しており、調査区の南から西にかけてさらに住居域が広がる可能性が明らかとなった。なお、住居群以外の場所や近世以降の遺構からも弥生土器や土師器、須恵器などの破片が出土しているが、その多くは表面がかなり磨滅しており、流れ込みによるものであろう。

近世以降の各遺構は分布に偏りがなく、数条の溝が確認できることから、ある程度の区画を有する町屋が形成されていたと推測される。

本書では紙幅の都合から、西新町遺跡を最も特徴づける弥生・古墳時代の集落を中心に報告を行い、近世以降の遺構に関しては主要遺構・遺物を報告するにとどめる。

第２節　弥生・古墳時代の遺構と遺物

第１項　竪穴住居跡と出土土器

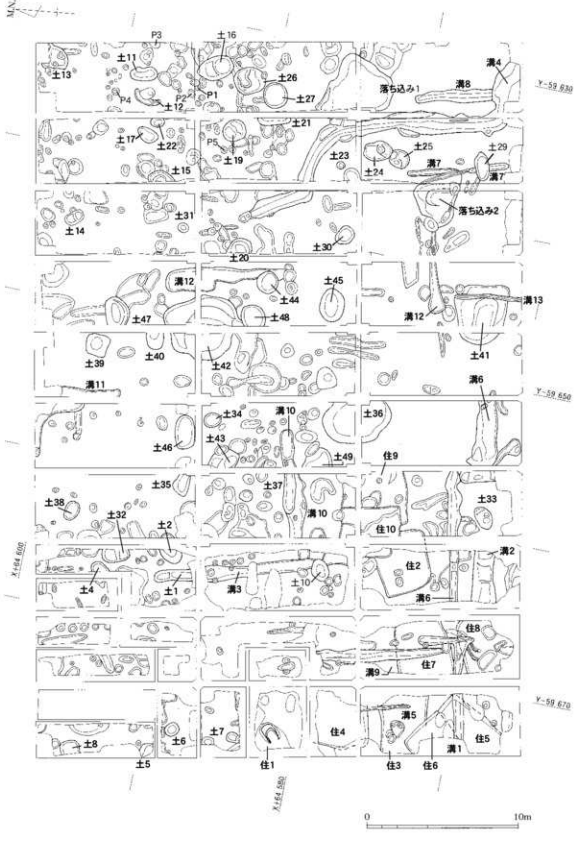
１号竪穴住居跡（図版４、第７図）

調査区西側に住居の半分程度を辛うじて検出できた。この住居跡の周辺は元々体育館の入口部分にあたりコンクリートの基礎が狭い間隔で設けられ、さらに地山よりも深く及んでいた。そのため、遺構の残りは非常に悪く、後述するカマド付近を除いてほとんど床面付近まで攪乱が及ぶ。住居は北東側の一部を検出したのみで、正確な規模は不明であるが、検出した部分の最大長は北壁が3.2 m、東壁が2.4 mを測り、遺存状況から住居の主軸はN47° Eと推定される。住居の北東隅には南に開くカマドを付設している。なお、遺構の埋土は暗黄褐色砂で、わずかに炭粒を含む。遺物はカマド内と周辺から数点出土しているが、後世の攪乱が激しくほとんど遺物が残っていなかった。

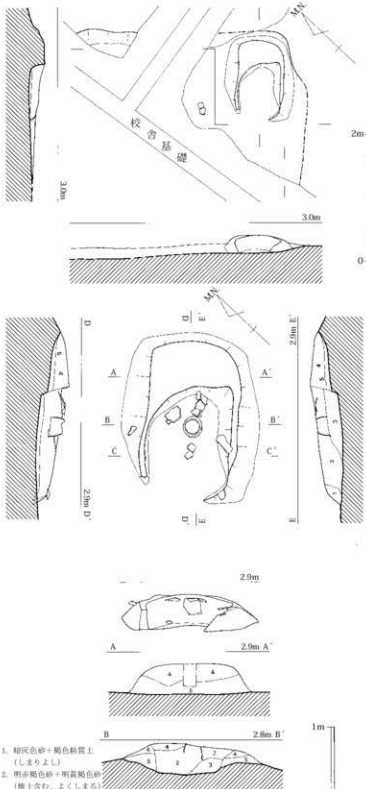
カマド（図版４、第７図）

住居の北東隅にあり、主軸軸はN46° Eにとり、概ね住居の主軸に合わせている。表土掘削時から既にカマドの存在がわかるほど住居上部が削平されており、カマド本来の上部構造については不明である。

カマドの構築土は大きく粘性土と砂の２種に分けられ、移植ゴテでも削るのが容易でないほど非常



第6図　西新町遺跡第22次調査遺構配置図（1/250）



第７図　１号竪穴住居跡及びカマド実測図（1/60・1/30）

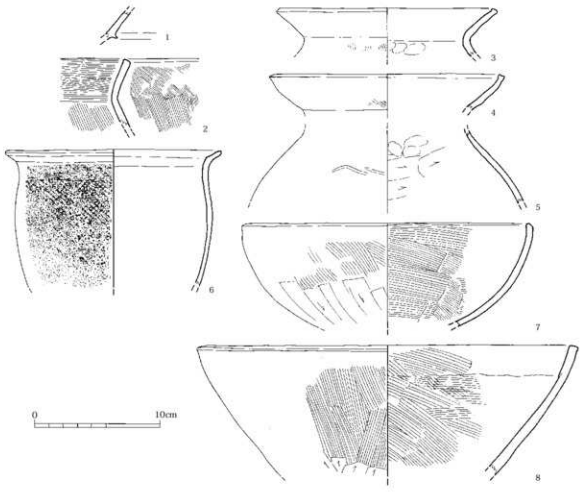
に固く締まる。海浜部でもあるので、火熱による焼き締めだけではなく、ニガリなどの利用がなかったのか検討する必要もあろう。カマド本体は逆Ｕ字状に遺存し、袖部の断面観察から床面上に灰白色砂を用いてある程度平面的な規模を確定させた後に、褐色砂混じりの赤褐色土を用いて立体的な構造に仕上げたとみられる。

カマドの中央部では朝鮮半島系の鉢が倒置させた状態で出土した。煙突や支脚としての利用なども想定していたが、カマド内の堆積土の層位確認からその可能性は考え難い。

出土遺物（図版13、第８図）

２・５～８はカマド内、その他はカマド周辺で出土した。

１は山陰系二重口縁壺の口縁部小片で、内外とも横ナデ調整で、外面に鋭い段をもつ。焼成はやや不良で、色調は淡褐色、胎土は普通。２は在地の長胴甕の口縁部で、残存高5.4cm、焼成は良好、胎土は普通。内外ともハケメ調整。色調は内面が茶褐色～暗茶褐色、外面が暗茶褐色を呈し、外面から口縁部内面には煤が付着。３～５は布留系甕。３は口縁部片で、口径17.4cm・残存高3.8cmを測る。焼成は不良、色調は淡褐～淡灰褐色を呈し、胎土は普通。胴部外面は縦ハケ、頸部内面には指頭痕が残る。４も口縁部で、口径18.6㎝・残存高2.9cmを測り、

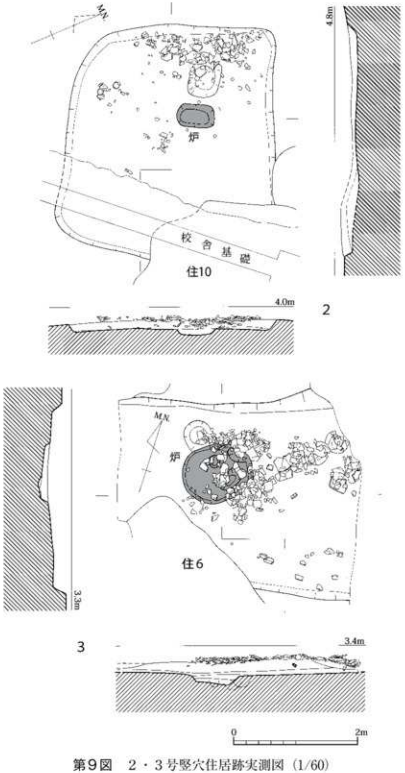


第8図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

内湾気味に外方へ開く。焼成は良好、色調は淡褐色、胎土は良好。外面に一部縦ハケがみえる。5は肩部の破片で、なで肩を呈する。焼成は不良、色調は淡褐～淡灰褐色、胎土は普通。外面には一条の波状文を施す。6は朝鮮半島系（慶尚南道地域か）の鉢で、底部を欠失しているが平底と推定される。口径17.0cm・残存高10.8cmを測り、口縁部は短い「く」の字状に曲げる。外面には細かい格子叩きが施され、内面はナデ調整とみられる。焼成は良好、色調は明黄橙～赤橙色、胎土は粗い。7は丸底の鉢で口径23.0cm・残存高8.2cmを測る。内外ともハケ調整で、外面は底部を手持ちヘラ削りで整える。胎土は普通で、色調は橙褐色～黄橙色を呈し、外面に黒斑。8は大型の鉢で口径30.0cm・残存高10.2cmを測る。内外ともハケメ調整で、外面下半は手持ちヘラ削りを施す。胎土は普通で、色調は暗黄茶褐色を呈し、外面の一部に煤が付着。

2号竪穴住居跡（図版5、第9図）

3C区から4C区に位置する。住居の東側が体育館基礎に壊され、10号住居跡に北東隅を切られ



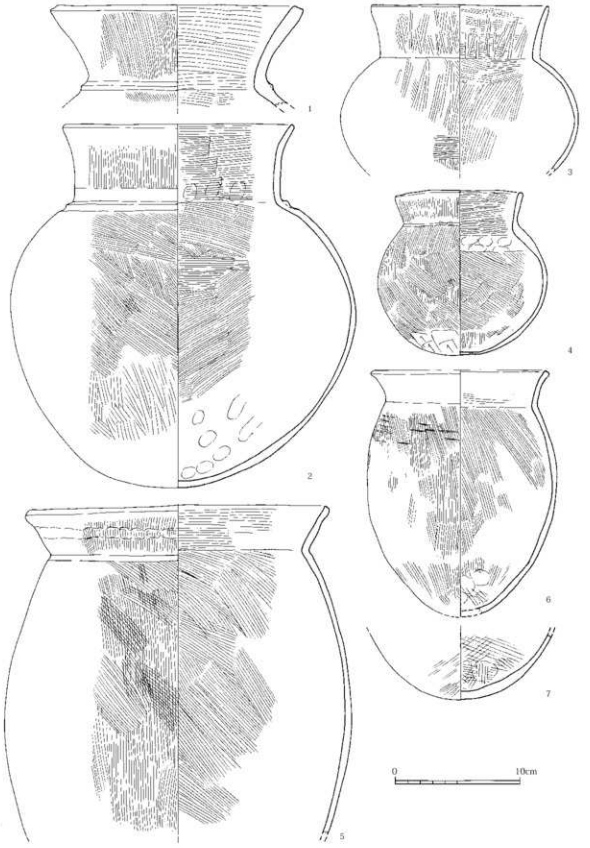
第9図　2・3号竪穴住居跡実測図（1/60）

ているため正確な規模は不明であるが、長軸長3.72 m・単軸長3.35 mの規模を測る。東西方向に長軸をとり、住居の軸はN67° Wである。後世に削平を受けていたため、住居の深さは18cm程度しかないが、床面の標高は2.65 mである。住居の埋土は暗黄褐色砂である。

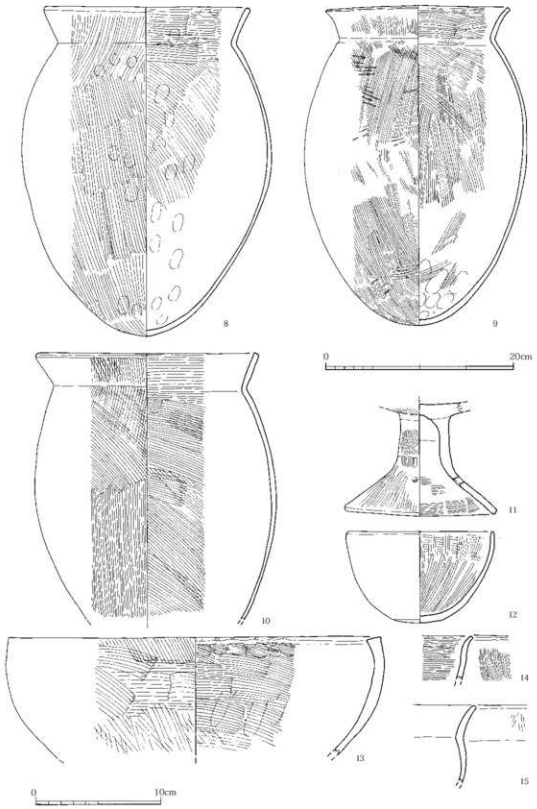
住居の中央からやや西寄りに長さ61cm・幅36cm・深さ8cmの土坑が設けられており、その西側にも長さ62cm・幅48cm・深さ13cmの土坑があり、炉内にはいずれも火熱を受けた暗茶褐色砂がみられ炉跡と推定される。底面はわずかに硬化しているが、あくまで地山（黄白色砂）を素掘りしただけであるため、カマドのような堅固さはない。出土遺物の大半は炉よりも西側の壁際に集中しており、住居内での生活空間の在り方を反映しているかもしれない。

出土遺物（図版13、第10・11図）

1～4は壺。1は大型壺で胴部は欠損し、口径20cm、残存高8.0cmを測る。頸部には小さな突帯。内外ともハケメ調整で、口縁端部は横ナデで整える。胎土はやや粗く、色調は灰黄褐色を呈する。2は壺で口径16.4cm、器高28.6cm、胴部最大径26.4cmを測る。頸部に小さな突帯がめぐり、胴部は中位よりやや上方に最大径。内外ともハケにより調整し、内底面に指頭痕が残る。焼成は良好、胎土は普通で、色調は黄褐色を呈する。外面の口縁部付近と胴部下半に煤が付着。3は短頸壺で口径14.0cm、残存高13.2cmを測る。焼成は良好で、胎土はやや粗い。内外ともハケメ調整を行うが、口縁部の内



第10図　2号竪穴住居跡出土土器実測図1（1/3）



第11図　2号竪穴住居跡出土土器実測図2（8～10は1/4、その他は1/3）

外と胴部上半に粗いミガキを施す。このミガキは粗いながらもジグザグに施され暗文状。色調は明灰黄褐色を呈する。4は小型丸底壺で底部の一部を欠損するものの概ね完形で、口径10.2cm、器高12.9cmを測る。外面はハケメ調整の後、底部を手持ちヘラ削りする。内面はハケメ調整を行うが、頸部内面にはナデによる指頭痕が残る。胎土は良好で、色調は黄褐～黄橙色を呈し、外面の一部に煤。

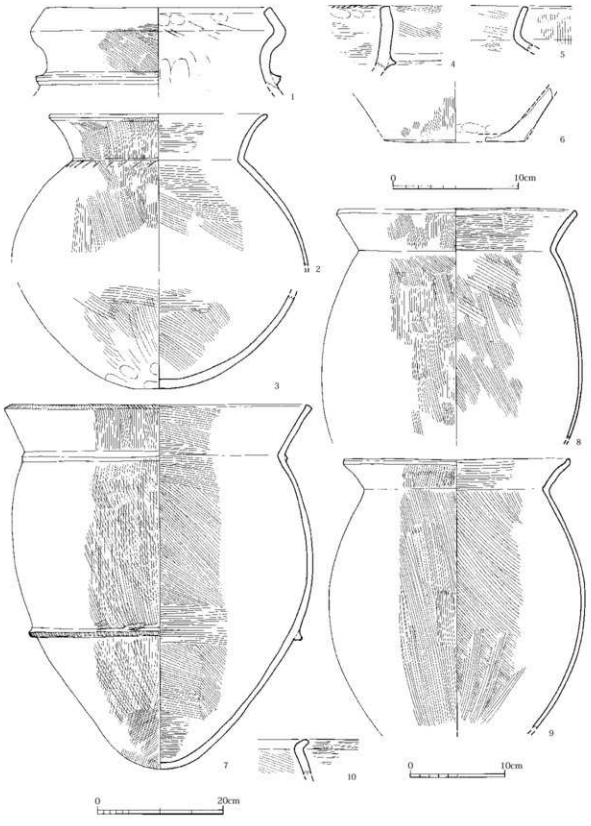
5～10は甕。5は甕で下半部を失っている。口径24.0cm、残存高26.0cm、胴部最大径27.2cmを測る。内外ともハケによる調整である。口縁部は直線気味だが、成形時の指オサエが強く少し凹凸がある。焼成は良好、胎土は普通で、色調は黄褐～黒褐色を呈する。外面は煤が部分的に付着。6は小型甕で底部を一部欠損するが、口径14.1cm、器高19.3cmを測る。内面は胴部を縦ハケ、口縁部を横ハケ、外面はやや右下がりの叩き後に縦ハケを施す。口縁部は横ナデする。焼成は良好、胎土も良好、色調は黄褐色。7は甕の底部片で残存高5.4cmを測る。内外ともハケ調整で内面底部に指頭痕が残る。焼成は良好、色調は淡褐色、胎土は普通。外面に煤。8は略完形の甕で、口径22.0cm、器高35.1cm、胴部最大径26.5cmを測る。内外ともハケによる調整で、部分的に指オサエの痕跡が残る。外面は全体に煤が付着し、内面も下半部に少し煤が付着。外面には2ヶ所に黒斑。焼成は良好、胎土は普通で、色調は明灰褐～褐色を呈する。9は甕の略完形品で口径19.7cm、器高34.1cm、胴部最大径23.7cmを測る。内外ともハケによる調整だが、外面には部分的に叩きの痕跡。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈するが、外面は全体的に煤が付着。胎土は良好。10は甕で口径24.0cm、残存高28.6cmを測る。内外ともハケによる調整。焼成は良好、胎土は普通で、色調は外面が灰黄褐～赤橙色、内面が灰黄褐色を呈する。外面は全体的に煤が付着し、口縁部付近に黒斑。

11は高坏の脚部で、底径12.1cm、残存高9.0cmを測る。筒状にのびる脚が中途で逆漏斗状に広がる。坏部は欠損するが、外面にヘラミガキの痕跡がある。脚部の内面はナデ後ハケメ調整を行い、外面は縦ハケ後、裾部に縦方向ミガキを施す。脚の屈曲部付近には焼成前に円孔透かしを三方に穿つ。焼成は良好、胎土は普通。色調は灰褐～暗灰褐色を呈する。

12～15は鉢。12は小型の鉢で、概ね完形。底部は径4.2㎝程度の底部をもち、ゆるやかな曲線を描きながら上方へ立ち上がり口縁部に至る。外面の調整は磨滅により不明だが、内面は横ハケ後縦ハケを施し、ミガキにより仕上げる。焼成は良好で、胎土は良好。色調は内面が黄褐色だが、外面から口縁部内面にかけて煤が付着するため外面は暗茶褐色を呈する。13は大型の鉢で、口径29.6㎝・残存高9.4cmを測る。口縁部はやや内側に入り、指オサエでつまむ。内外ともハケ調整。焼成は普通、色調は明灰褐～褐色、胎土はやや粗い。14は小型の鉢の口縁と推測され、残存高3.6cmを測る。内外ともハケメ調整により、端部付近のみ横ナデを行う。焼成は良好で、色調は内外とも灰黄褐色。胎土は良好。15は丸底鉢の口縁部で、残存高6.3cmである。調整は内面が体部をナデ、口縁部を横ナデし、外面にはハケメの痕跡が残る。焼成は良好で、胎土も良く、色調は灰黄褐色を呈する。

3号竪穴住居跡（図版5・6、第9図）

1C区の北側に位置し、表土掘削の段階で既に住居の存在が確認できた。住居の東西双方の壁はちょうど体育館基礎で攪乱を受けており、長軸方向の規模は不明であるが、規模は長軸残存長3.8m、短軸長3.0m、深さ0.26mである。主軸はN72°Eで、東西方向に軸をとる。住居の埋土は暗黄褐色砂で、部分的に火熱を受けた茶褐色砂が混じるが遺構にはならない。むしろ、中央付近の床面には長さ113cm・幅92cm・深さ15cmの土坑があり焼土がみられることから、炉と推定される。住居内から



第12図　3号竪穴住居跡出土土器実測図1（2・3・8・9は1/4、7は1/6、その他は1/3）

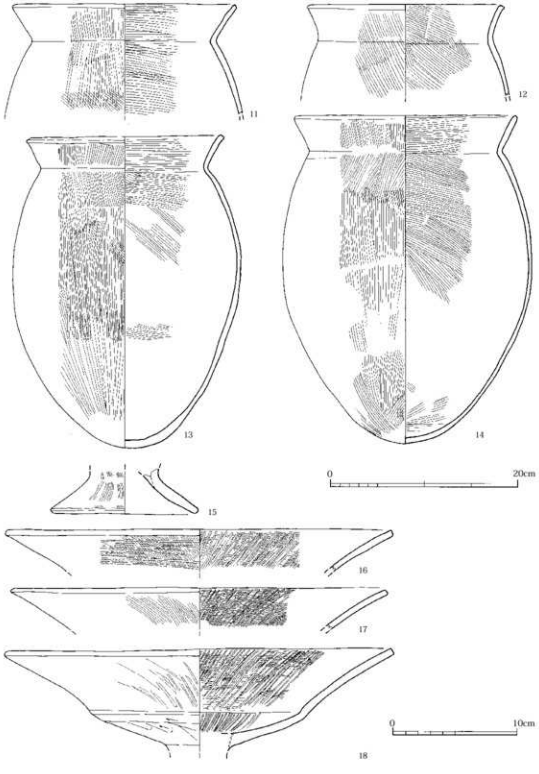
は非常に多量の土器が折り重なるようにして投棄されていたが、いずれも床面からは浮いた状態で出土した。なお、住居床面の標高は 2.95 m前後である。

出土遺物（図版 13・14、第 12 図）

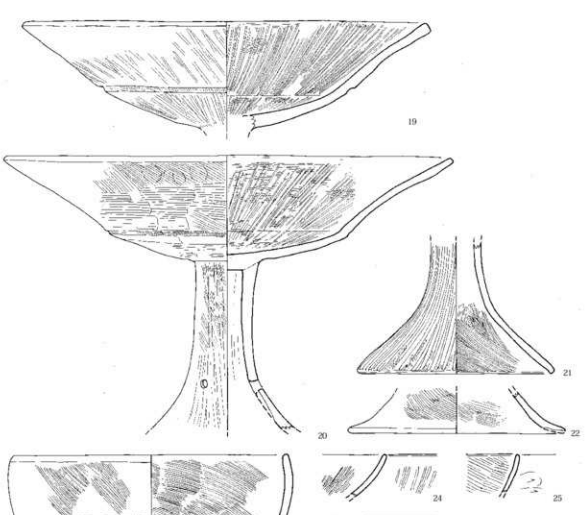
1～6 は壺。1 は複合口縁壺の口縁部で、口径 17.8cm、器高 6.5cm を測る。外面はハケによる調整で、内面にはハケによる工具痕がわずかに残る。口縁部は鍵状に屈曲し、頸部に 1 条の突帯をめぐらせる。焼成は良好で、胎土はやや粗く、色調は内面が暗黄褐色、外面が暗黄茶褐色である。2 は広口の壺で胴部下半を失うが、口径 23.0cm、残存高 16.1cm を測る。内外ともハケによる調整で、頸部に刻み目文を施す。胎土は普通、焼成は普通で、色調は灰黄褐色。胴部中位付近に煤が付着。3 は底部片で、残存高 10.5cm を測る。底部は丸底だが、かすかに平らな面がある。内外ともハケ調整で、外面にナデの痕跡。焼成は良好で、胎土はやや粗い。色調は灰黄褐～茶褐色。4 は複合口縁壺の口縁部片で、残存高は 5.1cm を測り、外面に刺突文を施した突帯がめぐる。内外ともハケ調整で端部上面にも刻みを施す。焼成は良好、色調は明橙～明黄橙色、胎土は普通。5 は短頸壺の口縁部片で、残存高 3.6cm を測る。内外ともハケ調整を行い、焼成は良好で、色調は明橙色、胎土は普通。6 は弥生土器の底部片で、底径 11.1cm、残存高 4.2cm を測る。内外とも剥離が激しいが胴部外面は縦ハケ、底部内面は指オサエで調整。焼成は良好で、色調は淡黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。外面に黒斑。

7～15 は甕。7 は大型甕で、口径 49.0cm・器高 58.0cm を測る。口縁部は直線的に開き、胴部は上位に最大径をもち、底部に向かって急激にすぼまる。焼成は良好、色調は灰黄褐色、胎土はやや粗い。内外ともハケ調整。8 は胴部下半部を失うが、口径 25.45cm、残存高 24.3cm、胴部最大径 27.5cm を測る。胎土は普通で、焼成は良好。色調は淡灰褐を呈し、外面の一部は二次火熱により赤褐色を呈する。外面には黒斑があり、全面に煤が付着。調整は内外ともハケ。9 は底部を欠損し、口径 20.0cm・残存高 28.6cm を測る。口縁端部を上方へ少しつまみ上げる。内外ともハケ調整。焼成は良好、色調は黄橙～橙褐色、胎土は普通。10 は小型甕の口縁部で、残存高 2.85cm を測る。内面はハケ調整、外面は叩き後粗いハケ調整を行う。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈し、胎土は普通。外面には煤が付着。11 も上半部のみが遺存し、口径 24.0cm、残存高 11.65cm を測る。胎土は普通で、焼成は良好で、内外とも煤が付着。色調は内面が灰黄褐色、外面が灰黄褐～茶褐色を呈する。調整は内外ともハケ。12 は口縁部付近が遺存し、口径 21.0cm、残存高 9.6cm を測る。胎土はやや粗く、焼成は良好。色調は内面が灰黄色、外面が淡茶褐色を呈し、外面は全体的に煤が付着する。調整は内外ともハケ。13 は半分程度遺存し、口径 21.0cm、器高 33.5cm、胴部最大径 24.3cm を測る。内外ともハケによる調整を行うが、外面下半部の調整は粗い。焼成は良好、胎土は普通。色調は灰黄褐色を呈するが、外面は全体的に煤が付着。また、外面胴部中位付近に黒斑。14 は口径 23.8cm、器高 35.0cm、胴部最大径 26.7cm を測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で色調は明灰褐～明褐色。調整は内外ともハケによるが、胴部中位付近は内外とも磨滅が激しい。外面は全体的に煤が付着。15 は台付甕の台部片で、底径 11.8cm、残存高 3.5cm を測る。胴部との接合部で剥離し、貼り付け時の粘土の痕跡が確認できる。内面は横ナデ、外面はハケにより調整。胎土は普通、焼成は良好で、色調は灰黄褐色。

16～22 は高坏。16 は口縁部のみで、口径 30.8cm、残存高 3.35cm を測る。内面は横ハケ後放射状暗文、外面は縦ハケ後横方向のミガキを施す。胎土は良好、焼成は良好で、色調は灰黄褐～橙褐色。17 も口縁部片で、口径 30.0cm、残存高 3.2cm を測る。調整は、内面が横ハケ後に放射状暗文、外面が縦ハケによる。胎土は良好、焼成は良好で、色調は灰黄褐色を呈する。18 も坏部のみ遺存し、口径



第13図　3号竪穴住居跡出土土器実測図2（11～14は1/4、その他は1/3）



第 14 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図 3（1/3）

30.5cm、残存高 8.1cm を測る。内面は横ハケ後に放射状暗文を施し、外面は坏底部に手持ちヘラ削りがみられ、口縁部は縦ハケ後に放射状暗文が施される。胎土はやや良好、焼成は良好で、色調は橙褐～茶褐色を呈する。外面には黒斑がみられ、内面は全体的に煤が付着。19 は坏部で、口径 31.2cm、残存高 8.6cm を測る。浅い底部に外上方へ直線的にのびる口縁部がつく。内面は横ハケ後放射状暗文を施し、外面も磨滅により不鮮明であるがハケ調整後に暗文を施す。胎土はやや良好、焼成は良好で、色調は橙褐色。口縁部外面には一部黒斑があり、内面は部分的に煤が付着する。20 は脚端部を欠損し、口径 34.7cm、残存高 21.4cm を測る。脚部は筒状にのびた後、逆漏斗状に広がると推定される。坏部は横ハケ後放射状暗文を施し、外面は底部をハケ後横方向のミガキを粗く施し、口縁部はハケで調整する。脚部は剥離が激しいが縦ハケ後に縦方向のミガキを施し円孔を 3 か所に穿つ。胎土は良好、焼成は良好で、色調は淡褐～明赤褐色を呈する。21 は高坏脚端部付近の破片で、底径 15.4cm、残存高

10.3cm を測る。筒状の脚部から逆漏斗状に裾部へ広がる。内面は筒状部をナデ、裾部をハケによる調整で、外面はハケ調整後に縦方向のミガキを施す。胎土は普通、焼成は良好で、色調は灰黄褐色を呈し、外面端部付近に煤が付着。22 は脚の裾部片で、底径 17.0cm、残存高 3.2cm を測る。胎土は良好、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。内外ともハケによる調整で、内面の一部に煤が付着。

23 ～ 26 は鉢。23 は丸底の鉢で、口径 21.4cm、器高 12.2cm を測る。胎土は普通、焼成は普通で、色調は内面が黄褐色、外面が灰黄褐色。内面はハケ、外面はハケ後手持ちヘラ削りを行う。外面は火熱によるためか剥離が激しく、内外とも薄く煤が付着。24 は残存高 3.4cm を測り、外面はナデ後暗文を施し、内面は横ハケ後放射状暗文を施す。焼成は普通で、色調は淡橙褐色を呈し、胎土は精良。25 は残存高 3.1cm を測り、外面は手持ちヘラ削り、内面は横ハケで調整。焼成は良好で、色調は灰褐～褐色を呈し、胎土は普通。内外とも若干煤。26 は平底の鉢で、口径 9.7cm、底径 4.0cm、器高 4.05cm を測る。外面はハケ後粗くヘラ削りを行い、内面はナデ後ヘラ工具で調整。焼成は良好で、色調は明灰褐色を呈し、胎土は普通。外面の一部に煤が付着。

27 は飯蛸壺の口縁部で、口径 8.3cm、残存高 2.95cm を測る。内外ともナデ調整で、わずかに穿孔部分が残る。

4号竪穴住居跡（図版 5、第 15 図）

1 B － 3 区から一部は 1 C 区に及び、1 号住居跡と 3 号住居跡の間に営まれている。住居の四壁は南壁と西壁の一部を除いていずれも体育館基礎により大きく攪乱を受けており、正確な規模は不明である。ただ、隣接する 2 B － 2 区や 3 B － 2 区などでは住居の続きを確認できないため、北壁と東壁は基礎の直下あたりにあったと考えられる。現状では東西 3.75 m以上、南北 3.5 m以上、深さ 0.37 mの規模を測るが、本来の住居壁が基礎の下にあったとすれば、おおよそ東西 4.2 m、南北 4.0 mとなろうか。床面の標高は 3.05 m前後である。

住居の埋土は暗黄褐色土で、中央付近から西側にかけて炭混じりの茶褐色砂が散見されたが、遺構とは考えがたく埋没の過程で流入したものと推定される。床面中央付近には長さ 97cm・幅 50cm・深さ 4 cm の掘り込みがあり、埋土は火熱を受けた茶褐色砂で、硬化はないものの炉跡と考える。なお炉の北には長径 53cm・短径 42 ㎝・深さ 7 cm、南には長径 32 ㎝・短径 27cm・深さ 7 cm のピットが掘られており、埋土は住居埋土と類しており、あるいは柱穴になるか。

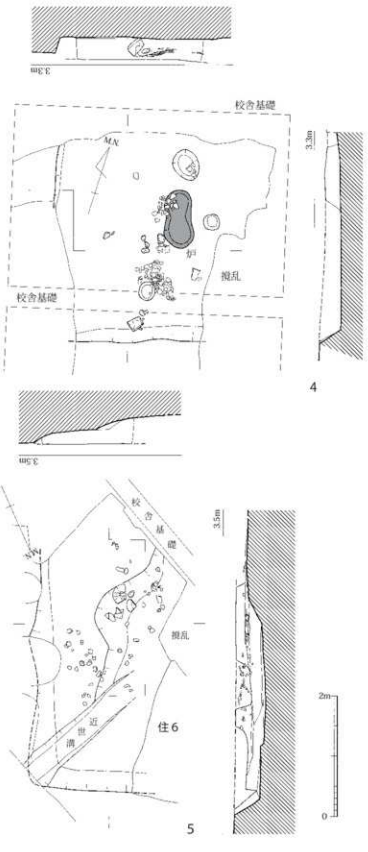
出土遺物（図版 14、第 16・17 図）

1 は直口壺の口縁部である。口縁部は内傾し、頸部に突帯をめぐらせ、外面には突帯貼り付け時の傷が残る。口径 11.8 ㎝・残存高 9.0cm を測る。内外ともハケ調整で、焼成は良好、色調は淡褐～明橙褐色、胎土は普通である。

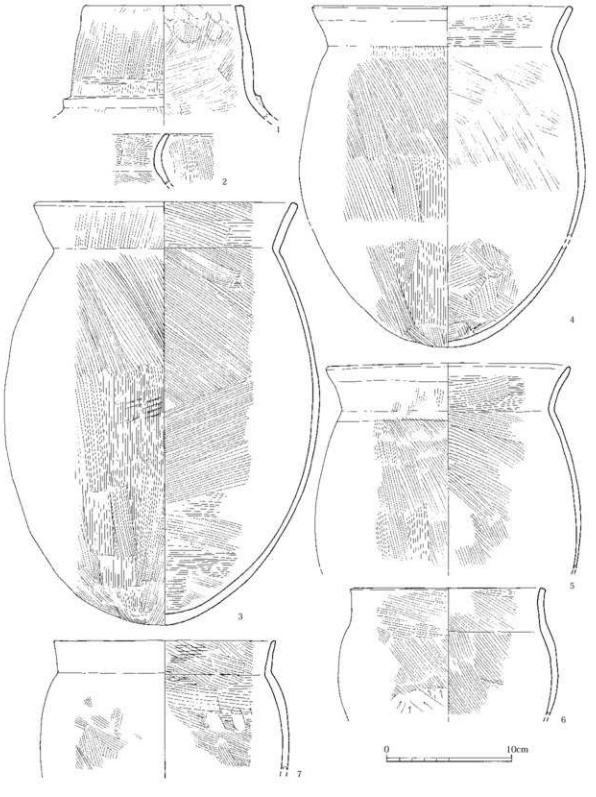
2 ～ 7 は甕。2 は小型甕の口縁部片で、残存高 3.9cm を測る。内外ともハケ調整、焼成は普通、色調は明橙色、胎土は普通である。3 は口径 20.8 ㎝・器高 33.4 ㎝を測り、内外ともハケ調整であるが外面にわずかに叩きの痕跡がある。焼成は良好、色調は黄橙～橙褐色、胎土は普通である。4 は胴部の一部を欠損するが、上半部と底部が遺存し、口径 20.4cm、復元器高は 27.0cm を測る。内外ともハケ調整で、焼成は良好、色調は淡黄褐～明褐色、胎土は普通である。外面には黒斑がみられ、外面全体に煤が付着する。5 は胴部下半を失い、口径 19.2 ㎝・残存高 16.2cm を測る。内外ともハケ調整で、焼成は良好、色調は明黄褐色、胎土は普通である。外面に若干煤がみられる。6 は頸部の屈曲が

緩やかな甕で、口径15.4㎝・残存高10.1cmを測る。内外ともハケ調整で、胴部外面の下半部は削りがみられる。焼成は普通、色調は明褐～灰褐色、胎土はやや粗い。外面に若干煤がみられる。7は口径17.4㎝・残存高10.3cmを測り、内外ともハケ調整である。焼成は普通、色調はにぶい灰褐色、胎土は普通である。外面の一部に煤がみられる。

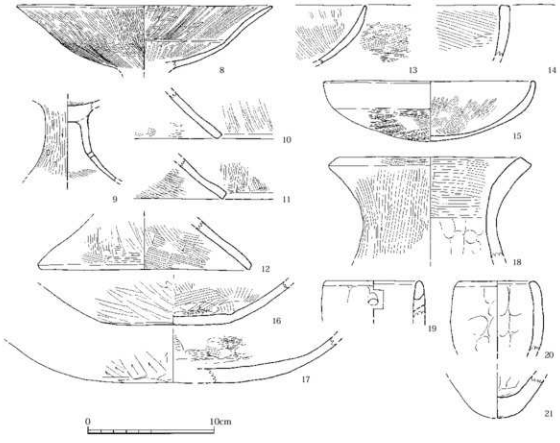
8～12は高坏である。8は口縁部片で、口径20.1㎝・残存高5.05cmを測る。内外ともハケ調整後に放射状暗文を施し、焼成は良好、色調は明褐色、胎土は良好。9は脚部で、外面は縦方向のミガキを施し、内面は基部付近をナデ、裾部をハケ調整する。裾部への屈曲部付近には三方に円孔を穿つ。焼成は良好、色調は淡褐～明褐色、胎土は良好。10は脚裾部片で残存高3.7cmを測る。内面はハケ調整、外面は縦方向のミガキが残る。焼成はやや不良、色調は淡褐色、胎土は普通。内外とも若干煤。11も脚裾部片で残存高3.3cmを測る。内面はハケ調整、外面はハケ調整後縦方向のミガキを施す。焼成は良好、色調は明褐色、胎土は良好。12も脚裾部片で、底径16.7㎝・残存高3.9cmを測る。内面はハケ調整、外面はハケ調整後粗く縦方向の



第15図　4・5号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 16 図　4 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 （1/3）



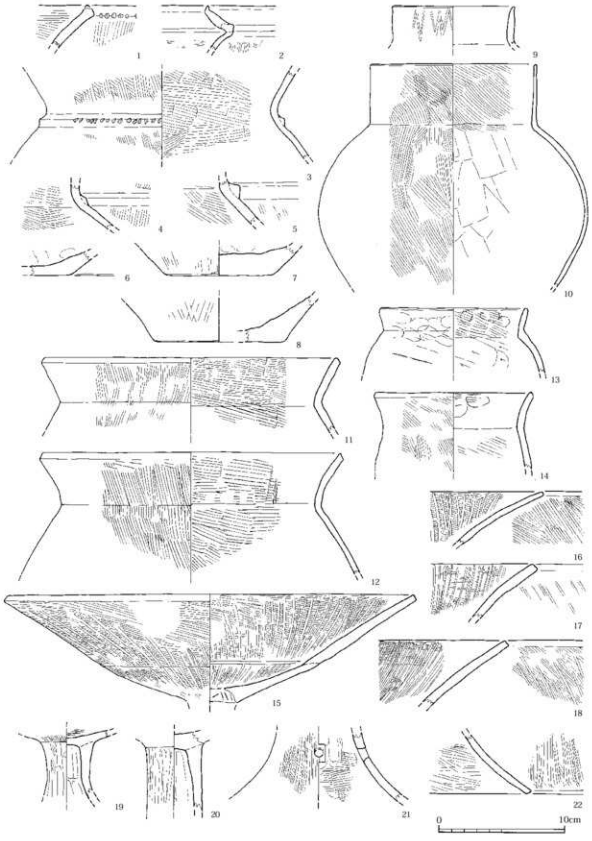
第 17 図　4 号竪穴住居跡出土土器実測図 2（1/3）

ミガキを施す。焼成は普通、色調は明橙色、胎土は普通。

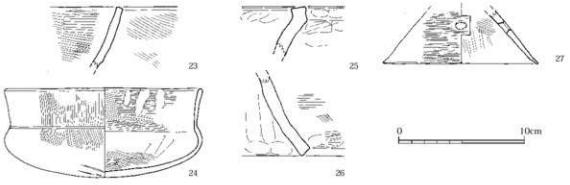
13 ～ 17 は鉢。13・15 は小型の鉢で、内外ともハケ調整の後外面にミガキを施し、15 は内面に放射状暗文を施す。13 は残存高 4.7cm を測り、焼成は良好、色調は淡黄褐色、胎土は良好。15 は口径 16.4 ㎝・器高 4.7 ㎝を測り、焼成は良好、色調は橙褐色、胎土はやや粗い。14 は大型鉢の口縁部片で、残存高 4.1cm を測り、内面はハケ調整。焼成は良好、色調は内面が灰褐色、外面が明赤褐色を呈し、胎土は普通。16・17 は平底の大型鉢の底部片。15 は残存高 3.4cm を測り、焼成は良好、色調は明橙～明黄橙色、胎土はやや粗い。内面はハケ調整、外面は工具によるナデ気味の調整で、外面に若干煤。17 は残存高 3.7cm を測り、焼成は良好、色調は内面が明灰褐色、外面が赤橙色を呈し、胎土は普通。

18 は器台。口径 15.9 ㎝・残存高 8.0cm を測り、内外ともハケ調整で内面にナデの跡が残る。焼成は良好、色調は淡褐色、胎土は粗い。

19 ～ 21 は飯蛸壺。19 は口径 7.9 ㎝・残存高 2.9cm を測り、わずかに穿孔の一部が残る。内外ともナデで仕上げ、焼成はやや不良、色調は淡灰褐色、胎土はやや粗い。20 は口径 6.0 ㎝・残存高 5.5cm を測り、内外ともナデ調整。焼成は良好、色調は淡灰褐～淡黄褐色、胎土はやや粗い。外面の一部に黒斑がみられる。21 は底部片で残存高 3.4cm を測る。内外ともナデ調整で、焼成は不良、色調は灰～暗灰色、胎土は普通。



第18図　5号竪穴住居跡出土土器実測図1（1/3）



第19図　5号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/3）

5号竪穴住居跡（図版6、第15図）

1C区の南半部に位置し、6号住居跡と重なるように営まれ、切り合い関係から「5号→6号」の順番が推定される。住居の西側は体育館基礎により破壊を受けているが、調査区外に一部が残っていると推定される。北壁と東壁の一部が辛うじて残っており、東西2.25m、南北4.96m以上、深さ0.48mを測る。床面の標高は2.80m前後で、隣接する6号住居跡よりもわずかに浅く掘り込まれている。住居の埋土は暗黄褐色砂で、茶褐色砂や黒褐色砂も一部にみられたが、遺構ではなく堆積層であり、炭粒もまばらに混じる。東側は不整形ながら一段高くなっており、ベッド状遺構とみられる。北辺にはみられず東辺のみに付設されたと推定される。

遺物は全体的に散在していた。

出土遺物（図版14、第18・19図）

1～10は壺。1は口縁部片で残存高3.4cmを測る。内外ともハケ調整で、外面端部に刺突文を施す。焼成は良好、色調は明褐色、胎土はやや粗い。2は複合口縁壺片で残存高3.5cmを測り、逆「く」の字に折れて端部は上方へつまみ上げる。内外ともハケ調整で、焼成は普通、色調は内面が明褐色、外面が淡褐～灰褐色、胎土はやや粗い。3は頸部片で頸部径18.2cmを測る。内外ともハケ調整で、頸部に突帯をめぐらし刺突文を施す。焼成は良好、色調は明赤褐色、胎土は普通。4も頸部片で内外ともハケ調整で、外面に突帯をめぐらせる。焼成は良好、色調は淡褐～淡灰褐色、胎土は普通。5も頸部片で、内外ともハケ調整。外面には4よりも大きな突帯をめぐらせる。焼成は良好、色調は明褐～明灰褐色、胎土はやや粗い。6は底部片で残存高1.9cmを測る。内面に指頭痕が残り、焼成は良好、色調は淡灰褐色、胎土はやや粗い。7も底部片で底径8.4cm・残存高2.3cmを測る。内面はナデ、外面はハケで調整。焼成は良好、色調は暗灰褐色、胎土は粗い。8も底部片で底径10.4cm・残存高3.8cmを測る。内面は全面が剥離しており調整不明だが、外面は縦ハケである。焼成は良好、色調は明褐色、胎土はやや粗い。9は口縁部片で口径9.6cm・残存高3.2cmを測る。内外とも横ナデで仕上げ、外面にジグザグ状の暗文を施す。10は直口壺で口径13.1cm・残存高17.6cmを測る。内面はハケ調整後胴部を工具によるナデ調整、外面はハケ調整。焼成は良好で、色調は灰褐色、胎土は良好。

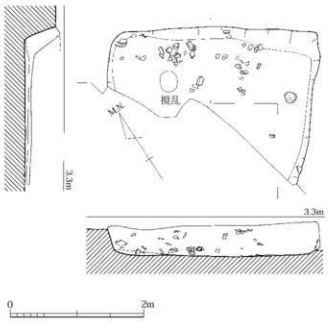
11～14は甕。11は甕口縁部片で、口径22.6cm・残存高5.9cmを測る。内外ともハケ調整で、焼成は普通、色調は明褐色、胎土はやや粗い。12は口径13.8cm・残存高9.6cmを測り、内面はハケ調整、外面は叩き後ハケ調整である。焼成は良好で、色調は明褐色、胎土は普通。内外とも一部に煤。13

は小型甕で、口径 11.5 ㎝・残存高 5.3cm を測る。内面は胴部を工具による強いナデ、口縁部をハケで調整し、外面は叩きの痕跡が残る。焼成は普通で、色調は淡橙色、胎土はやや粗い。14 も小型甕で、口径 12.2 ㎝・残存高 6.2cm を測る。内外ともハケ調整で、焼成は普通、色調は明褐色、胎土は普通。

15 ～ 22 は高坏。15 は坏部だけが完存し、口径 32.3cm・残存高 8.5cm を測る。内外ともハケ調整後に放射状暗文を施す。脚部との接合面には刻みの痕跡。焼成は普通で、色調は淡橙～淡黄褐色、胎土は良好。16 は口縁部片で残存高 4.2cm を測り、内外ともハケ調整し、外面には暗文を施す。焼成は普通で、色調は淡褐色、胎土はやや良好。他の個体よりも薄手。17 も口縁部片で残存高 4.5cm を測る。内面はハケ調整後に放射状暗文を施し、外面は磨滅が激しいが放射状暗文が辛うじて残る。18 も口縁部片で残存高 5.2cm を測り、内外ともハケ調整後に放射状暗文を施す。19 は脚部で、坏部は内外ともハケ、脚部は内面をハケ、外面をハケ調整後に縦方向のミガキで仕上げる。焼成は良好、色調は茶褐色、胎土は良好。20 も脚部で、坏部内面はハケ後ミガキ、脚部は内面を工具ナデ、外面を縦方向ミガキで仕上げ。焼成は普通で、色調は明赤橙色、胎土は良好。21 は脚部片で、内面は筒状部寄りをナデ、裾部側をハケで調整し、外面はハケ調整後に縦方向のミガキを施す。円孔が穿たれている。焼成は普通で、色調は明灰褐色、胎土は良好。22 は脚端部片で残存高 4.7cm を測る。内面はハケ、外面はハケ調整後に縦方向のミガキを施す。焼成は良好、色調は明褐色、胎土は普通。

23・24 は鉢。23 は口縁部片で残存高 5.0cm を測り、内外ともハケ調整で仕上げる。焼成は良好で、色調は明褐～明灰褐色、胎土は普通である。24 は小型丸底鉢で、口径 15.6 ㎝・器高 6.95 ㎝を測る。内面はハケ調整後に頸部付近を工具によるナデで仕上げ、外面はハケ調整である。焼成は良好、色調は黄褐色、胎土は良好である。内外とも底部付近に煤がみられる。

25 ～ 27 は器台。25 は大型の器台の口縁部で端部を上方へ折り曲げる。残存高 3.9cm を測り、外面は叩き後にナデを行う。焼成は良好、色調は明褐色、胎土はやや粗い。26 は大型器台の脚部で残存高 6.3cm を測る。内面はナデ、外面はハケ調整が行われる。焼成は良好、色調は明灰褐～赤褐色、胎土はやや粗い。27 は精製の小型器台脚部で、底径 12.2 ㎝・残存高 4.2cm を測る。内面はハケ調整、外面は横方向のミガキで仕上げる。円孔を四方に穿つ。焼成は良好、色調は淡灰黄褐色、胎土は良好。



第 20 図　6 号竪穴住居跡実測図（1/60）

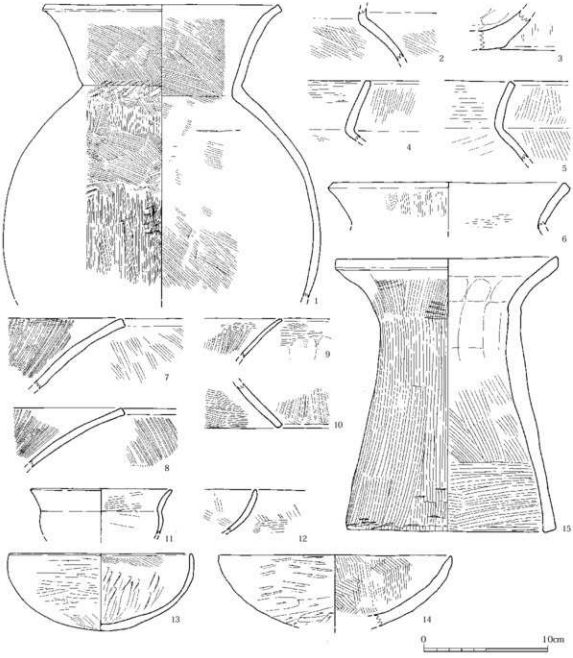
6 号竪穴住居跡（図版 5・6、第 20 図）

1 C区の中央部に位置し、3・5 号住居跡と切り合い、「3・5 号→6 号」の順番で営まれている。北壁と東西壁の一部とが遺存していたが、近世期の遺構と体育館基礎に破壊を受け、あまり遺存状況はよくない。規模は東西 3.17 m、南北 2.32 m 以上を測り、深さは最も深い場所で 0.48 mあり、床

面の標高は2.72 mである。東壁は近世期の遺構により破壊を受けていたことと、崩れやすい砂層が調査中に崩落するなどし、遺存状況は良くない。非常に狭い範囲しか残っておらず、炉跡も確認できなかった。

出土遺物（図版14・15、第21図）

1～3は壺。1は底部が不明で、口径18.5㎝・残存高23.3cmを測る。内面はハケ調整、外面は胴部が叩き後ハケ、後円部がハケで仕上げる。焼成は良好、色調は茶褐～暗黄褐色、胎土は普通。2は



第21図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

頸部片で、内外ともハケ調整である。焼成は良好で、色調は明黄褐～赤褐色、胎土は普通である。3は底部小片で残存高は3.2cmである。内面はナデ、外面は縦ハケ調整。焼成は普通で、色調は内面が黄褐色、外面が褐～赤褐色を呈し、胎土は普通である。

4～6は甕。4は残存高4.8cmを測り、内外ともハケ調整である。焼成は良好で、色調は内面が灰褐色、外面が灰黄褐色、胎土は普通。5は残存高6.4cmを測り、内外ともハケ調整である。焼成は良好で、色調は内面が淡褐色、外面が明褐色を呈し、胎土は普通である。6は口径19.2㎝・残存高3.75cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好、色調は明褐色、胎土は普通。

7～10は高坏。7は残存高5.6cmを測り、内面はハケ後に放射状暗文を施し、外面は縦ハケで調整する。焼成は普通で、色調は淡褐色、胎土は普通である。8は残存高4.8cmを測り、内面はハケ後に放射状暗文を施し、外面も磨滅しているが放射状暗文が残る。焼成は普通で、色調は灰黄褐～灰褐色、胎土は普通である。9は7・8よりも薄手の破片で、残存高3.3cmを測る。内面はハケ後に放射状暗文、外面はハケ後に工具によるナデを行い、横方向のミガキを施す。焼成は良好、色調は内面が暗灰褐色、外面が黒灰褐色を呈し、胎土は精良。外面は黒塗りであろうか。10は脚端部片で残存高3.6cmを測る。内外ともハケ調整を行い、外面は縦方向のミガキで仕上げる。焼成は良好で、色調は灰褐色、胎土は普通。

11～14は鉢。11は小型丸底鉢の口縁部で、口径11.2㎝・残存高3.7cmを測る。内面は体部を工具によるナデ、口縁部を横ハケで調整し、外面は横ナデを行う。焼成は良好、色調は内面が明褐色、外面が明褐～灰褐色を呈し、胎土は普通である。12は残存高2.4cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好、色調は灰褐色、胎土は粗い。13は口径14.3㎝・器高6.1㎝を測る。内面はハケ調整後に工具によりナデ気味のミガキを行う。外面は底部を手持ちヘラ削りで調整し、上部を横方向のミガキで仕上げる。焼成は良好で、色調は内面が茶褐～暗茶褐色、外面が赤茶褐～暗茶褐色を呈し、胎土は精良。14は口径18.4㎝・残存高5.65cmを測る。内面はハケ調整、外面は叩き後に底部をヘラ削りする。焼成は普通、色調は淡灰褐～灰色、胎土は普通。

15は器台。口径17.2㎝・底径16.5㎝・器高21.9㎝を測る。内面はナデ後ハケ調整、外面は叩き後ハケ調整。焼成は普通で、色調は灰黄褐色、胎土は普通。

7号竪穴住居跡（図版6、第22図）

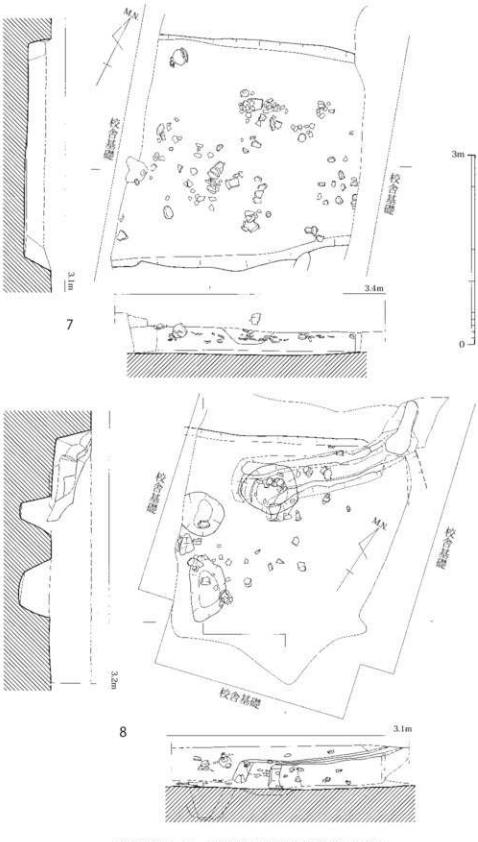
2C区の北側に位置し、南側にある8号住居跡のカマド煙道の先端がわずかに7号住居跡を斬っており、「7号→8号」の順番が復元できる。東西壁はちょうど基礎があるため規模は不明であるが、北壁と南壁の距離が3.45m・東西は遺存幅が3.66mを測り、東西方向に長軸をとる長方形住居であったと推定される。床面の標高は約2.5mで、ほとんど平坦で炉は確認できなかった。西側の基礎の際には床面から45cmほど浮いた状態で粘土塊が見つかり、かなり硬化していたが、炉やカマドとするには小さく不整形で性格は不明である。

出土遺物（図版15、第23～25図）

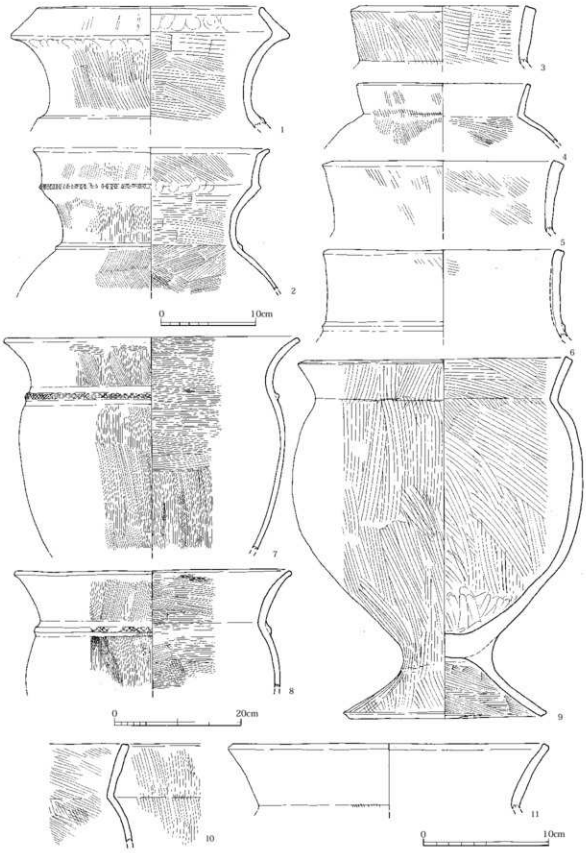
出土遺物は豊富であるが、隣接する8号住居跡からの混入品も一部にみられる。

1～6は壺。1は複合口縁壺で、口径18.0㎝・残存高9.6cmを測り、内外ともハケ調整で、後円部は指オサエやナデで整える。焼成は良好、色調は黄橙色、胎土は普通。2も複合口縁壺で口径25.0㎝・残存高15.3cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好、色調は淡黄橙～明褐色、胎土はやや粗い。

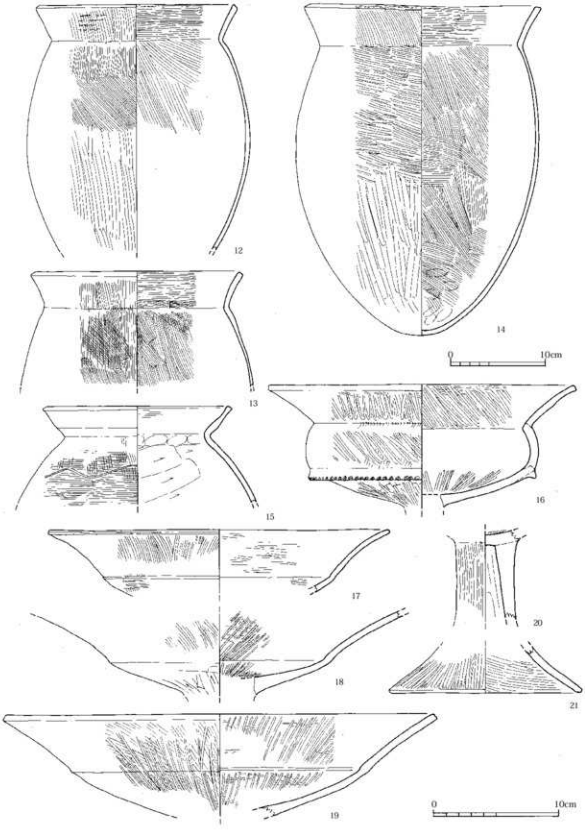
3は直口壺の口縁部で、口径14.6㎝・残存高4.6cmを測り、内外ともハケで調整。焼成は良好、色調はにぶい褐色を呈し、胎土は普通。4は短頸壺の口縁部で、口径13.8㎝・残存高4.8cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好、色調は明橙～明黄橙色、胎土は精良。5は広口壺の口縁部で、口径19.1㎝・残存高5.7cmを測る。内外ともハケ調整で、焼成は普通、色調は赤茶褐色、胎土はやや粗い。6も広口壺の口縁部で、口径19.0㎝・残存高7.0cmを測り、内外ともハケ調整。頸部には小さな



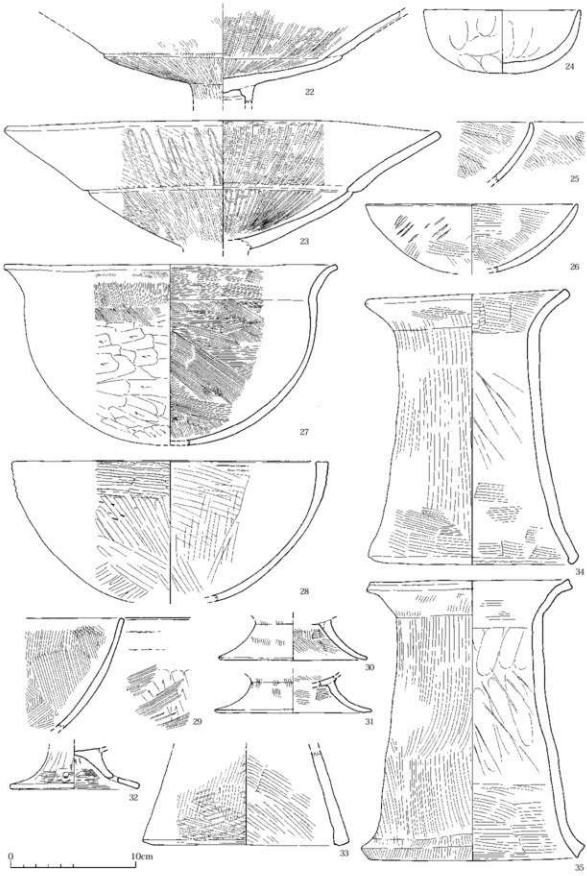
第22図　7・8号竪穴住居跡実測図（1/60）



第23図　7号竪穴住居跡出土土器実測図1（2は1/4、7・8は1/6、その他は1/3）



第24図　7号竪穴住居跡出土土器実測図2（12～14は1/4、その他は1/3）



第 25 図　7 号竪穴住居跡出土土器実測図 3（1/3）

突帯がめぐる。焼成は良好、色調は茶褐色、胎土はやや粗い。

7～15は甕。7は大型甕で胴部下半を欠うが口径47.3㎝・残存高34.3cmを測る。内外ともハケ調整で、頸部に斜格子の刻みを施した突帯。焼成は良好、色調は橙褐色を呈し、胎土はやや粗い。外面の一部に黒斑。8も大型甕で、口径44.4㎝・残存高19.0cmを測り、調整は7と同じ。焼成は良好で、色調は黄橙色、胎土は普通。9は台付甕の完形品で、土圧により多少歪みがみられるが、口径21.7㎝・底径16㎝・器高28.7㎝を測る。10は口縁部片で残存高7.9cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好で、色調は明褐色、胎土は普通。内外とも若干煤がみられ、外面には黒斑。11は口径25.3㎝・残存高5.3cmを測り、外面頸部にわずかにハケ調整がみられ、口縁部は内外とも横ナデ。焼成は良好で、色調は内面が淡赤橙色、外面が淡黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。12は底部を欠損するが、口径21.1㎝・残存高27.0cmを測り、内面はハケ、外面は叩き後、ハケ調整で叩き目を消し、下半部は粗いハケ。焼成は良好、色調は淡灰黄褐～灰褐色、胎土は普通。全体的に薄く煤。13は口径22.2㎝・残存高21.2cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好で、色調は黄橙色、胎土は普通。14は口径25.0cm・器高35.0cmを測り、内面はハケ調整、外面は右下がりの叩き後に下半部を粗いハケ、後円部もハケで調整。焼成は良好、色調は淡褐～灰黄褐色、胎土は普通。胴部下半に煤。15は布留系甕でおそらく8号住居跡からの混入品であろう。口径14.8㎝・残存高7.6cmを測る。内面は胴部をヘラ削り、頸部はナデ、口縁部は横ハケ。外面は縦ハケ後横ハケで波状文を施す。

16～23は高坏。16は加飾高坏で脚部を欠損し、口径24.0㎝・残存高9.6cmを測る。焼成は良好、色調は明橙～黒褐色を呈し、胎土は良好。内外ともハケ調整後ミガキを施し、坏部外底面はヘラ削り後にミガキを施す。17は口縁部で口径26.8cm・残存高4.9cmを測り、内外ともハケ調整である。焼成は普通、色調は明橙色、胎土は良好である。内外とも一部に煤がみられる。18は坏部片で、内面はハケ後に放射状暗文を施し、外面は底部をハケ後ヘラ工具による調整を施す。焼成は良好、色調は明褐色、胎土は良好。19は口径34.0㎝・残存高7.95cmを測り、内外ともハケ調整後、放射状暗文を施す。焼成は普通で、色調は内面が明褐色、外面は明灰褐～黒灰色を呈し、外面のみ黒塗りか。胎土は普通。20は脚基部で、内面はナデ、外面は縦方向のミガキを施す。焼成は良好で、色調は灰黄褐～褐色、胎土は良好。21は脚裾部で19と同一個体の可能性がある。底径15.0㎝・残存高3.6cmを測り、内面はハケ調整、外面は縦方向のミガキ。焼成は普通、色調は内面が淡褐色、外面は明灰褐～黒灰色を呈し、外面のみ黒塗りか。22は坏部片で、坏部は内外ともハケ後放射状暗文、脚部内面はナデ、外面は縦方向ミガキが残る。焼成は普通、色調は淡灰褐色、胎土は普通。外面の一部に黒斑がある。23は多少歪みがある。口径34.6㎝・残存高10.1cmを測り、内外ともハケ後放射状暗文を施すが、口縁部外面にはジグザグ状の暗文を施す。焼成は良好、色調は明黄橙色、胎土は良好。

24～32は鉢。24は小型の鉢で口径12.4㎝・口径5.0㎝を測る。内外ともナデで仕上げ、焼成は普通で、色調は淡褐色を呈し、胎土はやや粗い。少し厚手。25は口縁部片で残存高4.8cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好、色調は明黄褐～橙褐色、胎土は普通。26は口径16.7㎝・残存高5.35cmを測り、内面はハケ調整、外面は叩き後ハケ調整を行う。焼成は良好で、色調は明橙～明黄橙色を呈し、胎土は普通。27は大型鉢で口縁部が外反する。口径26.2㎝・器高14.3㎝を測り、内面はハケ調整、外面はハケ調整後、胴部下半をヘラ削りする。焼成は良好で、色調は明黄橙色、胎土は普通。28は素口縁の大型鉢で、口径25.0㎝・残存高11.1cmを測る。内面はハケ調整、外面は叩き後ヘラ工具による粗いナデ。焼成は良好で、色調は灰黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。29は大型鉢の口縁部片

で、残存高8.8cmを測る。内面はハケ調整で、外面は下半部をヘラ削りした後粗いミガキを施す。焼成は良好、色調は明褐色、胎土は普通。30は台付鉢の台部片で、底径11.6cm・残存高3.2cmを測る。内外ともハケ調整。焼成は良好、色調は淡橙色を呈し、胎土は良好。31も台付鉢の台部片で、底径12.4㎝・残存高3.0cmを測る。内外ともハケ調整で、焼成は普通、色調は淡橙色を呈し、胎土は良好である。32は裾部が屈曲し、底径10.2cm・残存高3.2cmを測り、台部内面は接合部付近をナデ、裾部はハケ調整、外面はハケ後縦方向のミガキを施す。三方に円孔を穿つ。焼成は良好、色調は黄橙色、胎土は普通。

33～35は器台。33は底部片で底径16.3cm・残存高7.4cmを測り、内面はハケ、外面は叩き後ハケによる調整。34は口径16.1㎝・底径16.5cm・器高21.7cmを測る。内面は筒状部をヘラ工具によるナデ、裾部と口縁部をハケ調整する。外面はハケ調整。外面の一部は二次火熱により赤変し、煤もみられる。焼成は良好、色調は黄褐～赤褐色、胎土はやや粗い。35は口径16.2㎝・底径17.6cm・器高22.2㎝を測る。内面は筒状部をナデ、裾部付近と口縁部はハケ調整で、外面はハケ調整。外面に若干煤。焼成は良好、色調は黄褐色、胎土は普通。

8号竪穴住居跡（図版7、第22図）

2C区の南側に位置し、東西と南側の壁が体育館基礎の部分にあたるため、規模は不明である。現存の規模は東西3.6m・南北3.92m・深さ0.69mを測る。住居埋土はにぶい黄褐色砂である。床面は比較的平坦で、中央から西寄りにピットが2つあり北側が径32～36cm・深さ48cm、南側が長さ52cm・幅27cm・深さ49cmである。いずれかが柱穴であった可能性もあるが、対になるピットがなく、不確定である。なお、唯一確認できる北側の壁に沿ってカマドが残っている。遺物は住居の中ほどから西寄りで多くみられたが、集中する状況ではない。

カマド（図版7、第26図）

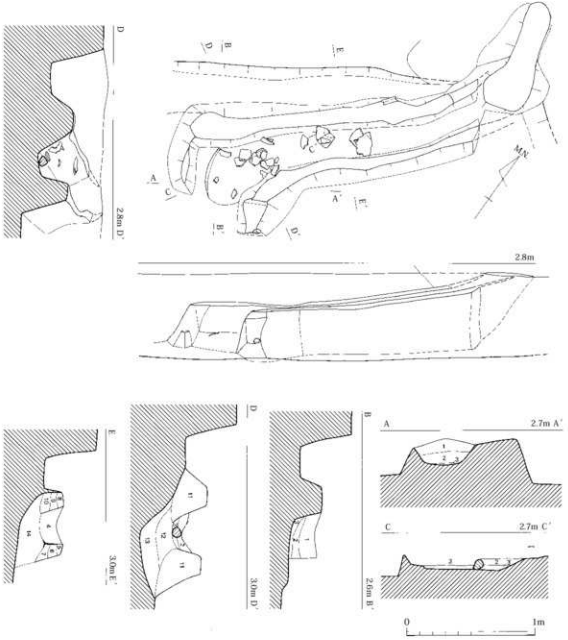
煙道の先はちょうど住居の北東隅に至るようである。この部分については上層の攪乱や調査中の崩壊などで少し掘りすぎたが、ちょうど住居の隅に取りつくとみてよいだろう。カマド本体の長さは2.94mを測り、壁沿いにのびた後、燃焼部で鍵状に南に折れる構造である。カマドの壁体は砂混じりの粘質土で構築され、極めて堅固である。燃焼部の両袖は開き気味に短くのび、中央部には支脚石が転倒した状態で遺存していた。煙道は天井が崩落しており所々に土器片が落ち込んでいた。調査終了前にカマドを撤去したところ、燃焼部の下部に長径88㎝・短径80㎝・深さ14㎝の浅い土坑状の掘り込みを確認した。埋土はやや赤味のある褐色砂で、燃焼部付近だけではあるが基礎地業が行われたものと推定される。

出土遺物（図版16、第27～29図）

非常に豊富な土器が出土したが、一部には7号住居跡など周辺の弥生時代終末段階の住居からの混入品がみられる。また、大半は住居床面より浮いた状態で出土した。

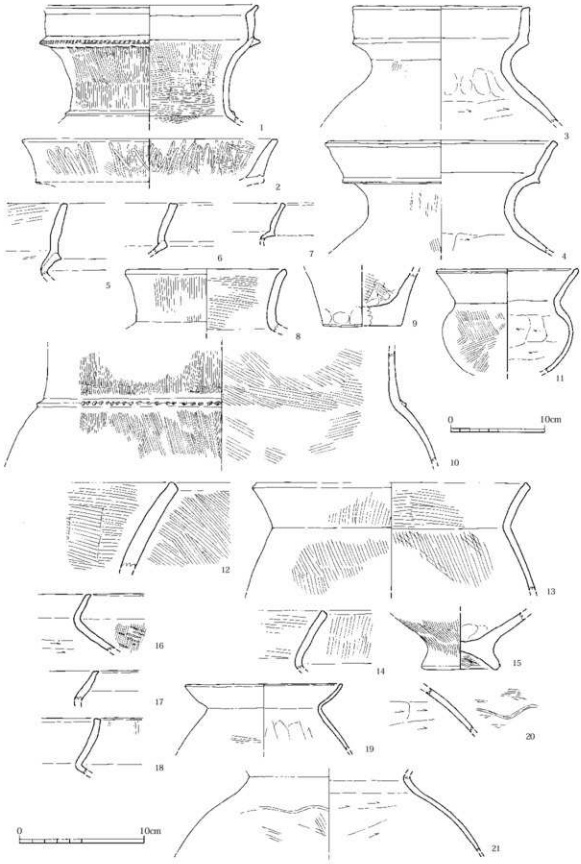
1～11は壺。1は複合口縁壺で、口径22.8cm、残存高12.5cmを測る。口縁部の屈曲部に刻みを施した突帯をめぐらし、口縁端部は外方へ折り曲げる。内外ともハケによる調整で、屈曲部より上は横ナデを行う。焼成は良好で、色調は黄橙褐色を呈し、胎土はやや粗い。2は畿内系の二重口縁壺か。口径27.2cm、残存高4.2cmを測り、1次口縁との接合部で剥離。内外ともハケ調整後に雑な暗文。

3～7は山陰系の二重口縁壺。3は口縁部が直立し、口径14.0cm、残存高9.1cmを測る。内外と



1. 灰黄褐色細砂
2. 褐白灰色細砂（焼土粒少し混）
3. 黄灰色細砂＋黄褐色粘質砂（カマド粘土）
   暗赤褐色粘質砂（　〃　）
   } ブロックで混入
3. 黄灰色細砂
4. 黄灰黄褐色細砂（堆積埋土）
5～11. 黄白色細砂に3～5cm大褐色粘土塊含む
※4と6，7層の埋土は暗灰色の粘質砂層状に介在する
12. 赤褐色砂
13. ややあみがかった褐色砂
14. ややあみがかった灰褐色砂縞状に粘土入る

第26図　8号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



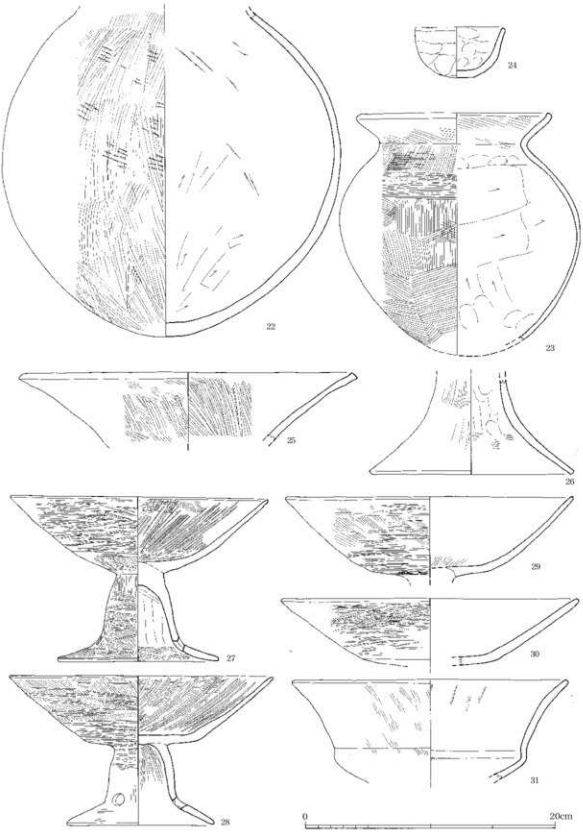
第27図　8号竪穴住居跡出土土器実測図1（1・2・10は1/4、その他は1/3）

も剥離や磨滅が激しく、外面は縦ハケ、内面は胴部をヘラ削りで調整。焼成は普通で、淡褐色を呈する。胎土はやや粗い。4は口径17.8cm、残存高8.9cmを測る。内面は胴部をヘラ削りし、口縁部は磨滅のため不鮮明だがナデ調整か。外面は縦ハケ調整で、口縁部を横ナデする。焼成は良好で、色調は淡褐～灰黄褐色を呈し、外面に若干煤が付着。胎土は普通。5は残存高5.85cmを測り、内面は横ハケ、外面は横ナデで調整。焼成は良好で、色調は淡橙色を呈し、胎土はやや良好。6は残存高4.1cmを測り、内外とも横ナデ。焼成は普通で、色調は淡褐色を呈し、胎土は普通。7は残存高3.0cmを測り、内外とも横ナデを行う。焼成はやや良好で、色調は淡黄褐色を呈し、胎土はやや良好。

8は口径12.8cm、残存高5.0cmを測り、外面は縦ハケ、内面は横ハケで調整。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈し、胎土はやや粗い。9は平底の壺底部で、弥生土器の混入であろう。底径6.3cm、残存高4.3cmを測り、内面はハケ調整後底部をナデで仕上げ、外面は磨滅により不鮮明だがハケ調整か。焼成は良好で、色調は黄橙～赤橙色を呈し、胎土はやや粗い。10は大型壺で、頸部に突帯をめぐらし、刻みを施す。内外ともハケ調整を行い、焼成は普通で、色調は明褐～明茶褐色を呈する。胎土はやや粗い。11は小型丸底壺で、口径11.1cm、残存高8.2cmを測る。外面はハケ調整、内面は胴部をヘラ削りし、口縁部は横ナデ。焼成は良好、色調は外面が黄褐～暗黄褐色、内面が灰黄褐色を呈する。外面には黒斑がある。胎土は普通。

12～23は甕。12は大型甕の口縁部で、残存高6.9cmを測る。内外ともハケ調整で、焼成は良好、色調は淡黄褐～淡灰褐色、胎土は普通。口縁端部付近に黒斑。13は口径22.1cm、残存高8.6cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好で、色調は淡灰褐～淡黄褐色を呈し、胎土は普通である。外面には全体的に煤。14は在地甕で残存高4.7cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は普通で、色調は明赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。15は台付甕の底部で、残存高4.5cm、底径6.3cmを測る。外面及び高台の内側はハケ調整、胴部内面はナデ調整を行う。焼成は普通で、色調は明黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。16は残存高4.6cmを測り、外面は右下がりの叩き後に縦ハケ調整を行い、内面はヘラ削りする。焼成は良好で、色調は淡黄褐～淡灰色を呈し、胎土は普通。17は甕の小片で残存高2.4cmを測る。内外とも横ナデ調整で、焼成は普通で、色調は淡黄褐色を呈し、胎土は普通。18は布留系甕の口縁部で、残存高4.4cmを測る。外面は縦ハケ後横ナデ、内面は横ナデを行う。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈し、胎土は普通。19は布留系甕で口径12.2cm、残存高5.2cmを測る。外面はハケ調整、内面は胴部をヘラ削り。焼成は良好で、色調は暗黄褐色を呈し、胎土は普通。内面はほとんど磨滅し、外面は全体的に煤が付着。20も布留系甕で、外面はハケ調整後に波状文を施し、内面はヘラ削りする。焼成はやや不良で、色調は外面が明黄褐色、内面が淡灰黄褐色、胎土は普通。21は布留系甕の胴部片で、外面は右下がりの叩き後縦ハケで調整し、1条の波状文を施し、内面はヘラ削りを行う。焼成は不良で、色調は淡褐色を呈し、胎土はやや粗い。22は口縁部を欠損し、残存高25.8cm、胴部最大径26.3cmを測る。外面は右下がりの叩き後縦ハケで調整し、内面はヘラ削りを行う。焼成は良好で、色調は外面が黄橙～赤茶褐色、内面が赤茶褐色を呈する。胎土は普通。外面は全体的に煤が付着する。23は胴部に歪み。口径14.9cm、残存高18.7cm、胴部最大径18.9cmを測る。外面はハケ調整、内面は胴部をヘラ削り、後円部をハケで調整。焼成は普通で、色調は暗黄褐色を呈し、胎土はやや良好。外面は黒斑があり、全体的に薄く煤。

24は鉢。口径6.8㎝・器高4.0cm・底径2.8cmを測り、内外ともナデ調整である。焼成は普通、色調は黄褐～明褐色、胎土は普通。



第 28 図　8 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 （1/3）

25 ～ 31 は高坏で、25・26 は在地系、27 ～ 31 は畿内系。25 は口径 26.8cm、残存高 5.5cm を測り、内外ともにハケ調整後縦方向のミガキを施す。焼成は良好で、色調は淡褐～明褐色を呈し、胎土は良好である。26 は脚部片で、底径 16.2cm、残存高 7.8cm を測る。外面は縦ハケ後縦方向のミガキを施し、内面は筒状部をナデ、裾部を横ハケで調整する。焼成はやや不良で、色調は淡黄褐色を呈し、胎土は良好である。27 は 3 分の 2 ほど残存し、口径 20.4cm、底径 12.6cm、残存高 13.0cm を測る。外面はハケ調整後、坏部底面を除き横方向のミガキを施す。坏部内面は横ハケ後放射状暗文を施し、脚部内面は筒状部をナデ、裾部を横ハケで調整する。焼成は普通で、色調は橙褐～明橙色を呈し、胎土は良好である。28 は略完形で、口径 20.9cm、底径 11.7cm、器高 11.8cm を測る。坏部は外面が縦ハケ後横方向ミガキで、内面は横ハケ後放射状暗文を施す。脚部は磨滅が激しいが、内面はハケ後ナデ調整し、外面は縦ハケ後横方向のミガキを行う。裾部への屈曲部には円孔を三方に穿つ。焼成は普通で、色調は明橙色を呈し、胎土は良好である。29 は口径 22.8cm、残存高 6.3cm を測る。内面は磨滅が激しいが放射状暗文が一部に残り、外面は縦ハケ後横方向のミガキを行う。焼成はやや不良で、色調は明橙色を呈し、胎土は良好である。30 は口径 23.6cm、残存高 5.3cm を測り、内面は磨滅により調整不明であるが、外面は縦ハケ後横方向のミガキを行う。焼成は普通で、色調は淡赤褐色を呈し、胎土は良好である。外面の一部に黒斑がある。31 は口径 21.9cm、残存高 7.9cm を測り、坏部からの立ち上がり部分で屈曲する。内外とも磨滅が激しいが、外面は縦ハケ、内面は底部を縦ハケ、口縁部を横ハケで調整する。焼成は良好で、色調は明黄橙～明橙色を呈し、胎土は良好である。

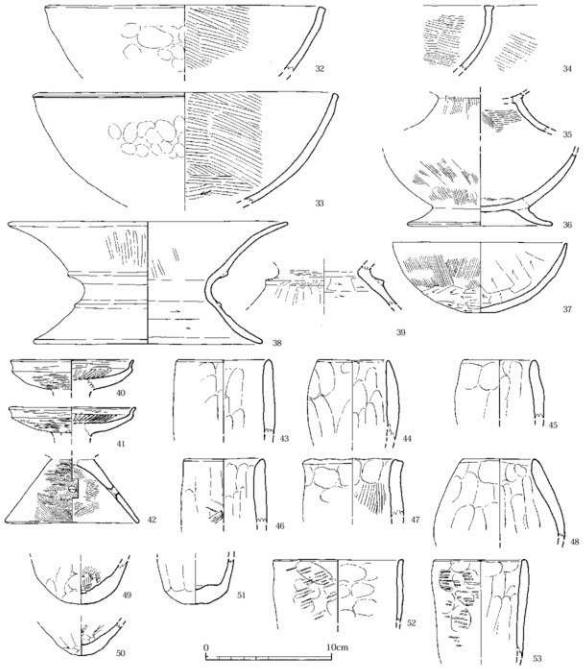
32 ～ 37 は鉢。32 は口径 21.3cm、残存高 5.35cm を測り、外面はナデ、内面は横ハケ調整である。焼成は普通で、色調は淡褐～淡灰褐色を呈し、胎土はやや粗い。33 は口径 24.0cm、残存高 8.7cm を測り、外面はナデ、内面はハケ調整を行う。焼成は普通で、色調は外面が淡褐色、内面が淡灰褐～灰色を呈し、胎土はやや粗い。口縁端部に丹塗りを行い、内面には黒斑がある。34 は残存高 5.25cm を測り、内外ともハケ調整を行う。焼成は良好、色調は明黄褐～褐色を呈し、胎土は普通である。外面には黒斑がある。35 は台付鉢の基部片で、坏部内面はミガキ、底面はナデ、脚部は内外ともハケで調整する。焼成は良好、色調は明橙色、胎土は普通である。36 も台付鉢で底径 11.4cm、残存高 5.6cm を測る。胴部外面は縦ハケ、内面はナデ、高台部は横ナデで調整。焼成は良好で、色調は黄茶褐色を呈し、胎土は普通。37 は口径 13.6cm、器高 5.5cm を測り、外面はハケ調整後手持ちヘラ削り、内面はやや削り気味の工具ナデを行う。焼成はやや良好で、色調は淡灰褐色を呈し、胎土はやや粗い。外面には黒斑。

38・39 は山陰系の器台。38 は口径 22.0 ㎝・底径 18.0cm・器高 9.6cm を測り、全体的に磨滅が激しいが、受部の内外には暗文が残り、裾部の内面はヘラ削りである。焼成は普通で、色調は淡黄褐～淡橙色を呈し、胎土は普通。39 は基部付近の破片で、裾部の内面はヘラ削り、外面は工具によるナデ、基部外面は横方向のミガキを施す。焼成は良好、色調は淡褐～淡黄褐色を呈し、胎土は普通である。

40 ～ 42 は畿内系の小型精製器台。40 は口径 9.6 ㎝・残存高 2.4cm を測り、内面は底部を放射状暗文、口縁部を横方向ミガキ、外面はハケ後横方向ミガキ。焼成は良好、色調は橙褐色、胎土は精良。41 は口径 9.8 ㎝・残存高 2.3cm を測り、調整は 40 と同じ。焼成は良好、色調は黄橙～橙褐色、胎土は精良。42 は底径 10.6cm・残存高 5.15cm を測る。内面は横ハケ、外面はハケ後に横方向のミガキ。円孔が穿たれている。焼成はやや不良で、色調は明橙色、胎土は精良。

43 ～ 51 は飯蛸壺。43 は口径 7.6 ㎝・残存高 5.85cm を測り、内外ともナデで仕上げ。焼成は良好、色調は明灰褐色、胎土は普通。44 は口径 5.5 ㎝・残存高 6.3cm を測り、内外ともナデ調整。焼成は普通で、

色調は淡褐色、胎土は普通。45は口径5.6cm・残存高4.6cmを測り、内外ともナデ調整。焼成は普通、色調は灰褐～赤褐色、胎土はやや粗い。46は口径6.4㎝・残存高5.15cmを測り、内外ともナデ調整で、外面に若干工具痕が残る。焼成は良好で、色調は淡灰褐色、胎土は普通。47は口径6.7㎝・残存高4.5cmを測り、内面はナデ後一部ハケ、外面はナデ調整。焼成は良好、色調は内面が淡褐色、外面が淡褐～明褐色、胎土は良好。48は口径5.4㎝・残存高6.4cmを測り、内外ともナデ調整。焼成は良好、



第29図　8号竪穴住居跡出土土器実測図3（1/3）

色調は淡灰褐色、胎土は普通。49は残存高3.5cmを測り、内面はハケ、外面はナデで調整。焼成は良好、色調は淡黄褐色、胎土は普通。50は残存高2.55cmを測り、内外ともナデ仕上げ。焼成は良好、色調は内面が明赤褐色、外面が明黄褐色を呈し、胎土は普通。51は残存高5.5cmを測り、内面はナデ、外面は底部をナデ、胴部を手持ちヘラ削り後ナデで仕上げる。焼成は良好、色調は橙褐色、胎土は普通。

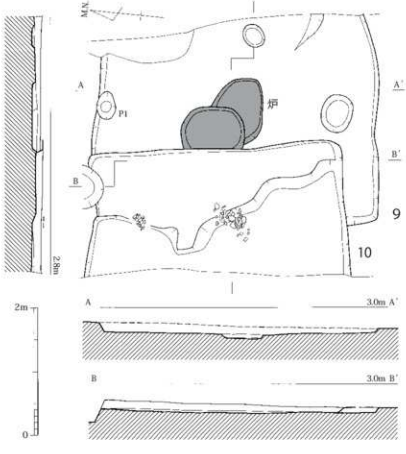
52・53は製塩土器。52は口径10.2㎝・残存高4.95cmを測り、内面はナデ、外面は叩き後ナデで仕上げる。焼成は良好、色調は明赤橙色、胎土は普通。53は口径7.1㎝・残存高7.7cmを測り、調整は52と同じ。焼成は普通、色調は淡黄褐色、胎土は普通。

9号竪穴住居跡（図版7、第30図）

住居群のなかでは東側に位置し、10号住居跡との切り合い関係から、先行して営まれたことがわかる。西側は10号住居跡、東側は基礎により攪乱を受け正確な規模は知りえないが、遺存する北壁と南壁の距離は4.56mで、南壁は東西3.24mが残る。すでに上部を削平されていたこともあり、住居の深さは10cm程度しかなく、床面の標高は約2.5mである。中央付近に炉の痕跡とみられる暗茶褐色砂の広がりがみられたが、重複する2つの広がり確認でき、炉の位置をずらしたことが窺える。他にもピット状の掘り込みもあったが、いずれも浅く柱穴といえるほどの根拠がない。出土遺物は1点しか出土していない。

出土遺物（第31図）

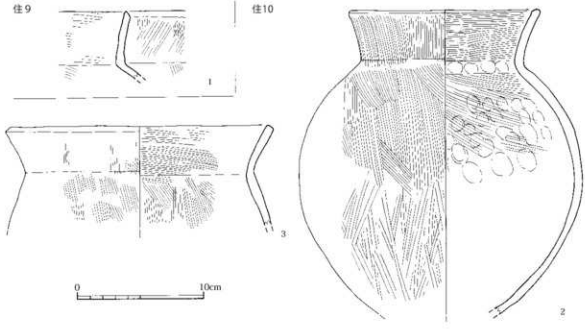
かなり削平を受けていたこともあって僅か1点だけである。1は甕の口縁部で、残存高5.2cmを測る。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。胎土は普通である。外面は縦ハケ、内面は横ハケで調整する。



第30図　9・10号竪穴住居跡実測図（1/60）

10号竪穴住居跡（図版7、第30図）

4B区から4C区、さらに3C区で確認した。住居の西半分に基礎が入っているため全容をつかめないが、遺存する住居壁から規模は長



第31図　9・10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

軸4.25ｍ・単軸3.25ｍで、後世の削平が激しく深さは20cmを残す程度である。２号住居跡と９号住居跡と切り合い関係があり、「２・９号→10号」の順序となる。東側には高さ７cmほどの一段高い部分がありベッド状遺構の可能性もあるが、極めて不整形である。なお、９号住居跡では炉跡が見つかったが、10号住居跡では全く確認できなかった。ただ、中央付近で甕が潰れた状態で出土し、土器片に混じって炭化材の小片もみられ、この付近に炉が存在した可能性がある。

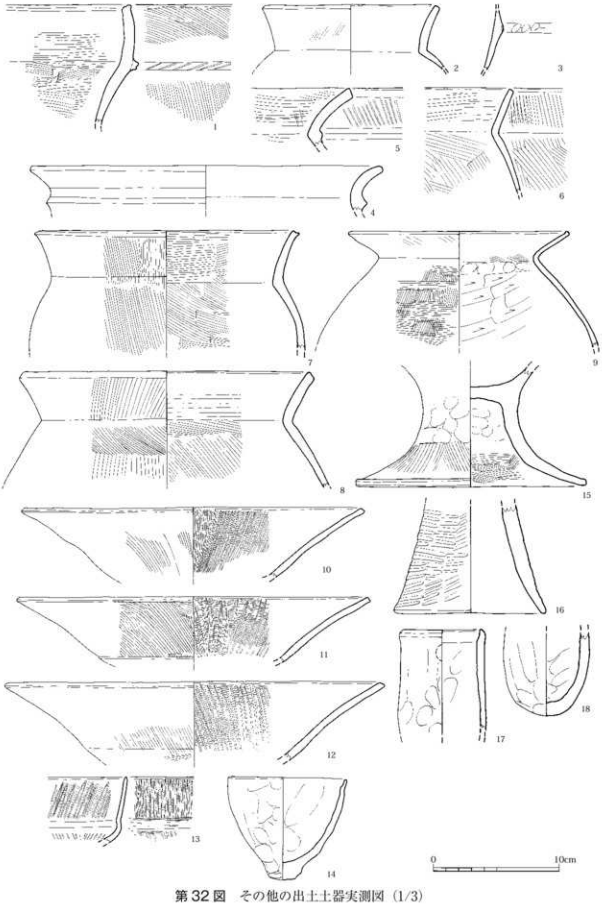
出土遺物（図版16、第31図）

２は広口壺で、底部を欠損し、口径14.5cm、残存高23.7cm、胴部最大径22.1cmを測る。外面は胴部下半部を粗い縦ハケ、上半部を横ハケで調整。胎土は普通。焼成は普通で、色調は灰黄褐～灰茶褐色を呈する。外面の一部に黒斑を有し、部分的に煤が付着する。３は在地甕の口縁部で、口径21.0cm、残存高7.9cmを測る。外面は縦ハケ、内面は胴部を縦ハケ、口縁部を横ハケで調整。焼成は普通で、色調は明赤褐色を呈する。胎土は普通。

第２項　その他の出土土器（図16、第32図）

ここでは遺構検出時の採集品や、近世期の遺構・包含層などに混入していた弥生・古墳時代の土器について報告する。小片まで含めれば多く出土しているが、その大半は表面が磨滅し、後世の造成や掘削などにより傷みが激しい。

１・２は壺。１は１Ｃ区基礎埋土出土。複合口縁壺で残存高9.4cmを測る。焼成は良好、色調は灰



第32図　その他の出土土器実測図（1/3）

黄褐色、胎土は普通。2は82号ピット出土。口径14.0cm・残存高5.1cmを測り、内外とも磨滅が激しいが、ハケ調整か。焼成は良好、色調は灰黄褐色、胎土は普通。

3～9は甕。3は76号ピット出土。弥生時代前期の甕片で混入品。内外とも磨滅するが、小さな突帯には刺突文。焼成は良好、色調は灰黄褐色、胎土は粗い。4は10C遺構面採集。口径28.0cm・残存高3.6cmを測り、内外とも横ナデ。焼成は良好、色調は灰黄褐色、胎土はやや粗い。5は8号ピット出土。残存高4.6cmを測り、内面はハケ、外面は暗文がみえる。焼成は良好、色調は灰黄褐色、胎土は普通。6は112号ピット出土。残存高8.3cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好、色調は内外とも灰黄褐色で、外面には煤が付着。胎土は普通。7は1C区基礎埋土出土。口径11.0cm・残存高9.9cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好、色調は茶褐色、胎土はやや粗い。8は1C遺構面採集。口径12.4cm・残存高9.0cmを測り、内外ともハケ調整。焼成は良好、色調は内面が灰黄褐色、外面が暗黄茶褐色、胎土はやや粗い。9は6号ピット出土の布留系甕。口径17.6cm・残存高9.2cmを測る。内面は胴部をヘラ削り、頸部をナデ、口縁部を横ハケ後ナデ。外面は縦ハケ後横ハケ。焼成は良好、色調は灰黄褐～淡灰褐色、胎土は普通。

10～12は高坏。10は1C遺構面採集。口径27.0cm・残存高5.5cmを測り、内面はハケ後放射状暗文、外面はハケで調整。焼成は良好、色調は灰黄褐色、胎土は普通。11は1C基礎埋土出土。口径27.9cm・残存高5.2cmを測り、調整は10と同じ。焼成は良好、色調は灰黄茶褐色、胎土は普通である。12は1C遺構面採集。口径30cm・残存高6.3cmを測り、調整は10と同じ。焼成は良好、色調は灰黄茶褐色、胎土は普通。

13～15は鉢。13は1C区基礎埋土出土。小型丸底鉢で残存高5.25cmを測る。内外ともハケ後に放射状のミガキを施す。焼成は良好、色調は灰黄茶褐色、胎土は良好。14は4B区遺構面採集。手捏ね鉢で口径9.3cm・器高8.0cm・底径2.0cmを測り、内外とも指オサエ及びナデで調整。焼成は良好、色調は灰黄色、胎土は普通。15は4B遺構面採集。脚付鉢の脚部で底径18cm・残存高9.4cmを測り、基部付近は内外ともナデ、裾部はハケで調整。焼成は良好、色調は灰黄色、胎土はやや粗い。14・15は採集した地点を考えると、10号住居跡に伴っていた可能性がある。

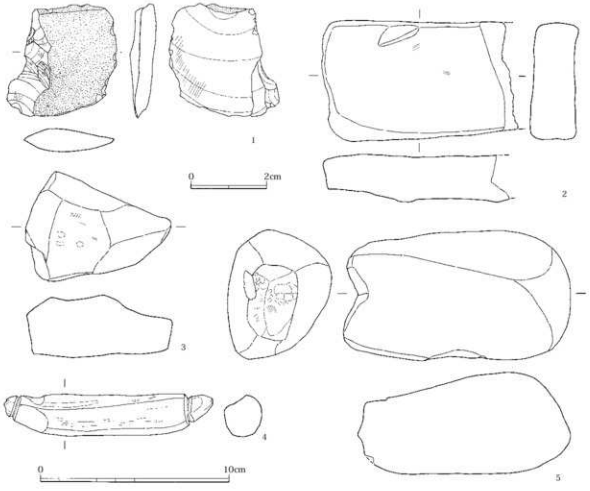
16は器台。底径12.1cm・残存高8.5cmを測り、内面はナデ、外面は叩きがみられる。焼成は良好、色調は灰黄褐色、胎土は普通である。

第3項　竪穴住居跡出土の石器

17・18は飯蛸壺。17は2A－3区基礎埋土出土。口径6.8cm・残存高8.2cmを測り、内外ともナデ調整である。焼成は良好、色調は内面が黄褐色、外面が橙褐色、胎土は普通。18は6号ピット出土。残存高6.6cmを測り、内外ともナデ調整である。焼成は良好、色調は灰黄褐色、胎土は普通である。

竪穴住居跡からは点数こそ少ないものの石器も出土した。掲載した以外にも住居内から石が出土したが、積極的に石器として認められなかったため、除外した。

1は7号竪穴住居跡から出土した黒曜石の剥片で、表面は風化が進み、片面には原石面が残る。縦3.0cm・横2.9cm・厚さ0.7cm・重さ2.92gを測る。縄文時代遺物の混入である。2は5号竪穴住居跡出土の砂質凝灰岩製砥石で、両側面を面取りし、砥面にわずかに擦痕が残る。長さ10.4cm・幅5.45cm・厚さ2.55cmを測る。3も5号竪穴住居跡出土の凝灰岩製砥石片で、縦5.8cm・横7.7cm・厚さ3.35cm



第 33 図　竪穴住居跡出土石器実測図（1 は 1/1、他は 1/2）

を測る。わずかに擦痕が残る。4 は 6 号竪穴住居跡出土の滑石製石錘の完形品で、長さ 11.05cm・幅 2.25cm・重さ 70.88 g を測る。両端に紐を緊結するための溝がめぐる。5 は 6 号竪穴住居跡出土で、一端に人工的な抉りが認められるため緑泥片岩製石錘の可能性も推定される。長さ 12.0cm・幅 6.8cm・重さ 673 g を測る。

第3節　近世以降の遺構と遺物

紙幅の都合により、主要な遺構と遺物について概述する。なお、再三述べるが、近世以降の遺構はいずれも近世期の整地層上面から掘削されているが、古墳時代の地山面まで下げて検出を行った。そのため、図上では遺物が遊離したものもある。

第1項　主要な遺構と出土遺物

(1) 土　坑

12号土坑（図版8、第34図）

10 A区の南西部に位置し、長軸1.82 m・短軸0.68cm・深さ0.22 mで、南側は深さ0.37cmを測る。遺構の北寄りに土師器皿を蓋と身にして合わせたものが二組出土し、集落域ということもあり胞衣埋納遺構の可能性もあるが、合わせ口にした土器の内部からの遺物は皆無である。

出土遺物（第36図1～4）

1～4はいずれも土師器皿で、1と3は蓋に転用。1は口径10.6cm・器高1.5cmで、内外ともに黒斑。天井部は回転ヘラ削り。2は口径11.5cm・器高1.2cmで、底部は回転ヘラ削り。3は口径11.6cm・器高1.4cmで、内外とも黒斑を有し、天井部は回転ヘラ削り。4は口径11.8cm・器高1.75cmで、内面に黒斑がある。底部は回転ヘラ削りで、中央部のみヘラ切り未調整。

15号土坑（図版8、第34図）

東西2基の土坑が切り合うが、埋土による区別はできない。東側は径1.25 m・深さ0.91 m、西側は長軸1.08 m・短軸0.80 m・深さ0.98 mを測る。遺物は少ない。

出土遺物（第36図8・9・16）

8は染付皿で、口径14.7cm・底径10.6cm・器高5.6cmを測る。底部と体部の境にある段と高台畳付は露胎である。外面は草花文、内面は無文。9は燈明台。口径3.7cm・底径3.8cm・器高4.2cmで、内面に芯立てがあり、脚部に径3 mm程度の釘穴を穿つ。16は土師質大型鉢で、口径43cm・底径15.9cm・器高32.2cmを測る。内外ともハケ調整で、口縁部外面には2条の沈線。

17号土坑（図版8、第34図）

長軸1.34 m・短軸0.97 m・深さ0.19 mを測る。中央南寄りに甕が破砕した状態で出土した。本来は埋甕遺構か。

出土遺物（第36図18）

18は台付き火鉢。鉢部底径20.5cm、残存高9.5cmで、底面に板目痕が残る。

22号土坑（図版9、第35図）

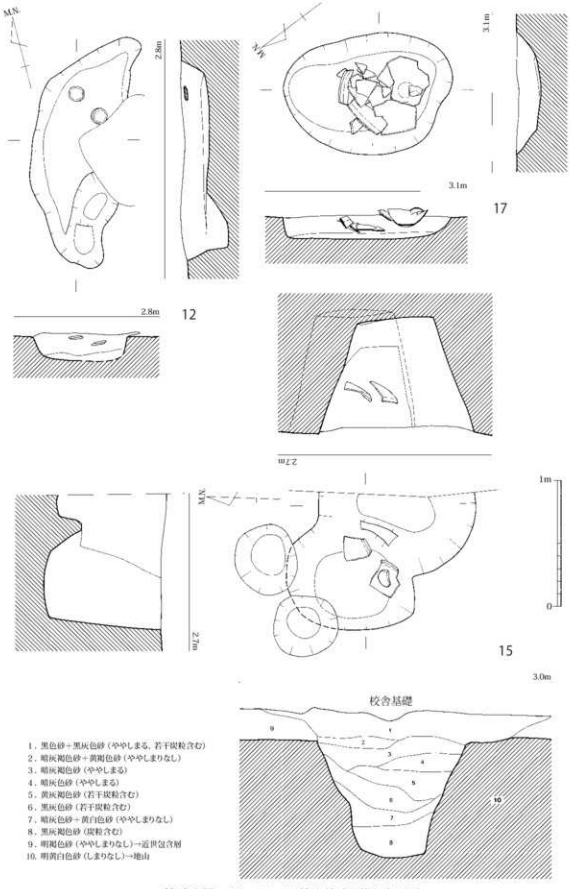
長軸0.84 m・短軸0.59 m以上・深さ0.24 mを測る。東寄りに甕底部が正置された状態で出土した。埋甕遺構か。

出土遺物（第36図15）

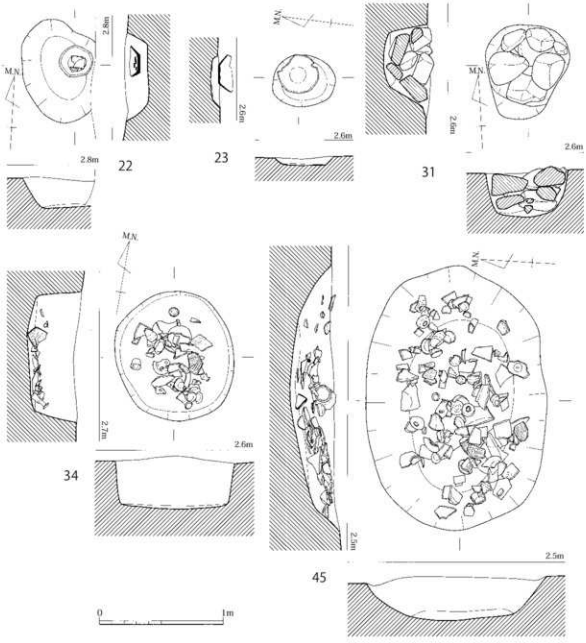
15は土師質甕底部で、底径16.6cm・残存高16.8cmを測る。後述する土坑42出土の第36図14と同型品であろう。外面に4条の沈線がめぐる。

23号土坑（図版9、第35図）

長径0.49 m・短径0.42 m・深さ0.07 mを測る。中央に甕底部が正置した状態で出土した。図上で



第 34 図　12・15・17 号土坑実測図（1/30）



第 35 図　22・23・31・34・45 号土坑実測図（1/30）

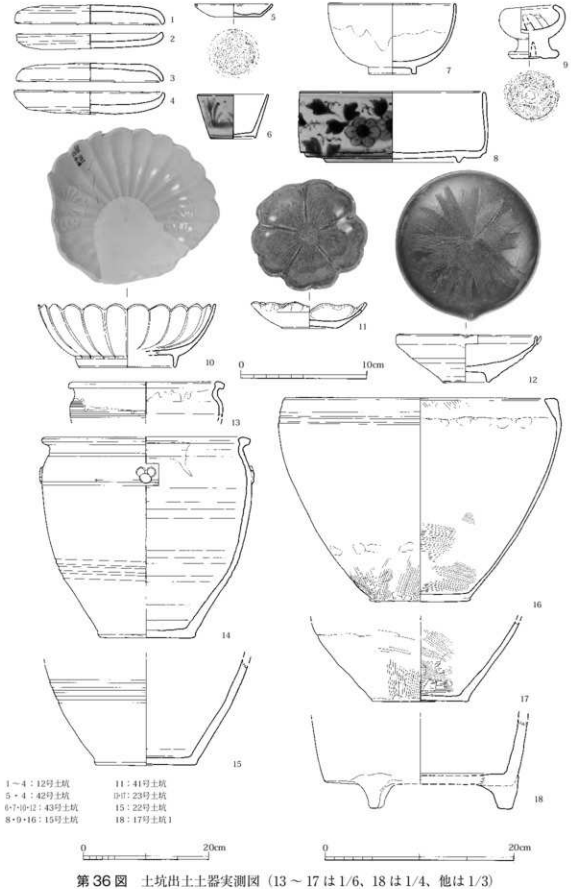
は遺構から浮いているが、古墳時代の地山面で検出したためである。

出土遺物（第 36 図 13・17）

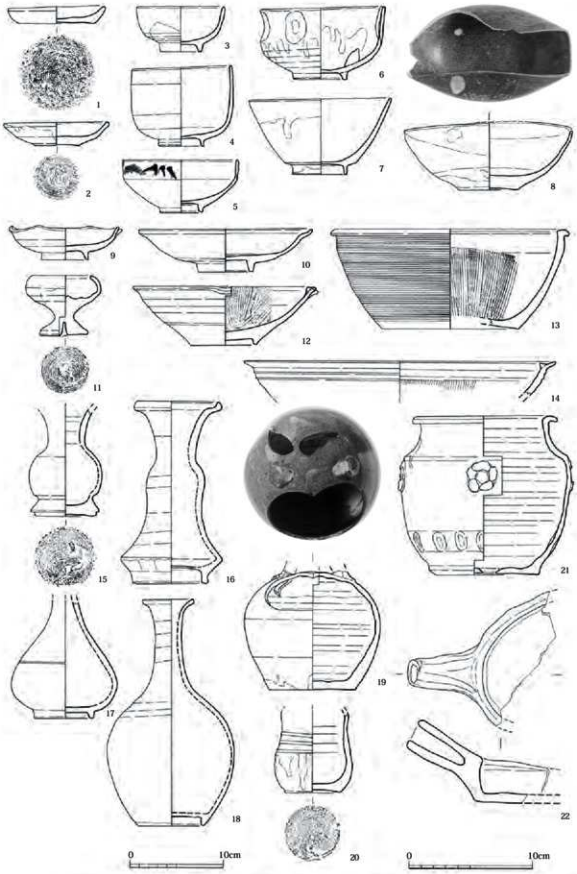
13 は施釉陶器中型甕。口径 25.0cm・残存高 5.7cm を測り、口縁部は内外ともナマコ釉がかけられる。17 は土師質甕底部。底径 15.3cm・残存高 12.5cm を測る。内外ともハケ調整。土坑 15 出土の甕と同様の大型品。

31 号土坑（図版 9、第 35 図）

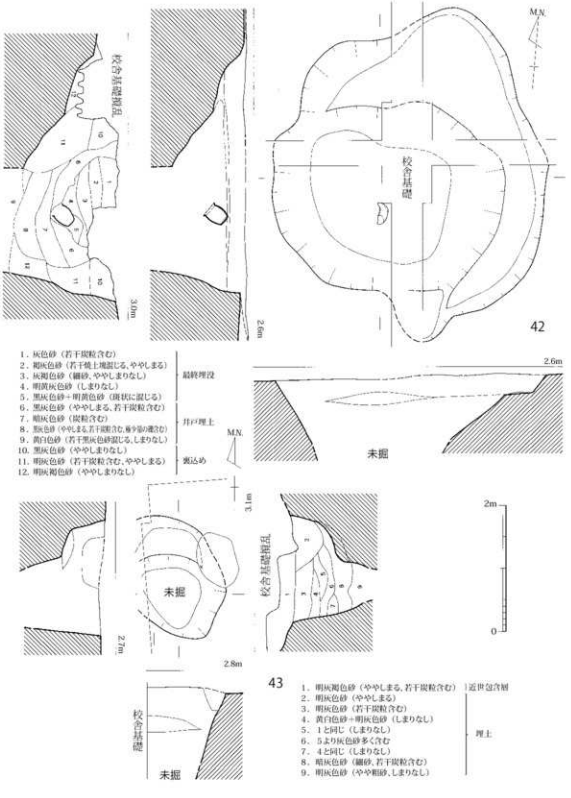
長径 0.76 m・短径 0.67 m・深さ 0.38 m を測り、人頭大の礫が多数みつかった。掘り進めると中央部には礫がなく、柱の根元を固める根巻石の可能性も考えたが、周囲に同様の遺構はなく、中央部が



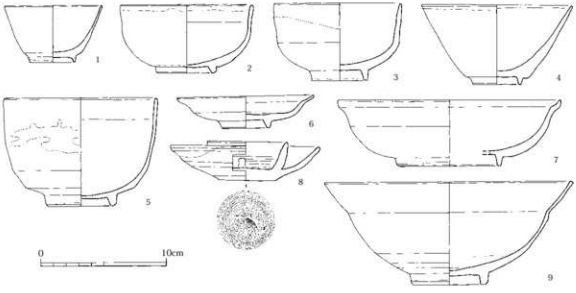
第 36 図　土坑出土土器実測図（13 ～ 17 は 1/6、18 は 1/4、他は 1/3）



第 37 図　34 号土坑出土土器実測図（13・14・18・19・21・22 は 1/4、他は 1/3）



第38図　42・43号土坑実測図（1/60）



第 39 図　45 号土坑出土土器実測図 1（1/3）

空洞状になることから石組を伴う埋納遺構の可能性も考えられる。

34 号土坑（図版 10、第 35 図）

長径 1.05 m・短径 0.95 m・深さ 0.42 m を測る。日常雑器などが床面付近にまとまって出土し、炭混じりの黒灰色砂が多く、廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第 37 図）

1・2 は土師器皿。1 は口径 7.8cm・底径 6.1cm・器高 1.4cm、2 は口径 8.4cm・底径 5.6cm・器高 1.9cm を測る。口縁部の内外には煤が付着する。

3 ～ 8 は碗。3 は口径 7.05cm・器高 3.65cm の小碗。下半部は露胎。4 は口径 8.0cm・器高 6.5cm で畳付は露胎。5 は腰折れ碗で口径 9.25cm・器高 4.25cm を測る。高台内は露胎。細かい貫入あり。6 はなまこ釉がかかり、口径 10.0cm・器高 6.0cm で、畳付きは露胎。口縁部は指オサエで凹凸をつける。7 は口径 11.3cm・器高 5.2cm で、なまこ釉がかかる。8 は口径 13.5cm・器高 5.4cm で、鉄釉がかかる。底部は糸切り。

9・10 は皿。9 は花文皿で口径 9.05cm・器高 2.7cm を測る。10 は口径 13.9cm・器高 3.5cm 内面は蛇の目剥ぎ。底部から高台にかけて露胎。

11 は灯火台。口径 4.7cm・器高 4.9cm で、底部は糸切り。

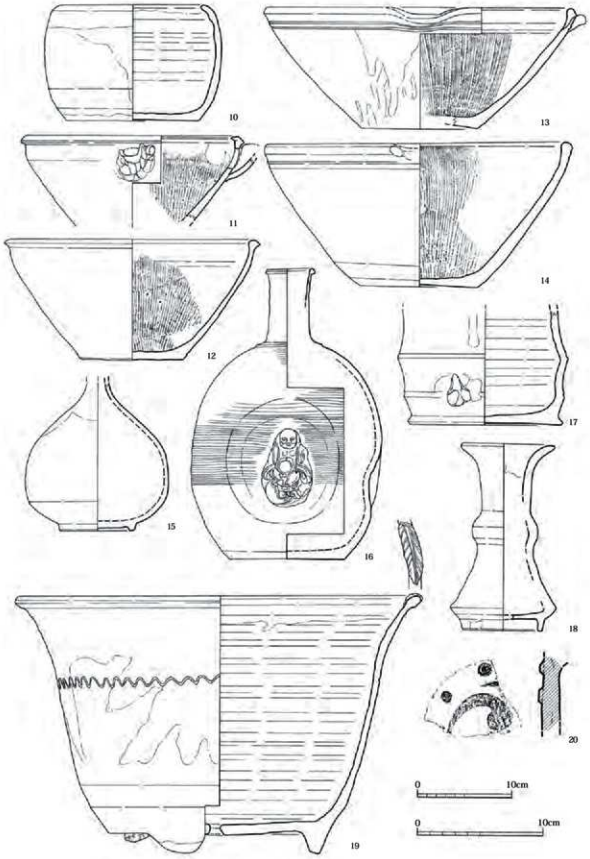
12 ～ 14 は擂鉢。12 は片口付で口径 14.7cm・器高 7.8cm で、内外とも施釉。13 は平底で、口径 25.8cm・底径 14.8cm・器高 10.7cm を測る。14 は口径 33.6cm・残存高 2.85cm で、口縁部内面に突帯を有する。

15・16 は仏花瓶で、17・18 は瓶。15 は底径 5.0cm・残存高 9.0cm で、底部は糸切り。16 は口径 6.8cm・底径 6.2cm・器高 14.8cm を測る。17 は底径 4.3cm・残存高 9.6cm で、畳付きは露胎。18 は口径 5.4cm・底径 7.1cm・器高 24.4cm を測る。

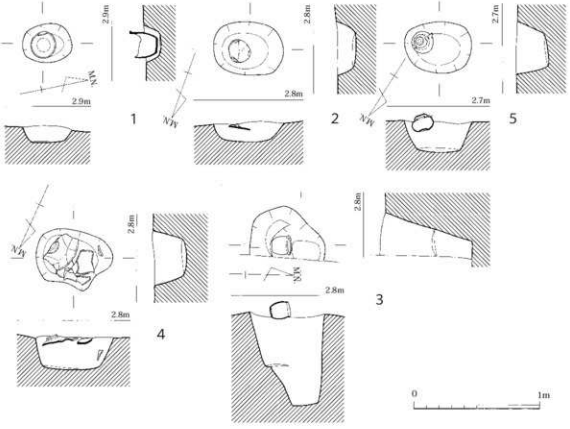
19 は香炉。底径 9.7cm・残存高 12.7cm で、本来上部に把手が付く。

20 は徳利。底径 4.4cm・残存高 6.7cm を測り、底面は糸切り。外面は釉を流しかける。

21 は甕。口径 15.5cm・器高 17.1cm・底径 12.0cm で、肩部に 2 ヶ所粘土を貼り花形にする。底部



第40図　45号土坑出土土器実測図2（10・15～18・20は1/3、他は1/4）



第 41 図　1 ～ 5 号ピット実測図（1/30）

には焼成後に穿孔をしている。

22 は土師質土師。表面は煤による汚れ。

42 号土坑（図版 10、第 38 図）

長軸 5.31 m・短軸 4.36 m・深さ 1.3 m以上を測る。土層の観察などから井戸であったと考えられるが、掘削中にも崩落が始まり完掘には至らなかった。井戸の掘り方は東西 3.8 m・南北 3.0 m程度である。最終的な埋没（人為的な埋め立てか）の直前に落ち込んだ甕が出土している。

出土遺物（第 36 図 5・14）

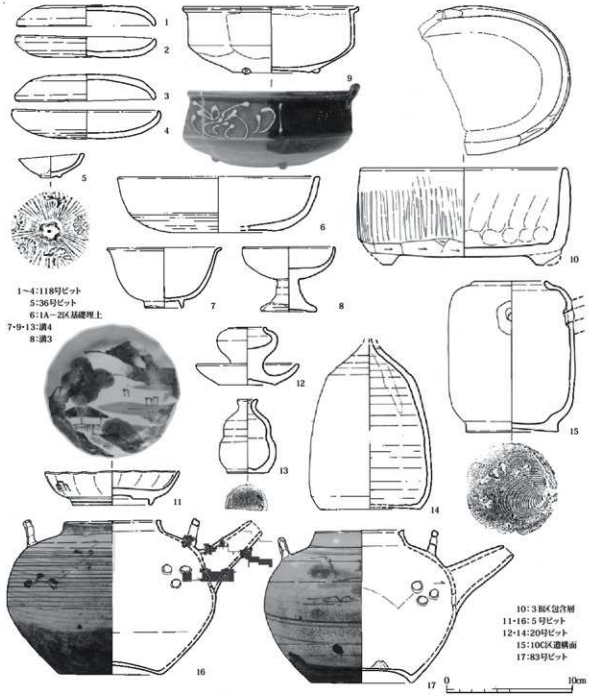
5 は土師器皿で、口径 6.2cm・底径 3.6cm・器高 1.1cm を測る。底部は糸切りで、口縁端部に油煙が付着する。14 は土師質中型甕で、口径 33.4cm・底径 15.0cm・器高 32.8cm を測る。緩やかな肩部には粘土貼り付けによる花弁を前後につけ、胴部中位には浅く太い沈線がめぐる。

43 号土坑（第 38 図）

長軸 1.90 m・短軸 1.24 m以上・深さ 1.30 m以上を測り、土層の観察や土坑の形態から井戸と推測される。遺構壁面の崩落の危険があったので完掘はしていないが、段掘りしており、井戸本体の掘方は径 0.65 ～ 0.70 m程度か。井戸枠等の構造物は確認できなかった。

出土土器（第 36 図 6 ・ 7 ・ 10 ・ 12）

6 は染付の猪口。口径 5.8cm・底径 3.8cm・器高 3.5cm を測る。外面に草花文。7 は施釉陶器の碗。口径 10.2cm・底径 3.8cm・器高 5.6cm を測り、釉は二重掛け。畳付のみ露胎。10 は白磁菊花形皿。口径 14.0cm・底径 7.7cm・器高 5.0cm で、見込みに菊花文。畳付は露胎。12 は陶器の小型片口付鉢。



第 42 図　その他の出土土器実測図 1（1/3）

口径 11.2cm・底径 3.8cm・器高 5.7cm を測り、摺目は 14 本単位。畳付は露胎。片口部分は口縁を外側へ小さく折り、曲げる程度である。

45 号土坑（図版 10、第 35 図）

7 B区の南側に位置し、長軸 2.14 m・短軸 1.46 m・深さ 0.35 mを測る。炭混じりの黒灰色砂が堆積し、極めて多数の土器類が折り重なるようにして出土した。廃棄土坑であろう。

出土遺物（第 39・40 図）

1 ～ 5 は碗。1 は口径 7.7cm・底径 3.6cm・器高 4.5cm で畳付きは露胎。2 は口径 10.6cm・底径 4.8cm・器高 5.4cm を測る。釉は発色が悪い。3 は口径 10.2cm・底径 4.5cm・器高 6.1cm を測り、釉は二重にかかるが発色不良。4 は口径 11.9cm・底径 3.8cm・器高 6.2cm で、畳付きは露胎。5 は口径 12.2cm・底径 5.6cm・器高 8.5cm で口縁部付近は二重に釉をかける。

6 ・ 7 は皿、8 は燈明皿。6 は口径 10.8cm・底径 3.8cm・器高 2.5cm で、見込みは蛇の目釉剥ぎ。7 は口径 17.4 ㎝・底径 8.3cm・器高 5.2cm で、畳付きは露胎。口径 11.8 ㎝・器高 2.8 ㎝を測り、内面に口径 6.2cm の受皿を設ける二重構造。中心部には芯立てがある。底部は糸切り。

9・10 は鉢。9 は口径 19.7cm・底径 6.0cm・器高 8.1cm で、見込みは蛇の目剥ぎ、畳付きは露胎である。10 は平底で円筒状の鉢。口径 11.0cm・底径 10.6cm・器高 9.1cm で、口縁部がやや内傾へ入る。ところどころに貫入がみられ、底面は露胎。

11 ～ 14 は擂鉢。11 は注口をつける形式の片口付擂鉢で、口径 23.5cm・残存高 9.0cm を測る。口縁部は内傾に折りたたんで肥厚させる。12 は口径 26.0cm・残存高 12.7cm を測り、底部は剥落している。12 は素口縁鉢で、口径 26.0 ㎝・底径 11.0 ㎝・器高 12.7cm を測る。13 は片口付鉢で、口径 33.2cm・底径 12.3cm・器高 12.7cm を測り、口縁部付近に 2 条の沈線がめぐる。外面下半は露胎。14 も片口付鉢で、口径 32.7cm・底径 12.6cm・器高 15.3cm を測る。

15・16 は瓶、18 は仏花瓶。15 は底径 6.0cm・残存高 11.7cm で、畳付きのみ露胎。16 は口径 3.9cm・底径 9.2cm・器高 22.9cm で、頸部に小さな突帯がめぐり、外面にはカキメを施す。胴部は 4 か所を窪ませて、そのうち 1 か所に衣を着た人物像を貼りつける。18 は口径 7.4cm・底径 6.5cm・器高 14.8cm で、中央付近が少し膨らむ。畳付き以外は施釉され、細かな貫入がみられる。

17 はペコカン徳利。底径 12.2cm・残存高 9.1cm で、胴部は屈曲部分にそれぞれ沈線をめぐらせ、底部付近に粘土を貼りつけ文様とする。

19 は植木鉢。口径 42.9cm・底径 23.0cm・器高 27.6cm で大型である。外面と口縁部内面、高台内に施釉される。畳付きは露胎。底部中央には焼成前に穿孔が行われる。体部外面にはヘラ書きの波状沈線を施す。底部は 3 か所に高台があり、焼成時に使用された胎土目の 1 つが残り、剥落の痕跡から高台の間に二個ずつ用いたことが窺える。

20 は軒先瓦。軒丸瓦の破片で、三つ巴文と珠文がみられる。

その他の土坑出土遺物（第 36 図 11）

11 は 41 号土坑出土の陶器で五弁花形皿。口径 9.2cm・底径 4.2cm・器高 2.0cm を測り、無高台で底面のみ露胎。

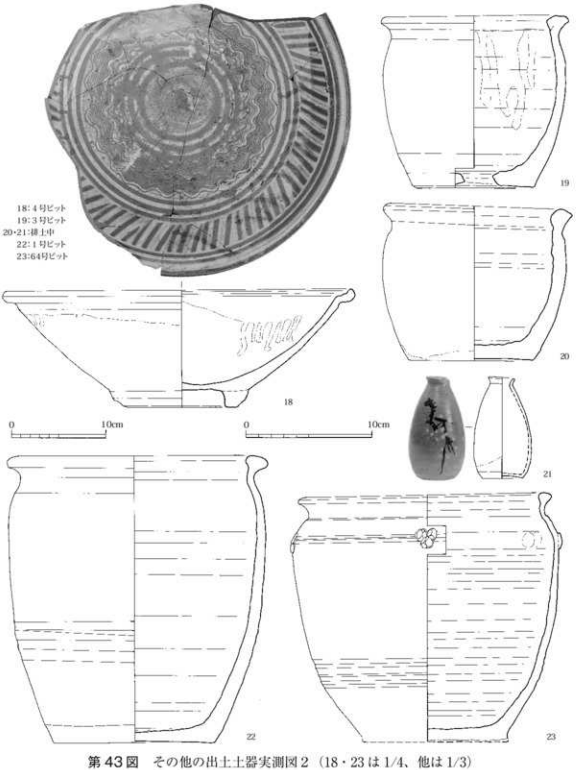
（2）ピット

1 号ピット（図版 11、第 41 図）

長径 39cm・短径 31cm・深さ 14cm で、表土剥ぎの段階で口縁部の一部を打ち欠いてしまったが、中央に陶器甕が安置された状態で出土し、中から寛永通宝が 1 枚出土した（第 47 図 6）。寛永通宝は壺の底に張り付くように出土しており、上部からの流れ込みではないようである。埋納遺構であろうか。

出土遺物（第 43 図 22）

22 は陶器甕。口径 20.5cm・底径 12.7cm・器高 22.7cm を測り、外面は鉄釉。胴部中位に浅く太め



第 43 図　その他の出土土器実測図 2（18・23 は 1/4、他は 1/3）

の沈線をめぐらせる。

2 号ピット（図版 11、第 41 図）

長さ 0.56 m・幅 0.42 m の小規模なピットで、掲載しなかったが、台付火鉢の底部が出土。

3号ピット（図版 11、第 41 図）

東西 41cm 以上・南北 59cm・深さ 74cm を測り、遺物は施釉陶器の鉢が 1 点出土した。

出土遺物（第 43 図 19）

19 は陶器小型甕で、口径 13.5cm・底径 9.6cm・器高 12.4cm を測る。外面には鉄釉がかかり、底部には焼成後に孔を穿つ。

4号ピット（図版 11、第 41 図）

長径 61cm・短径 43cm・深さ 27cm を測る。陶器の鉢が潰れた状態で出土した。

出土遺物（第 43 図 18）

18 は大型の鉢で、口径 36.5cm・底径 11.4cm・器高 12.5cm を測る。内面はハケメにより横線・縦線・波状文を施す。高台外側を斜めに切り落とす。

5号ピット（図版 11、第 41 図）

長径 53cm・短径 41cm・深さ 25cm を測る。磁器皿を蓋に転用した土瓶が出土した。胞衣埋納遺構であろうか。

出土遺物（第 42 図 11・16）

11 は磁器の色絵花形皿で、口径 10.7cm・底径 6.2cm・器高 2.6cm を測る。蛇の目凹形高台で、畳付は露胎。内外に文様が描かれる。16 は土瓶。口径 7.8cm・底径 8.2cm・器高 12.0cm で、肩部に把手をつける。注口の付け根には湯を流すための孔が三つある。非常に薄手で軽量。

118 号ピット

調査終了直前に壁が崩落し姿を見せたため個別遺構図は作成できなかったが、12 号土坑と同様に土師器皿を蓋と身に合わせたものが二組出土した。やはり埋納遺構か。

出土遺物（第 42 図 1 ～ 4）

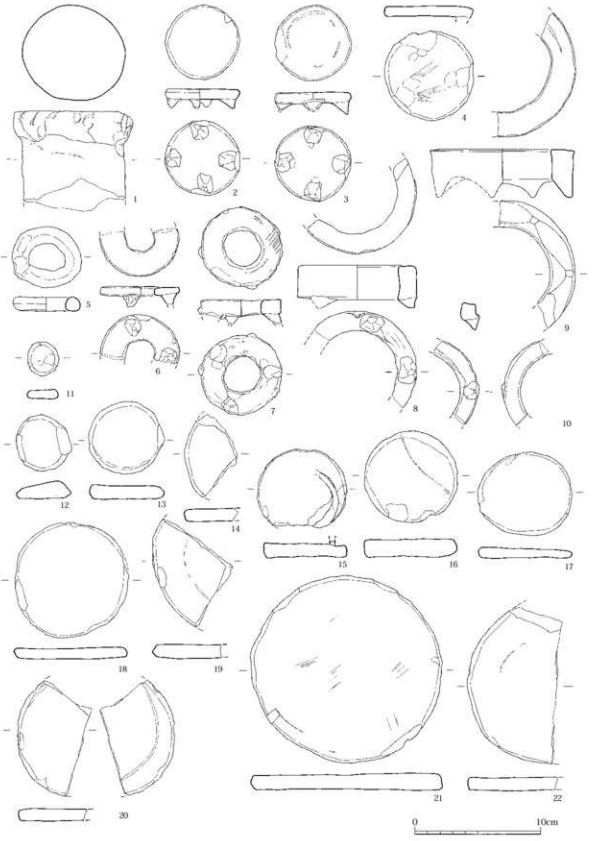
1 ～ 4 はいずれも土師質皿で、1・3 は蓋に転用。1 は口径 11.0cm・器高 1.5cm で、内外とも黒斑を有する。2 は口径 11.0cm・器高 1.7cm で、底面はヘラ切り。3 は口径 11.0cm・器高 1.5cm で、天井部外面はヘラ切り後、中心部を除き回転ヘラ削り。内面に黒斑。4 は口径 11.7cm・器高 2.2cm で、底面はヘラ切り後、中心部を除き回転ヘラ削り。

その他のピット出土遺物（第 42・43 図 5・12・14・17・23）

5 は 36 号ピット出土の白磁紅皿。口径 5.3cm・器高 1.9cm を測り、外面には花文を散らす。12 は 20 号ピット出土の施釉陶器燈明皿で、口径 8.2cm・器高 4.5cm を測り、脚台付きの受皿が伴う形式である。受皿の口縁部は内外とも露胎で、底面も中央部を除き露胎。14 も 20 号ピット出土。陶器瓶で底径 7.8cm・残存高 12.9cm を測る。内面には轆轤ナデの跡が顕著に残る。17 は 83 号ピット出土の陶製土瓶。口径 7.0cm・底径 8.6cm・器高 12.0cm を測る。注口の付け根には孔が 3 つある。23 は土師質甕で、口径 26.8cm・残存高 26.0cm を測り、底部は剥落しているが、復元底径は 15.0cm である。

（3）その他の出土土器（第 42・43 図 6 ～ 10・13・15・20・21）

6 は 1 A － 2 区基礎埋土出土の土師質鉢。口径 16.0cm・器高 4.4cm を測り、底部は回転ヘラ削り。7 は 4 号溝出土の小碗で、口径 9.1cm・底径 3.1cm・器高 4.8cm で、細かい貫入がみられ、高台内から周辺まで露胎。8 は 3 号溝出土の仏飯器。口径 7.4cm・底径 4.5cm・器高 5.1cm で、脚裾部と底面は露胎。9 は 4 号溝出土の把手付土鍋。口径 14.0cm・器高 5.6cm で、底部に粘土粒をつけて台とする。



第 44 図　窯道具実測図（1/3）

口縁部には短い粘土紐で輪をつくり把手とする。10は掘剥り用のたらい。長径16.5cm・器高7.7cmを測り、外面はハケ調整後底部との境を手持ちヘラ削り。かなり厚手。13は4号溝出土の小瓶。口径1.6cm・底径3.3cm・器高5.9cmを測り、底部は糸切りで露胎。15は10C区遺構面採集の油差しで、注口は欠損するが、口径5.9cm・底径7.3cm・器高11.8cmを測り、底部は糸切り。内外とも釉がかかるが、内面底部は未発色で、外面底部は露胎。20・21はともにⅡ区東側の表土掘削時に排土中から採集したが、この2点は20の中に21が納まる入れ子の状態で発見され、本来は埋納遺構に伴うものと推測する。20は小型甕で、口径13.5cm・底径9.6cm・器高12.4cmを測り、形態・法量とも3号ピット出土の甕と類似する。21は陶器の小型徳利で、枝に咲く花が表現されている。口径2.1cm・底径3.3cm・器高8.0cmを測る。

第2項　窯道具

1はトチン。溝4出土で、径8.0cm・最大径9.4cm・残存長7.9cm。下半部を欠く。

2～4は有足円板ハマ。2は2A－3区遺構面採集で、径5.9cm・器高1.5cm。3は10C遺構面採集で、径6.1cm・残存高1.6cm。上面には高台の痕跡が残る。4は3C区表土出土で、径7.0cm・残存高1.0cmを測り、足の欠けた三足ハマ。

5は円環ハマ。3A－2区包含層出土で、径5.4cm・厚さ1.1cmを測る。

6～10は有足円環ハマ。6は11号土坑出土で、径6.25cm・器高1.6cmを測る三足ハマである。7は3B区包含層出土で、径6.3cm・器高1.9cm。8は9B遺構面採集で、径9.4cm・器高3.4cmを測り、五足ハマか。9は9B遺構面採集で、径11.4cm・器高3.3cmを測り、下部を数か所円弧状に切り取ることで足とする。10は溝3出土で、器高2.1cm。

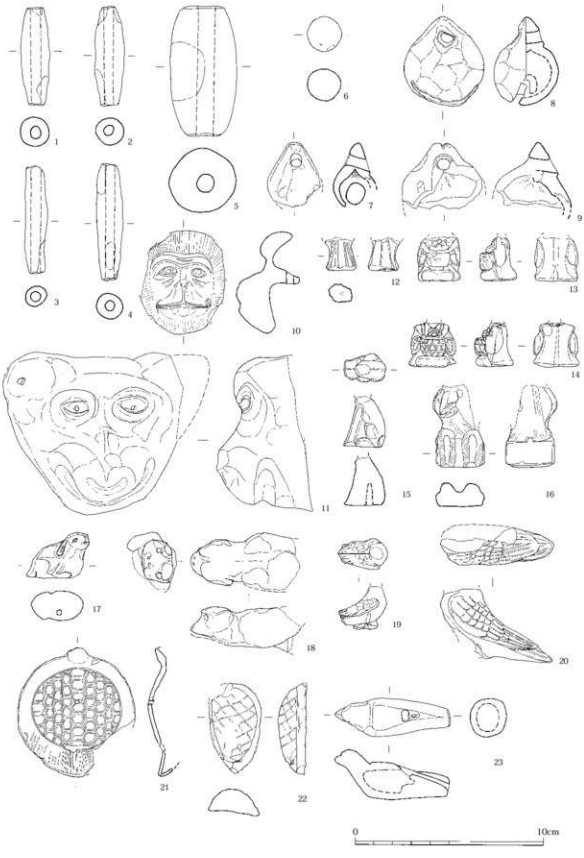
11～22は円盤ハマで、小型（11～13・15～17）・中型（14・18・20）・大型（19・21・22）がある。11は1C遺構面採集で、径2.6cm・厚さ0.8cm。12は1C遺構面採集で、径4.4cm・厚さ1.5cm。13は43号土坑出土で、5.9cm・厚さ1.2cm。14は溝1出土で、厚さ1.0cm、径は9.0cmか。15は45号土坑出土で、径7.1cm・厚さ1.2cm。16は23号ピット出土で、径7.2cm・厚さ1.5cm。17は24号土坑出土で、径7.4cm・厚さ0.9cm。18は9C遺構面採集で、径9.2cm・厚さ0.9cm。19は1C区基礎埋土出土で、厚さ1.2cm、径は12.5cmか。20は55号ピット出土で、厚さ1.0cm、径は10.4cmか。21は64号ピット出土で、径15.0cm・厚さ1.3cm。22は114号ピット出土で、厚さ1.1cm、径は13.2cmか。

第3項　土製・陶製品

1～5は土錘。1は溝4出土で、長さ6.15cm・径1.55cm・重さ9.08g。2は41号土坑出土で、長さ5.3cm・径1.55cm・重さ11.35g。3は1A－3区基礎埋土出土で、長さ5.65cm・径1.2cm・重さ5.49g。4は3A－2区包含層出土で、長さ6.3cm・径1.4cm・重さ11.65g。5は35号ピット出土で、長さ6.9cm・径3.5cm・重さ78.88g。

6は投弾。2A－3区基礎埋土出土で、径1.8cm・重さ5.8cm。

7～9は土鈴。7は90号ピット出土で、残存高3.45cm・幅2.8cmを測り、径1.2cmの丸が残る。



第 45 図　土製・陶製品実測図（1/2）

8は47号土坑出土で、高さ4.8cm・幅4.2cmを測り、径1.1cmの丸が残る。9は溝3出土で、残存高3.45cm・幅4.2cm。

10・11は猿面。10は10A遺構面採集で、縦5.45cm・幅4.4cmで、背面に紐を通す穴が開く。11は2A－1区包含層出土で、高さ8.6cm・残存幅9.6cmを測り、耳に相当する部分に紐を通す穴があく。型押しで薄手。

12～14は人物形の根付。12は2A－2区包含層出土で、人物の下半身のみで、残存高1.8cm幅1.65cm。中心に径2mmの孔が貫通。13は3B遺構面出土で頭部を欠き、残存高2.35cm・幅2.25cm。中心に径3mmの孔が貫通。14は75号ピット出土で頭部を欠き、残存高2.35cm・幅2.5cm。

15～21は土人形。15は2A－2区包含層出土で、頭部を欠く猿。残存高2.7cm・幅2.25cmを測り、底部に径3.5mmの孔がある。16は2A－1区遺構面採集で、頭部を欠く腰掛け猿。残存高4.4cm・幅2.7cm。17は35号ピット出土の兎。高さ2.4cm・幅3.3cmを測り、径3mmの孔が開く。18は9A区表土出土で、種別は判然としないが四足動物である。残存長5.75cm・残存高2.4cm。19は溝1出土の鳥で、頭部と尾羽を欠損。残存高2.3cm・幅2.6cmを測り、底部に径2mmの孔が開く。20は151号ピット出土の鳥で、頭部と脚部を欠損。残存高3.8cm・残存幅6.0cm。21は119号ピット出土の型押し亀。腹側を欠損し、長さ6.7cm・幅6.3cm。

22は松傘形土製品で、2C区包含層から出土。縦4.8cm・横2.8cm・厚さ1.5cmを測る。裏面は剥離した状態で、何かに張り付けたものか。

23は8B区遺構面出土の陶製鳥形笛で、長さ6.1cm・幅2.0cm・高さ2.6cmを測る。

第4項　石器・石製品

1～3は縄文時代の石器で、集落形成以前の遺物。1は11号土坑出土の安山岩製の打製石鏃。残存長1.4cm・幅1.5cm・厚さ0.25cm・重さ0.36gで、先端を欠く。2は18号土坑出土の黒曜石製細石刃。長さ2.6cm・幅1.05cm・厚さ0.55cm・重さ1.18gで、一部自然面が残る。3は39号土坑出土の黒曜石製剥片鏃で、一部を欠く。残存長3.0cm・幅1.55cm・厚さ0.4cm・重さ1.69g。

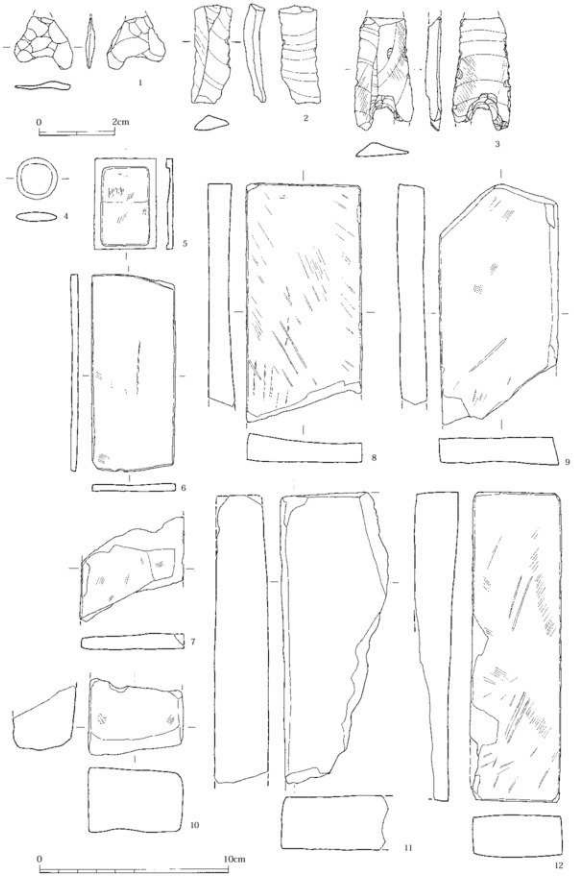
4は11号土坑出土の黒色の碁石。径2.15cm・厚さ0.5cm・重さ3.57g。5は1A－3区包含層出土の粘板岩製小型砥。縦4.8cm・横3.25cm・厚さ0.35cm。

6～12は砥石で、いずれも擦痕がみられる。6は64号ピット出土の砂岩製。長さ10.45cm・幅4.5cm・厚さ0.5cm。7は64号ピット出土の頁岩製の破片。残存長5.5cm・幅5.45cm・厚さ0.86cm。8は落ち込み1出土の凝灰岩製。残存長12.5cm・幅6.1cm・厚さ1.4cm。9は64号ピット出土の頁岩製。残存長12.65cm・幅6.3cm・厚さ1.5cm。10は落ち込み2出土の頁岩製。残存長4.0cm・幅5.1cm・厚さ3.4cm。11は34号土坑出土の凝灰岩製。残存長15.35cm・残存幅5.7cm・厚さ2.9cm。12は10B区遺構面採集の頁岩製である。長さ16.35cm・幅4.7cm・厚さ2.3cm。

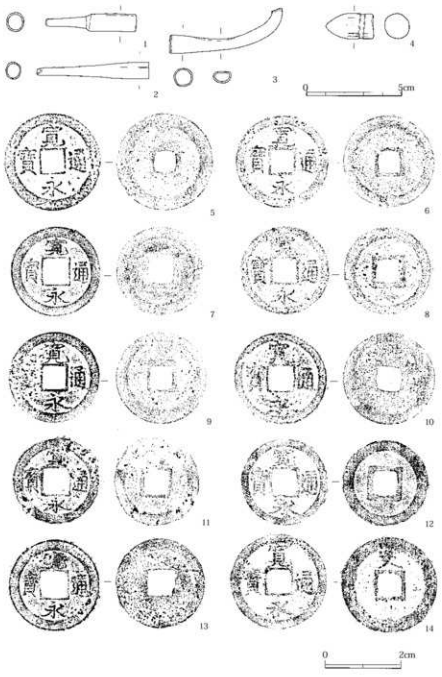
第5項　金属製遺物

(1) 金属製品

1～3は青銅製煙管金具で、1・2が吸口、3は火皿を欠くが雁首である。1は35号ピット出



第 46 図　石器・石製品実測図（1 ～ 3 は 1/1、他は 1/2）



第47図　金属製品実測図及び銭貨拓本
（1～4は1/2、他は1/1）

土で長さ4.7cm・径1.0cm。2は13号土坑出土で長さ5.9cm・径0.85cm。3は40号土坑出土で長さ5.9cm・径0.95cmを測り、首部と羅宇接続部の間は少し扁平になる。

4は13号ピット出土の銃弾で、長さ2.5cm・径1.3cm・重さ27.83gを測り、基部側に浅い溝がめぐり、表面には条痕が残る。

（2）銭　貨

合計11枚が出土したが、47号土坑から出土した1点は表裏とも錆で覆われ銭種不明のため掲載していない。厚みはいずれも1mmで、10分の1mm単位の僅かな差がある程度。5は47号土坑出土で、径25mm・重さ3.59g。6は1号ピット出土で、径24mm・重さ3.80g。7は36号ピット出土で、径23mm・重さ2.39g。8は1B－1区表土出土で、径23mm・重さ2.67g。9は1B－3区基礎埋土出土で、径24mm・重さ3.37g。「マ通宝」と称されるもの。10は2A－1区包含層出土で、径24mm・重さ1.92g。11は3A－2区包含層出土で、径22mm・重さ2.26g。12は3B区包含層出土で、径23mm・重さ2.19gで、一部穴が開く。13は4C区検出時の採集で、径23mm・重さ2.64g。14は9A区遺構面採集で、径23mm・重さ3.43gを測り、背面に「文」の字を鋳出す。

第4章　小　結

西新町遺跡の諸様相については第Ⅱ部に譲り、ここでは第22次調査の成果をまとめる。

弥生・古墳時代　当該期の遺構はいずれも竪穴住居跡で、調査区の南西部に偏在していた。今回の住居跡群は第3砂丘に近い位置に立地し、海側に最も近い一群で、調査区の北半部には住居跡等の遺構が存在しないことから集落の北限にあたると考えられる。

竪穴住居跡は合計10軒を確認し、その内訳は弥生時代終末期8軒（2～7・9・10号住居跡）、古墳時代初頭2軒（1・8号住居跡）である。いずれの住居跡も体育館基礎の工事により破壊を受け、遺存状況は良くない。

弥生時代の住居跡は概ね長方形を呈し、2・3・4・9号住居跡の4軒では中央付近で炉跡を検出した。いずれの炉も暗茶褐色に焼けた砂が堆積し、わずかに硬化の傾向が窺える程度であった。柱穴は確認できなかったが、4号住居跡では炉の南北にそれぞれピットがあり、非常に浅いが柱穴の可能性もある。また、5・10号住居跡では不整形ながらベッド状遺構と推測される段が確認できた。各住居跡から出土した土器は、在地系土器で占められる。

古墳時代の住居跡はいずれもカマドを有しており、1号住居跡は住居の北東隅に1m程度の両袖をもつ逆U字状のカマドがあり、2号住居跡は北壁の中央付近に燃焼部があり、壁沿いに煙道が長くのび北東隅で外方へ出るL字に近い形態を呈するカマドがあった。2軒の住居跡は12m程度しか離れていないにも関わらず、それぞれ異なる形態のカマドが構築されている。なお、両住居跡とも山陰系・畿内系土器の占める割合が高くなり、新たな土器様式の成立の様相が窺える。

ところで、弥生・古墳時代の住居群は一部で切り合い関係があり、ある程度住居の構築順序が復元できる。切り合い関係に基づき新古関係を「古→新」で示すと次の通りである。

〔弥生終末〕		〔古墳初頭〕
4号		1号
2・9号→10号		
3・6号→5号		
7号	→	8号

近世以降　溝・井戸・土坑・地鎮遺構（脆衣埋納遺構）・ピットなど多様で、今回の調査で確認した遺構の大半は当該期に属するものである。注目されるのは地鎮遺構（脆衣埋納遺構）が複数確認されたことである。土坑12や1・5・118号ピットでは土師器皿や甕・土瓶などを転用した埋納遺構があり、1号ピットでは寛永通宝が1枚納められていた。また、表土掘削時の排土中からは内部に小型の徳利を入れた小甕が採取され、祭祀行為で酒を使用した可能性や脆衣に対する副葬品であった可能性なども推測される。

この中で12号土坑や118号ピットでは土師器皿が合わせ口にしたものが二組ずつ出土したが、こうした同形同大の器を合わせ口にする手法は山口県萩城下町でもみられる。また、紙幅の都合で掲載できなかったが、同様の土師器皿は他にも出土しており、本来はさらに多くの事例が存在した可能性もある。

参考文献

谷口哲一　2002「萩城下町の脆衣埋納遺構」『陶垠』第15号　山口県埋蔵文化財センター年報

第2部　総　括
第1章　古墳時代篇

第1節　西新町遺跡出土の土師器の編年

1．はじめに

福岡県教育委員会が調査を実施した福岡市早良区西新町遺跡12～15・17・20・22次調査では竪穴住居跡などから多量の土師器等の土器が出土し、良好な出土状況を示すものが多い。また、集落の展開、各遺構・遺物の意義について論じる際も、土師器の時期区分が問題となる。そこで、ここでは土師器について検討を加え、時期区分と各遺構の位置づけを示すことにしたい。

福岡県教育委員会が調査を実施した地区は、遺跡の北東部に位置し、弥生時代中期～古墳時代前期に及ぶ遺跡の存続期間の中でも比較的新しい時期、古墳時代以降の竪穴住居跡が中心となる。そこで、編年の結果に基づいて、古墳時代初頭における土器の様相の転換、古墳時代集落の下限時期等についても、あわせてふれることにしたい。

2．編年の方法

編年の基準器種の抽出　西新町遺跡12～15・17・20・22次調査で検出した遺構は古墳時代の土師器である布留式ないしはその影響のもとに本地域で製作された布留系土器を主体とする時期と言える。従来、北部九州の古墳時代初頭前後の土器編年においては在地系土器の変遷と外来系土器との共伴関係を基準に、弥生時代終末の在地系土器を主体とする段階から、古墳時代に入り畿内系を主体とする外来系土器の卓越する段階への変遷を重視する視点に重点が置かれてきた〔武末1978、柳田1982、田崎1983、溝口1989、井上1991など〕。このような視点は北部九州における古墳時代の開始とその当時の文化・社会の変化を明らかにする上で有効で、大きな成果を挙げている。しかし、12次調査の各遺構は布留式、布留系土器を主体とするので、ここで目的とする各遺構の時期比定には適用が難しい。

西新町遺跡に対しては2次調査の結果に基づき常松幹雄氏・折尾学氏〔1982〕によって出土土器の編年がすでに実施されている。ただ、2次調査区は在地系土器から外来系土器への転換期にあたる遺構が多く、12～15・17・20・22次調査次調査出土土器と比較すると先行する時期のものが中心になる。したがって、そのままここでの時期区分には使用できないが、12～15・17・20・22次調査資料との関係を後述することにしたい。

このほかに布留式・布留系甕の変遷も重視する見解があると思われるが、古墳時代前期を通じて甕は堅牢な形態的変化があまりなく、久住猛雄氏〔1999〕の指摘するように口縁部断面形態、口縁端部形態、内面のヘラケズリなど調整技法の微細な属性でしか変化をたどれないと思われる。また、西新町遺跡および周辺地域の同時代遺跡における良好な一括遺物を見るとこれら微細な属性はバリエーションが大きいので、小変異の頻度の変化にのみ時間的な変遷が現れていると推測される。そのため、やはりここでの各遺構の時期比定には指標としてとりあげることは難しい。

これに対して、小形精製器種である小形丸底壺、外反口縁鉢は古墳時代前期の土師器の指標となる器種の一つであり、精製土器の展開という点で古墳時代前期を通じて、変化をたどることができる器種である。また、形態的に変化が大きく、すでに寺沢薫氏〔1986〕、久住猛雄氏〔1999〕によって、

説得力の高い型式変化の説明も行われている。そこで、ここではこれらの業績を参考にしながら、小形丸底壺、外反口縁鉢を中心に土器の編年を考えてみたい。

なお、土師器の器種の分類については、基本的に、『西新町遺跡』Ⅶ第4章第2節に準じることにしたい。

土器の一括性について　編年的検討のために、型式、器種の分類を行い、その消長をとらえる必要があるが、その際に基準的な単位となるのは良好な一括遺物である。西新町遺跡は砂丘上に立地するため遺構の輪郭が捉えにくく、古墳時代以後の様々な人間の活動によって遺物が堆積当初の位置から二次的に移動する要因も多く存在するものと思われる。加えて、竪穴住居跡の切り合いによる重複関係も極めて顕著である。また、竪穴住居跡からの出土遺物は床面に放置されたというよりは、竪穴住居跡の埋没途中に投棄され、堆積したものが多い。しかし、一方では砂丘という立地により、竪穴住居跡は他の遺跡と比較して短期間で埋没した可能性が高い。そこで、ここでは、切り合いの少ない、輪郭の明確な竪穴住居跡を選択し、その中から出土土器の豊富なものを良好な一括遺物として取り上げることにしたい。

3　小形精製器種の型式分類とその共伴関係を中心とした時期区分

小形丸底壺・外反口縁鉢の型式変化　古墳時代前期～中期前半にかけて盛行する小形丸底壺は、古墳時代前期においては器壁が薄く、外面をミガキで仕上げ、化粧土を塗布した精製品を主体とし、畿内系精製小形器台、畿内系精製小形二重口縁鉢とともに小形精製三器種を構成している。古墳時代前期の小形丸底壺のこれらの特徴は基本的には、弥生時代後期終末以前、古墳時代中期前半の小形壺には見られないものである。西新町遺跡においても、若干のハケメ仕上げの粗製品を含みながら精製品が多数を占めており、これらが古墳時代前期を中心としたものであることは明らかである。

さて、上述した久住猛男氏の研究によれば小形丸底壺は、典型的な布留式の平行期においては、外反口縁鉢との器種分化が明確になるとともに、口縁部が伸長し、胴高を凌駕する方向に変化するとしている。

そこでここでは器高10cm以下の小形丸底壺について『西新町遺跡』Ⅲで提示したように、

Ⅰ式　口径が胴部最大径より小さく、口縁の伸びが長いもの（第48図1）。

Ⅱ式　口径が胴部最大径より小さく、口縁の伸びが小さく、胴高の1／2以下で、口縁は直立気味のものも多い（第48図2）。

Ⅲ式　口径が胴部最大径より大きく、口縁の伸びが小さく、胴高の1／2以下（第48図3）。

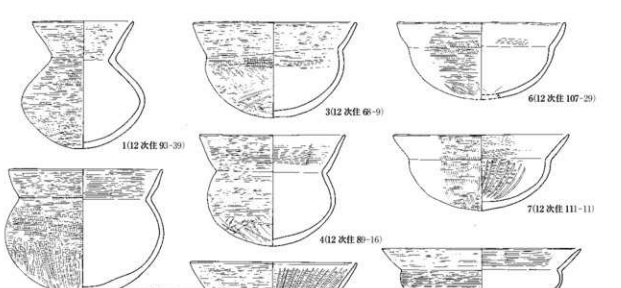
Ⅳ式　口径が胴部最大径より大きく、口縁の伸びが大きいが、胴高程には至らない（第48図4）。

Ⅴ式　口径が胴部最大径より大きく、口縁高が胴高より大きくなるもの（第48図5）。

のように型式を設定し、この順に変遷したと考えておきたい。

口縁が断面「く」の字に外反する鉢は、弥生時代後期終末以前には若干量の大形品が見られるが、いずれも粗製仕上げである。これに対して古墳時代初頭の北部九州では、口径20cm以下の小形丸底鉢が外来系土器の流入とともに増加する。これらの外反口縁鉢は粗製のものもあるが、小形丸底壺と同様の特徴をもつ精製品が多数を占めている。一方、古墳時代中期前半になると早良平野を含む北部九州一円で精製のものはもちろん、外反口縁の形態をなす鉢自体がほとんど消滅している。

外反口縁鉢は深い胴部に短く直立に近い角度で立ち上がる口縁がつくものから、浅く広がった胴部



第 48 図　西新町遺跡出土の小形丸底壺、小形丸底鉢の型式分類（1／3）

に大きく開き、長く伸びた口縁がつくものへの変異が看取できる。後者は小形精製二重口縁鉢の出現に影響をうけた可能性〔久住 1999〕とともに、上述した小形丸底壺との形態差がより広がる方向へ、すなわち器種分化の方向への時間的変化として理解できるだろう。そこで、口径 20cm 以下の精製外反口縁鉢について、このような器形の変化から『西新町遺跡』Ⅲと同様に、

Ⅰ式　口径が胴部最大径と大差なく、直に近い角度で立ち上がり、口縁の短いもの、口縁の内湾気味のものが多い（第 48 図 6）

Ⅱ式　口縁が外傾し伸びるが、口縁高は胴高の 1／2 以下のものより小さいもの（第 48 図 7）。

Ⅲ式　口縁が外傾し伸びるが、口縁高は胴高の 1／2 以上のもの（第 48 図 8）

と型式を設定することにしたい。Ⅰ式は恐らく畿内の庄内式に系譜が求められると考えられる。

その他の器種　上記した 2 器種のみでは不安であるので、その他の器種の検討も必要である。最も多量に出土する布留系甕については、上述のように 1 遺構で様々な微細変異を呈す一方で、形態的属性、法量等において明確な変化を示す特徴をとらえる部位が少ない。したがって、それ以外の器種に注目する必要があるが、ここでは畿内系精製小形器台、畿内系精製小形二重口縁鉢、精製小形直口鉢に注目することとする（第 49 図 1～4）。これら器種は精製小形丸底壺、精製小形丸底鉢と一体となって、布留系の精製器種を構成するからである。なお、畿内系小形器台は受部が底をもち皿状を呈するもの（Ⅰ式）と、受部底がないもの（Ⅱ式）に 2 分される。この他、布留系甕の出現過程と対比することを考慮して、Ⅴ様式系甕、庄内系甕、在地系甕、在地系高杯、Ⅴ様式系高杯、畿内系高杯〔第 49 図 5～12〕の共伴、出土状況についてみてみることにしたい。

良好な一括資料における共伴関係　前記した条件を満たす良好な一括遺物 50 件について、上記した器種について、共伴状況を示したのが第 2 表である。

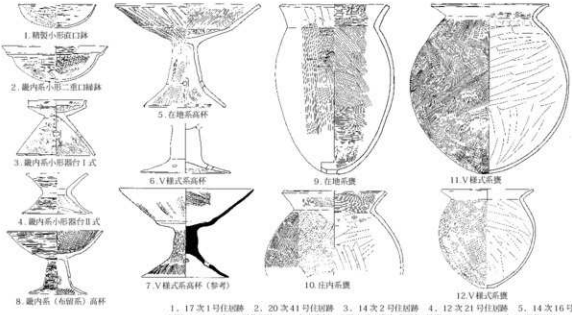
これを見ると、小形丸底壺、小形丸底鉢は想定した変遷のとおり相関している。小形丸底壺Ⅰ・Ⅱ式は小形丸底鉢Ⅰ式と、小形丸底壺Ⅲ・Ⅳ式は小形丸底壺Ⅱ式と、小形丸底壺Ⅴ式は小形丸底鉢Ⅲ式

第2表　西新町遺跡 12 ～ 15・17・20・22 次調査における各器種型式の共伴関係

調査次数	遺構番号	時期区分	小形丸底壺					小形丸底鉢				小形器台		鹿内系小形二重口縁鉢	精製小形直口鉢	在地系甕	V様式系甕	庄内系甕	在地系高杯	V様式系高杯	鹿内系（布留系）高杯	備考
			I	II	III	IV	V	I	II	III	I	II										
17	8 号住			1				1							○	●			●			小形丸底壺・小形丸底鉢は粗製
12	93 号住		2	3				3	1		1								○	○		
17	38 号住	Ⅲ古						3									○	●	●		○	
12	105 号住			1							1					○			○	○	●	在地系甕は布留系甕との折衷気味
12	119 号住							1			1					○		○		○	○	
12	135 号住							1									○				○	小形丸底鉢は粗製
13	48 号住		1	1	1										●		○		●		●	
13	78 号住			5	1			5			4				●	○		○		○	●	
12	125 号住			1				3							○				○	○	○	
14	21 号住							4			2				●				●		●	
13	64 号住							2			1				●	●					●	
17	7 号住			1				2			1				○	○	○	○	○		○	
13	2 号住	Ⅲ新						5			1				●	○			●			
14	19 号住			1				1							●						○	
14	26 号住			2				3	2		3				●				●		●	
12	140 号住				1			2	1						○				○	○	●	
17	9 号住			4		1		6	1		2				●	○	○		●		●	
17	1 号住			1	3	1		15	1		3				●		○	○	○		●	
12	101 号住			2				1	3		3				●	○			○	○	●	
14	8 号住			1					2		1				●	○			○			
13	15 号住				2				2		1				●						●	
13	44 号住				1				3		1				●							
13	18 号住			2	1			2	1			1			●	●						
20	27 号住			1	6				2		1				○		○	○			●	
20	4 号住								4		1				○				○		○	
14	2 号住	Ⅳ古							2		2				○						●	
12	154 号住			1	1	2		1							○							
17	6 号住				1	3			3						○						●	
20	45 号住					2			1					○								
12	89 号住				2	2			2		1			○	●		○					
12	109 号住			2	1		1	1	2			1	●			○					○	
12	81 号住			1	1	3	1		4			1	○	○	○	○					●	
14	27 号住				1	1	1														●	
12	147 号住			1				1	1	4	1				○						○	
20	46 号住						1		1						○				●			
12	96 号住					1					1	1	1	○	●				○		○	小形器台Ⅱはやや不安
14	28 号住								1	1	1			○		●	●		○		○	
12	139 号住				2	3	1	1		1	1	1			●	○				○	○	小形丸底壺、小形丸底鉢は精製
17	37 号住			2	3	5			1	5	4			○	○			○			○	
17	5 号住				2	1	1		1	3		2			●			○			○	小形丸底鉢Ⅲは一部粗製
12	72 号住								1	2	2				●		○				●	
12	23 号住	Ⅳ新			1	1	1					1			○						○	小形丸底壺Ⅳ・Ⅴは一部粗製
13	29 号住			1			2	3			1	1	1	○	●					○	●	
12	30 号住							2	1	1	1		1				○				○	
12	97 号住				4			4		6	1	4		●	●	○			○		●	小形丸底壺、小形丸底鉢は一部粗製
12	82 号住							1			1										○	
13	67 号住							1							○							小形直口鉢は一部粗製
13	73 号住							1							○						●	小形丸底壺は粗製
12	21 号住				1			3		5	4		4		●	○	○					小形丸底壺、鉢は一部粗製
13	27 号住							4			5	1		●							○	小形丸底壺は一部粗製

●は確実に伴う事を示す。○は破片資料、数字は点数を示す。

と共伴する例が多い。したがって、かなりの重複期間をもちながらも小形丸底壺、小形丸底鉢は型式番号順に出現、変遷した可能性が高いと考えられる。また、備考に小形丸底壺・鉢の粗製のものが含



第49図　時期区分の指標として取り上げたその他の器種（1／6）

まれる場合は特記したが、特に新しい段階になると、小形丸底壺、小形丸底鉢が粗製化が進行する。なお、小形丸底壺Ⅱ式、小形丸底鉢Ⅰ式にも粗製のものがあるが、それらは小形精製器種の定型化以前の様相を示すものと考えられる。

その他の遺物との共伴をみると、小形丸底壺Ⅰ・Ⅱ式と小形丸底壺Ⅱ式の共伴する遺構は、精製小形直口鉢の有無で大きく2分できる可能性がある。また、精製の畿内系二重口縁鉢、畿内系小形器台Ⅱ式は小形丸底壺Ⅳ式の出現以降のものと共伴し、時期が限定できる。

弥生時代終末以来の在地系甕は新しい時期まで破片として出土することが多い。第2表に掲載した遺構のほとんどで、布留系甕が甕の大半を占めているが、17次8号住居跡では、布留系甕を含みながら、在地系甕が主体を占めている。また、庄内系甕、Ⅴ様式系甕も古い時期の一群に目立つ傾向がある。

したがって、小形丸底壺Ⅰ・Ⅱ式と小形丸底鉢Ⅰ式の共伴を基準に西新町Ⅲ式を再構成し、それを精製小形の直口鉢の有無で古段階と新段階に2分することにしたい。また、小形丸底壺Ⅲ・Ⅳ式と小形丸底鉢Ⅱ式が主として組み合う時期を西新町Ⅳ式古段階、小形丸底壺Ⅴ式と小形丸底鉢Ⅲ式が主として組み合う段階を西新町Ⅳ式新段階とすることにしたい。第5～8表は、福岡市教育委員会の実施した調査も加えて、西新町遺跡の竪穴住居跡等の時期区分を示したものである。遺物が少ないものもあるし、ここでは西新町Ⅰ式、Ⅱ式の検討を十分に行っていないため不安もある。そのため、将来的には再検討が必要となるが、今後の遺跡の検討の一材料として提示した。

なお、これまで12・17次調査報告書などで各遺構の時期を示したことがあるが、第5～8表はそれを再検討したものであり、多少の異同が生じている。また、あくまで漸移的な変化で、全ての遺構で遺物の一括性が保障されるものではない。その他の器種を組み合わせれば少し違う時期区分が成り立つ可能性もあろう。

第3表　周辺遺跡における各器種型式の共伴関係

遺跡名	遺構番号	在地系甕	V様式系甕	庄内系甕	布留系甕	在地系高杯	V様式系高杯	畿内系（布留系）高杯	小形丸底壺					小形丸底鉢			小形器台		畿内系小形二重口縁鉢	精製小形直口鉢	備考	文献
									I	II	III	IV	V	I	II	III	I	II				
福岡市早良区有田・小田部遺跡133次	SC01	●	○						○												朝鮮系軟質土器、有明海沿岸系？有透し器台が伴う。精製土器は顕著ではない	山崎編 1990
前原市三雲遺跡サキゾノI－1区	1号住	●		●		●	○						○								小形丸底壺V式は粗製で位置づけは他とは同じではない	柳田他編 1982
筑紫郡那珂川町松木遺跡第5地点	1号住		●	○		○			1					1			2				小形丸底壺・鉢は粗製化が顕著、精製小形直口壺は含まない、小形器台は庄内系の粗製品	澤田他 1985
筑紫郡那珂川町松木遺跡第5地点	2号住		●			●	○							1			1				布留系甕を含まず、在地系甕を主体とする、精製小形直口壺は含まない	澤田他 1985
福岡市博多区博多遺跡群147次	SC4102			●				●						2							庄内系甕が主体をなす、精製小形直口鉢は目立たず	大塚編 2006
福岡市早良区有田・小田部遺跡107次	SC01		○		○	●		○													在地系高杯が主体、精製土器が顕著ではない、布留系甕が多い	山崎編 1990
大野城市原ノ畑遺跡	SK06			●	●	●		●						2			1				V様式系の壺が目立つ、庄内系甕と布留系甕が共存	舟山編 2001
筑紫郡那珂川町中原・ヒナタ遺跡（安徳・道善・片縄地区区画整理第1地点）	4号住				●	○	●							3			1				精製直口鉢は目立たない、布留系甕が主体	佐藤他編 1997
福岡市早良区野芥大薮遺跡1次	SK067	●	○	○	●	●			1												在地系甕と布留系甕が共存、小形丸底壺I式はやや不安	山崎 1998
福岡市早良区西新町遺跡4次	SC39			●	●			●	1					1							精製小形直口鉢は含まず	松村 1989
福岡市早良区西新町遺跡2次	D区11号住	●			●				1					1							在地系甕と布留系甕が共存、小形丸底壺・同鉢は粗製傾向	池崎他編 1982
福岡市博多区博多遺跡群63次	SC0429				●			●						2			1					濱石他編 1992
福岡市早良区清末遺跡3次	SC003				●	○		○						○			1				布留系甕が主体を占める	濱石編 1995
福岡市早良区岩本遺跡2次	SC0507	●			●	●			1	1				1							精製小形直口壺、布留系高杯は目立たない	濱石他編 1993
福岡市早良区岩本遺跡2次	SC0517	○			●	○								2			1			●		濱石他編 1993
福岡市博多区博多遺跡群45次	SK4031		○	●	●			●		1				1			2			●		田崎編 1991
福岡市博多区雀居遺跡12次	SJ01			○	●		●	●		1				1			3			●	土器溜状の遺構	力武他 2004
福岡市博多区博多遺跡群36次	SC276			●	●			●		3			1	4			4			●	東海系甕出土、庄内系甕目立つ、小形丸底壺やや新しい傾向のものがある	吉留編 1990
福岡市博多区久保園遺跡第3次	SC016				●	○		●		1				4			3			●	V様式系壺も存在	吉武 2005
福岡市博多区堅粕遺跡8次	63号遺構				●			●						4			3				東海系の甕を多く含む	大庭 1999
福岡市早良区西新町遺跡2次	D区8号住			●	●			●		5					6					●		池崎他編 1982
福岡市早良区東入部遺跡1次	SC206	○			●			○		1					1		1				在地系甕、長脚傾向の高杯、在地系高杯を含む	榎本編 1998
福岡市早良区有田・小田部遺跡81次	SC01			○	●					2	2						1			○		濱石編 1986
福岡市博多区雀居遺跡9次	59号土坑				●			●		3	3	1			1		5			●		松村編 2000
福岡市博多区博多遺跡群50次	945号遺構		○		●			○		1	1	1					1			●		大庭編 1991
福岡市博多区比恵遺跡9次	15号井戸			●	●			●		1		1					3			●	布留系甕が主体	杉山編 1986
筑紫郡那珂川町仲遺跡	26号住		●		●			●				1		1	2	2	1		●	●	V様式系甕と布留系甕が共存、高杯の弁別は不安	佐藤他 1993
福岡市博多区博多遺跡群36次	SC277			●	●							2	1							○	小形丸底壺V式は粗製化が進む	吉留編 1990
福岡市博多区雀居遺跡9次	4号井戸				●					1	4	5		1	4	4				●		松村編 2000
福岡市早良区東入部遺跡1次	SC205		○		●	○		●			2	2	2		4	1				●	在地系高杯やや目立つ、長脚傾向の高杯を含む、前期末に近い傾向	榎本編 1998
福岡市早良区有田・小田部遺跡35次	6号住				●		○	○			2		1		1	1					精製の小形直口鉢は目立たない、小形丸底鉢は粗製化が進行する	井澤編 1988
福岡市早良区西新町遺跡5次	SC06		○		●			●				2	1		2	3	1		●	●	小形丸底鉢・同壺は粗製化の傾向、高杯は短脚	長家 1994
福岡市早良区西新町遺跡4次	SC31	○			●			●					1	1	2	1					小形丸底壺V式・同鉢III式粗製化が進む、高杯は長脚化の傾向が顕著、前期末に近い土器	松村 1989
福岡市早良区清末遺跡3次	SC0071				●			●	1				2			2					布留系甕が主体、精製小形直口鉢は目立たない（出土していない）、かなり新しい傾向	濱石編 1995

●は確実に伴う事を示す。○は破片資料、数字は点数を示す。

4．周辺遺跡の状況と西新町遺跡出土土師器の編年

周辺遺跡の状況良好な一括遺物について　西新町遺跡の所在する早良平野はもちろん、隣接する福岡平野、糸島半島において、古墳時代初頭～前期の布留系土器を中心とした外来系土器を主体とする良好な一括遺物（第3表）について、前項と同様の方法によってみてみたい思う。

表では時間的な前後関係に即して上下に配列しているが、有田・小田部133次SC01から博多遺跡群147次SC4102までは布留系甕を含まず、在地系、V様式系、庄内系の甕が主体をなしている。したがって、西新町II式に平行する時期と考えられる。有田・小田部遺跡107次SC01から岩本遺跡2次SC0507までは布留系甕が出現しているが、精製小形の直口鉢が出現しておらず、小形丸底壺・鉢

の型式から考えて西新町Ⅲ式古段階にほぼ並行すると考えられる。この時期には在地系甕、在地系高杯がかなりの比重で出土する遺構も多い。岩本遺跡２次 SC0517 から東入部遺跡１次 SC206 は小形丸底壺Ⅱ式と小形丸底鉢Ⅰ式を主体とし、西新町Ⅲ式新段階に並行すると考えられる。この時期になると、布留系甕、畿内系高杯がほぼ主体を占めるようになる。

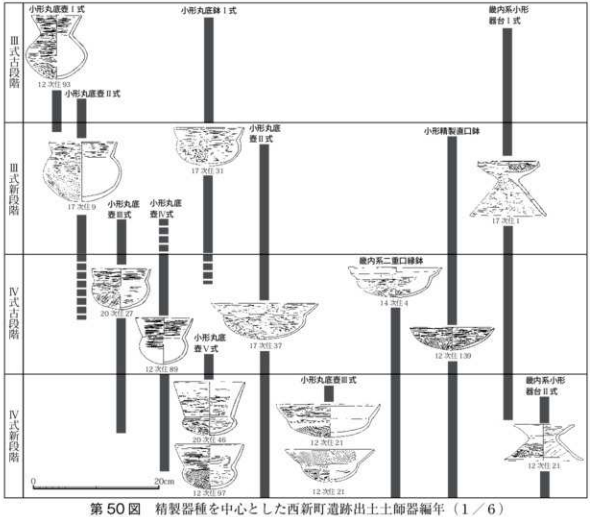
有田小田部遺跡 81 次 SC01 から比恵遺跡９次 15 号井戸までは小形丸底壺Ⅱ～Ⅳ式を主体とし、小形丸底鉢との共伴がやや貧弱であるが、西新町遺跡Ⅳ式古段階に相当するであろう。なお、仲遺跡 26 号住居跡では布留系甕に加えて相当量のＶ様式系甕が出土しているが、小形丸底壺Ⅳ式、小形丸底鉢Ⅲ式が出土する点などから考えて、西新町Ⅳ式古段階でも新しい頃に平行すると考えておきたい。したがって、一部の遺跡ではＶ様式系土器、庄内系土器が西新町遺跡Ⅳ期古段階まで、残存するなど、遺跡間での様相の違いがあると想定される。博多遺跡群 36 次 SC277 から清末遺跡３次 SC0071 までは、小形丸底壺Ⅴ式を伴うとともに、小形丸底鉢Ⅲ式が主体となる。また、これらの１群では小形丸底壺、小形丸底鉢の粗製化が顕著であり、西新町遺跡Ⅳ式新段階と並行すると考えられる。

西新町遺跡出土土師器の編年的位置づけと古墳時代の始まり　柳田氏の編年〔1982〕、久住氏の編年〔1999〕と対照すれば西新町Ⅲ式古段階は柳田氏のⅠａ期、久住氏ⅠＢ～ⅡＡ期、西新町Ⅲ式新段階は柳田氏Ⅰｂ期、久住氏ⅡＡ～ⅡＢ期、西新町Ⅳ式古段階は柳田氏Ⅱａ期の一部、久住氏ⅡＣ期、Ⅳ式新段階は柳田氏Ⅱａ～Ⅱｂ期、久住氏ⅢＡ期に相当しよう。

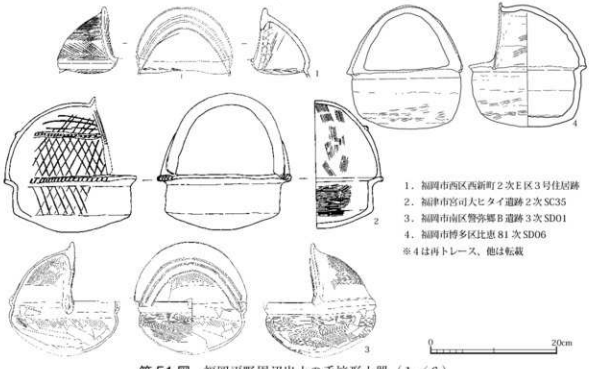
ここでは型式分類、共伴関係に含めなかったその他の器種を含めた外来系土器の出現過程について、弥生時代終末と考えられる西新町Ⅰ式から西新町Ⅳ式までの間の変遷をみてみたいと思う。『西新町遺跡』Ⅶにおける器種分類にもとづき、主要な外来系土器の存続時期幅について、概念的に示したものが第４表である。先の編年と若干循環論法的になるが、第５表によれば西新町遺跡では畿内系の庄内系甕、Ｖ様式系甕は西新町Ⅲ式古段階に出現することがわかる。畿内系高杯も同じ時期である。第３表に見たように、周辺では前原市三雲遺跡、博多遺跡群、那珂川上流の松木遺跡等でＶ様式系、庄内系土器を主体的に含む遺構も存在しているので、それらの遺跡とは１段階遅れると言える。また、Ⅲ式古段階としたがⅡ式に遡る可能性のある９次 SC59 ではＶ様式系甕が出土しているが、在地系土器が主体となる。17 次８号住居跡は布留系甕を含むが、在地系甕、在地系高杯が主体となっている。博多遺跡群 147 次 SC02、松木遺跡等那珂川上流の遺跡で畿内系土器が主体となる遺構が存在するのとは対照的で、西新町遺跡では器種間で段階的に畿内系土器が受容されたと考えられる。

これに対して山陰系土器はⅡ式の７次 SC01 で二重口縁壺が、17 次 36 号住居跡で鼓形器台が出土しているが、本格的に出土するのは、西新町Ⅲ式古段階からである。ただ畿内系土器とは異なり、Ⅲ式古段階には二重口縁壺、高杯、鼓形器台、脚付鉢、直口鉢からなるセット関係が揃っている様相がうかがえる。なお、山陰系土器はその後もセットとして安定的に出土するとともに、二重口縁壺以外の器種は製作技法等の体系で、在地系土器と排他的である。このような様相から、山陰からの移住者が一程度存在するとともに、継続的に山陰からの土器制作者の移動が維持されていたのではないかとも想像される。畿内系土器の流入過程と対比すると興味深い。

また、西新町遺跡では 17 次調査８号住居跡、福岡市調査の２次Ｅ区３号住居跡（第 51 図１）で手焙形土器が出土していて、上部の形態から 17 次８号住居跡が新しい。筑前地域では、福岡市博多区比恵 81 次 SD06（第 51 図４）〔瀧本 2004〕、福岡市南区警弥郷Ｂ遺跡３次 SD01（第 51 図３）〔白井 1995〕、福岡県福津市宮司大ヒタイ遺跡２次 SC35（第 51 図２）〔池ノ上編 2002〕から手焙形土器が

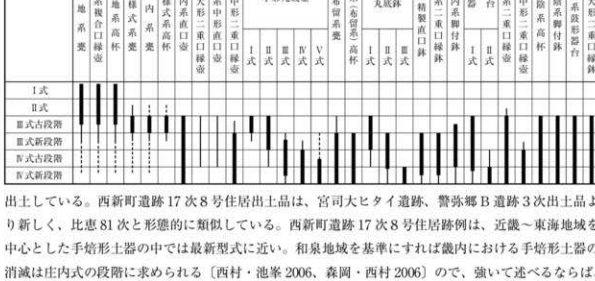


第 50 図　精製器種を中心とした西新町遺跡出土土師器編年（１／６）



第 51 図　福岡平野周辺出土の手焙形土器（１／６）

第４表　西新町遺跡における在地系土器から外来系土器への転換



出土している。西新町遺跡17次８号住居出土品は、宮司大ヒタイ遺跡、警弥郷Ｂ遺跡３次出土品より新しく、比恵81次と形態的に類似している。西新町遺跡17次８号住居跡例は、近畿～東海地域を中心とした手焙形土器の中では最新型式に近い。和泉地域を基準にすれば畿内における手焙形土器の消滅は庄内式の段階に求められる〔西村・池峯2006、森岡・西村2006〕ので、強いて述べるならば、西新町遺跡Ⅲ式古段階の内に、庄内式と布留式の境があるのでないかと考えられる。

このような外来系土器への転換の過程は北部九州における古墳の出現、古墳時代の開始と当然ながら密接に関連している。筑前地域における最古の前方後円墳として、久住氏〔1999〕は福岡市博多区那珂八幡古墳を挙げ、氏の編年によるＩＢ期としている。また、近年、糟屋平野では初期の全長48ｍの前方後円墳、糟屋町戸原王塚古墳〔西垣編2006〕が調査された。周溝くびれ部から一括して出土した土器は、ほぼ庄内系土器単純で古めらる。したがって、筑前地域における前方後円墳の出現は西新町Ⅲ式古段階に先行する時期、Ⅱ式に遡るのではないかと考えられる。

一方、西新町遺跡に対応する墓地である藤崎遺跡では、これまで18基の方形周溝墓が調査されている。このうち、木棺から三角縁二神二車馬鏡１、刀子１、鉇１、鉄鏃１、素環頭刀１が出土した藤崎遺跡２次調査６号方形周溝墓は、西新町遺跡Ⅲ式に相当すると考えられる。また、藤崎遺跡では1912年に三角縁複波文帯盤龍鏡１、素環頭大刀１が箱式石棺から発見され、その後の調査で32次１号方形周溝墓が相当すると考えられている。この方形周溝墓出土土器は西新町Ⅱ式に遡る可能性も考えられる。このほかに２次調査２・３・８号方形周溝墓も西新町遺跡Ⅱ式に遡る可能性があり、墓地の形成は、西新町遺跡で本格的に布留系土器等畿内系土器が普及するのに先行する時期となる可能性を考慮しておきたい。

古墳時代の開始の時点をどこに求めるかは別として、以上のような点から、西新町Ⅱ式の段階には前方後円墳等の古墳文化の波及、畿内系土器の波及の時点を求めることができよう。

土師器から見た西新町遺跡古墳時代集落の終焉　西新町遺跡ではⅣ式新段階が古墳時代集落の終焉時期に相当する。Ⅳ式新段階においては小形丸底壺、小形丸底鉢の粗製化の進展が見れらる。一方、畿内を中心とした西日本の古式土師器については、布留式新段階になると小形精製３器種の消滅と粗製の小形丸底壺の急増という現象が指摘されている。西新町遺跡Ⅳ式新段階の土器は小形丸底壺、小形丸底鉢に粗製品が含まれるものの、細かいミガキを施した精製品もかなりの量を占めている。

この周辺での代表的な古墳時代中期初頭の前方後円墳である福岡市西区勰崎古墳〔杉山編2002〕

では高杯、小形丸底壺、山陰系二重口縁壺が出土している。小形丸底壺、高杯は横方向のミガキが施されず、西新町遺跡Ⅳ式新段階よりは明らかに後出する土師器といえる。また、集落遺跡を取り上げれば、福岡市西区野方久保遺跡 SC03 号住居跡〔大庭・二宮編 1993〕の一括遺物では、小形丸底壺の粗製化が進んでおり、西新町遺跡Ⅳ式新段階よりも後出すると考えれる。ただ、西新町遺跡４次 SC31 号住居跡からは長脚傾向の高杯が出土しており、鋤崎古墳出土の高杯と形態的に連続する要素ととらえられる。したがって、Ⅳ式新段階は、古墳時代前期でも末頃に近いと考えられる。

しかしながら、Ⅳ式新段階は、周辺遺跡の資料を含めれば細分の可能性もある。古墳時代前期と中期の境界と西新町遺跡の古墳時代集落の終焉が厳密に一致するかはやや問題があるが、西新町遺跡の終焉は、古墳時代前期から中期への畿内政権の変質とも連動したと推測しておきたい。

5．おわりに

ここでは、主として 12 ～ 15・17・20・22 次調査の出土品を中心に、古墳時代初頭～前期の西新町遺跡出土土師器を、Ⅲ式古段階、Ⅲ式新段階、Ⅳ式古段階、Ⅳ式新段階の４時期に区分し、周辺遺跡との関連、西新町遺跡の編年的位置づけについて論じた。ただ、取り上げた器種も限定的であり、各時期の間の境界も漸移的な変化として理解するしかないことも事実である。今後、器種を加えると共に、器種構成の変化などの観点から、検証が必要となろう。また、周辺遺跡の資料も完全に検討したわけではないので、今後は遺跡を広げて、検討する必要性も感じている。

12 次調査出土土器を中心として暫定的な編年を提示して以降、博多遺跡群や比恵・那珂遺跡群の調査を基礎に筑前地域の古墳時代初頭の土器を研究されている福岡市教育委員会の久住猛雄氏には多くの御批判、御教示をいただいた。氏をはじめとする御批判をどこまで解決したかは自信がないが、今後とも、多く方からの御教示をいただければ幸いである。なお、福岡市内出土品の一部の調査については、福岡市埋蔵文化財センターの力武卓治氏、荒牧宏行氏、瀧本正志氏、田上勇一郎氏、上角智希氏にお世話いただいた。記して感謝いたします。

引用文献

井上　裕弘　1991「北部九州における古墳出現前後の土器群とその背景」『児嶋隆人先生喜寿記念　古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念事業会
久住　猛雄　1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ
武末　純一　1978「早良平野の古式土師器」『古文化談叢』第５集
田崎　博之　1983「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』第 120 輯
常松幹雄・折尾学　1982「第４章　結語」　池崎譲二・田崎博之・常松幹雄・田中克子・折尾学編『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅱ　西新町遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書第 79 集
寺沢　薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」寺沢薫編『矢部遺跡』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 49 冊
西村歩・池峯龍彦　2006「和泉地域」　森岡秀人・西村歩編 2006『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
溝口　孝司　1998「古墳出現期の土器相－筑前地方の素材として－」『考古学研究』第 35 巻第２号
森岡秀人・西村歩　2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題」森岡秀人・西村歩編 2006『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
柳田　康雄　1982「３・４世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』　森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
池崎譲二・田崎博之・常松幹雄・田中克子・折尾学編　1982　『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅱ　西新町遺跡　福岡市文化財調査報告書第 79 集（２次）
濱石　哲也編　1986「有田・小田部遺跡群第 81 次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 129 集
杉山　富雄編　1986『比恵遺跡第９・10 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 145 集

第５表　西新町遺跡弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡等とその時期（１）

次数	地区	住居跡番号	Ⅰ	Ⅱ	第Ⅰ古	第Ⅱ新	第Ⅱ古	第Ⅲ新	庄	堀	切合い等備考
2	A	1			○				○		
2	A	2									土器少なく時期決定困難
2	A	3									土器少なく時期決定困難
2	A	4	△								
2	A	5			△				○		
2	A	6			△						
2	A	7			○						
2	A	9									土器少なく時期決定困難
2	A	10									土器少なく時期決定困難
2	A	11			○						
2	A	12			△						
2	B	1				△			○		
2	B	2									時期決定困難
2	B	3									時期決定困難
2	B	4			△						
2	B	5									時期決定困難
2	B	6				△					
2	B	7			△						
2	B	8							○		時期決定困難
2	C	1				△					
2	C	2			△						
2	C	3			○						
2	C	4			△						
2	C	5			△						
2	C	6									時期決定困難。住５→住６？
2	C	7			△						
2	C	8							○		時期決定困難
2	C	9			○						
2	C	10									時期決定困難
2	D	1				○					住 15→住１
2	D	2				△					
2	D	3			○				○		
2	D	4			△						
2	D	5				△					
2	D	6			△						
2	D	7				△			○		
2	D	8				○			○		
2	D	9									時期決定困難
2	D	10			△				○		
2	D	11			○						
2	D	12							○		時期決定困難
2	D	13				○					
2	D	14			△						
2	D	15									時期決定困難
2	D	16				△					
2	D	17			△						
2	E	1									時期決定困難
2	E	2				△			○		
2	E	3			△						
2	E	4					△				
2	F	1				△				○	
2	F	2					△			○	
2	F	3					△				
2	F	4									時期決定困難
2	G	1			○						
2	G	2									時期決定困難
2	G	3			△						
2	H	2			○						
2	H	3			○						
3		1				△					住１→住２・６→住４→住５→住３
3		2						△			住１→住２・６→住４→住５→住３
3		3						○			住１→住２・６→住４→住５→住３
3		4						○			住１→住２・６→住４→住５→住３
3		5						○			住１→住２・６→住４→住５→住３
3		6						△			住１→住２・６→住４→住５→住３
3		7									土器少なく時期決定困難
4	Ⅱ	SC13					△				
4	Ⅱ	SC16				○				○	SC31→SC16
4	Ⅱ	SC18									
4	Ⅱ	SC20									
4	Ⅱ	SC31							○		SC31→SC16
4	Ⅱ	SC32									時期決定困難
4	墓	SC39			△						
4	墓	SC40				△					
5		SC01					△	△	○		

次数	地区	住居跡番号	Ⅰ	Ⅱ	第Ⅰ古	第Ⅱ新	第Ⅱ古	第Ⅲ新	庄	堀	切合い等備考
5		SC02						○		○	
5		SC03					△				○
5		SC04					△				○ SC05→SC04→SC03・SC08
5		SC05			○						
5		SC06							○		○ SC05→SC07→SC06
5		SC07						○			○
5		SC08							△		○ SC04→SC08
5		SC09			○						○
6		SC01			○						
6		SC02									時期決定困難
6		SC03			○						
6		SC04			○						
6		SC05			○						
6		SC06			○						
6		SC07			○				○		
6		SC08			△						
6		SC10									時期決定困難
7		SC01			○						
7		SC03			○						
8		SC01									時期決定困難
8		SC04			○						
8		SC05			△						
9		SC22	△								
9		SC23	△	△							
9		SC39				△					Ⅱ期に遡る？。Ⅴ様式系墓
9		SC67			△						
9		SC30・60			△						
10		SC023			○						
10		SC037			○						
10		SC038									土器少なく時期決定困難
10		SC061			△						
10		SC068			△						SC68→SC37
10		SC078			○						
10		SC080									土器少なく時期決定困難
12		1									時期決定困難
12		2									時期決定困難
12		3							○		時期決定困難
12		4						△			住７→住６→住４
12		5									時期決定困難
12		6					△			○	住７→住６→住４
12		7							○		住７→住６→住４
12		8									時期決定困難
12		9					○				住７→住９→住６
12		10									住 10→住 22
12		12									時期決定困難
12		13						△	○		
12		14							○		時期決定困難
12		15					○				
12		16				△					住 16→住 15
12		17					△		○		住 20→住 17
12		18					△		○		住 19→住 18
12		19					△		○		住 19→住 18
12		20									住 20→住 17
12		21						●			住 25→住 21
12		22						●		○	
12		23							○		住 23→住 21
12		24					△		○		住 24→住 21・9
12		25			○						
12		26					△				住 28→住 27→住 26
12		27				△					住 28→住 27→住 26
12		28							○		住 28→住 27→住 26
12		29					△		○		
12		30						●		○	
12		31									時期決定困難
12		32							○		時期決定困難
12		35					△		○		住 43→住 35→住 29・住 31
12		36						△			住 38→住 43→住 36
12		37						○		○	
12		38							○	○	住 38→住 43→住 36
12		39					○			○	
12		40							○	○	住 47→住 40
12		41							△		
12		42							○	○	
12		43							○		住 38→住 43→住 36
12		44								○	時期決定困難

第６表　西新町遺跡弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡等とその時期（２）

次数	地区	住居跡番号	I	II	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	炉	竈	切合い等備考
12		45							○		住61→住45→住35
12		47									住47→住40
12		48				△					
12		49							○		時期決定困難
12		50							○		時期決定困難、住50→住51→住52→住53
12		51									時期決定困難、住50→住51→住52→住53
12		52				△				○	住50→住51→住52→住53
12		53								○	時期決定困難、住50→住51→住52→住53
12		55									時期決定困難
12		56									時期決定困難
12		61									時期決定困難、住61→住45→住35
12		63						△			住155→住63
12		64						△		○	
12		65						○			住157・住66→住65→住128
12		66									住157・住66→住65→住128
12		68					○		○		住66・住154→住68→住64
12		69									時期決定困難
12		70									時期決定困難、住70→住63
12		71									時期決定困難、住71→住68
12		72						●		○	住73→住72
12		73							○		時期決定困難、住73→住72
12		74					△		○		住74・住78→住128→住65
12		75						○		○	住76→住75
12		76						○	○		住159→住76→住75
12		77						△		○	住121→住77
12		78					△			○	住74・住78→住128→住65
12		79						△			住80→住79
12		80						○			住80→住79
12		81					●			○	
12		82						●			
12		83									時期決定困難
12		84									時期決定困難
12		85									時期決定困難
12		86					△				
12		87									時期決定困難、住87→住44
12		88						△		○	
12		89					●			○	住90→住89
12		90					△				
12		91				△			○		住91→住94
12		92					△				
12		93			●				○		
12		94									時期決定困難
12		95									時期決定困難
12		96						●	○		住96→住97
12		97						●		○	住96・100→住97
12		98					○		○		
12		99					△		○		
12		100					○				住100→住97
12		101					●				住105→住101
12		102				△					住102→住103
12		103				△					住103→住107
12		104						○			住106→住104
12		105			●				○		住105→住101
12		106									住106→住104
12		107				△					
12		108					△				住109→住108→住113
12		109					●		○		住109→住108→住113
12		110						○		○	住112→住110
12		111						○		○	
12		112					△				住112→住110
12		113					△				住113→住115
12		114							○		時期決定困難
12		115									時期決定困難、住113→住115
12		116				△			○		住117→住116
12		117			△				○		住117→住116
12		118		△					○		
12		119			●				○		住160→住119
12		120					○				住120→住117
12		121						○			住121→住77
12		122				○			○		住123→住122
12		123				△					住123→住122
12		124				△					住124→住122
12		125				●				○	
12		126					△		○		住126→住127
12		127					△				
12		128						△		○	住74・住78→住128→住65
12		129								○	時期決定困難
12		130						△		○	住131→住130
12		131						○		○	住131→住130
12		132				○			○		住107→住132
12		133						○			住136→住133
12		134					△				住140→住134
12		135			●				○		
12		136				△					住136→住133
12		137		△					○		住137→住138
12		138				○			○		住167・住165・住170→住138
12		139						●	○		住139→住134
12		140				●			○		住140→住134
12		141							○		時期決定困難、住168→住141
12		142				○			○		
12		143							○		時期決定困難
12		144					△				住145→住144
12		145			△						住145→住144
12		146			△				○		住166→住146
12		147						△	○		
12		148							○		時期決定困難
12		149					△		○		
12		150						△			
12		151					△				
12		152							○		時期決定困難
12		153				△			○		
12		154					●			○	
12		155				△				○	住155→住63
12		156					△				
12		157				●				○	
12		158				△					住128→住158
12		159					△				住76→住159
12		160									住160→住119
12		161									時期決定困難
12		162				△					住162→住124
12		163									住81→住163
12		164									時期決定困難
12		165				△			○		
12		166	△								住166→住146
12		167									時期決定困難
12		168	△								住168→住141
12		170				△					住167・住165・住170→住138
12		41号土坑			△	△					
13		1					△				
13		2				●					
13		3									時期決定困難
13		4				△					
13		5									時期決定困難
13		6					△			○	住8→住7→住6
13		7					△				住8→住7→住6
13		8					△				住8→住7→住6
13		9									時期決定困難
13		10					△			○	
13		11				△			○		
13		12					×	△			
13		13									時期決定困難
13		14									時期決定困難
13		15					●				
13		16				△					
13		17					×	△			
13		18					●				
13		19					△				
13		20					△			○	
13		21					△				
13		22				△	×				
13		23					△			○	住24→住23
13		24				○			○		住24→住23
13		25				○			○	○	
13		26						△			住42・43・31→住27・33→住26
13		27						●	○		住42・43・31→住27・33→住26
13		28							○		時期決定困難
13		29						●			住29→住30

第７表　西新町遺跡弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡等とその時期（３）

次数	地区	住居跡番号	Ⅰ	Ⅱ	重古	重新	安古	安新	炉	竈	切合い等備考
13		30						△		○	住29→住30
13		31					○		○		住33・41→住32→住31→住27・52
13		32									時期決定困難，住33・41→住32→住31→住27・52
13		33				△					住33・41→住32→住31→住27・52
13		35						△			住36→住35・住37
13		36						△			住36→住35・住37
13		37						△		○	住38→住36→住35・住37
13		38					△		○		住38→住36→住35・住37
13		39						△		○	
13		40					△	△		○	
13		41					△				
13		42				△				○	
13		43					○			○	住43→住27
13		44					●		○	○	住45・54→住44
13		45				△			○		住45・54→住44
13		46					△				
13		47									時期決定困難
13		48				●				○	
13		49						△			住50→住51→住49
13		50					○		○		住50→住51→住49
13		51					△				住50→住51→住49
13		52					○			○	
13		53					△			○	
13		54				△	△				
13		55									時期決定困難
13		56									時期決定困難
13		57				○					
13		58				●				○	
13		59									時期決定困難
13		60					△				
13		61				△					
13		62									時期決定困難
13		63					○				
13		64				●			○		
13		65						○			
13		66				△					
13		67						●		○	住67→住65
13		68						△	○		住67・69→住68
13		69					△			○	
13		70									時期決定困難
13		71					△			○	住71→住63
13		72									時期決定困難
13		73						●		○	
13		74				△			○		
13		75				○				○	
13		76				△					
13		77				○				○	住77・79→住78
13		78				●				○	住77・79→住78
13		79				△					住77・79→住78
13		80					△				
13		81									時期決定困難，住76→住81
13		82					△				
13		83					△				
13		84				△					
13		85					△			○	
13		86					○			○	
13		1号落込									時期決定困難
14		1				○				○	
14		2					●			○	
14		3				○					住1→住3
14		4						○			住5→住4
14		5					○	△			住5→住4
14		6					△		○		住6→住9
14		7			△				○		
14		8					●				
14		9					△	△			住6→住9
14		10					△	△			
14		11					△				住11→住12
14		12					△			○	住11→住12
14		13			△						
14		14						○			住15→住14
14		15				○	△			○	住15→住14
14		16				△			○		
14		17				△					井戸→住17

次数	地区	住居跡番号	Ⅰ	Ⅱ	重古	重新	安古	安新	炉	竈	切合い等備考
14		18						△		○	
14		18					△	△			
14		18					△				
14		19					●			○	
14		20					△			○	住24・住25→住20
14		21				●				○	
14		22				△					
14		23				○				○	
14		24			○				○		住24→住20
14		25				△					住25→住20
14		26				●				○	
14		27					●			○	
14		28						●			
14		29				○				○	住29→住27
14		井戸				○	○				
17		1				●				○	住2・3・40→住1
17		2				○					住2・3・40→住1
17		3			△						住2・3・40→住1
17		4					△				
17		5						●		○	住22→住5
17		6					●			○	住36→住9→住6
17		7				●			○		住8→住7
17		8			●				○		住8→住1・住7
17		9				●			○		住34・36→住9
17		10					△				
17		11							○		時期決定困難
17		12						△		○	住13→住12
17		13				△				○	住13→住12
17		14			○				○		住34→住14→住9
17		15									時期決定困難，住30→住15
17		16								○	時期決定困難，住30→住16
17		17						○	○		
17		18						△			
17		19					△		○		
17		20									時期決定困難
17		21					●		○		
17		22						△			
17		23									時期決定困難，住25→住23→住16
17		24			△						
17		25					△		○		
17		26				△					
17		27									時期決定困難
17		28					△				住28→住25
17		30					△				
17		31				○					
17		32									時期決定困難
17		33				○			○		
17		34			△				○		住34→住14→住9
17		35								○	時期決定困難
17		36									時期決定困難，住36→住9→住6
17		37						●		○	
17		38			●				○		
17		39			△				○		
17		40			△				○		住2・3・40→住1
18		SC01		●							
18		SC24			○						
18		SC42			○						
20		1						△	○		
20		2					△				住2→住3
20		3						△			
20		4						○		○	
20		5						△		○	住8・住6→住7→住5
20		6					△		○		住8・住6→住7→住5
20		7					△				住8・住6→住7→住5
20		8					△				住8・住6→住7→住5
20		9					△			○	
20		10									時期決定困難
20		11						○		○	
20		12				△			○		
20		13				△			○		
20		14						△			
20		15					△			○	
20		16					△	△	○		
20		17					△		○		住19→住17→住18
20		18					△	△			住19→住17→住18

第8表　西新町遺跡弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡等とその時期（4）

次数	地区	住居跡番号	Ⅰ	Ⅱ	庄古	庄新	布古	布新	炉	竈	切合い等備考
20		19					△			○	住19→住17→住18
20		21						△		○	住44→住48→住28→住21
20		22									時期決定困難
20		23						○		○	
20		24				○			○		住25→住24
20		25				△					住25→住24
20		26									時期決定困難
20		27					●				
20		28						△		○	住44→住48→住28→住21
20		29					△				
20		30					○			○	
20		31				△					住31→住32
20		32					△	×		○	住41→住42・住32
20		33					△			○	住33→住35
20		34					△				
20		35						○		○	住33→住35
20		36									時期決定困難，住36→住37
20		37						△	○		住36→住37
20		39					△			○	住41→住42・住32
20		41					△			○	住41→住42・住32
20		42						△		○	
20		43						△			住43→住44→住48
20		44						△			
20		45					●			○	
20		46						○			住46→住21
20		47				×	△				
20		48						△		○	住44→住48→住28→住21
21		SC05		○							
21		SC14		○							
21		SC32		○							
22		1			△					○	
22		2		○					○		住2・9→住10
22		3		○					○		住3・6→住5
22		4		○					○		
22		5		○							住3・6→住5
22		6		△							
22		7		○							住7→住8
22		8			△					○	住7→住8
22		9		△					○		住2・9→住10
22		10		△							住2・9→住10

●は第2表で扱った資料，△は時期決定にやや確実性を欠く資料，×は確実性に欠ける資料。

井澤　洋一編　1988　『有田・小田部』第9集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集（35次）
松村　道博　1989　『西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第203集（4次）
山崎龍雄編　1990　『有田・小田部』第11集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集（107・133次）
吉留秀敏編　1990　『博多』13　福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第228集（36次）
田崎博之編　1991　『博多』20　福岡市埋蔵文化財調査報告書第248集（45次）
大庭康時編　1991　『博多』21　福岡市埋蔵文化財調査報告書第249集（50次）
濱石哲也・菅波正人編　1992　『博多』31　福岡市埋蔵文化財調査報告書第286集（63次）
濱石哲也・榎本義嗣編　1993　『入部』Ⅳ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集（岩本遺跡2次）
大庭友子・二宮忠司編　1993　『野方久保遺跡』Ⅱ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第348集
長家　伸　1994　『西新町遺跡』3　福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集（5次）
濱石哲也編　1995　『入部』Ⅴ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集（清末遺跡3次）
白井　克也　1995　『警弥郷B遺跡』2　福岡市埋蔵文化財調査報告書第414集（3次）
榎本義嗣編　1998　『入部』Ⅷ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第577集（東入部遺跡1次）
山崎　龍雄　1998　『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告』4　福岡市埋蔵文化財調査報告書第581集（野芥大藪遺跡1次）
大庭　康時　1999　『堅粕』3　福岡市埋蔵文化財調査報告書第590集（8次）
松村道博編　2000　『雀居遺跡』5　福岡市埋蔵文化財調査報告書第635集（9次）
杉山富雄編　2002　『鋤崎古墳』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集
舟山良一編　2001　『瑞穂・原ノ畑遺跡』大野城市文化財調査報告書第57集
瀧本　正志　2004　『比恵』33　福岡市埋蔵文化財調査報告書第782集（81次）
力武卓治・西堂将夫　2004　『雀居』8　福岡市埋蔵文化財調査報告書第747集（12次）
吉武　学　2005　『久保園遺跡』3　福岡市埋蔵文化財調査報告書第837集（3次）
大塚紀宜編　2006　『博多』106　福岡市埋蔵文化財調査報告書第892集（147次）
柳田康雄・小池史哲編　1982　『三雲遺跡』Ⅲ　福岡県文化財調査報告書第63集（サキゾノⅠ－1区）
澤田康夫・佐藤昭則　1985　『松木遺跡』Ⅱ　那珂川町文化財調査報告書第12集（第5地点）
佐藤昭則・茂　和敏　1993　『仲遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第32集
佐藤昭則・井上裕弘編　1997　『中原・ヒナタ遺跡』那珂川町文化財調査報告書第39集（安徳・道善・片縄地区区画整理第1地点）
西垣彰博編　2006　『戸原王塚古墳』粕屋町文化財調査報告書第23集
池ノ上宏編　2002　『津屋崎町内遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第19集（宮司大ヒタイ2次）

第２節　西新町遺跡出土の朝鮮半島系遺物について

１．はじめに

西新町遺跡は筑前地域を代表する古墳時代集落であるとともに、朝鮮半島系土器、初期のカマド遺構等、朝鮮半島との交流、交易を物語る資料が集中する特異な遺跡としても注目されている。九州と朝鮮半島との交易は、弥生時代中期後半～後期には長崎県壱岐市原ノ辻遺跡－伊都国の中心地である福岡県前原市三雲・井原遺跡群を軸とした『原ノ辻＝三雲貿易』から弥生時代終末以降、博多湾を中継地とする『博多湾貿易』に変化し、その当初は福岡市西区今山遺跡と福岡市博多区博多遺跡群が中心を担ったが、古墳時代前期には西新町遺跡が中心となったとする説もある〔久住 2007〕。また、カマド状遺構の存在とあわせて、朝鮮半島からの相当数の渡来人が遺跡に居住していた可能性も指摘されている。

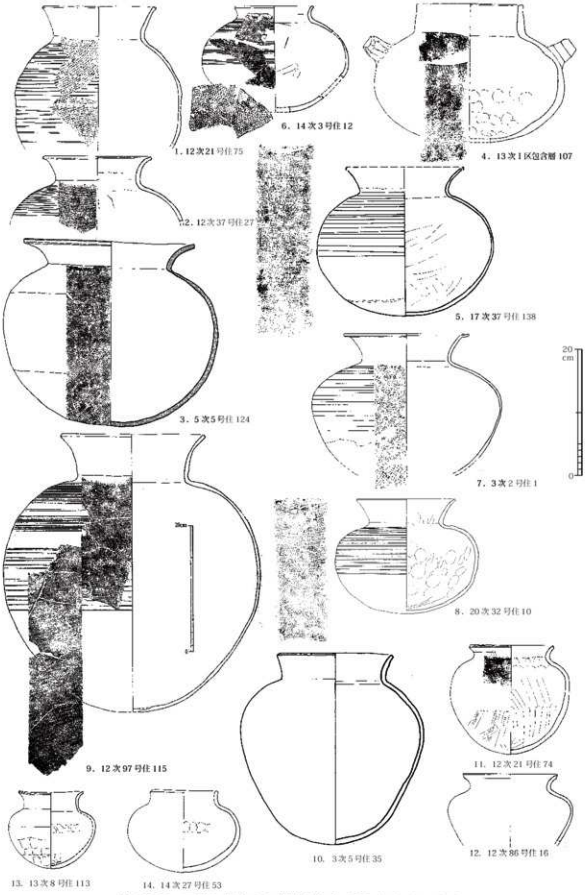
ここでは既刊報告書と重複する部分も多いが、朝鮮半島系土器を中心に、時期やその特徴を整理し、あわせて、朝鮮半島との交流を物語る遺物についても言及することにしたい。

２．朝鮮半島系土器の事例報告

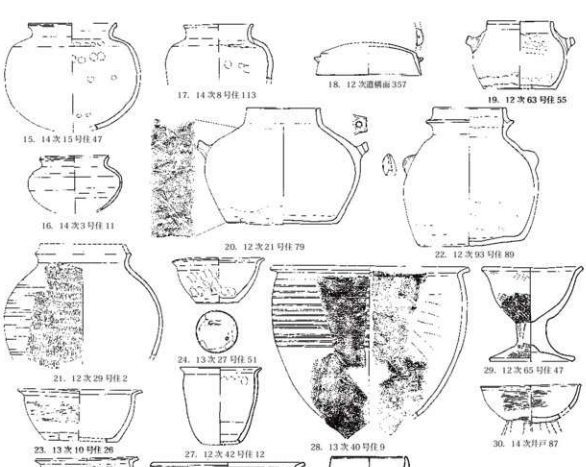
第 52 ～ 54 図には西新町遺跡出土の朝鮮半島系土器のうち、器形のわかるものを中心に示した。

１～９は外面にタタキ文様を持つ壺で、タタキの後、螺旋状に沈線を巡らすものが多い。

１はやや長胴気味で、胴部の張りが小さく、口縁は外傾して、端部は外にわずかに拡張気味である。胴部外面は格子タタキの後、沈線を巡らす。灰褐色で陶質。２は胴部の張りが大きく、口縁は緩やかに外反する。外面平行タタキ後沈線を巡らし、灰色で陶質を呈す。３は胴部の張りが強く、頸部から急激に外反して、口縁端部に至る。外面は小さな格子タタキを施し、焼成は陶質である。４は肩部に縦方向に穿孔した大きな耳を貼付したもの。胴部の張りが大きく、口縁部はほぼ直立する。外面は平行タタキを施し、瓦質で灰色を呈する。縦方向の穿孔を施し、口縁部の直立するタタキ文壺は、慶尚南道金海市良洞里 280 号墳〔東義大学校博物館 2000〕などに見られるが、良洞里 280 号墳の例は格子タタキである点で異なる。５は胴部の張りが強く、頸部が丸みを帯びて屈曲し、口縁へと至る。外面上部は平行タタキの後、沈線を巡らし、下部は小さな格子タタキである。灰色を呈し、調整はやや甘く瓦質に近い。６は胴部の張りが強く、頸部は短く緩やかに外反するもの。外面は上部が細かい平行タタキ、下部が粗い斜格子タタキである。器表は黒褐色、器壁中央は黄褐色を呈することが特徴的で、軟質に近い焼成である。７は胴部の張りが強く、口縁部はやや直線的に開く。端部の外への屈曲が強く、水平に近い面をなすことが特徴的である。胴部外面上部は平行タタキ、下部はやや大きな格子タタキを残し、軟質でやや褐色を呈す。口縁端部の特徴は忠清南道天安市清堂洞遺跡〔国立中央博物館 1993〕の２世紀後半～３世紀後半とされる墳墓群出土品に多く見られる。ただ、全羅南道咸平郡萬家村古墳群〔全南大学校博物館 2004〕、慶尚南道咸安市道項里 26 号墳〔昌原文化財研究所 1997〕にも、外面が縄席文タタキながら、褐色軟質で、同様の口縁部を呈する例もあり、広範囲に類例を検索する必要があろう。８は偏球形胴部に外反する口縁部が付くもの。胴部外面は上部平行タタキ後、沈線、下部は格子タタキである。暗灰色～茶褐色で、瓦質に近い焼成である。９はやや大形品で、倒卵形に近い胴部に、緩やかに外反しながら長く伸びる口縁の壺。胴部外面は平行タタキを施し、上半は沈線を巡らす。灰色～黄灰色で瓦質に近い焼成である。10 は外面のタタキを丁寧にナデ消した壺。胴部



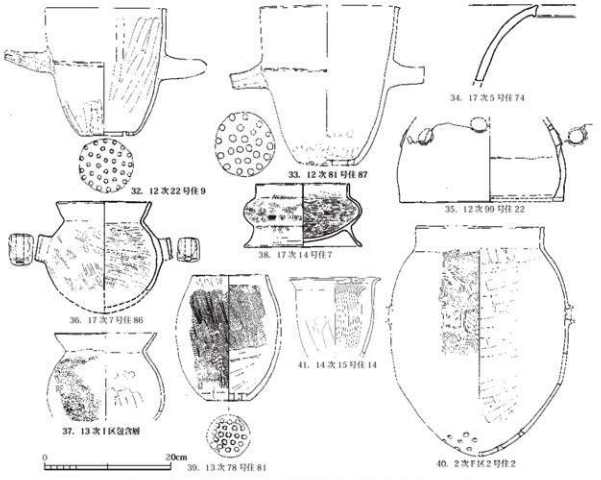
第52図　西新町遺跡出土朝鮮半島系土器（1）（1／6）



第 53 図　西新町遺跡出土朝鮮半島系土器（2）（31 は 1／3、他は 1／6）

は倒卵形で、口縁部は短く緩やかに外反し、端部が角張る。全羅北道扶安郡竹幕洞遺跡出土〔第 55 図 7、国立全州博物館 1994〕の 4 世紀の土器群中に類例が見られる。

11 ～ 17 は小形・中形の壺。いずれも陶質の焼成で、胴部にはタタキ痕は観察されない。11 は頸部から急激に短い口縁が外反し、胴部は球形を呈する。胴部外面下部には微かな擦痕、胴部内面には微かなナデ上げの痕跡が観察される。12 は肩が張った胴部で、口縁端部は直立に近い面をなす。灰褐色を呈する。13 はやや尖り底気味の底部で、頸部は内傾し、緩やかに外反しながら口縁端部に至る。胴部外面下部はナデにより小さく微かな稜のたつ面が形成される。暗赤紫色で硬い焼成である。14 は口縁が短く直立し、胴部がやや張るもの。やや甘い焼成で黄灰色を呈する。15・16 はいずれも胴部の張りが強く、口縁端部に凹みが巡るものである。15 は黒灰色、やや小形の 16 は青灰色～黒灰褐色を呈する。17 は器壁がやや厚く、頸部内面に粘土接合痕を残す粗雑な印象のもの。肩が張り、口縁部は頸部からやや直立気味に立ち上がり、緩やかに外反する。このうち 13 は慶尚南道馬山市縣洞遺跡〔昌原大学校博物館 1990〕など慶尚南道西部地域に類例が多いようである。11 は 4 世紀中葉頃に編年されている慶尚南道金海市礼安里遺跡 138 号墳副槨出土品〔第 55 図 9、釜山大学校博物館 1993〕など、

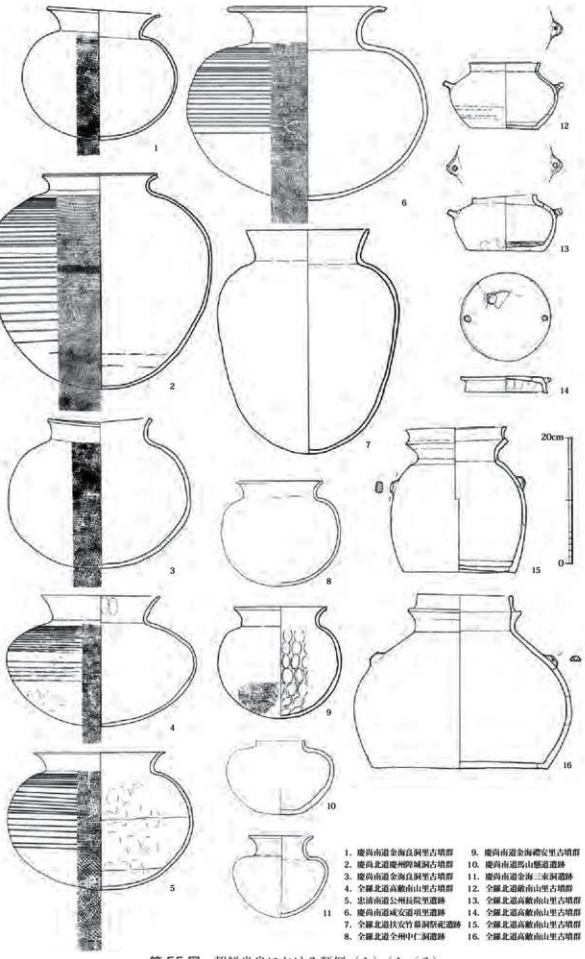


第54図　西新町遺跡出土朝鮮半島系土器（3）（1／6）

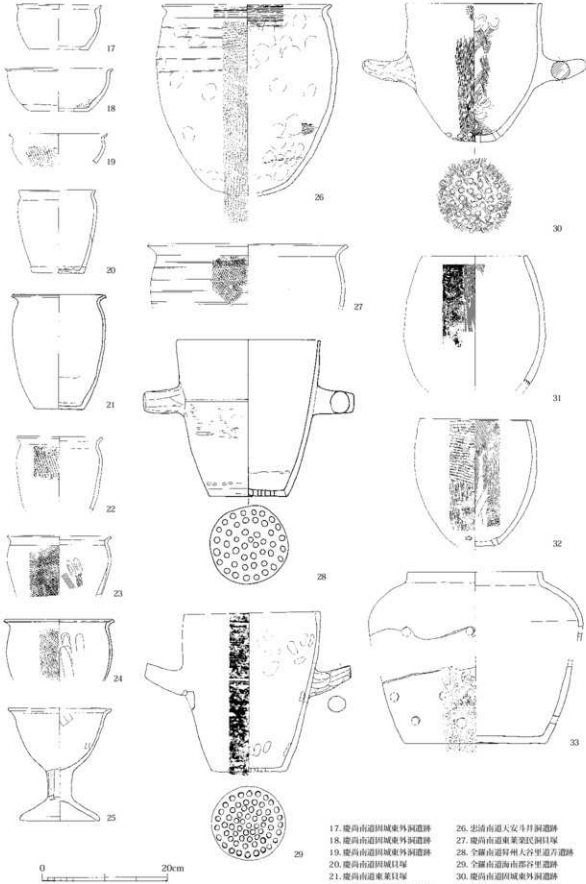
金海地域の出土例と対比できるようである。これに対して全羅道地域では、西新町遺跡集落の時期である3世紀後半～4世紀に11～17のような陶質・無文の中形・小形の壺は少ない。したがって、これらは大半が慶尚南道南海岸地域からの搬入品ではないかと考えられる。ただ、3世紀中頃～4世紀前半と考えられる全羅南道咸平禮德里萬家村古墳群13号墳4号土壙墓〔全南大学校博物館2004〕、4世紀代の集落遺跡、全羅北道全州中仁洞遺跡原三国時代3号住居跡〔第55図8、全北文化財研究院2008〕で、11に類似する硬質無文の土器が出土していることも注意しておきたい。

19・20は縦方向穿孔の耳をもつ両耳付平底壺で、18はその蓋か。いずれも忠清道・全羅道地域に特徴的な器形（第55図12～14）で、搬入品であろう。19は内外ナデ仕上げで、胴下部外面は横方向に手持ちヘラケズリを施し、口縁部は短く直立する。軟質で褐色。20は外面に小さな格子タタキをとどめたやや大形品である。口縁部は短く直立し、黄褐色～赤褐色。18は天井部がやや丸みを帯び、口縁部が直線的に内傾する蓋である。小片であるが、口縁上部の外面に縦方向に穿孔した耳が貼付される。両耳付壺蓋は天井部と口縁部の境界の屈曲部に耳を貼付するものが多い〔金鍾萬1999〕ので、やや特異である。軟質で褐色を呈すが、胎土・焼成は土師器と異なり、搬入品と考えて間違いない。

21は頸部下の外面にタタキ工具角の刺突による三角列点文を巡らした二重口縁壺。胴部は球形で、頸部・口縁部は短い。胴部外面には平行タタキの後、凹線を巡らす。赤褐色であるが、土師器よりは硬い焼成である。22は平底で穿孔の無い耳を貼付した二重口縁壺。底部は大きな平底で、肩部に穿



第 55 図　朝鮮半島における類例（1）（1／6）



17. 慶尚南道固城東外洞遺跡
18. 慶尚南道固城東外洞遺跡
19. 慶尚南道固城東外洞遺跡
20. 慶尚南道固城貝塚
21. 慶尚南道東萊貝塚
22. 慶尚南道固城東外洞遺跡
23. 慶尚南道固城貝塚
24. 慶尚南道東萊貝塚
25. 全羅南道麗水禾長洞遺跡
26. 忠清南道天安斗井洞遺跡
27. 慶尚南道東萊栗民洞貝塚
28. 全羅南道舜州大谷里道芳遺跡
29. 全羅南道海南郡谷里遺跡
30. 慶尚南道固城東外洞遺跡
31. 慶尚南道金海府院洞遺跡
32. 慶尚南道東萊栗民洞貝塚
33. 全羅南道羅州伐谷里古墳群

第56図　朝鮮半島における類例（2）（1／6）

孔の無い縦長耳を貼付する。頸部高・口縁立ち上がり高の小さい二重口縁をなし、割れ口にその接合方法を明瞭に観察することができた。内外ナデ仕上げ。軟質であるが、器表は燻したように黒灰色を呈する。これらの二重口縁壺も忠清道・全羅道地域に特徴的な器種（第55図15・16）で、特に全羅南道栄山江流域に多く、3～4世紀を中心にする器種と指摘されている〔林永珍1998〕。

23～28はいずれも短く外反した口縁の鉢。23・24はやや浅い器形で、いずれも底部と体部の接合部外面に手持ちヘラケズリを施す。22は内外回転ナデ仕上げで、黒灰色～灰色、瓦質焼成である。24は内外ナデ仕上げで、底部外面には回転台に設置する際に生じた低い突起が見られる。灰色を呈し、瓦質焼成である。25はやや中形で深い器形のもの。内外回転ナデで仕上げ、瓦質、灰色を呈する。26・27はいずれも赤褐色を呈する軟質平底鉢。26は胴部外面に小さな格子タタキを施すのに対して、27は内外ナデである。28は大形で深い甕に近い器形のもの。胴部外面には斜格子タタキの後、沈線を巡らす。やや軟質で、灰褐色を呈す。同様の器形は忠清南洞天安市斗井洞遺跡〔第56図26、忠清文化財研究院2001〕や釜山市東業楽民洞貝塚〔第56図27、国立中央博物館1998〕に見られ、広範囲に分布するものと推定される。

29は軟質で褐色の高杯。杯部は深く、脚柱部が中実で、太い点が特徴的である。杯部外面、脚裾部外面には粗い格子タタキが残る。外面の格子タタキは確認されず、器高が本例よりやや高いものの、同形態の例が全羅南道麗水市禾長洞遺跡1次6号住居跡〔第56図25、順天大学校博物館2002〕にある。

30は脚部を失うが、底部に透し上端の痕跡が残り、透付き高杯杯部と考えられる。内外にミガキを施し黒褐色を呈し、いわゆる黒色磨研土器に通じる雰囲気である。全羅道からの搬入品か。

31は口縁が直立する小形の杯。内外ナデで、陶質、灰色を呈する。慶尚南道からの搬入品か。

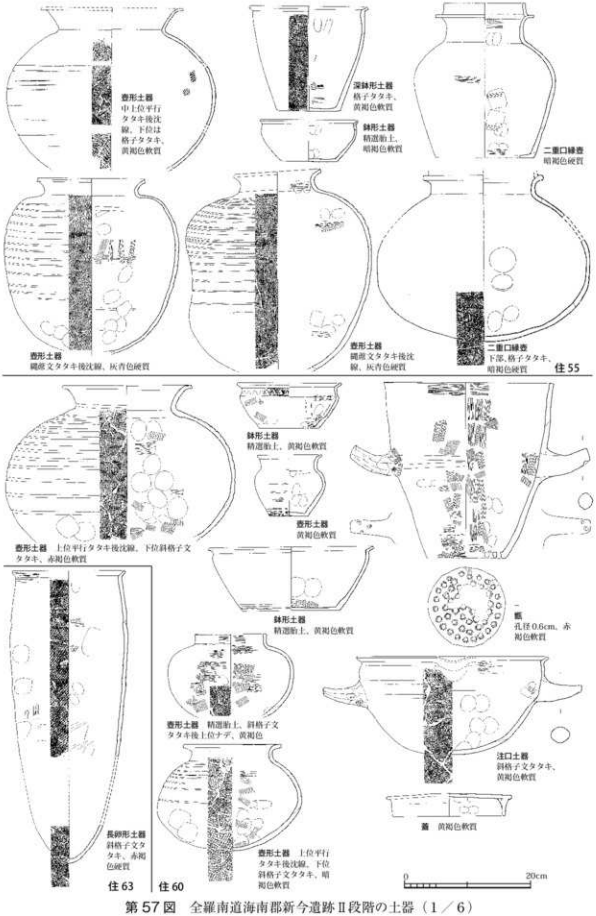
32・33は甑。いずれも口縁が直立し、平底で同心円状に直径1cmに満たない蒸気孔を多数、配置する。いずれも胴部中間に把手を挿し込み成形するが、胴部外面器壁にはその割り付け線と思われる沈線が巡る。32は黄褐色を呈するがやや硬質で、形態のみならず胎土・焼成・色調のいずれにおいても全羅南道海南郡郡谷里貝塚出土例〔第56図28、木浦大博物館1989〕と酷似している。33は土師器に近いやや柔らかい焼成で、淡褐黄色を呈する。

34は灰色陶質の大形甕口縁部。口縁端部はナデによりシャープに上下に拡張する。

35は平底で胴上部がすぼまり、肩部近くには2ヶ所に大きな焼成前穿孔が見られる特異な器形のもの。土師器中には例がなく、大きな平底が両耳付平底壺などの土器と共通するため朝鮮半島系土器として位置づけた。完全に同一の器形は例を知らないが、強いてあげればやや時期の下る全羅南道羅州市伏岩里古墳群2号墳墳丘東側出土品〔第56図33、全南大学校博物館1999〕と類似している。

36・37は形態が土師器甕に類似するが、朝鮮半島系土器の技法・属性が見られるもの。36は縦方向に穿孔した耳を胴部に貼付することが最大の特徴である。加えて、器壁が土師器甕に比べ厚く、内外を板状工具を用いたナデで仕上げる点も注意される。これらの特徴から考えて、土師器とは異なる技法で、土師器甕を模倣して製作したものと考えられる。36は器壁の厚さは土師器甕とも合致するが、外面に残された小さな斜格子タタキは土師器には見られない特徴で、朝鮮半島系土器の影響と考えられる。胴部内面には土師器甕と同様にケズリを施すものの、その範囲も胴下部に限られ特異である。これら2点の土器は、朝鮮半島出身の工人が製作したのではなかろうか。

一方、38～41は朝鮮半島系土器の器形を模倣して土師器工人が製作した土器と考えられるものである。38は径の大きい脚を付け、口縁が直立する壺である。内外に細かいハケメ調整が見られ、胎



第 57 図　全羅南道海南郡新今遺跡Ⅱ段階の土器（1／6）

土は土師器精製器種と共通するが、大きな脚は土師器及び弥生時代後期終末以来の在地系土器には見られない。器形としては朝鮮半島南部の瓦質爐形土器に近く、その模倣品の可能性を考えたい。39・40はハケメ・ケズリ仕上げの甑。これらは在地の土器の胎土に近いが、朝鮮半島南部でもハケメ仕上げの甑（第56図30～32）が出土している。朝鮮半島南部出土のハケメ仕上げ甑は列島からの移住者によって製作された可能性などを考慮する必要があろう。41は軟質平底鉢を模倣して製作されたものか。胴部外面下部板ナデ、胴部内面粗いハケメ。

3．朝鮮半島系土器に関する二、三の検討

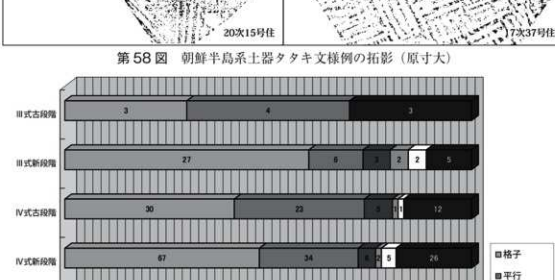
朝鮮半島系土器の時期について　まず土師器編年に照らして西新町遺跡出土の半島系土器の時期を考えてみたい。最も遡るのは2次D区1号住居跡の軟質両耳付壺、12次93号住居跡の両耳付二重口縁壺、17次38号住居跡の陶質土器壺口縁部等で、Ⅲ式古段階まで遡る可能性がある。ただし、これまでのところⅡ式以前に遡る例はないようである．

一方、出土した朝鮮半島系土器のうち、12次93号住居跡二重口縁壺、12次63号住居跡両耳付壺は全羅道を中心に分布する特徴的な器種である。これらの土器を徐賢珠氏〔2006〕が行った全羅南道栄山江流域の土器編年に照らすと、Ⅰ－1期～Ⅰ－2期にその中心があり、Ⅰ－1期は3世紀中葉～後葉、Ⅰ－2期は4世紀前葉～中葉とされる。先に朝鮮半島系土器の多数は西新町Ⅲ式～Ⅳ式に並行すると述べた。古墳時代前期いっぱいに相当するが、栄山江流域の土器の絶対年代の比定と大枠では合致すると思われ、日韓の並行関係をたどる確実な根拠にこれらの資料がなることは間違いない。

西新町遺跡と並行する時期の全羅南道の集落遺跡として対比可能なもののひとつに海南郡新今遺跡〔湖南文化財研究院2005〕がある。新今遺跡は住居跡72基が調査されているが、大きく4時期に区分され、Ⅰ期は3世紀中頃、Ⅱ段階は3世紀後半、Ⅲ段階は4世紀、Ⅳ段階は5世紀の実年代が与えられている。このうちⅡ段階の土器を第57図に示した。二重口縁平底壺、タタキ文壺、甑は西新町遺跡出土品と類似している。新今遺跡Ⅰ段階のタタキ文壺は胴部が胴高よりも胴部最大径が大きい偏球形のもの（新今遺跡壺形土器Ⅰ型式）か胴高と胴部最大径のほぼ等しい球形胴のもの（新今遺跡壺形土器Ⅱ型式）に限られるが、Ⅱ段階には長胴のもの（新今遺跡壺形土器Ⅲ型式）が出現し、Ⅲ段階になると偏球形のものが消滅するとされている。西新町遺跡では偏球形のタタキ文壺も多数出土しており、新今遺跡Ⅱ段階以前と接点をもつものと考えられる。朝鮮半島からの搬入品と考えられる西新町12次22・89号住居跡出土甑と新今遺跡60号住居跡出土甑は全体的な形態、底部穿孔の大きさ、配置も類似しているといえる。また、新今遺跡ではⅡ段階になって陶質に近い硬質の土器が出現するとされ、西新町遺跡における陶質の朝鮮半島系土器の存在とも符合する。西新町遺跡の朝鮮半島系土器は、新今遺跡のⅢ段階以前、特にⅠ～Ⅱ段階のものとの並行関係が問題となる資料であろう。

朝鮮半島系土器の器種構成　西新町遺跡の朝鮮半島系土器には上述したように、タタキ文壺、二重口縁壺、無文丸底壺、高杯、平底深鉢、両耳付壺のような器種がある。豊富なように見えるが、朝鮮半島における器種のすべてが出土しているわけでわけではない。第57図新今遺跡出土土器のうち長胴で外面にタタキを施した「長卵形土器」、把手をつけ口縁部が片口をなす鍋状の器形「注口土器」は新今遺跡および全羅道地域のこの時期の主要な器種であるが、西新町遺跡では出土例は極めて少ない。また、平行する時期の朝鮮半島南東部、洛東江流域では爐形土器が墳墓などで多く出土するが、西新

第 58 図　朝鮮半島系土器タタキ文様例の拓影（原寸大）



第 59 図　タタキ文様等の時期別比率等グラフ

町遺跡ではそれを模倣した可能性のある土器は存在するものの、壺形土器そのものは出土していない。したがって、朝鮮半島の同時期の器種から選択的にとりいれられた可能性が高い。

タタキ文壺の検討　朝鮮半島系土器の中で最も量の多いものは、胴部外面にタタキを施し、しばしば螺旋状に沈線、凹線を巡らした壺形土器である。ただ、これらの土器は特徴に乏しい上に、破片となって出土した例が大多数を占める。そのため、１点ごとに朝鮮半島の類例を検索することは容易ではない。そこで、ここでは、時期毎に文様別の比率をみるなどして、その概要を把握し、今後の検討に備えることにしたい。

タタキは主として壺形土器の外面に顕著に残るが、小型の鉢形土器にも施されている。外面に残るタタキ文様のバリエーションとしては格子、平行、縄席文、網代状（第58図）がある。通常、内面には丁寧なナデを施して当て具痕を消すが、稀に板ナデにより最終調整を行うものがある。外面の格子タタキには正格子と斜格子の二種があり、前者は少数である。両者とも、方2～3㎜程度の細かなタタキが大半を占めるが、タタキ板の彫りが狭く単位も大きめの特徴的な例も見られる。平行タタキと縄席文も1単位／㎜程度の間隔が多い。また、網代状タタキの出土例は極めて限られるが、ひと区画が方12㎜程度の平行文で構成されている。ところで、外面に2種の原体を併用してタタキ分けする例もみられ、この場合は体部下半から底部にかけて格子タタキを行った後、体部上半に縦位の平行タタキを施している。タタキ文様の変わる部位は、体部に巡らされた沈線の最も下位の界線と一致する傾向にある。朝鮮半島における同様のタタキ分けは全羅道や忠清道に多いという傾向が示されている〔寺井 2001〕。

第59図は時期ごとのタタキ文の比率を示したものである。西新町遺跡から出土した約656点のうち、甑などの把手、底部、口縁端部等の内外横ナデ調整を行う部位を除いた533点を対象としている。格子文、平行文タタキに挙げたグラフの数値には、1個体で両者を使い分ける「平行文＋格子文」の項に属するものも一部含まれるものと思われる。個体数が限られているためグラフに現れた比率が安定的でないこと、住居廃棄時に混入する可能性があることなどから、統計処理・分析をするには若干躊躇するが、参考として集計した。なお、タタキを持たない、内外面ともナデ調整を施す例もグラフに反映される最終調整の比率の公平性という観点から表に含めているが、極めて少数派であるハケ、ケズリ、カキメについては除外している。タタキ文様を有する朝鮮半島系土器は、西新町遺跡ではⅢ式古段階から出現し、時期が下るにしたがって出土頻度を増す（Ⅲ式古段階：9％、Ⅲ式新段階17％、Ⅳ式古段階：21％、Ⅳ式新段階：53％）。各文様の出現時期に関しては、Ⅲ式新段階にはすべての文様が出揃うものの、例えば縄席文自体は既に楽浪系土器にもみられ、また、当遺跡例より遡る三雲遺跡番上Ⅱ－6号住居〔柳田 1980〕等でも出土している。時期別の出土傾向は、各期を通して格子文が半数前後と安定した比率を占めるが、例えば内外面ナデ消し調整からタタキへ移行するというような時期変化に伴う製作手法的な傾向は把握できなかった。なお、網代状文は全羅南道金坪遺跡〔全南大博物館 1998〕に類例を求めることができるが、西新町遺跡内では最も出土点数が少なく、4次、12次、17次、20次から出土した計10点にとどまる。

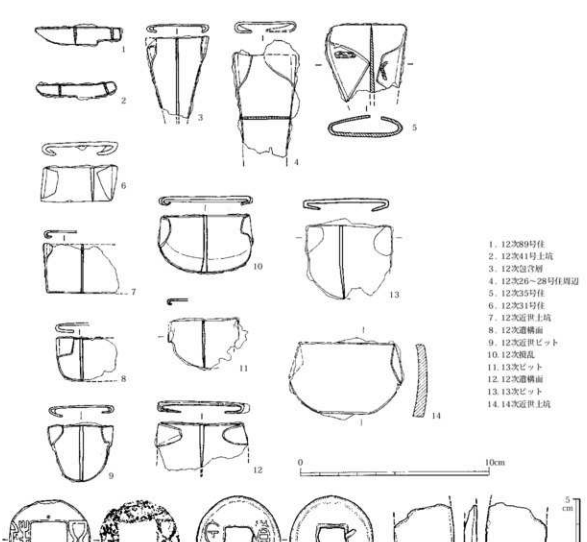
その他、気づいた点として、小型の鉢は格子文に限られ平行文は施されないこと、平行タタキは縦位であること、平行文と格子文のタタキ分けを行う例は比較的大型の壺にみられることなどがある。

4．その他の朝鮮半島系遺物

その他の朝鮮半島系の遺物としてミニュチュア鉄器、銭貨、鉛片（第60図）がある。

ミニチュア鉄器には、実用に耐えない小型品で刃部が形成されていないものなどをまとめて第60図に図示した。両側縁を折り返した鍬、鋤先または手鎌と思われる形状のものが多く見られる。これらは小型鉄製農工具とも称され、朝鮮半島の鍛冶工人と関連する遺物との指摘がある〔坂 2005〕。これまでの調査では鍛冶遺構そのものは検出されなかったが、板状鉄製品や鞴羽口など鍛冶に関連する遺物が出土していることからも、鍛冶工人の存在が予想される。

12次96号住居跡出土の五銖銭は周縁部の隆起帯から内側の銭体を削り取ったいわゆる「剪輪五銖



第60図　その他の朝鮮半島系遺物（ミニチュア鉄器は1／2、貨幣は実大、鉛片は2／3）

銭」で、字体も考慮して、後漢後半、紀元2世紀の製品と考えられる〔岡内1982の分類による〕。高倉洋彰氏〔1989〕は弥生時代の貨泉の大半はその製作時期に近い新末～後漢初すなわち弥生時代後期初頭～前半に流入したと推測している。17次38号竪穴住居跡の貨泉が弥生時代後期前半に流入し、伝世の後、古墳時代初頭になって廃棄された可能性を完全に排除することはできないが、遺跡の展開及び古墳時代初頭における朝鮮半島との交流の脈絡から考えて、古墳時代初頭に流入した可能性が高いのではなかろうか。12次96号竪穴住居跡出土の五銖銭も同じ過程でもたらされたものであろう。

また、17次5号竪穴住居跡から出土した鉛板片も注目される。『西新町遺跡』Ⅷで報告された鉛同位体比測定結果によれば、中国華中～華南産原料の範囲内に含まれるが、朝鮮半島南部産原料の可能性も指摘されている。

5．小　結

ここでは西新町遺跡出土の朝鮮半島系土器について、再報告し、その類例、時期等について検討を行った。上述したように西新町遺跡では多種多様な朝鮮半島系土器が出土するが、特に甕や両耳付壺、二重口縁壺などの全羅道等、朝鮮半島西南部地域の土器と類似する資料が多い。その一方で、慶尚南道地域の土器と推測されるものも存在し、朝鮮半島南海岸さらには対馬、壱岐を通じた交易路の終着点という様相を呈している。さらに、朝鮮半島系土器を模倣した土器、あるいは朝鮮半島系土器の製作技術で在地の土器を製作したものもあり、渡来人の存在を強く示唆する資料である。

ただ、両地域の平行関係については、全羅道、慶尚南道における編年網、各器種の型式分類の中に、西新町遺跡出土の朝鮮半島系土器を位置づける必要があろう。一方、全羅道、慶尚南道地域の土器の器種構成のすべてではなく、一部が選択的に搬入されている状況も見落とすことができない。近年、これらの地域では墳墓遺跡のみならず集落遺跡の発掘調査の事例が飛躍的に増加している。今後、朝鮮半島南部における同時代の器種構成の中に、西新町遺跡出土品を位置づけて、搬入された器種の選択の背景にある人、モノの動きの意味の検討を深める必要があろう。

これまでの西新町遺跡の発掘調査では、小田富士雄先生、西谷正先生、武末純一先生、寺井誠氏に韓国における類例等についてさまざまな御教示をいただいた。また、発掘調査現場や出土遺物の整理過程では多くの韓国の考古学者の方々に御教示をいただいた。感謝申し上げるとともに、日韓両国の研究者によって西新町遺跡の発掘調査成果の批判的な検討が進み、今後の福岡県をはじめとする日韓交流史の考古学的解明のための素材として資料が利用されるようお願いしたい。

参考文献

岡内三眞　1982「漢代五銖銭の研究」『朝鮮学報』第102輯
高倉洋彰　1989「王莽銭の流入と流通」『九州歴史資料館研究論集』14
寺井　誠　2001「古墳出現前後の韓半島系土器」『3・4世紀　日韓土器の諸問題』釜山考古学研究会・庄内式土器研究会・古代学研究会
柳田康雄　1980『三雲遺跡』Ⅰ　福岡県文化財調査報告書第58集
久住猛男　2007「「博多湾交易」の成立と解体－古墳時代初頭前後の対外交易機構－」『考古学研究』第53巻第4号
坂　靖　2005「小型鉄製農工具の系譜－ミニチュア農工具再考－」『考古学論攷』橿原考古学研究所
金鍾萬　1999「馬韓圏域出土両耳付壺少考」『考古学誌』第10輯韓国考古美術研究所
林永珍　1998「竹幕洞土器と栄山江流域土器の比較考察」『扶安竹幕洞祭祀遺蹟研究』国立全州博物館
徐賢珠　2006『栄山江流域古墳土器研究』学研文化社
木浦大学校博物館　1989『郡谷里貝塚』Ⅲ
昌原大学博物館　1990『馬山縣洞遺蹟』昌原大学博物館学術調査報告第3冊
釜山大学校博物館　1993『金海礼安里古墳群』Ⅱ　釜山大学校博物館遺蹟調査報告第15輯
国立中央博物館　1993『清堂洞』国立博物館古蹟調査報告第25冊
国立全州博物館　1994『扶安竹幕洞祭祀遺蹟』国立全州博物館学術調査報告第1輯
国立昌原文化財研究所　1997『咸安道項里古墳群』Ⅰ　学述調査報告第4輯
国立中央博物館　1998『東萊楽民洞貝塚』国立博物館古蹟調査報告第28冊
全南大学校博物館　1998『寶城金坪遺蹟』全南大学校博物館・寶城郡
全南大学校博物館　1999『伏岩里古墳群』
東義大学校博物館　2000『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館学術叢書7
忠清文化財研究院　2001『天安斗井洞遺跡（C・D地区）』忠清文化財研究院文化遺跡調査報告第23輯
順天大学校博物館　2002『麗水禾長洞遺蹟』Ⅱ　順天大学校博物館地方文化叢書第41冊
全南大学校博物館　2004『咸平礪徳里萬家村古墳群』全南大学校博物館学術叢書84
湖南文化財研究院　2005『海南新今遺蹟』
全北文化財研究院　2008『全州中仁洞遺蹟』遺蹟調査報告18

（吉村靖徳・重藤輝行・吉田東明）

第３節　西新町遺跡の竪穴住居作りつけカマド

１．はじめに

西新町遺跡では、日本列島の他の弥生時代後期終末～古墳時代前期の竪穴住居跡にはほとんど例の無い、カマド付きの竪穴住居跡が多数検出されたことが大きな特徴となっている。これまでの22次に及ぶ調査の中で、カマド付き竪穴住居跡は106棟を数える。この数は弥生時代終末～古墳時代前期の竪穴住居跡全体の約20%に相当する。これに対して炉を設置するものがほぼ同数の103基あり、残る竪穴住居跡は、新しい遺構にこわされてカマドないしは炉跡の有無の不明なものである。

同時期の朝鮮半島は、楽浪郡を経由して中国本土ないしは中国東北部の調理様式が摂取され、カマドが広く普及する時期に相当する。韓国では近年、三韓～三国時代の集落遺跡の調査が進展しており、壁に沿って長く煙道を伸ばす形式のものは「オンドル状遺構」とも称される。西新町遺跡のカマドについては韓国でのオンドル状遺構と称されるものと類似するものがあるため、朝鮮半島からの渡来人がもたらした知識のもとに構築されたことには異論がないようである。

ここでは西新町遺跡で検出したカマドに対して平面形態による分類を行い、全体的な傾向や朝鮮半島との比較検討を行いたい。

２．カマドの構造と分類

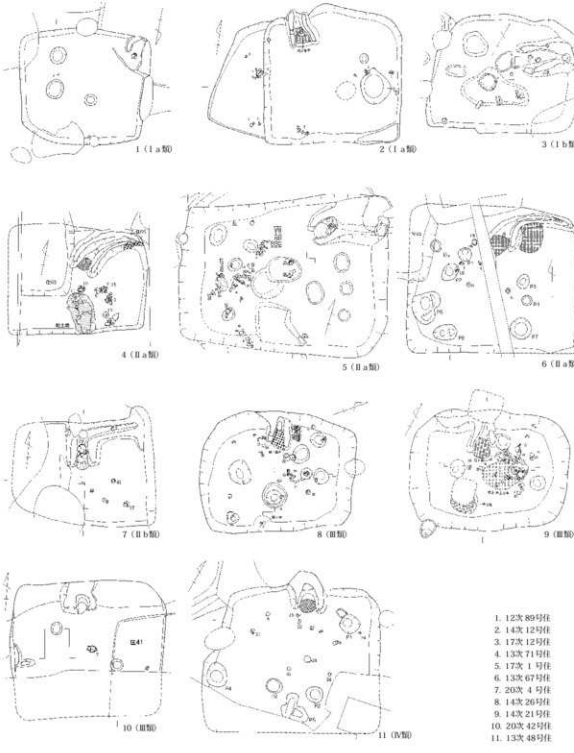
（１）平面形態による分類

かつて『西新町遺跡Ⅴ』において、同様の趣旨で類型化を試みたが、基本的にはこの分類に変更はない。しかしこれまでの調査により状態の良いカマドの調査事例が増加し、更なる細分も可能になったため、今回は前回の分類に追加する形で細分を行う。

カマドの類型化に際しては、住居跡内におけるカマドの位置と煙道の長さに着目し、大きく次の三つの型式に分類し、更にⅠ類についてはⅠａ・Ⅰｂ類に、Ⅱ類についてはⅡａ・Ⅱｂ類に細分を行った。

Ⅰ類：カマド本体が住居の隅に付設されるもので、「隅カマド」とも呼称される。煙道がほとんど無く馬蹄形を呈するもの（Ⅰａ類）と、短い煙道があるもの（Ⅰｂ類）に二分される。Ⅰａ類は第５次調査SC04や第12次調査89号竪穴住居跡が典型例である。カマドの主軸を斜め方向にとり、一方の袖部を住居跡の壁に沿わせるものが多い。煙道は無いか、もしくは非常に短く、カマド燃焼部から直接煙を屋外に排出する構造となる。支脚の位置は住居隅から50cm前後を測る。中にはカマド本体が壁と接していないものや、隅からわずかにずれた位置にあるものもある。日本列島で普及する５世紀以降のカマドに類例が見られ、かねてから朝鮮半島との関連性が指摘されていた類型である。Ⅰｂ類は第17次調査12号竪穴住居跡が典型例である。焚口の奥から住居の隅に向かって1m足らずの短い煙道が伸びるが、次のⅡ類と比較するとかなり短く、放射熱による温室効果を意図したものではない。この類型としたものの中にはⅠａ類や次のⅡ類と判別し難い形状のものもある。また、第12次調査125号竪穴住居跡や第20次調査30次竪穴住居跡のように煙道が短く屈曲して壁に沿い、煙出し部分が住居隅から離れるものもこの類に含めている。Ⅰａ類と比べて数が少なく、日本列島の普及期以降のカマドにも類例が見られない。

Ⅱ類：カマド燃焼部が住居の壁から離れた内側にあり、煙道が住居の隅に向かって長く伸びるもので、一般的に「オンドル状遺構」もしくは横煙道、粗形炕などと称されるものである。長い煙道の目的は、



第61図　西新町遺跡カマドの分類

排出する煙の放射熱によって、屋内の温室効果を狙ったものとされる。燃焼部の主軸が壁に直交せず斜め方向を向くもの（Ⅱａ類）と、燃焼部の主軸が壁に直交するもの（Ⅱｂ類）とに細分できる。Ⅱ類の中には第17次調査1号竪穴住居跡のように煙道先端の煙出し部分を更に屈曲させるものもある。

Ⅱａ類は第13次調査71号竪穴住居跡や第17次調査37号竪穴住居跡が典型例で、西新町遺跡で検出されたカマドの中では最も数が多い。煙道の片方が壁に接し、燃焼部が斜め方向に折れて壁から離れるものと、燃焼部から煙道までが緩やかなカーブを描き、煙出しの部分だけが住居の隅にとりつくものとがある。煙道は短いものでも1m以上、長いものでは2mを超え、燃焼部を含めた全長は3mを超えるものもある。Ⅱｂ類は煙道が壁に沿って長く伸び、燃焼部は煙道から直角に折れて主軸方位が竪穴住居の壁と直交するものであり、第20次調査4号竪穴住居跡が典型例である。Ⅱａ類と比較して数が少ないが、日本列島における普及期の類例は、このような、いわゆる「L字状カマド」が通例であり、むしろⅡａ類のような例は見られない。

Ⅲ類：住居の壁のほぼ中央に付設されるもので、煙道は無いか、もしくは非常に短い。第14次調査26号竪穴住居跡や第20次調査42号竪穴住居跡などが典型例である。基本的にはカマド本体は屋内のみにとどまるが、中には第13次調査48号竪穴住居跡のようにカマドの先端を屋外へ突出させるものもある。西新町遺跡の中では数が少ないが、我が国の普及期以降のカマドの多くはこのⅢ類に類似する。

（2）カマドの構造等について

カマドの分類には含めなかったが、西新町遺跡では次のようなカマドの構造の特徴、使用等の具体的方法を知る例があった。

構築材料と構築技法　これまでの調査の結果、カマドの構築には多くの場合粘土を使用したことが明らかになっている。これは本遺跡が砂丘上に立地するため、カマドのような急傾斜の立ち上がりをもつ構築物には不適であり、他の場所から搬入されてきたものである。一方で、構築に砂を用いる例も少数ではあるが存在する。砂を用いた場合、砂単独でのカマド壁体構築は不可能に思えるので、何らかの凝固剤を用いた可能性が高い。粘土を使用した壁体の構築にもバリエーションが見られ、粘性の異なる一定の厚みをもった粘質土を数層積み上げる例、砂を主体にし、間層に薄い粘質土を挟んで互層に積み上げる例、壁体に土器片を混入させる例、内面に精良な粘土を貼り付ける例など各様の例があるが、多くの例では粘土のみを使用するのではなく、混和剤として砂を混ぜ、また砂層と互層に積み重ねることによって壁体の強化を図る工法上の工夫が行われている。

工法上の特徴はカマドの下部にまで及んでいる。第20次調査では下部構造に関する詳細な検討が加えられており、これによると、カマド本体の構築に先立ち床面の掘込地業を伴うものがあり（Ⅱ類）、これには基礎地業の整地と本体の構築に明確な工程差が認められるもの（Ⅱａ類）と一連の工程として行われるもの（Ⅱｂ類）に分かれ、更にⅡａ類は、単一層かそれに準じる一連の充填作業として捉えられるもの（Ⅱａ1類）と、基礎地業の整地が版築状の層序を示し、分化した作業工程として捉えられるもの（Ⅱａ2類）とに分けられる。こうしたカマド下部の基礎地業を行う目的として、構築面の安定や湿気の遮断等が想定されるが、やはりカマドの構築に際して自然的条件に適し、かつ堅牢に構築するための知識の所以と思われる。

支脚　支脚として使用された材は、棒状の礫や角礫をはじめ、飯蛸壺、高坏脚部などの転用も見られる。支脚に関しては要するに煮沸する容器への熱伝導の効率化を図るために一定程度床面から持ち上げてやれば良い訳で、支脚に使用する材料は特に拘る必要はなかったものと思われる。また二つの支脚を持つものも少なからず見られるが、両支脚の位置が、古墳時代後期頃に見られるいわゆる二つ掛

第9表　西新町遺跡カマドの時期別比率

	Ⅰ a類	Ⅰ b類	Ⅰ類合計	Ⅱ a類	Ⅱ b類	Ⅱ類合計	Ⅲ類	カマド計	炉
Ⅰ　期	0	0	0	0	0	0	0	0	1
Ⅱ　期	0	0	0	0	0	0	1	1	8
Ⅲ（古）	1	1	2	0	0	0	0	2	17
Ⅲ（新）	5	1	6	2	2	4	3	13	32
Ⅳ（古）	10	3	13	7	6	13	3	29	18
Ⅳ（新）	10	2	12	6	5	11	6	29	12
合　計	26	7	33	15	13	28	13	74	88

けの支脚の位置と比較して狭く、二つ同時に煮沸容器を使用したとは思えないので、これは一つの容器を二つの支脚を用いて支えたと考えて良い。支脚の設置方法には、床面を掘り込んで設置するものや床面に置いただけのものが見られるが、これは支脚の材の形状に因るものと思われる。

カマドで使用された土器　カマドに掛けた土器がそのまま放置され、押しつぶれて出土したような例は、12次調査第125号竪穴住居跡など数例ある。一般的にはやはり布留系の甕を使用しているが、中には第14次調査2号竪穴住居跡のように広口壺を使用しているものもあり、煮沸容器としての器形の選択に厳密な意識が働いている訳ではない。また土器の出土傾向から見て、半島系土器が多く出土しているとは言え、日本列島で生産された土器が圧倒的多数を占めることからも、渡来人がカマド付き竪穴住居跡に居住したとしても、使用する土器は土師器が大半だったはずである。

また12次22号住居跡、12次81号住居跡ではカマドに隣接して、朝鮮半島系の多孔式の甑が出土している。これに対して、布留系甕の底部に大きな単孔を穿った甑も17次6号住居跡、20次29号住居跡等で出土している。したがって、渡来人がカマド付き竪穴住居跡に居住したとしても、使用する土器には土師器が多かったと推測される。渡来人のみが排他的に1ヶ所にまとまって居住していたというよりは、在地の集団との調和的な関係にあり、必要物資を交換していたと考えるのが自然であり、在地の集団と渡来人との居住区の区別なく、一集落内に共存していた景観をイメージできる。

3．カマドの検討

時期別の検討　第9表は、西新町遺跡で見つかったカマドを先の分類に照らして区分し、第一節で行った時期区分で分けたものである。この表には比較のために屋内炉の数値も含めている。なお、出土遺物からの時期比定が困難なものは対象から除外している。

合計106基のカマドのうち、時期比定ができたものは74基で、Ⅰ類が33基、Ⅱ類が28基、Ⅲ類が13基となる。Ⅰ類が最も多く、Ⅱ類が次ぐが、Ⅰ類とはそれほど差が無い。対してⅢ類はⅠ類やⅡ類の半数にも満たず、圧倒的に少ない傾向にある。Ⅰa類とⅠb類とを比較すると、全時期を通じてⅠa類の方が多い。Ⅱa類とⅡb類はほぼ同数である。

時期毎の推移を見てみると、Ⅰ期にはカマドはなく、Ⅱ式には1例だけⅢ類のカマドが見られる。西新町遺跡でのカマドの初現である。後続するⅢ式古段階の時期にはⅠ類のカマドが2例あり、数は少なくとも継続してカマドが構築されていることが判る。Ⅲ式新段階の時期になると竪穴住居数の増

第10表　西新町遺跡カマドの設置位置別比率

	北	北東	北西	東	西	南東	南西	南
カマド本体	31	12	15	3	10	1	2	2
煙出し	19	12	11	12	14	1	5	7

加とともにカマドを付設した住居が増加するが、炉の数と比較すると圧倒的に少なく、この時期までは基本的にカマドではなく屋内炉が主体を占める。Ⅳ式古段階の時期になると、カマドの数は29基を数え、同時期の炉の数を大きく超える。この傾向はⅣ式新段階の時期でもほぼ同様である。なお、Ⅲ～Ⅳ式の時期を通して、Ⅰ類・Ⅱ類のカマドの数に大きな差は見られず、Ⅲ類は全時期を通じて少数派のままの存在である。

まとめると、カマドの類型ではⅠ類とⅡ類が多く、それに対してⅢ類は数が少ない。カマドはⅡ式の段階に西新町遺跡に初めて導入され、Ⅲ式新段階の時期までは炉が多数を占めるものの、Ⅳ式古段階の時期になると炉を凌駕するようになる。その一方で炉もまた相対的に数を減じるものの、全時期を通じて使用され続けたこととなる。カマドと炉の数の対比をそのまま当時の在来人と渡来人の数に当てはめることは出来ないが、少なくとも長期に亘って一つの集落内に炊事様式の異なる両者が共存していたことは疑いない。

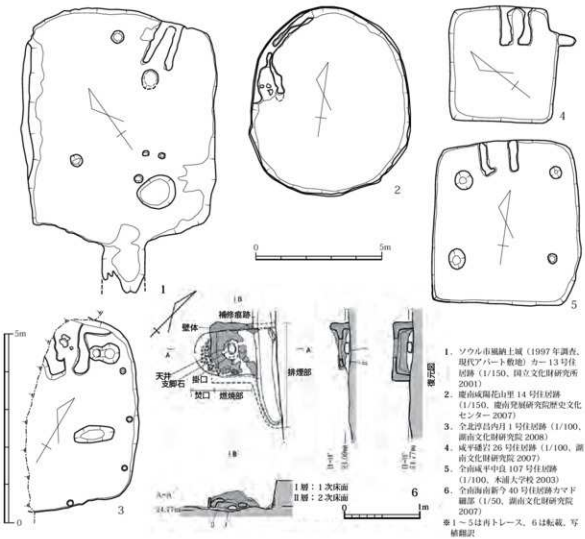
カマドの方位　第10表はカマド本体と煙道先端部の煙出しの方位を8方向に分割したものである。カマドの方位を見ると、北に方位を向けるものが最も多く、次いで北西、北東となる。北に近い方向に方位を向けるものが大半であり、これに対して南方向に向けるものは非常に少ない。カマドを構築する際、まず第一に風の方向を計算し、同時に周辺にある建物等の位置も考慮した上で付設したと思われるが、基本的には北方向を優先していたことが判る。煙出しの方位については、Ⅱ類としたものがカマド本体と方位を異にするため、試みに作表を行ったものであるが、これを見ると西－北－東方向にかなりばらついた状況であり、なおかつ南や南西方向に向けるものも増加している。煙出しの位置にはさほど注意を払わなかったのであろうか。

因みに、我が国の5世紀以降のカマド方位でもやはり、地形やその他の要因にかかわらず、カマドは基本的に北方向を向く傾向にあり、この点では共通している。

遺跡の中での分布状況　カマド類型の分布状況について少しふれておきたい。撹乱や重複によってカマドの一部または全部を壊されたものが多数あり、詳細に検討する事は出来ないので、大まかな傾向を提示するにとどめる。

Ⅰ類のカマドは第2次、5次、12次、13次、15次、17次、20次の調査で見つかっている。古墳時代の集落域全体に広がっており、特に偏在する傾向は見出せない。しいて挙げるならば、第5次調査と第14次調査では検出したカマドの大半がこのⅠ類である。

Ⅱ類のカマドは第12次、13次、17次、20次調査で見つかっている。古墳時代の集落の中でも東側に偏った位置に分布する状況が窺える。Ⅱ類のカマドはⅣ期に増加することは先に述べたが、集落構成も東側の竪穴住居群の方が時期的に新しいものが多く、この分布と連動するものと思われる。Ⅲ類のカマドは第5次、12次、13次、14次、20次調査で見つかっている。検出数が少なく希薄であるものの、Ⅰ類同様集落全体に分布する傾向にある。



第62図　西新町遺跡に並行する時期の朝鮮半島のカマド

4．朝鮮半島の事例との比較

西新町遺跡では、過去22次にわたる調査で480棟を超える数の弥生時代末～古墳時代前期の竪穴住居跡を検出している。竪穴住居同士の重複により、また近世以降の撹乱等によって旧状を窺うことが出来ないものも多く、また柔らかい砂地に掘り込まれているため埋没過程で大きく崩壊したと思われるものも少なからず見られるが、竪穴住居の平面形が残るものを概観すると、その多くは長方形または正方形のプランを意識して掘削されている。

同じ頃の北部九州の竪穴住居は、基本的に平面形が長方形もしくは正方形をなす。長方形プランの竪穴住居は屋内炉を有し、二本の主柱を配し、短軸側にベッド状遺構を持つものも少なくない。炉の位置は中央に配置されるものが大半だが、中には「偏在炉」と称されるように偏った位置に炉を設けるものも見られる。正方形プランの竪穴住居は四本の主柱を基本とし、三辺にベッド状遺構を設けるものも多い。炉の位置は中央に位置するものが多く、まれに偏在炉も見られる。ベッド状遺構については地質的要因もあって検出が難しく、西新町遺跡でベッド状遺構を確認できた例は少ないが、こうした状況は西新町遺跡の竪穴住居と共通しており、竪穴住居の平面形に関して言えば特に外来的な要

素は窺えない。

この時期における朝鮮半島の竪穴住居の類例を散見してみると、慶尚道地域では円形プランを基本とし、近年では煙道が長く伸びたカマドを付設する調査例が増加している（第62図2、咸陽花山里遺跡〔慶南発展研究院歴史文化センター2007〕など）。全羅道地域では長方形または正方形プランのものが多く、慶尚道地域と対照的である。こうした朝鮮半島の例と西新町遺跡例とを比較する限り、少なくとも竪穴住居の平面形態においては慶尚道地域からの影響は無かったものと思われる。

一方、カマドの構造を比較してみると、慶尚道地域のカマドは第62図2のように壁に対してカマド本体を斜め方向に向け、煙道が壁面に沿って弧を描く構造となる例が多い。対して全羅道地域のものは本遺跡のⅠ類（第62図4、5）、Ⅱb類、Ⅲ類（第62図3）に類似したものが見られる。壁に対してカマド本体を斜め方向に向けるⅡa類の特徴は全羅道地域には見られない特徴であり、そうするとこのⅡa類のカマドは慶尚道地域の影響下に構築された可能性が高いということになる。対してそれ以外のカマドについては全羅道地域の情報により西新町遺跡の竪穴住居に設置された可能性が高いということが言える。竪穴住居を構築するにあたっては、北部九州在来の要素である平面形、主柱等を基本的な要素とし、それまでの構成要素に無かったカマドのみ外来の要素を取り入れたということになる。

一方、全羅道、忠清道では1遺跡内でのカマドの様相は多様である。前節でとりあげた全羅南道海南郡新今遺蹟〔湖南文化財研究院2005〕では、3世紀中頃とされるⅠ段階では西新町遺跡Ⅲ類と類似するカマドであるが、Ⅱ段階では西新町遺跡Ⅱb類に類似するL字形カマド（第62図6）に転換するとされている。

これに対して4世紀以降とされる全羅北道益山射徳遺跡〔湖南文化財研究所2007〕では、西新町遺跡Ⅲ類と類似するカマドが築造されている。また、4～5世紀に編年される忠清南道龍立岩遺跡〔忠清南道歴史文化研究院2008〕は、Ⅲ類に類似するカマドが12基であるのに対し、Ⅱb類に類似するカマドが5基にすぎない。ここでは、両者は時間的な差ではなく、中小形住居跡に前者が、大形住居に後者が使用されたと推測されている。したがって、朝鮮半島西南部地域においても小地域ごとに多様な形態が築造された可能性がある。また、西新町遺跡に並行する時期の百済の王城、ソウル市風納土城遺跡〔国立文化財研究所2001〕では、六角形の住居跡に壁から煙道を離したカマドが設置され（第62図1）、住居跡の平面形は別とすると西新町遺跡カマドのⅠa類と同様の構造となっている。忠清南道以南の地域に六角形住居跡はほとんど存在しないので、風納土城にみるようなカマドが西新町遺跡に直接的な影響を与えた可能性は小さいと推測される。ただ、朝鮮半島西海岸～南海岸地域の海沿いの交流のもとに展開した多様なカマドが西新町遺跡に流入したと想定され、今後の調査研究の進展に注意しておくことにしたい。

全羅南道地域では、咸平中良遺跡、海南新今遺跡（第62図6）などのように、カマドの支脚は2枚の板石をおいた例が多く、西新町遺跡でよくみられるような柱状の石を地中に埋め込んだ例をみつけることができなかった。一方、西新町遺跡14次23号住居の板状石を2枚置いた支脚は全羅南道と類似性が高いと言える。今後、このような細部の特徴にも注意して、類例の検索にあたる必要があろう。

ところで、竪穴住居の構成要素について、他に注目すべき点が一つある。それは、壁の一辺のほぼ中央に接して粘土塊が置かれる例が数例確認されたことである。こうした事例は古墳時代の竪穴住居で時折見られる構造物であり、東京都八王子市中田遺跡で検討されたように、出入口に関する施設と

して想定されるものである。本遺跡のこうした事例も出入口施設として機能していたものと推察される。また粘土塊ではなくピットが見つかる例もあるが、これも出入口施設に関するものと見てよいだろう。

5．小　結

西新町遺跡の発掘調査が行われる前までは、我が国におけるカマドの発生は伝統的な炊事形態である屋内炉から進化的に発展し、古墳時代中期に普及するカマドに至るという説と、中国のカマドが朝鮮半島を経て我が国にもたらされたという説とがあったが、本遺跡や朝鮮半島の調査事例が増加するにつれ、カマドはほぼ完成された工法をもとに定型化した状態で、また多孔式甑という我が国に無い形態の土器を伴って、朝鮮半島から伝来したことはほぼ確実となった。西新町遺跡では、大きくⅠ類～Ⅲ類のタイプの異なるカマドが見られたが、このように一つの集落内で異なるカマドの形態が見られることは朝鮮半島においても同じ状況であることも明らかになった。

その一方で、カマドという新たな炊飯形態は西新町遺跡の外にはほとんど広がっておらず、本格的に我が国に普及するのは、一世紀以上経た５世紀に入ってからのことである。古墳時代前期の北部九州の土器がカマドという炊事形態に不適当だったということは、西新町遺跡での使用例を見ても考えられることではない。カマドの情報を保持した渡来人が、貿易の中継地点としての西新町の集落から外に出るのを制限されたのか、或いは外に出る必要が無かったのか、推測の域を出ないが興味深い事ではある。

参考文献

湖南文化研究院　2007『益山射徳遺跡』Ⅰ・Ⅱ
国立文化財研究所　2001『風納土城』
慶南発展研究院歴史文化センター 2007『咸陽花山里遺蹟』慶南発展研究院歴史文化センター調査研究報告書第 59 冊
湖南文化財研究院　2007『咸平礪岩遺蹟』(財) 湖南文化財研究院・韓国道路公社
木浦大学校博物館　2003『咸平中良遺跡』
湖南文化財研究院　2008『淳昌内月遺蹟』(財) 湖南文化財研究院・淳昌郡
湖南文化財研究院　2005『海南新今遺蹟』
忠清南道歴史文化研究院　2008『竜龍立岩里遺蹟』

（重藤輝行・吉田東明）

第４節　西新町遺跡出土の玉製品・玉生産関連遺物

西新町遺跡の既往の調査の内、いくつかの調査において、古墳時代前期を中心とする玉製品もしくは玉製作に関する多種多様な遺物が出土している。ここでは、これまで西新町遺跡の調査で出土した玉および玉生産関連遺物を紹介し、遺跡の性格の一端を示したい。

なお、西新町遺跡では古墳時代前期以外に弥生時代の玉製品等も出土しているが、ここでは古墳時代前期のものに限定する。

①ガラス小玉

ガラス小玉は12次調査で３点、14次調査で282点出土している。中でも14次調査の282点は、18号住居から一括して出土したものである。

これらの小玉は大きく青色系（青紺色・淡青色）と赤色系（赤褐色）の２種類に分類され、青紺色の小玉の直径は約５～６mm、最大高は約２～６mm、赤褐色の小玉の直径は約２～３mm（中には4.2mmのものもある）、最大高は約１～３mmである。

また製作技法については、青紺色の小玉の気泡の流れが長軸方向に連続して認められることや、赤褐色小玉に見られる黒色の筋が長軸方向に確認できること、さらには外面の滑らかさや角がない形状等から、そのほとんどが鋳型を使用しない「引き伸ばし技法」（大賀2002）により製作されたものであると考えられる。

よって、製作技法からこれらのガラス小玉は中国・朝鮮半島で製作され、当遺跡にもたらされたものであると考えられる。

②ガラス小玉・勾玉鋳型

ガラス玉の鋳型は、何れも土製で、12次調査で勾玉鋳型が１点、小玉鋳型が２点、13次調査で小玉鋳型３点が出土している。その内、いくつかについては、黒色に被熱したものもあることから、使用された可能性が高い。

小玉鋳型については、その平面形状はいずれも方形を呈したものであり、このような類例は国内では、他に東京都で１例のみ確認されるに過ぎない。一方、朝鮮半島ではいくつか確認されており（京畿道河南市漢沙里遺跡や全羅南道海南郡郡谷里貝塚、全羅北道全州市中仁洞遺跡など）、朝鮮半島のガラス小玉製作技術と非常に関連の深いものであると考えられる。

現在のところ西新町遺跡では、鋳型で製作されたと見られるガラス小玉・勾玉はもとより、坩堝・羽口・未成品など、ガラス玉製作が行われた痕跡は確認されていない。これは一見、当遺跡で鋳型による玉製作が行われておらず、単に鋳型がもたらされただけであると考えることができるかも知れない。しかし、鋳型に被熱があり、少なくとも使用された痕跡があることから考えても、鋳型のみが当遺跡にもたらされた意味を見いだすよりも、鋳造された小玉の数があまりに少なかったため、結果として鋳型以外は残されていないと考えた方が妥当ではなかろうか。

おそらく、西新町遺跡において自前でガラス玉を製作するよりは、遺跡の立地も示しているように、それよりは大量に流入する中国・朝鮮半島製のガラス玉を調達した方が効率的であったことを示しているのではなかろうか。

③蛇紋岩製勾玉関連遺物

西新町遺跡では、蛇紋岩もしくは変質安山岩の玉石を原石として勾玉を製作した過程の一連の遺物が出土している。13次調査で原石2点確認されているが、12次調査では96号住居を中心として原石・未成品あわせて274点が出土している。粗く整形した後に、内湾部の刳り込みを作り出し、その後すぐに穿孔するものと、最終的な整形の後に穿孔するものが確認されている。96号住居から集中的に出土することから、この住居が蛇紋岩製勾玉の玉作工房跡であった可能性が考えられている。

しかし、この種の勾玉の完成品が当遺跡はもとより周辺の古墳などから出土していないことや、同様の玉作遺跡が他に見つかっていないこと、さらに製作方法に体系性が認められないことなどから、おそらくは非常に単発的なもので、長期間もしくは広範囲には製作・流通しなかった可能性が考えられる。

④その他の玉製品

上記の遺物以外では、12次調査では碧玉（緑色凝灰岩）製の管玉2点、紡錘車形石製品1点、未成品1点、土製勾玉1点、17次調査では碧玉製管玉1点が出土している。また、4次調査Ⅲ区溝SD44や、18次調査では当該時期の玉砥石（筋砥石）も出土している。あまり点数は多くないが、碧玉製の研磨途中の未成品や玉砥石などの玉生産関連遺物が出土していることや、一般的に集落などでは見られない管玉や紡錘車形石製品の完成品が見られることから、碧玉製品の何らかの製作が当遺跡において行われた可能性は考えられる。しかし、その出土点数の少なさから見積もっても、かなり単発的なものである可能性は高い。

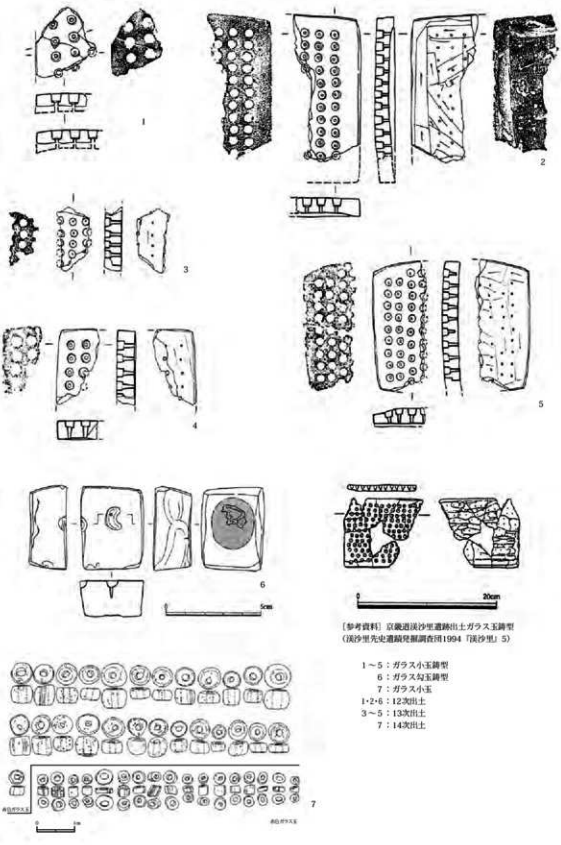
以上のように、羅列的ではあるが、西新町遺跡出土の玉製品・玉生産関連遺物を紹介してきた。これらの遺物は、古墳時代前期の西新町遺跡においては、ガラス小玉・勾玉、蛇紋岩製勾玉、管玉を中心とする碧玉製品などの多種多様な玉製品の製作が行われていたことを示している。しかし、14次調査出土のガラス小玉が中国・朝鮮半島製であることからもわかるように、西新町遺跡で製品を製作するよりも、他地域で製作されたものを調達した方が効率的であったようであり、製作自体は単発的に終わったと考えられる。

しかし、古墳時代前期初頭の北部九州において玉作工房跡はほとんど見つかっておらず、玉生産を行っていたこと自体、西新町遺跡の特殊性を物語っていると思われる。

（岡寺　良〔九州歴史資料館〕）

参考文献

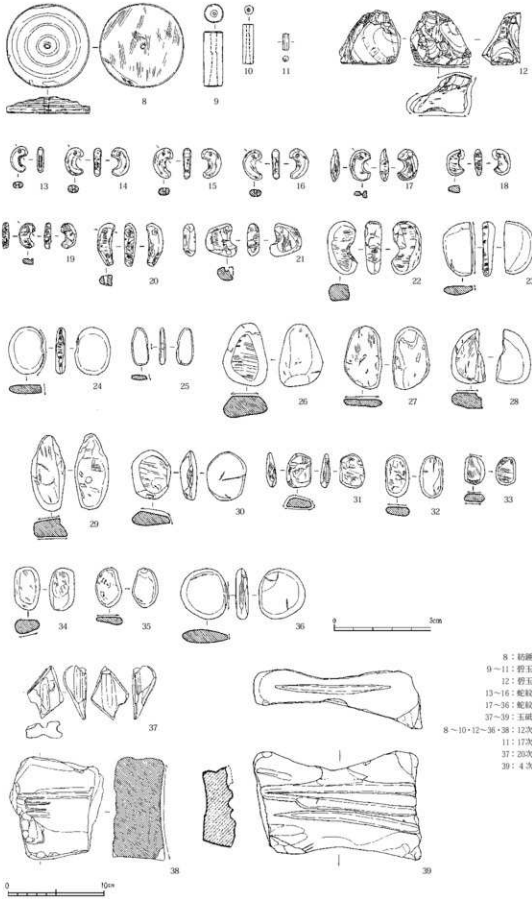
大賀克彦　2002「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』第9巻　弥生・古墳時代　石器・石製品・骨角器



［参考資料］京都遺跡沙里遺跡出土ガラス玉鋳型
（遺沙里先史遺蹟発掘調査団1994「遺沙里」5）

1～5：ガラス小玉鋳型
6：ガラス勾玉鋳型
7：ガラス小玉
1・2・6：12次出土
3～5：13次出土
7：14次出土

第63図　西新町遺跡出土玉・玉生産関連遺物（1）



第64図　西新町遺跡出土玉・玉生産関連遺物（2）

第５節　西新町遺跡出土石錘について

（１）　はじめに

西新町遺跡は博多湾に面した東西に長く延びる砂丘上に位置する。本遺跡はこれまで22次にわたる発掘調査で、カマド付竪穴住居跡や瓦質・陶質・軟質土器、ガラス小玉鋳型、板状鉄斧などの多くの朝鮮半島系資料が発見されると同時に、山陰系・瀬戸内系・畿内系土器群など西日本各地との交流を伺える資料が多量に出土している。このことから、古墳時代前期前半に本遺跡は倭諸国全体の対外交易及び列島内交易の一大拠点になったと考えられ（久住2004・2007）、石錘・土錘・飯蛸壺など多くの各種漁撈具の出土から、その交易の実際にあたっては漁撈活動に従事した人々（漁撈民）が大きな役割を果たしたことが想定されている（小山田2004）。

そこで、ここでは本遺跡から出土した漁網業や釣漁業に使用したと考えられる石のおもり（沈子）である石錘を分類し、遺跡内における出土エリアの特定及び時期・型式ごとの出土傾向を明らかにするとともに、石錘の出土状況とその観察から、使用形態（機能）についての検討を試みてみたい。その上で、本遺跡における漁撈活動の実態に少しでも迫ることが本論の目的である。

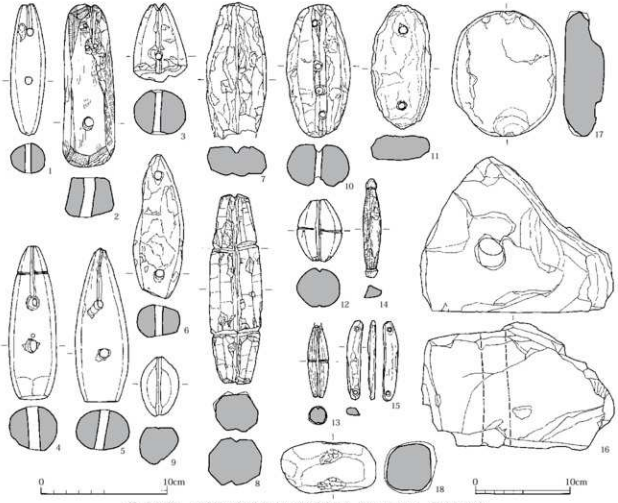
（２）出土石錘の分類

北部九州における弥生～古墳時代の石錘については、下條信行氏（下條1984）や山中英彦氏（山中2007）などにより既に検討されている。特に下條氏が提唱した九州型石錘と呼ばれる垂下式の特徴的な石錘が、南は鹿児島県の薩摩半島、東は遠く福井県の若狭湾まで分布することから、博多湾における交易活動を支えた漁撈民の行動の足跡を追える資料として注目されてきた。

石錘は多種多様な漁法で使用される漁具の中でも最も基本的なものの一つであり、対象魚種や海底の状況、生態系などに適合するよう複雑に展開するものとされ（平川1990）、その分析にあたっては、機能に基づく分類を行うべきであることが指摘されている（真鍋1995）。石錘はこれまで御床松原遺跡、今宿五郎江遺跡、大原Ｃ（小葎）遺跡など各遺跡の調査報告書において優れた分類案が提示されているが、石錘を網羅的に取り扱いかつその機能を軸に分類した下條氏と山中氏の分類を基礎に作業する。特に、近年下條氏の分類を参考に、より機能的な視点から分類・検討を行った山中氏の分類を援用し、それに若干の修正を加えて、以下の分類を行った。

Ⅰ類（第65図１～６）　上窄下寛形、垂下式のいわゆる下條氏の九州型石錘Ａ型である。山中氏の分類（以下、山中分類と略）に従い、底部形態が丸味を持つものをⅠＡ類（下條氏のＡⅡ型〔博多湾型〕）（１～３）、底部が面を持ち水平であるものをⅠＢ類（下條氏のＡⅡ型〔糸島型〕）（４～６）とした。さらに山中分類では、底部はⅠＢ類と同様に面を持つが、体部に丸味があり胴部に最大径を持つものをⅠＣ類とする。山中氏が指摘するように、将来的にはⅠ類は細分化できるとは思うが、今回は完形品に近い資料でかつ共伴した出土土器から所属時期が明確な資料を主な対象としたため、各類の資料数が少なく（第11・12表）、分析に影響が及ぶことが予想された。そこで今回は下條氏の分類と同じく底部形態を重視し、ＩＡ類とＩＢ類の２分類のみとした。

Ⅱ類（第65図７～11）　平面が紡錘形をなす横型の錘である。山中分類に従い、長辺に溝が巡り、体部に孔が無いものをⅡＡ類（７・８）、断面が球形に近い小型のものはⅡａ類（９）、体部に１～４孔があるものをⅡＢ類（10）とした。また新たに山中分類に加え、平面形態は紡錘形をなすが、溝が



第 65 図　西新町遺跡出土石錘分類図（16 は 1/4、他は 1/3）

なく上下に２孔のみが存在するものをⅡＣ類とした（11）。

Ⅲ類（第 65 図 12）　体部は紡錘形、体部断面は円形で、長短の両辺に溝が巡る石錘である。小型のもの（Ⅲａ類）のみ出土している。

Ⅳ類（第 65 図 13）　細長い体部に溝や孔を持つものである。細長い体部の長辺に溝を持つものをⅣＡ類、長短両辺に溝を持つものをⅣＢ類（13）とした。

Ⅴ類（第 65 図 14・15）　細長い棒状で両端に突起や溝、孔を持つものである。両端に紐掛け用の突起を持つもの（ＶＡ類）（14）と、新たに加えた両端に穴を持つもの（ＶＣ類）（15）が出土した。

Ⅵ類（第 65 図 16）　半球形有孔滑石製品とも呼ばれる中央に円柱孔を持つものである。本遺跡では底部径よりは体高が低いが、厚みがあるもの（ⅣＢ類）（16）と小型品が出土している。

Ⅶ類（第 65 図 17･18）　いわゆる打欠石錘である。山中分類を細分し、礫の長辺を打ち欠くもの（ⅦＡ類）（17）と、礫の短辺を打ち欠く小型品（ⅦＢ類）（18）とに分けた。

また上記の分類に加え、今回は溝の有無（有：Ａ、無：Ｂ）と溝の位置（長辺：１、短辺：２、長短辺：３）及び孔の有無（有：ア、無：イ）とその数（１孔：ａ、２孔：ｂ、３孔以上：ｃ）という属性を加え、分類した。さらに溝と孔の法量と漁業規模の相関関係を指摘した真鍋篤行氏の研究（1995）を参考に、各資料の溝と孔の法量を計測した（第 11 表）。

調査次数	出土遺構	重量（g）	型式分類	法量（cm）			溝幅（mm）		孔径（mm）			材質	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	長軸	短軸	上	中	下			
2	C地区住9	195.0	ⅡB−A1−アb	11.4	3.9	2.6	5.0		5.0		4.5	滑石	Ⅱ式	
6	SC-05	44.0	Ⅱa−A1	4.7	3.0	2.9	3.0					砂岩	Ⅰ式	
6	SC-07	8.5	Ⅱa−A1	3.5	1.4	1.3	2.0					砂岩	Ⅰ式	
6	SC-05	4350.0	Ⅵ	22.0	16.4	13.2			27.0			滑石？	Ⅰ式	
9	SC52	83.0	Ⅱa−A3	4.0	4.2	4.6	3.0	2.0				砂岩	中期新段階	砥石転用
9	SC65	140.0	ⅦB	7.5	4.0	4.2						砂岩	中期末	
9	SC85	160.0	ⅦB	9.9	4.5	2.7						花崗岩	中期末	
9	SK78	124.0	ⅦB	8.2	4.2	2.4						礫岩	中期新段階	
9	SK78	9.0	Ⅱa−A1	2.6	1.8	1.1	1.5					滑石	中期新段階	
9	SC67	280.0	ⅦA	8.9	6.9	4.0						砂岩	Ⅱ式か	
12	住74・75上層	19.8	ⅣB−A3	5.7	1.7	1.5	3.0	2.0				滑石	Ⅳ式古段階	
12	住119	60.6	ⅡA−A3	4.8	4.0	2.0	2.0	1.5				滑石	Ⅲ式古段階	平面台形、断面長方形
12	住43	107.9	ⅡA−A2	8.0	3.5	2.8						滑石	Ⅳ式新段階か	短軸に溝状の切り込み
12	住4	12.6	ⅤA	7.8	1.5	0.9						滑石	Ⅳ式新段階か	
12	住43上層	170.8	ⅠB−アb	11.5	4.0	4.0						滑石	Ⅳ式新段階か	
12	住21	22.4	ⅤC−アb	6.9	1.6	1.4			2.5		2.5	滑石	Ⅳ式新段階	再加工
12	住144	126.1	ⅠA−A1−アa	7.4	3.9	4.1	6.0		6.0			滑石	Ⅳ式古段階か	
12	住19	114.7	ⅠA−A1−アa	6.2	4.0	3.6	4.0		4.0			緑色片岩	Ⅲ式新段階か	
12	住29・30付近遺構面	175.3	ⅠA−A1−アb	9.8	3.8	3.1	2.0		5.5		5.5	滑石	Ⅳ式	
12	住30	105.9	ⅠA−A1−アb	10.2	2.6	2.4	4.0		5.0		5.0	蛇紋岩	Ⅳ式新段階	
12	住139	179.0	ⅠB−A1−アb	12.1								細粒砂岩	Ⅳ式新段階	
12	住72覆土上層	185.8	ⅠB−A3−アb	11.9	3.8	3.3	3.5	2.0	3.0		8.5	砂岩	Ⅳ式新段階	
12	住166	274.3	ⅠA−A1−アb	12.7	4.1	3.2	3.0		3.0		9.0	凝灰質泥質岩	Ⅰ式か	砥石転用
12	住43付近遺構面	239.4	ⅡB−A1−アc	10.4	5.0	3.3	10.0		4.0	4.0	5.0	滑石	Ⅳ式新段階か	
12	住43付近検出面	102.9	ⅡB−A1−アc	9.3	4.0	1.7	5.0		5.0	6.5	5.0	滑石	Ⅳ式新段階か	
12	住39	385.6	ⅦA	9.8	8.2	3.1						玄武岩	Ⅳ式古段階	
12	住139	372.1	ⅦA	8.9	8.6	3.0						玄武岩	Ⅳ式新段階	
13	住25	254.1	ⅡA−A1	9.7	6.0	3.1	2.5					滑石	Ⅲ式後半	
13	住25	291.4	ⅡA−A1	9.4	5.1	3.6	4.0					滑石	Ⅲ式後半	
13	住50	13.2	ⅠB−A1−アb	4.9	1.4	1.4	1.0		3.0		3.5	滑石	Ⅳ式古段階	小型品、上溝幅1mm
14	住4	57.9	ⅤC−アA	7.7	1.0	1.8			2.5			滑石	Ⅳ式新段階か	
14	住8	207.5	ⅠA−A1−アb	11.9	3.7	3.7	2.0		5.0		5.5	砂岩	Ⅳ式古段階	
17	住2覆土中部	7.2	ⅤC−アb	6.3	1.0	0.6			2.5		3.0	シルト岩	Ⅲ式新段階	
17	住7石錘集中区	126.3	ⅡB−A1−アc	10.8	3.9	2.0	6.0		4.5	5.0	5.0	滑石	Ⅲ式新段階	一部欠損
17	住7石錘集中区	143.9	ⅡB−A1−アb	8.0	5.4	2.4	7.0		4.5		5.0	滑石	Ⅲ式新段階	
17	住7石錘集中区	142.9	ⅡC−アb	9.7	4.7	2.3			5.0		5.5	滑石	Ⅲ式新段階	
17	住7石錘集中区	134.3	ⅡB−A1−アc	10.4	4.2	2.3	10.0		3.0	5.0	5.5	滑石	Ⅲ式新段階	一部欠損
17	住7石錘集中区	254.0	ⅡB−A1−アc	13.2	4.8	2.7	6.0		5.5	5.0	5.0	滑石	Ⅲ式新段階	
17	住7石錘集中区	169.7	ⅡB−A1−アc	9.7	4.8	2.9	7.0		3.0	4.5	4.5	滑石	Ⅲ式新段階	
17	住9覆土上面	248.2	ⅡB−A1−アb	10.6	5.9	2.7	12.0		5.0		5.5	滑石	Ⅲ式新段階	一部欠損
19	SC10	不明	ⅡA−A3	10.4	4.3	3.8	4.0	2.5				滑石	後期初頭	一部欠損
19	SK18	不明	Ⅵ	14.0	14.0	6.0			2.3			滑石	中期新段階	小型品、側面に擬孔あり
19	SX26	不明	ⅡA−A1	3.4	1.4	1.3	2.0					滑石	中期新段階	
22	住6	70.8	ⅤA−A2	11.1	2.2	2.0		4.0				滑石	Ⅱ式	溝を掘り、突起をつくる
22	住6	673.0	ⅦAか	12.0	6.8	5.5						緑色片岩	Ⅱ式	

第11表　西新町遺跡出土石錘一覧

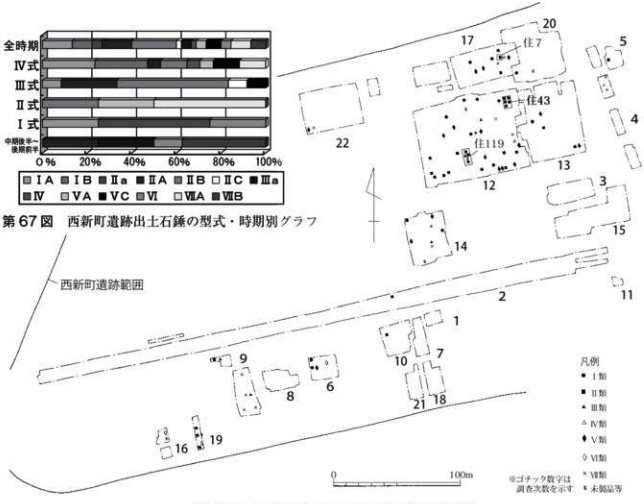
（3）西新町遺跡内における石錘の出土傾向

本遺跡では竪穴住居跡や土坑に加え、遺構面や包含層、近世遺構や撹乱に混入した資料を含めると総計280点余りの古墳時代に属すると考えられる石錘のうち、先述したように完形に近くかつ共伴する土器などで時期比定できる資料のみを対象とし、集成したものが第11表である。

遺跡内での出土傾向の分析を行うために、破片や遺構外出土資料も含めたⅠ～Ⅶ類の各型式及び未製品の出土地点を遺構配置図に落とし（第68図）、また集成した資料の時期ごとの各型式出土割合グラフを第69図に示した。

まず本遺跡の全体的な特徴を見てみると（第69図）、全時期ではⅠ・Ⅱ類が60％近くを占める。特に本遺跡ではⅡB類が多く出土することが特徴で、山中氏が指摘するように、ⅡB類は本遺跡で考案され自給生産されたものであろう（山中2007）。これに第66図に示した各型式の出土傾向を合わせて考えると、全体では石錘が遺跡北東－南西方向に出土がまとまる傾向にある。しかしⅡB類12点とⅦB類＋自然石石錘162点が共伴した17次7号住居跡とⅠB類1点及びⅡB類4点が出土した12次43号住居跡を除くと、特定の遺構に集中するのではなく、多くが1、2点のみと分散して出土する。また12次119号住居跡からⅠ・Ⅱ類石錘の未製品2点が出土しており、119号住居跡周辺で石錘を製作していた可能性がある。さらに石錘は遺構覆土上層や遺構上層で出土するものが少なくなく、石錘の多くが住居廃絶後ゴミ穴となった住居内に廃棄した状況が見て取れる。

第 67 図　西新町遺跡出土石錘の型式・時期別グラフ

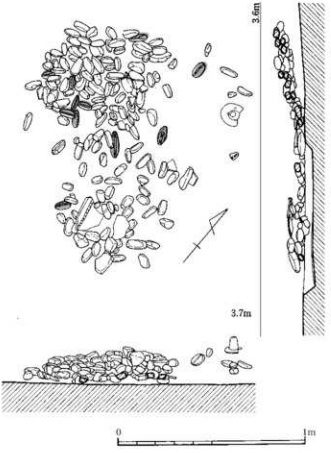


第 66 図　西新町遺跡出土石錘分布図（1/3,000）

次に時期別の出土傾向を見ると、弥生時代中期後半の住居跡を確認した遺跡南西部の９次調査ではⅢａ類とⅦＢ類のみが出土している。このⅦＢ類は民俗例から短軸に紐を掛け、沈子網に緊縛する袋網系の石錘と考えられる（真鍋 1995）。後期前半以降集落自体が一旦断絶し、再び遺構が出現する後期終末の西新町１・２式段階は石錘出土数自体が少ないものの、南西部の６次調査区でⅡＢ類が出土することは注目される。集落が急激に大規模化する、古墳時代前期前半のⅢ式新段階段階になると、ⅡＢ類を中心とする多種多様な石錘が遺跡北東－南西方向の帯状エリアにまとまり、特に 12 次調査区から 17 次３区にかけては密に出土する。次節で検討する漁網１セットに使用された石錘群がそのままが出土した 17 次７号住居跡はこのⅢ式新段階に属する。遺構数が最大となるⅣ式段階には、石錘の器種がさらに多様化する。釣漁用錘であるⅣ・Ⅴ類が一定量の割合を占め、この段階から確実に現れるⅠ類が 50% 近くと急激に増加するのに対し、前段階まで中心であったⅡ類が急激に減少する。Ⅰ類の使用形態は（５）で詳しく検討するが、当段階では網漁業が衰退し、代わって釣漁業が盛行することを示している。ちなみに、本遺跡出土Ⅰ類石錘は体部が長いものが多く、若狭湾や鹿児島、唐津湾で出土するⅠ類石錘と共通する。またⅦＡ類の伝統的な打欠石錘の存在から、おそらく漁網錘としてⅦＡ類も引き続き併用されていると考えられる。

以上まとめると、全体的な傾向として集落北～北西部の海側に石錘の出土がまとまる傾向にあり、

漁撈活動に従事した人々は集落内でも海に近いエリアで活動していた可能性が高い。本遺跡では手鎌と刀子が多く出土することから、手鎌はワカメなどの海草採集、刀子は魚加工用として一部が使用された可能性があり、その手鎌・刀子出土範囲及び袋網系漁網か飯蛸壺漁どちらかに使用されたと考えられる大型管状土錘の出土範囲と石錘出土範囲とが重なることから、本遺跡内における漁撈活動エリアの存在を示しているといえよう。

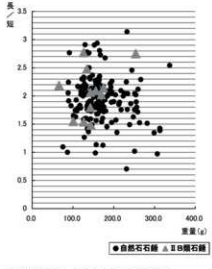


第68図　17次7号住居跡石錘出土状況（1/20）

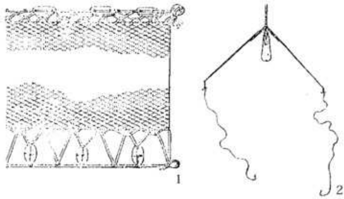
（4）17次7号竪穴住居跡出土石錘群の漁網復元

先述したように、17次7号住居跡から石錘短軸の紐掛け箇所のみ若干打ち欠くもの（ⅦB類）も一部含むが、大半が自然石をそのまま利用した自然石石錘162点とⅡB類石錘12点が集中して出土した。この石錘群について、報告者は住居廃絶後の凹みに漁網一式を廃棄したと推測し、山中氏は2種類の石錘を組み合わせた1組の漁網である可能性を指摘している（山中2007）。良好な漁網一括資料である本例は非常に貴重な事例であることから、ここでは民俗例や先行研究に基づき、その漁網の復元的な検討を試みたい。この石錘群の出土状況を図示したのが第68図で、石錘群の重量を横軸に、長軸／短軸の長さ比を縦軸にとり、グラフ化したのが第69図である。

まず第68図の出土状況を見てみると、この石錘群は住居床面のやや北寄りに位置する凹跡上部の長軸1.3m×短軸0.9mの楕円形を呈する範囲からまとまって出土している。このうちⅡB類石錘12点（トーンで示す）は石錘群東と中央、南側に存在することから、漁網を丸めて廃棄した可能性が高く、また石錘群北東側は出土レベルが高いことから、廃棄時の網最上面部分が北東部であったと想定される。第69図の法量グラフでは、自然石石錘（図の●）の多くが長／短比は2前後、重量は100～200g内におさまる。よって、自然石石錘は大きさ・形態、重量を揃えて採集していることが分かる。なお、ⅡB類石錘（図の▲）も長／短比・重量分布帯は自然石石錘とほぼ同じである。



第69図　17次7号住居跡石錘群の法量



第70図　漁業用石錘の民俗例

次に石錘自体を観察すると、ⅡB石錘類石錘は材質が滑石のため全体的に磨滅し、特に片面の磨滅が顕著である。一方、自然石石錘はその多くが砂岩質のため、ⅡB類石錘ほどではないが磨滅しているものが多い。民俗例から漁網業における石錘の使用法を検討した平川敬治氏によると、糸島郡志摩町野北におけるカナギ（イカナゴ）漁で使用された滑石製沈子は、当初400 g前後で製作されるが、次シーズンでは磨り減ることで200 g前後となり、100 g以下になると廃棄したとする（平川1990）。当石錘群の重量分布は約300 g～100 gを示すことから、自然石石錘の製作当初の重量は300 g程度であった可能性がある。またⅡB類石錘は約250 gを測るものが1点存在することから、製作当初の重量は250 g程度であったと考えられる。

以上のことからこの漁網の復元を試みると、ⅡB類石錘の使用形態は真鍋氏（真鍋1995）と山中氏（山中2007）の先行研究から、水面に近い部分に遊泳する魚を捕獲する漁法である浮網の一種、「筑前地方のボラ網」的な使用法が想定される（第72図1）。このボラ網の沈子は上下の沈子網から延びた網に約300 gの滑石製縦長石錘を縦横に結び、1尋（約150㎝）につき5個装着して使用したもの

遺跡名	調査次数	出土遺構	重量（g）	型式分類	法量（㎝）			溝幅（㎜）		孔径（㎜）			材質	時期	備考
					長さ	幅	厚さ	長軸	短軸	上	中	下			
[illegible]遺跡		D－1区[illegible]層	41.1	ⅠB－A1－アc	7.1	2.3	2.5	4.0		3.0	2.5	6.0	滑石	中期末・後期終末	
[illegible]の江遺跡		P106・[illegible]層	285.0	ⅠB－A1－アb	7.4	5.6	4.6	3.0		2.0		5.0	滑石	中期末～後期後半	
		SD3Ⅱ層	不明	ⅠA－A1－アb	13.5	6.4	4.9	2.0		2.0		4.0	滑石	後期終末	
[illegible]中村遺跡	1	C－3区	320.0	ⅠB－A1－アa	12.9	4.4	4.6	2.0		3.0			砂岩	後期後半～後期終末か	先端部に[illegible]溝あり
	1	C－5区	130.0	ⅠB－A2－アa	8.0	3.4	3.8	3.0	5.0	7.0			滑石	後期後半～後期終末か	先端部に[illegible]溝あり
	1	F－2区	56.0	ⅠB－A1－アa	7.3	2.4	2.2	3.0		4.0			滑石	後期後半～後期終末か	
	1	G－2区	255.0	ⅠB－A2－アa	14.3	3.7	3.3	4.0	1.0	4.0			滑石	後期後半～後期終末か	先端部に[illegible]溝あり
御床松原遺跡	1	住16床面	121.0	ⅠB－アb	7.4	3.5	3.2			4.0		4.0	滑石	後期終末	
	1	住41	154.0	ⅠB－A1－アb	6.3	4.8	4.7	2.0		2.0		3.0	花崗岩	後期前半	
	1	住56床面	74.5	ⅠB－A1－アb	3.8	3.3	2.4	1.5		2.5		2.5	滑石	後期	
	1	住9	178.0	ⅠB－A3－アa	9.6	4.6	3.0	3.5		2.5			滑石	古墳前期前半	溝・孔とも直交、形態特殊
	1	住13床面	67.0	ⅠB－A1－アa	5.9	2.8	2.6	2.0		3.5			滑石	古墳前期前半	小型品
	1	住22	147.0	ⅠB－A1－アb	7.4	4.3	3.0	2.5		2.5		2.3	粘板岩	古墳中期前半	
	1	住52	280.0	ⅠB－A1－アb	5.1	4.4	3.7	2.3		3.0		2.5	滑石	古墳前期後半	
	1	住30	159.0	ⅠA－A1－アb	6.6	4.2	3.3	2.0		2.0		3.5	滑石	古墳前期前半	
大原C遺跡（小[illegible]遺跡）	1	住居跡床面	33.5	ⅠB－A1－アb	5.8	2.7	2.6	3.0		3.0		3.3	滑石	中期後半	
	1	住居跡床面	53.4	ⅠB－A1－アb	5.8	2.7	2.8	2.0		3.0		3.0	滑石	中期後半	
	1	住居跡覆土	151.0	ⅠB－A1－アa	5.6	3.4	2.8	3.0		4.0			滑石	中期後半～後期後半	
	1	住居跡覆土	119.8	ⅠB－A1－アa	5.9	3.3	3.1	4.0		3.0			滑石	中期後半～後期後半	
	1	住居跡覆土	246.3	ⅠA－A1－アa	12.2	4.4	3.9	3.5		6.3			滑石	中期後半～後期後半	
	1	住居跡覆土	253.9	ⅠA－A1－アa	14.1	4.1	3.7	3.0		5.5			滑石	中期後半～後期後半	
	1	住居跡覆土	52.9	ⅠA－A1－アa	5.6	3.1	2.1	3.5		5.0			滑石	中期後半～後期後半	
	1	住居跡覆土	221.4	ⅠB－A1	3.9	5.4	4.3	4.0					滑石	中期後半～後期後半	
今宿五郎江遺跡	2	SD-100	35.0	ⅠA－A1－アa	5.8	2.8	1.8	2.0		4.5			滑石	中期後半～後期後半	孔掘り直し
	2	SD-100	171.0	ⅠA－A1－アb	7.5	4.3	3.9	3.0		4.5		5.0	滑石	中期後半～後期後半	
	2	SD-100	103.0	ⅠA－A1－アa	7.2	3.4	3.2	3.0		4.5			滑石	中期後半～後期後半	一部欠損
	2	SD-100	117.0	ⅠB－A1－アa	5.0	4.2	4.0	2.0		3.0			滑石	中期後半～後期後半	
	2	SD-100	318.0	ⅠA－A1－アa	10.0	5.1	4.4	3.0		5.0			滑石	中期後半～後期後半	一部欠損
	2	SD-100	300.0	ⅠA－アa	8.5	5.2	4.7			6.0			滑石	中期後半～後期後半	
	2	SD-100	132.0	ⅠB－A1－アa	6.8	3.8	3.4	4.0		5.5			滑石	中期後半～後期後半	
	2	SD-100	121.0	ⅠB－A1－アb	7.0	4.1	3.3	4.0		4.0		4.0	滑石	中期後半～後期後半	
	2	SD-100	73.0	ⅠB－A1－アb	8.7	2.9	2.0	2.0		3.0		6.0	粘板岩	中期後半～後期後半	一部欠損
	2	SD-100	109.0	ⅠB－A1－アa	6.3	3.9	3.1	3.5		6.0			滑石	中期後半～後期後半	
	2	SD-100	223.0	ⅠA－A1－アa	9.9	4.3	2.7	6.0		6.5			滑石	中期後半～後期後半	
	2	SD-100	133.0	ⅠA－A1－アa	8.4	3.8	2.9	2.5		6.0			滑石	中期後半～後期後半	
	2	SD-100	77.0	ⅠB－A1－アa	6.0	3.5	3.5	2.0		4.5			粘板岩	中期後半～後期後半	
	4	包含層上層	243.0	ⅠB－A1－アb	10.6	4.8	3.9	2.5		2.0		4.5	粘板岩	中期末～後期終末	
	4	包含層上層	218.3	ⅠA－A1－アa	10.1	4.7	3.2	2.9		4.5			滑石	中期末～後期終末	先端欠損
	4	包含層上層	152.0	ⅠB－A1－アa	7.6	3.8	3.8	2.5		3.5			滑石	中期末～後期終末	
	4	包含層上層	71.3	ⅠB－A1－アa	6.2	3.5	3.1	1.5		2.5			滑石	中期末～後期終末	
	9	流路440	320.0	ⅠA－A1－アb	11.7	5.3	3.8	2.0		3.0		3.5	滑石	後期後半～古墳前期前半	
藤崎遺跡	1	住10	220.0	ⅠB－A1－アa	9.9	5.0	4.1	1.0		3.0			凝灰岩	後期終末	
宮の前遺跡	1	D地区Eトレンチ	262.0	ⅠA－A1－アa	10.7	3.6	3.5	4.0		7.5			滑石	後期後半～古墳前期前半	
	1	D地区Eトレンチ	162.0	ⅠA－A1－アa	7.5	4.1	4.0	3.0		3.0			蛇紋岩	後期後半～古墳前期前半	
	2	EH－EN－38グリッド	281.0	ⅠB－A3－アc	9.7	5.3	3.3	5.5	4.5	4.0		4.5	滑石？	古墳前期前半	先端欠損
[illegible]町遺跡	1	VIC2号溝	170.0	ⅠB－A1－アb	10.7	3.7	3.2	6.0		6.0			滑石	古墳前期後半	
野方久保遺跡	1	SC-07	238.0	ⅠB－A1－アb	10.5	4.7	3.1	2.5		2.5		5.0	滑石	古墳前期後半	先端一部欠損

第12表　玄界灘沿岸地域Ⅰ類石錘出土遺跡一覧

である。このボラ網で使用された石錘の形態は本遺跡出土Ⅱ類石錘とほぼ同じで、かつ本遺跡出土大型管状土錘の孔径が1㎝以上を測る反面、ⅡB類石錘の孔径は平均5㎜前後と小さく、ⅡB類石錘を沈子綱に直接装着したとは考えにくく、ボラ網的な使用方法が理解できる。またⅡB類石錘と組み合わせて使用した自然石石錘は、民俗例から沈子綱から垂らした綱に装着したものである可能性が高い（真鍋1995）。さらに出土したⅡB類石錘12点は先程の民俗例からすると出土量が少なく、垂下する錘としての役割は主に共伴した自然石石錘が担い、ⅡB類石錘は上下の沈子綱の間隔を保つことで漁網同士がからまないようにするための用途が主であった可能性が考えられる。

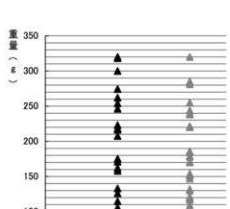
ちなみに漁網自体の規模は、先程の民俗例からⅡB類石錘と自然石石錘合わせて1尋につき5点装着されたとすると、約35尋（約52.5ｍ）ほどとなる。しかし、この民俗例ではボラ網が属する浮網は船で引き上げて使用するとされるが、石錘の磨滅痕から魚を取り囲む際は船を使用するが、魚が網に刺さった後は陸上から曳き上げる地曳網的なものであった可能性があり、民俗例からそのまま援用することは注意を要する。

（5）Ⅰ類石錘の機能について

前節ではⅡB類石錘の使用形態の検討を行ったが、続いてⅡB類石錘と同様の高い出土割合を示すⅠ類石錘の機能について検討したい。検討に際し、玄界灘沿岸地域で出土したⅠ類石錘の集成を行った（第12表）。集成は第11表の集成基準と同じく、完形に近い資料でかつ出土時期が判明する資料を中心に行うが、大原C（小萓）遺跡や今宿五郎江遺跡出土Ⅰ類石錘の大半が時期を明確に特定できないものであるが、時期及び形態的にも重要であるため分析対象に含めた。

まず時期的な変遷を見てみると、弥生時代中期後半の大原C遺跡竪穴住居跡床面出土石錘2点（ⅠB－A1－ア b 類）（第73図1・2）が現状では最古で、続く後期前半の御床松原遺跡41号住居跡例（第73図5）も同類である。後期後半前後からⅠA類が出現し、1孔のみのものや溝が無く孔のみのものなどバリエーションが増える（第12表、第73図）。また後期後半前後には壱岐や唐津湾地域まで分布域が拡大するが、そのほとんどは下條氏が糸島型としたⅠB類であることは興味深い。なお、原の辻遺跡P100区Ⅳ層出土石錘は御床松原遺跡を中心に認められる釣錘型のⅠB類で、神田中村遺跡出土Ⅰ類石錘のうち3／4点が湯納遺跡に類例が存在する、先端部に紐掛溝がある石錘である。古墳時代前期になると、博多湾西部の遺跡群とやや離れた御床松原遺跡のみと分布域が縮小するが、本遺跡のようにⅠ類の自給生産が開始される遺跡も存在する。古墳時代中期前半の御床松原遺跡22号住居跡出土例（第73図9）を最後にⅠ類石錘は消滅したと考えられる。

以上のことから、Ⅰ類石錘の出現形態は下條氏も指摘しているように（下條1984）、ⅠB類2孔溝有タイプ（ⅠB－A1－ア b 類）であったと考えられる。最古の大原C遺跡例の重量は1が53g、2が33gと軽く、後期後半以降最大300ｇ以上まで大型化するのと比較するとかなりの小型品である（第71図）。また孔径及び孔と上下端を結んだ溝幅がいずれも3㎜程度と、孔と溝とを緊縛した糸の径が3㎜以下で、かつ孔・溝の位置から糸が上下に延びていたことを示す。山口県天神山古墳出土鉄製釣針に残る釣糸の痕跡から、その釣糸径は0.25㎜以下と推定されており（真鍋1995）、ⅠB類石錘を緊縛した糸は釣糸であった可能性が高い。さらに本遺跡出土のⅠB類石錘を見ると底部に角が残り、ⅠA類石錘にも顕著な磨滅痕は認められない。これらのことから、弥生時代中期後半のⅠB類石錘は釣漁用錘の可能性が高いと想定される。続く後期前半の御床松原遺跡例は重量が154ｇと3倍近くまで



第71図　Ⅰ類石錘の重量推移

第72図　Ⅰ類石錘の溝幅推移

増加するが、最古例と同形態であることから同じく釣漁用錘であろう。後期後半前後以降から現れるⅠA類石錘の溝幅は、最大6㎜を測るものが存在するがそのほとんどが幅2～4㎜で（第72図）、孔幅についてはⅠA類石錘とⅠB類石錘はほぼ同じ傾向を示す。よってⅠA類石錘も釣漁用錘である可能性が高いこと示すが、ⅠA類石錘は1孔タイプが7割近くを占め、溝も上端部と孔のみ巡るタイプがほとんどである（第73図3）。このタイプはその形態からⅠB類石錘とは異なる魚種の釣漁業に使用するために改良されたものであり、民俗例から大野左千夫氏や下條氏が想定した天秤釣用の錘と考えられるであろう。ちなみに『熊本県漁業誌』第1編に描かれたサバ・アジ天秤釣（第70図2）の錘重量は鉛量90目（337.5 g）と記録されており、本タイプの最大重量のものと近い。

しかし、本来魚を釣るためには釣針の重量で十分であり、海の中道遺跡出土の釣漁用錘と想定される鉛は15 g以下であることから、一般的に100 gを超えるⅠ類石錘は釣漁用錘としての可能性は薄いという山中氏の指摘（山中2007）も納得できるものである。また弥生・古墳時代に天秤釣漁法自体が存在した証拠はなく、全てのⅠ類石錘＝釣漁用錘は推定の域にとどまるが、下條氏が指摘したようにその出土量の僅少さと第71図の重量分布のバラツキは釣る魚種に応じて重量を変えていたことを示すと考えられ、ここではⅠ類石錘は釣漁用錘であると想定しておきたい。

ちなみに山中氏が指摘するように、このⅠ類石錘は各遺跡によって形態に特徴がある（第73図）。御床松原遺跡では釣鐘型（5・6）や上下孔のみのもの（7）、体部中央が膨らみ、上下孔が直交方向に位置するもの（8）、大原C遺跡では孔が下方に位置し、やや体部が長い形態（3・4）、今宿五郎江遺跡では全体的に体部が丸く（10）、湯納遺跡では上下端が平坦で、上端と体部から穿孔した孔が連続する（11）など豊富なバリエーションが存在する。この要因は対象魚種の違いに加え、当時の出土遺跡の環境や生態系などによって様々な形態が生じることとなった可能性がある。

このように、複雑な要因によって展開する石錘の機能の復元は非常に難しく、特にⅠ類石錘については今後使用方法が復元できる良好な発掘資料が現れることを期待したい。

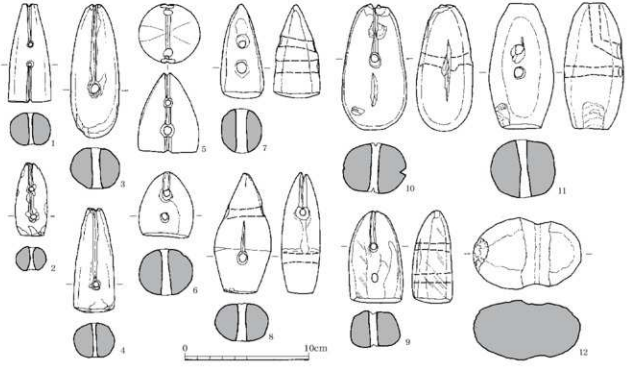
（6）西新町遺跡における漁撈活動について

これまで本遺跡出土石錘を対象に、その出土傾向ならびにⅠ類・ⅡB類石錘の使用形態について考えてきたが、最後に本遺跡における漁撈活動の在り方を検討することでまとめとしたい。

本遺跡ではⅠ類石錘を使用した大型釣漁業、Ⅱ類石錘を使用した大規模な曳網系網漁業、Ⅲ～Ⅴ類石錘を使用した小規模な釣漁業などとともに、17次3区を中心に出土した大型管状土錘を使用した

備讃瀬戸地域系譜の袋網系漁業（乗松 2006）か飯蛸壺漁、2003 年段階で北部九州における飯蛸壺出土総数の約 30％を占める、大阪湾・播磨灘沿岸地域系譜の飯蛸壺漁（平尾 2007）など多種多様な漁撈活動を確認できた。また漁撈活動と関連が強いものとして、今山遺跡などの生産地と消費地を結びつける中継地的な在り方を示す備讃瀬戸地域系譜の脚台付製塩土器が出土している（平尾 2007）。これらの各種漁撈活動が有機的に結びつくことによって、本遺跡の漁撈活動が成り立っていたと考えられるが、その実態はどのようであったのだろうか。

そのヒントとなるのが、弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業について検討した真鍋篤行氏の研究である（真鍋 1995）。真鍋氏は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に土器製塩の発達により塩が水産物の保存料として活用されるようになったことを契機として、釣漁業や貝類採集は急激に衰退する一方、大型網漁業や先進的な刺網漁業が発達することで漁業の大規模な再編が行われたと想定している。今回検討した、後期終末段階まで伊都国域を中心に分布することなどから伊都国系釣漁業と想定されるⅠ類石錘を使用した在地系大型釣漁業とⅡ類石錘を使用した在地系の大規模な曳網系網漁業や外来系の飯蛸壺と脚台付製塩土器、さらに刀子・手鎌などの加工具の存在などから、本遺跡においても製塩土器で作られた塩を利用して釣・網漁業などで獲得した水産物の保存用加工を行った可能性があろう。また多量に出土した飯蛸壺は自己消費用のみであったとは考えがたく、飯蛸壺で獲得した貯蔵性の良い水産資源であるイイダコもこの塩加工の水産物とともに、西新町集落の特産品として内陸部の集落などに流通していたと想定できるのではなかろうか。なお、前期前半には網漁業、前期後半には釣漁業と漁法の主流が何らかの原因で変化していることは注意を要する。



1～4：大原Ｃ遺跡　5～9：御床松原遺跡　10：今宿五郎江遺跡　11：湯納遺跡　12：唐原遺跡

第 75 図　Ⅰ類石類のバリエーションと瀬戸内系石錘（1／3）

本遺跡では生産活動の一つとして塩を利用した水産物の加工活動が存在したと想定されるが、飯蛸壺を除く漁撈具と製塩土器の出土量からさほど大規模なものであったとは考えにくい。また唐原遺跡において瀬戸内系石錘の出土（第73図12）や管状土錘を使用した瀬戸内系の袋網系網漁業が博多湾まで伝わっているものの、本集落では基本的には飯蛸壺漁のみ受容する。このように本遺跡では漁撈活動に従事した在地系の人々が主体性を持ち、伝播した様々な外来系漁撈要素を選択的に受容していることが確認できる。

さらに、本遺跡では山陰系土器群が特に多く出土することとⅠ類石錘が山陰地方を経由して若狭湾まで広がることは、少なくとも山陰地域との交易と漁撈活動は密接な関係であったことを指し示している。同じく朝鮮半島との交易にあたっても、この漁撈活動に従事した人々が大きな役割を果たしたと考えられるが、状況証拠のみで直接的な手がかりは発見できていない。今後、韓国南部沿岸、特に全羅道内で九州型石錘が発見されることを期待したい。

本遺跡は古墳時代前期前半を最盛期として集落が展開するが、中期になると断絶する。古墳時代における漁撈集団の検討を行った山崎純男氏は、５世紀中頃～後半にかけて博多湾を中心とした玄界灘沿岸部の製塩専業集団は、政治的な背景の下、九州の中央部西岸地域の天草諸島から宇土半島の有明海側に移動し、同時に漁撈集団の再編が行われたと想定する（山崎 1997）。今回検討したⅠ・Ⅱ類石錘を使用した在地系漁法も中期前半までは存続するが、中期中頃以降は急激に衰退し消滅する。本遺跡の終焉問題についても、交易活動を担った漁撈集団の動向が明らかになることでより実態に迫ることができると考えられる。今後の研究の進展に期待したい。　　（大庭孝夫〔九州歴史資料館〕）

引用・参考文献（なお、紙数の関係上、西新町遺跡を含む各遺跡の調査報告書は除いた）
熊本県農商課　1890「熊本県漁業誌」第１編下（1972年、「天草の民俗と伝承の会」が復刻）
秋山高志・前村松夫　1981「Ⅱ 漁村に生きる人々」『図録生活史事典』第２巻　柏書房
財団法人西日本文化協会　1982「福岡県漁業誌　筑前国第１篇」『福岡県史近代史料編　農務誌・漁業誌附録絵馬』福岡県
下條信行　1984「弥生・古墳時代の九州型石錘について－玄界灘海人の動向－」『九州文化史研究所紀要』第29号九州大学九州文化史研究施設
埋蔵文化財研究会第19回研究集会世話人 1986『海の生産用具－弥生時代から平安時代まで－』発表要旨集・資料集１
平川敬治　1990「網漁における伝統的沈子についての２、３の問題」『九州考古学』第65号　九州考古学会
真鍋篤行　1995「弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第８号　瀬戸内海歴史民俗資料館
久住猛雄　2004「古墳時代初頭前後の博多湾沿岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人－３・４世紀の倭人社会－』大阪府立弥生文化博物館図録30　大阪府立弥生文化博物館
小山田宏一　2004「交易の窓口、西新町遺跡」『大和王権と渡来人－３・４世紀の倭人社会－』大阪府立弥生文化博物館図録30　大阪府立弥生文化博物館
乗松真也　2006「漁業用の錘からみた地域間交流」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』　日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
山崎純男　2007「九州における海人集団の成立と展開」『古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から20年－』発表要旨集　埋蔵文化財研究会・第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会
平尾和久　2007「北部九州における飯蛸壺と製塩土器の受容と展開」『古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から20年－』発表要旨集 埋蔵文化財研究会・第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会
埋蔵文化財研究会・第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会　2007『古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から20年－』資料集第Ⅱ分冊
久住猛雄　2007「「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』第53巻第４号　考古学研究会
山中英彦　2007「「博多湾貿易」を支えた古代海人」『古文化談叢』第57集　九州古文化研究会

第6節　西新町遺跡の飯蛸壺と製塩土器

第1項　はじめに

福岡県教育委員会による県立修猷館高校校舎建替え等に伴う発掘調査と福岡市教育委員会による周辺地域の調査によって古墳時代前期の大規模集落西新町遺跡の構造が明らかにされつつある。本書はその総括に該当する考察編であるが、筆者に与えられた課題は西新町遺跡における飯蛸壺と製塩土器の様相の把握である。本稿では北部九州における両者の出土状況から明らかにしていく。

第2項　これまでの研究動向

飯蛸壺ならびに脚台付製塩土器のこれまでの研究史は前稿にまとめているので（平尾 2003・2004・2007）、詳述しないが簡単にまとめておく。

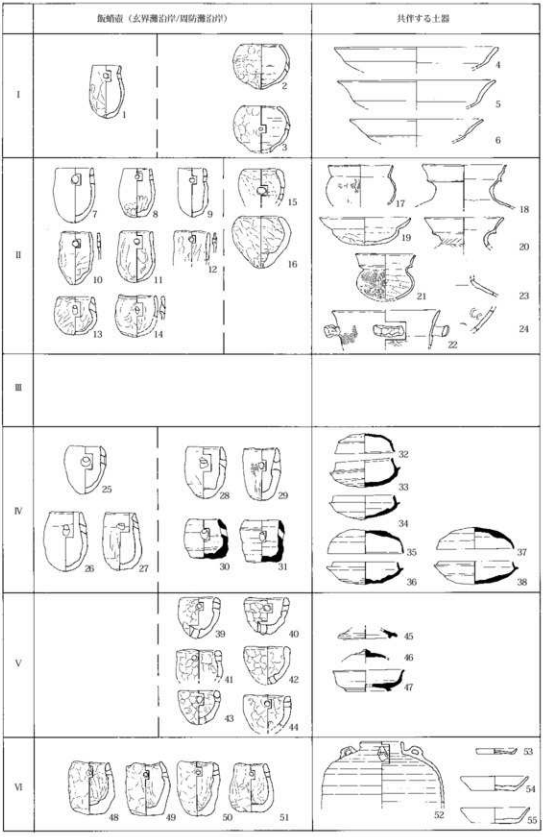
① 飯蛸壺

飯蛸壺の研究は近年に至るまで比較的等閑視されていた分野であった。しかし、1998年より本格的にはじまる西新町遺跡中心部の発掘調査の結果、大量の飯蛸壺が出土したことで、ようやく研究の俎上に上がったといえる。それらの成果を用いて、筆者は飯蛸壺の展開が古墳時代前期と後期に集中することを指摘した。特に前者の場合、西新町遺跡に集中すること、ほかの遺跡では溝や包含層から出土することが多いが西新町遺跡では住居跡、特に竈（偏在炉）をもつ住居跡から出土することを指摘した（平尾 2003）。2003年段階では、周防灘沿岸地域で確認される飯蛸壺は古墳時代後期以降のものであったが、築上町赤幡森ヶ坪遺跡の弥生時代後期後半の谷から出土した無頸壺が飯蛸壺であることを山中英彦氏が指摘したことで（行橋市歴史資料館 2003）、当地域における古い段階の飯蛸壺の存在が認識されることになる。また、山中氏の指摘とほぼ同じくして苅田町石塚山古墳の主体部付近で飯蛸壺が5個出土するなど、墳墓に伴う珍しい事例も明らかにされている（長嶺 2005）。また、最近では豊前市赤熊花ノ木遺跡で古墳時代前期の飯蛸壺が約400個まとまって出土したり、北九州市宇土遺跡9号土坑で古代の飯蛸壺が323点出土するなど（谷口編 2005）、現在では玄界灘沿岸地域（特に博多湾沿岸地域）と周防灘沿岸地域で出土した飯蛸壺の数の差はほとんどない状態となっている。したがって、周防灘沿岸地域においては今後の発掘調査の進展により状況が大きく変化する可能性もある。

② 製塩土器

製塩土器の研究、特に古墳時代前期の脚台付製塩土器の研究は、以前、山崎純男氏が指摘したように、停滞ともとらえられる時期が続いたが（山崎 1994）、近年、出土事例が増加しており、それらを用いて筆者は製塩土器が出土する遺跡の性格づけを行った（平尾 2004）。同年、松根恭子氏が九州全体を視野にいれ4世紀から7世紀の製塩土器の変遷をたどり（松根 2004）、積山洋氏は近年の調査成果をもとに製塩土器の編年案を示した（積山 2004）。また、伊崎俊秋氏は九州におけるこれまでの研究状況を概観している（伊崎 2005）。

北部九州における弥生時代から古墳時代前期における土器製塩の状況を概観すると、まず弥生時代前期中頃に位置づけられる福岡市比恵遺跡30次調査の貯蔵穴の灰層からウズマキゴカイが出土しており、この段階で既に藻塩焼製塩が認められる（山崎 1994）。土器を用いた製塩は弥生時代中期前半から大川市下林西田遺跡（伊崎編 1998）や福岡市姪浜遺跡（長家編 1996）で確認されている。ただ、



第74図　飯蛸壺編年表（1／8）

この段階では日常土器を転用して製塩土器としており、製塩への専従の度合いも低いと考えられる。また、これらの遺跡では朝鮮系無文土器も出土しており、朝鮮半島との関連も視野に入れるべきであろう。その後、弥生時代終末期まで土器製塩の様相は不明であるが、おそらく日常土器を転用していたと思われる。ただ、弥生時代終末期になると福岡県の内陸に位置する嘉麻市稜町遺跡において塩が付着した土器が確認されており（福島編 1985）、生産規模等は不明ながらも、北部九州に広がっていた流通網を活かし、内陸地まで塩が流通していた可能性も想定しておく必要がある。

古墳時代に入ると北部九州では備讃瀬戸内地域で用いられていた脚台付（式）製塩土器が認められる。数年前の集成では100箇所程度の遺構から出土していたが、現在でも大きな変化はないようである。古墳時代前期の製塩土器の出土傾向としては脚台部の出土が大半であることが特徴としてあげられ、全形が明らかなのは現段階で今宿遺跡5次調査出土例のみである（池田・久住編 2000）。

また、製塩土器が内陸部から出土することも大きな特徴である。特に標高500mを超える大分県久住町板切第Ⅱ遺跡（宮内編 1999）や都野原田遺跡（宮内編 2001）では大分湾沿岸から内容物とともに製塩土器がもち込まれている。筆者は製塩土器の出土した遺構の標高やその数をもとに遺跡の性格を分類した（平尾 2004）。そこでは、製塩遺跡の可能性があるものは今宿遺跡5次調査地点のみであったが、後に近接する今山遺跡8次調査で製塩土器が層状に堆積した状態が確認されている（米倉編 2005）。現在、古墳時代前期の北部九州で確実に製塩が認められる遺跡は、この2遺跡に限られる。

第3項　西新町遺跡の飯蛸壺と製塩土器

第13表は西新町遺跡の調査で確認された飯蛸壺の一覧である。飯蛸壺は前稿における集成以後（平尾 2003）、約350個増加し、519個確認されている[註1]。出土傾向としては以前と同様で、住居跡からの出土が大半で139棟から飯蛸壺が出土している。特に竈もしくは偏在炉（武末 1996）をもつ住居跡から出土する傾向がある[註2]。12次調査75号住居跡や20次調査41号住居跡では竈の支脚として飯蛸壺が用いられ、12次調査52号住居跡では竈の壁体に飯蛸壺を埋め込むなど西新町遺跡における竈と飯蛸壺の親縁性の証ともいえるが、事例は少ない。ちなみに西新町遺跡における竈の支脚には飯蛸壺のほかに棒状の礫、角礫、高坏脚柱部の転用品がある（吉村 2008）。

一覧表にあるように、西新町遺跡から10個を超える飯蛸壺の出土例は12次調査43号住居跡（16個）や41号土坑（14個）、14次調査1号住居跡（10個）、17次調査1号（14個）・2号（17個）・25号（13個）・39号住居跡（20個）、20次調査47号住居跡（10個）などと限られており、遺構の遺存状況にも左右されるが大半は数個のみの出土である。実際の漁では飯蛸壺は単体～数個ではなく数多く連ねて用いるものであることから[註3]、個々の住居跡の出土状況が漁で用いる数などを示すものではない。逆に福岡市堅粕遺跡や箱崎遺跡でみられる小さな土坑からひとつの縄につなげられたように20～30個まとまって出土するもののほうが実際の漁の様子を示すと考えられる。しかし、ひとつの遺跡から出土する量としては、玄界灘沿岸地域の中では他を圧倒する量の飯蛸壺が出土している。古墳時代前期の北部九州で、西新町遺跡と同程度の量の飯蛸壺が出土しているのは、最近、調査された赤熊花ノ木遺跡のみであるが、現在整理中で今後の進展に期待される。

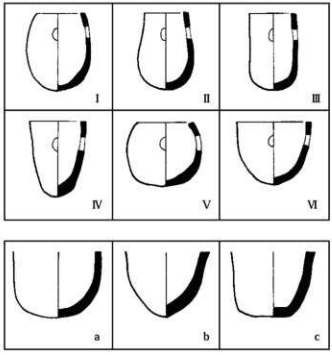
なお、少ない事例であるが、線刻をもつ飯蛸壺がある。12次調査30号住居跡からは胴部に釣針状線刻をもつもの、17次調査12号住居跡からも釣針とは認識できなかったがV字形の線刻をもつ飯蛸壺が出土している。これらは今山遺跡8次調査で出土した女陰を線刻した飯蛸壺と同様に漁の成果を

No.	次数	遺構名	時期	竈・炉	半島系土器	鉄器	飯蛸壺	製塩土器	その他	出典
1	2次	C2号土坑	Ⅱ式	—	—	—	1	—		福岡市79（1982）
2		D6号住居跡	Ⅲ式古段階	—	—	—	2	—		福岡市79（1982）
3		D8号住居跡	Ⅲ式新段階	偏在炉	甑	—	3	—		福岡市79（1982）
4		D9号住居跡	—	—	—	—	1	—		福岡市79（1982）
5		D13号住居跡	Ⅲ式新段階	偏在炉	—	—	6	—	炉2（中央・東側）	福岡市79（1982）
6		E4号住居跡	Ⅳ式古段階	—	○	—	3	—		福岡市79（1982）
7		F2号住居跡	Ⅲ式新段階	竈	甑	—	1	—		福岡市79（1982）
8		修猷館高校出土	—	—	—	—	2	—		福岡市79（1982）
9	3次	3号住居跡	Ⅳ式新段階	—	○	—	1	—		福岡県72（1985）
10		4号住居跡	Ⅳ式新段階	—	○	—	3	—		福岡県72（1985）
11		6号住居跡	Ⅳ式新段階	竈	○	—	3	—		福岡市375（1994）
12		7号住居跡	—	竈	○	—	3	—		福岡市375（1994）
13	4次	13号住居跡	Ⅳ式古段階	—	—	—	3	—	筒形土錘	福岡市203（1989）
14		16号住居跡	Ⅲ式古段階	—	甑	—	1	—		福岡市203（1989）
15		29号土坑	—	—	—	刀子	1	—	舟形石製品	福岡市203（1989）
16		51号土坑	—	—	—	—	1	—		福岡市203（1989）
17		52号土坑	—	—	—	—	2	—		福岡市203（1989）
18		ピット21	—	—	—	—	1	—		福岡市203（1989）
19		44号溝	—	—	—	鑿	3	—		福岡市203（1989）
20	10次	78号住居跡	Ⅱ式	—	—	鉄斧	2	—		福岡市683（2001）
21	12次	1号住居跡	—	—	—	刀子	1	—		福岡県154（2000）
22		4号住居跡	Ⅳ式新段階	—	—	—	1	—	小玉	福岡県154（2000）
23		8号住居跡	—	—	—	—	7	—	壁近く床面からまとまって出土	福岡県154（2000）
24		12号住居跡	—	—	—	—	1	—		福岡県154（2000）
25		15号住居跡	Ⅳ式古段階	炉	—	鉄鎌	6	2		福岡県154（2000）
26		18号住居跡	Ⅲ式古段階	炉	—	—	1	—		福岡県154（2000）
27		23号住居跡	Ⅳ式新段階	—	○	—	5	—		福岡県154（2000）
28		26号住居跡	Ⅳ式古段階	—	—	—	2	—	山陰系甑	福岡県154（2000）
29		29号住居跡	Ⅳ式古段階	炉	○	刀子	8	—	住居隅からまとまって出土	福岡県154（2000）
30		30号住居跡	Ⅳ式新段階	竈	○		8	—		福岡県154（2000）
31		32号住居跡	—	炉	—	—	○	—	飯蛸壺の図化無	福岡県154（2000）
32		36号住居跡	Ⅳ式新段階	—	甑	鉄器片	5	—		福岡県154（2000）
33		38号住居跡	—	竈	—	—	1	—		福岡県154（2000）
34		43号住居跡	Ⅳ式新段階	—	○	不明鉄器	16	—	山陰系甑	福岡県154（2000）
35		49号住居跡	—	炉	○	鉄鎌，鉄鏃	1	—	山陰系甑	福岡県154（2000）
36		50号住居跡	—	炉	○	—	1	—		福岡県154（2000）
37		52号住居跡	Ⅲ式新段階	竈	—	—	1	—	カマド（右袖に蛸壺使用）	福岡県154（2000）
38		68号住居跡	Ⅳ式古段階	炉	○	—	1	—		福岡県154（2000）
39		74号住居跡	Ⅳ式古段階	炉	—	—	1	—	玉未製品	福岡県154（2000）
40		75・75b号住居跡	Ⅳ式新段階	竈	—	—	2	—	カマド（支脚に蛸壺を用いる）	福岡県154（2000）
41		77号住居跡	Ⅳ式新段階	竈	○	—	1	—		福岡県154（2000）
42		79号住居跡	Ⅳ式新段階	—	—	—	1	—		福岡県154（2000）
43		82号住居跡	Ⅳ式新段階	—	○	—	1	—		福岡県154（2000）
44		89号住居跡	Ⅳ式古段階	竈	○	—	1	—		福岡県154（2000）
45		93号住居跡	Ⅲ式古段階	炉	○	—	1	—		福岡県154（2000）
46		97号住居跡	Ⅳ式新段階	竈	○	—	2	—		福岡県154（2000）
47		101号住居跡	Ⅳ式古段階	—	○	—	2	—		福岡県154（2000）
48		105号住居跡	Ⅲ式古段階	炉	○	—	3	—	山陰系甑	福岡県154（2000）
49		109号住居跡	Ⅳ式古段階	炉	○	—	1	—		福岡県154（2000）
50		121号住居跡	Ⅳ式新段階	—	甑	—	2	—		福岡県157（2001）
51		124号住居跡	Ⅲ式新段階	—	—	—	1	—		福岡県157（2001）
52		125号住居跡	Ⅲ式新段階	竈	—	—	2	—		福岡県157（2001）
53		130号住居跡	Ⅳ式新段階	竈	—	—	1	—		福岡県157（2001）
54		134号住居跡	Ⅳ式古段階	—	—	—	1	—		福岡県157（2001）
55		139号住居跡	Ⅳ式新段階	炉	—	—	3	—		福岡県157（2001）
56		140号住居跡	Ⅲ式新段階	—	—	鉄器	3	—		福岡県157（2001）
57		146号住居跡	Ⅲ式古段階	炉	—	—	2	—		福岡県157（2001）
58		154号住居跡	Ⅳ式古段階	—	—	—	1	—		福岡県157（2001）
59		155号住居跡	Ⅲ式新段階	竈	○	—	4	—		福岡県157（2001）
60		156号住居跡	Ⅳ式古段階	—	○	—	2	—		福岡県157（2001）
61		41号土坑	Ⅲ式古段階	—	—	—	14	—	後漢鏡	福岡県157（2001）
62		包含層	—	—	—	—	8	—		福岡県157（2001）
63	13次	1号住居跡	Ⅳ式古段階	—	甑	—	1	—	大半が調査区外	福岡県168（2002）
64		4号住居跡	Ⅲ式新段階	炉	○	—	1	—		福岡県168（2002）
65		6号住居跡	Ⅳ式古段階	竈	—	—	1	—		福岡県168（2002）
66		8号住居跡	Ⅳ式古段階	—	甑	—	1	—	遺存状態悪い	福岡県168（2002）
67		9号住居跡	—	炉か	—	—	1	—		福岡県168（2002）
68		12号住居跡	Ⅳ式新段階か	—	—	—	1	—	遺存状態悪い	福岡県168（2002）
69		15号住居跡	Ⅳ式新段階	—	甑	—	3	—		福岡県168（2002）
70		17号住居跡	Ⅳ式古段階	偏在炉	—	—	1	—		福岡県168（2002）
71		22号住居跡	Ⅲ式新段階	—	折衷土器	刀子	1	—		福岡県168（2002）
72		25号住居跡	Ⅲ式新段階	竈・炉	—	—	1	—	複数棟が重複	福岡県168（2002）
73		29号住居跡	Ⅳ式新段階	—	○	ヤリガンナ	1	—		福岡県168（2002）
74		38号住居跡	Ⅳ式古段階	炉	○	—	1	—		福岡県168（2002）
75		43号住居跡	Ⅳ式古段階	竈	—	—	1	—		福岡県168（2002）
76		44号住居跡	Ⅳ式古段階	竈・炉	○	—	1	—	小玉鋳型	福岡県168（2002）
77		52号住居跡	Ⅳ式古段階	竈	甑	—	1	—		福岡県168（2002）
78		57号住居跡	Ⅲ式新段階	炉	—	刀子	1	—	大半が調査区外	福岡県168（2002）
79		58号住居跡	Ⅲ式新段階	竈	○	—	1	—		福岡県168（2002）
80		60号住居跡	Ⅳ式古段階	—	—	鉄鏃	2	—	遺存状態悪い	福岡県168（2002）

第13表－1　飯蛸壺・製塩土器出土遺構一覧表①

No.	次 数	遺構名	時 期	竪・炉	平忝系土器	鉄 器	飯蛸壺	製塩土器	そ の 他	出 典
81		61 号住居跡	玄式前段階	—	—	—	7	—	遺存状態悪い	福岡県 168（2002）
82		64 号住居跡	玄式前段階	炉	甌	鉄鏃	1	—		福岡県 168（2002）
83		65 号住居跡	玄式前段階	—	—	—	2	—		福岡県 168（2002）
84		67 号住居跡	玄式前段階	竪	○	—	1	—	山陰系甌	福岡県 168（2002）
85		70 号住居跡	不明	—	—	—	2	—	遺存状態悪い	福岡県 168（2002）
86		71 号住居跡	玄式古段階	竪	—	—	1	—		福岡県 168（2002）
87		72 号住居跡	不明	—	—	—	1	—	剥落多い	福岡県 168（2002）
88		78 号住居跡	玄式前段階	竪	甌	—	6	—	東壁際焼土塊	福岡県 168（2002）
89		82 号住居跡	玄式古段階	—	甌	—	2	—	遺存状態悪い	福岡県 168（2002）
90		1 号溝	—	—	甌	—	1	—		福岡県 178（2003）
91		1 号落込み	—	—	甌	—	2	—		福岡県 178（2003）
92		1 区包含層	—	—	○	—	4	—		福岡県 178（2003）
93		3 区包含層	—	—	○	—	2	1		福岡県 178（2003）
94		1 区遺構面	—	—	○	—	1	—		福岡県 178（2003）
95		4 区遺構面	—	—	○	—	1	—		福岡県 178（2003）
96		攪乱など	—	—	○	—	12	1		福岡県 178（2003）
97	14 次	1 号住居跡	玄式前段階	—	—	—	10	—		福岡県 200（2005）
98		4 号住居跡	玄式古段階	—	甌	—	3	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 200（2005）
99		8 号住居跡	玄式古段階	炉	甌	—	4	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 200（2005）
100		14 号住居跡	玄式前段階	—	—	—	6	—		福岡県 200（2005）
101		18 号住居跡	玄式前段階	竪	○	—	1	—	遺存状態悪い（1/2）、小玉 282	福岡県 200（2005）
102		19 号住居跡	玄式古段階	竪	○	—	5	—		福岡県 200（2005）
103		21 号住居跡	玄式前段階	竪	○	—	3	—		福岡県 200（2005）
104		23 号住居跡	玄式前段階	竪	○	—	2	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 200（2005）
105		28 号住居跡	玄式前段階	—	甌	鉄鏃	3	—		福岡県 200（2005）
106		井戸	玄式前段階	—	○	—	1	—		福岡県 200（2005）
107	17 次	1 号住居跡	玄式前段階	竪	甌	刀子	14	1	小型台製鏡	福岡県 208（2006）
108		2 号住居跡	玄式前段階	—	—	—	17	—	遺存状態悪い（1/4）	福岡県 208（2006）
109		4 号住居跡	玄式古段階	—	—	—	2	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 208（2006）
110		5 号住居跡	玄式前段階	竪	○	刀子	6	1		福岡県 208（2006）
111		6 号住居跡	玄式古段階	竪	○	—	8	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 208（2006）
112		7 号住居跡	玄式前段階	炉	甌	鎌	7	—	石錘 1個、筒形土錘	福岡県 208（2006）
113		8 号住居跡	玄式古段階	炉	—	—	9	—		福岡県 208（2006）
114		9 号住居跡	玄式前段階	炉	○	手鎌	8	3		福岡県 208（2006）
115		10 号住居跡	玄式前段階	—	○	—	1	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 208（2006）
116		12 号住居跡	玄式前段階	竪	○	—	9	1		福岡県 208（2006）
117		14 号住居跡	玄式古段階	偏在炉	○	—	1	1		福岡県 208（2006）
118		18 号住居跡	玄式前段階	—	○	—	2	—	遺存状態悪い（1/3）	福岡県 208（2006）
119		20 号住居跡	不明	—	—	—	1	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 208（2006）
120		21 号住居跡	玄式古段階	炉	—	—	2	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 208（2006）
121		22 号住居跡	玄式前段階	—	—	—	4	—	遺存状態悪い（2/3）	福岡県 208（2006）
122		23 号住居跡	不明	—	○	—	1	—		福岡県 208（2006）
123		24 号住居跡	玄式前段階	—	—	—	9	—		福岡県 208（2006）
124		25 号住居跡	玄式古段階	偏在炉	—	—	13	—		福岡県 208（2006）
125		26 号住居跡	玄式前段階	—	—	—	4	—		福岡県 208（2006）
126		27 号住居跡	不明	—	—	—	1	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 208（2006）
127		31 号住居跡	玄式前段階	—	—	鉄滓	8	—	鉄滓は混入の可能性、管玉	福岡県 208（2006）
128		32 号住居跡	不明	—	—	—	2	—	遺存状態悪い（1/4）	福岡県 208（2006）
129		35 号住居跡	不明	竪	—	—	2	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 208（2006）
130		36 号住居跡	不明	—	—	—	3	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 208（2006）
131		37 号住居跡	玄式前段階	竪	甌	—	9	—	遺存状態悪い（1/2）、土製模造鏡	福岡県 208（2006）
132		38 号住居跡	玄式古段階	偏在炉	—	—	2	—	遺存状態悪い（1/2）、貨泉	福岡県 208（2006）
133		39 号住居跡	玄式古段階	炉	—	—	20	—	遺存状態悪い（1/2）、山陰系甌	福岡県 208（2006）
134		40 号住居跡	玄式前段階	—	—	—	5	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 208（2006）
135		遺構面	—	—	○	—	8	1		福岡県 208（2006）
136	20 次	1 号住居跡	玄式前段階	炉	○	釣針	1	—	遺存状態悪い、玉髄石	福岡県 218（2008）
137		2 号住居跡	玄式古段階	—	—	—	3	—	遺存状態悪い（1/4）	福岡県 218（2008）
138		3 号住居跡	玄式前段階	—	—	—	1	—	遺存状態悪い（1/4）	福岡県 218（2008）
139		5 号住居跡	玄式古段階	竪	—	—	4	—		福岡県 218（2008）
140		6 号住居跡	玄式古段階	炉	—	—	1	—		福岡県 218（2008）
141		7 号住居跡	玄式古段階	—	—	鉄鏃	2	—		福岡県 218（2008）
142		13 号住居跡	玄式前段階	炉	○	刀子	3	—		福岡県 218（2008）
143		16 号住居跡	玄式古段階	炉	○	—	4	1	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 218（2008）
144		21 号住居跡	玄式前段階	竪	—	—	1	—		福岡県 218（2008）
145		23 号住居跡	玄式前段階	竪	—	—	1	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 218（2008）
146		24 号住居跡	玄式前段階	偏在炉	—	—	3	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 218（2008）
147		27 号住居跡	玄式古段階	—	○	鉄斧	4	—		福岡県 218（2008）
148		30 号住居跡	玄式古段階	竪	甌	—	1	—		福岡県 218（2008）
149		32 号住居跡	玄式前段階	竪	○	—	1	—		福岡県 218（2008）
150		33 号住居跡	玄式古段階	竪	○	—	4	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 218（2008）
151		35 号住居跡	玄式前段階	竪	—	—	1	—	遺存状態悪い（1/4）	福岡県 218（2008）
152		37 号住居跡	玄式古段階	炉	—	—	2	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 218（2008）
153		39 号住居跡	玄式古段階	竪	—	—	2	—	遺存状態悪い（1/2）	福岡県 218（2008）
154		41 号住居跡	玄式古段階	竪	○	鉄鏃	3	—	2個は支脚として利用	福岡県 218（2008）
155		42 号住居跡	玄式前段階	竪	○	—	1	—		福岡県 218（2008）
156		45 号住居跡	玄式古段階	竪	○	—	1	—		福岡県 218（2008）
157		47 号住居跡	玄式前段階	竪	○	—	10	—		福岡県 218（2008）
158		55 号土坑	—	—	—	—	3	—		福岡県 218（2008）
159		その他遺構	—	—	○	—	6	—		福岡県 218（2008）
160		包含層	—	—	○	—	3	—		福岡県 218（2008）

第 13 表－2　飯蛸壺・製塩土器出土遺構一覧表②



第 75 図　飯蛸壺形態分類表（上. 胴部、下. 底部）

祈るためのものであろうか（米倉編 2005）。ほかにも 12 次調査 74 号住居跡からは口縁部下孔から横に 1 本たすき状に線刻をめぐらすものが出土している。

飯蛸壺の胴部と底部の分類は第 75 図に示しているが、胴部を

Ⅰ類　胴部最大径の位置が器高のほぼ半ばに位置するもの。口縁部が締まるものが多い。

Ⅱ類　胴部最大径の位置が胴部の下半に位置するもの。

Ⅲ類　口縁部から底部にかけて直線的に下り、胴に張りがないもの。

Ⅳ類　口縁部から底部に向かい胴の張りが弱く、比較的直線的にすぼまるもの。

Ⅴ類　胴の張りが強いもので、球状を呈するもの。器高が低いものが多い。

Ⅵ類　器高が低く、器高／口縁の値が 1.00 に近いもの。

の 6 分類に、底部を

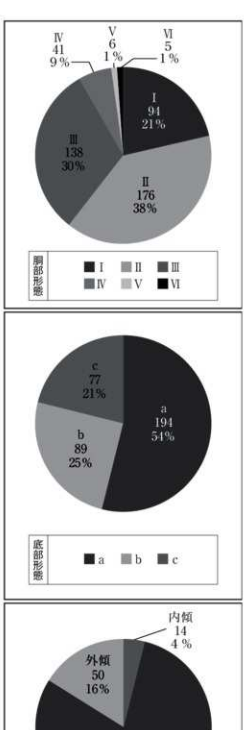
a 類　丸底

b 類　尖底

c 類　平底

の 3 分類にしている（平尾 2003）。このほかに口縁部下孔の穿孔角度（内傾・水平・外傾）も分類の要素になる[註4]。

第 76 図は分類をもとに西新町遺跡から出土した飯蛸壺の出土数を示したものである。これによると、現在確認できる 519 個のうち、胴部の形態が確認できるものが 460 個、底部がわかるもの 360 個、口縁部穿孔が確認できるものが 323 個ある。胴部の形態はⅠ～Ⅳ類のいわゆるコップ形が全体の 97％を占め、Ⅴ・Ⅵ類のいわゆるボール形は 11 個と西新町遺跡では完全に客体的存在となってい



第76図　飯蛸壺形態別出土傾向

る。胴部の形態はａ類の丸底が過半数を占めるもののｂ類の尖底、ｃ類の平底も一定の割合を占める。口縁部下孔については水平に穿孔するものが80％を占め、次いで外傾、内傾と続く。とくに内傾のものは４％とかなり少ない状況にある。また、飯蛸壺の中には底部に穿孔を施すものがある。これらは27個、全体の８％にみられるが、特定の遺構に集中するのではなく、１・２個ずつ出土している。なお、底部の穿孔の場所については①底部のほぼ中央に施すもの。②底部の中央から少しずらしたもの。③側面下部に施すもの。の３種類に分類できる。これらは、水の出入りが容易な形態であることから、漁の際に飯蛸壺を沈めやすく、引き揚げやすくする効果を期待したものであろう。

また、飯蛸壺の器面調整は基本的にナデで仕上げるが、少数の事例としてハケメやタタキの痕跡を残すものもあり、それらをグループ化できる可能性がある。

今まで述べてきた西新町遺跡における飯蛸壺の一般的形態から外れた客体的存在の一群は他の遺跡から搬入された可能性があり、注意を要する。特に玄界灘沿岸地域で通史的にみて数が少ないⅤ・Ⅵ類の飯蛸壺は、それらを主体とする周防灘沿岸地域からの影響が想定できる。なお、形態的には主体を占めるコップ形の飯蛸壺も、色調は鈍い橙色や白灰色、淡黄褐色などいくつかに区分される。これらは製作地の違いを示す可能性があることから、古式土師器や半島系土器だけでなく飯蛸壺も胎土分析の必要性が高い器種といえる。

一方、製塩土器の出土量は前回の集成以後（平尾2004）、若干増加しているのみである。また、出土部位も脚台部のみとこれまでと同じ傾向をみせる。ただ、前稿でも指摘したように（平尾2007）、古墳時代前期において飯蛸壺と製塩土器が共伴する事例は、西新町遺跡をのぞくと、今山遺跡、今宿遺跡などに限られる。特に今山遺跡、今宿遺跡は製塩遺跡に位置づけられ、弥生時代には大川市下林西田遺跡や福岡市姪浜遺跡でみられるように日常土器を転用することから、大規模な製塩の開始期には製塩専用土器の受容など人の移動に伴う技術の導入が想定される。この移動に伴い飯蛸壺を用いる漁も導入されたのだろう。一方、西新町遺跡では住居跡から１・２点の製塩土器が出土するのみで、今山遺跡でみられるような製塩土器の堆積層がな

いことも特徴である。沿岸部の遺跡の住居跡から１・２点の製塩土器が出土する事例は少なく、北九州市竪町遺跡１号住居跡などでみられる程度で（川上編 2003）、西新町遺跡のように複数の住居跡から出土する事例は現在のところ北部九州では認められない。

このように、沿岸部の拠点集落遺跡で脚台部を１～数個出土する住居跡が数棟～10棟前後確認され、製塩遺跡のように包含層からの多量出土が認められない西新町遺跡の性格について、若干、時期は異なるものの今山遺跡や今宿遺跡などの製塩遺跡で作られた塩がもち込まれ、消費地へ運び出すための中継地として位置づけられる（平尾 2004）。

第４項　北部九州における西新町遺跡

第３項で述べたように、西新町遺跡の飯蛸壺ならびに製塩土器の出土傾向は、玄界灘沿岸地域で一般的にみられるものと全く異なることがわかる。しかも、当遺跡は古墳時代前期の集落としても北部九州で住居跡が最も多い部類に含まれ、半島系土器の多さや竈付住居跡の多さなどから、半島と列島をつなぐ対外交流の拠点としての位置づけがなされている。

西新町遺跡で展開された対外交流を担った人々は、久住猛雄氏によると西新町遺跡やその墓地である藤崎遺跡の土器相などから北部九州在住の人々であった可能性が指摘されているが（久住 2007）、西新町遺跡の成立自体が、弥生時代終末期から古墳時代初頭の前原市潤地頭給遺跡における島根県花仙山産の碧玉を用いた玉作りや（江野編 2005）、古墳時代初頭における中国製銅鏡分布の核の移動などにみられるように（辻田 2001）、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての広域流通網の整備を前提にしていることも重要な点である。この視点でみると、西日本を中心に成立した広域流通圏を代表する、つまりヤマト王権を代表する対外交易の窓口が西新町遺跡であるといえる。

この遺跡には北部九州の人々を主体としながらも、海を越えて伝えられる文物とともに訪れる大陸の人々や届いた品物を求めて畿内や瀬戸内から集まる人々の姿が、竈をもつ住居跡や半島系土器、畿内系や山陰系土器の存在などから復元されるが、西新町遺跡のもつ性格の解明には本稿でふれた飯蛸壺や脚台付製塩土器も欠かせない資料であることが改めて確認される。

第５項　おわりに

以上、西新町遺跡における飯蛸壺と製塩土器の様相について簡単にまとめたが、1990年代後半の玄界灘沿岸地域（特に博多湾沿岸地域）における調査成果、ならびに近年の周防灘沿岸地域の調査成果が大きいことから、今後は両地域を比較しながら個々の遺跡の性格づけを行うとともに古墳時代前期における北部九州の人々が果たした役割についても検討する必要があるといえる。

最後に本稿を執筆する機会を与えていただいた福岡県教育委員会の皆様のお礼申し上げます。

（平尾和久〔前原市教育委員会〕）

註

1）前回の集成は12次調査までの成果をまとめたものであった。今回は20次調査までの出土品を集成している。なお、本報告に含まれる第22次調査分は含まれていない。

2）以前、西新町遺跡における飯蛸壺と竈（偏在炉）付住居跡の親縁性について、西新町遺跡では竈付住居跡が多く、飯蛸壺との親縁性は当然のことではないかとの指摘を受けた。しかし、県内の飯蛸壺の出土傾向をみてみると住居跡からの出土自体がそもそも少ないことから、西新町遺跡における住居跡出土例の多さ、特に竈付住居跡との親縁性の高さは注目すべき点であると考える。

3）たとえば、時期は異なるが大分県中津市諸田遺跡では住居跡から55個の飯蛸壺が確認されており、個々の飯蛸壺は口縁部下の孔に紐を通したかのような状態でまとまって出土している。なお、この住居跡は半分ほど別の遺構に切られており、本来はもっと数が多かったと考えられる（中津市教育委員会花崎徹氏ご教示）。このような一遺構からの飯蛸壺の大量出土はこのほかに福岡市箱崎遺跡8次調査44号土坑（田上編1999）、堅粕遺跡10号土坑横土器群（池邉編1997）などでも認められる。

4）口縁部下孔は外側から内側へと穿孔するものが大半である。なお、本稿において内傾とは内側が下がるもの。外傾とは外側が下がるものとし、若干の傾きは水平に含めている。

参考文献（西新町遺跡の報告書は除く）

池田祐司・久住猛雄編　1999『JR筑肥線複線化地内埋蔵文化財調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集

池邉元明編　1997　『堅粕遺跡群』福岡県文化財調査報告書第130集

伊崎俊明編　1992　『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第9集　福岡県教育委員会

伊崎俊秋編　1998　『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書第132集

伊崎俊秋　2005　「北部九州の土器製塩研究の現状と課題」『海峡の考古学―水島稔夫追悼集―』

岩永省三　1989　「土器から見た弥生時代社会の動態」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ

岩本正二　1994　「弥生時代の土器製塩」『吉備の考古学的研究』（上）

榎本義嗣・長家伸編　1996　『三苫遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第477集

大久保徹也　1994　「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究』（下）

大久保徹也　2000　『製塩土器の型式学的検討に基づく古墳時代中後期、中部瀬戸内海産塩流通システムの復元』平成11～12年度科学研究費補助金〈基盤研究（c）（2）〉研究成果報告書

川上秀秋編　2003　『竪町遺跡第2地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第298集

久住猛雄　2002　「九州」『日本考古学協会2002年度橿原大会研究発表資料集』

久住猛雄　2007　「「博多湾貿易」の成立と解体―古墳時代初頭前後の対外貿易機構―」『考古学研究』53－4

小山田宏一　2004　「交易の窓口西新町遺跡」『大和王権と渡来人 三・四世紀の倭人社会』大阪府立弥生文化博物館

田上勇一郎編　1999　『箱崎7』福岡市埋蔵文化財調査報告書第591集

高尾栄市編　1998　『船迫窯跡群』築城町文化財調査報告書第6集

武末純一　1996　「西新町遺跡の竈」『碩晤尹容鎭教授停年退任紀念論叢』

田中裕介　1994　「大分県」『日本土器製塩研究』青木書店

谷口俊治編　2005　『宇土遺跡　朽網城跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第332集

辻田淳一郎　2001　「古墳時代開始期における中国鏡流通形態とその画期」『古文化談叢』46

積山　洋　2004　「大阪湾沿岸の古墳時代の製塩土器」『畿内巨大古墳とその時代』雄山閣出版

長嶺正秀　2005　『筑紫政権からヤマト政権へ　豊前石塚山古墳』神泉社

長家伸編　1996　『姪浜遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第478集

橋口達也　1974　「福岡市今山下遺跡の製塩土器」『九州考古学』49・50

平尾和久　2003　「福岡県における飯蛸壺形土器の受容と展開」『古文化談叢』50上

平尾和久　2004　「北部九州の脚台付製塩土器」『福岡大学考古学論集―小田富士雄先生退職記念論文集―』

平尾和久　2006　「生産と流通からみた伊都国と奴国」『伊都国歴史博物館紀要』創刊号

平尾和久　2007　「北部九州における飯蛸壺と製塩土器の受容と展開」『古墳時代の海人集団を再検討する』第56回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

平川啓治　1988　「タコ手釣り漁における漁撈文化の一側面」『日本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論文集

広瀬和雄　1992　「大阪湾岸と三河湾岸の土器製塩―首長ネットワーク論の提唱―」『弥生文化博物館研究報告』1

福島日出海編 1985『榎町・勘高・巻原遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第5集

松根恭子　2004　「九州の土器製塩研究」『熊本古墳研究』2

宮内克己編　1999　『板切遺跡群（Ⅰ～Ⅴ）小原田遺跡』久住町文化財調査報告書

宮内克己編　2001　『都野原田遺跡』大分県文化財調査報告書第128輯　久住町文化財調査報告書第9集

山口譲治編　1992　『那珂6』福岡市埋蔵文化財調査報告書第292集

山崎純男　1991　「藻塩焼き」『新版古代の日本3　九州・沖縄』角川書店

山崎純男　1994　「福岡県」『日本土器製塩研究』青木書店

山崎純男　2007 「九州における海人集団の成立と展開」『古墳時代の海人集団を再検討する』第 56 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
山崎純男編　1993 『海の中道遺跡Ⅱ』海の中道遺跡発掘調査実行委員会
山中英彦　2006 「海の生産用具―豊前周辺とその特色―」『行橋市史』資料編　原始・古代
山中英彦　2007 「『博多湾貿易』を支えた古代海人」『古文化談叢』57
行橋市歴史資料館　2003 『海の幸を求めて－古代の漁具－』平成 15 年度特別展図録
吉村靖徳　2008 「カマド付設竪穴住居跡の展開とカマドの構造について」『西新町遺跡Ⅷ』福岡県文化財調査報告書第 218 集
米倉秀紀編　2005 『今山遺跡 8 次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 835 集
和田晴吾　1982 「弥生・古墳時代の漁具」『小林行雄博士古希記念考古学論考』
和田晴吾　1988 「漁撈」『弥生文化の研究』2　生業　雄山閣出版

編年表に用いた土器

Ⅰ期　1・4～6　那珂 SD01、2・3　赤幡森ヶ坪谷
Ⅱ期　7～9・17・18　西新町Ｄ地区 13 号住居跡、10～12・19～24　西新町 12 次 43 号住居跡
13・14　西新町 12 次 41 号土坑、15・16　石塚山古墳
Ⅳ期　25・32・33　三苫 1 号住居跡、26・27・34　姪浜 11 号住居跡、28・29・35・36　安武・土井の内
30・31・37・38　船迫窯跡
Ⅴ期　39～47　広幡 10 号住居跡
Ⅵ期　48～55　箱崎 29 号土坑

第７節　古墳時代集落の展開

第１項　はじめに

西新町遺跡は古墳時代前期の集落遺跡として全国的に注目を集めているが、これまで発掘調査が行われるごとに新たな知見が得られ、本書で報告した第22次調査においても新たな成果を追加することとなった。そこで、発掘された竪穴住居跡について第１節の土師器編年に拠って時期を定め、集落全体の時期別変遷を検討してみたい。

なお、本項では土師器編年の「Ⅰ式」を「Ⅰ式期」の意味で用いている。また、変遷の状況を明確化するため「Ⅰ式～Ⅱ式」など二時期にまたがる場合は遡りうる上限の時期を評価し「Ⅰ式」とした。

各遺構の時期等については前掲の第５～８表を参照していただきたい。　（下原）

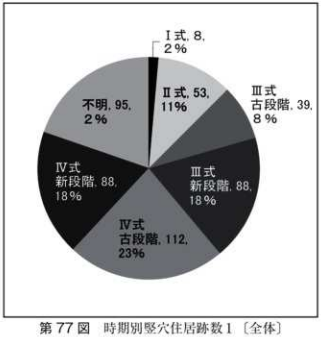
第２項　時期別にみた竪穴住居跡の変遷（第77～80図）

これまでの発掘調査で明らかになった竪穴住居跡は総数525基に及び、およそ東西500ｍ・南北200ｍの範囲にひろがる。

Ⅰ式以前　西新町遺跡における集落形成は弥生時代中期後半に遡る。時代が遡るため分布図には図示していないが、第８・９・16・19次調査区など遺跡の南西部に集中して合計42軒の竪穴住居跡が発見されており、甕棺墓群も発見されている。ただ後期になると急激に遺構数が減少し。集落の形成は途絶えてしまう。この現象は早良平野に営まれた多くの集落遺跡と共通する。

Ⅰ式　前段階に比べると遺構数は激減し、第２・６・９・12次調査区において合計８軒が確認されている。住居は、非常に少なく、小規模な単位が点在する程度と考えられる。現時点では12次調査区の２軒が東端になるようで、Ⅰ式以前よりもやや東側にも広がりをみせる。

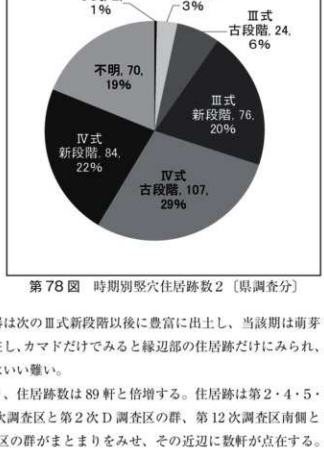
屋内施設としては、第６次SC07住居で炉跡の可能性が指摘される程度である。住居の平面形は長方形が主体である。



第77図　時期別竪穴住居跡数１〔全体〕

Ⅱ式　Ⅰ式にくらべ飛躍的に住居跡数が増加し、西新町遺跡における１つの画期が設定できる。当該期の住居跡数は53軒を数え、Ⅰ式の７倍にもなる。第２・５～10・12・17・18・21・22次調査区で確認され、非常に広範囲に分布するとともに、第５・17・22次調査区など分布範囲が遺跡の北側まで拡大していく。ただし、集落の中心は第２次調査区より南側にあり、第５・12・17次調査区では１～２軒が点在するに過ぎない。一方で、第22次調査区の場合、８軒の住居跡が折り重なるようにして営まれている。あくまで推定であるが、後述するⅣ式までの集落展開を考慮すれば、未調査である校庭部分に当該期の集落が広がっている可能性は高く、その北

限が第22次調査区になるのかもしれない。なお、この時期には第5次調査SC09住居でカマドが採用され、西新町遺跡の初現となるが、第5次調査区は他の同時期の住居跡と離れて位置し、系譜の異なる集団が居住した可能性は十分に考えられよう。



第78図　時期別竪穴住居跡数2〔県調査分〕

Ⅲ式古段階　住居跡数は39軒で、やや減少に転じているが、大勢でみれば大きな減少ではない。住居跡が確認されたのは第2～4・9・12～14・17・18・22次調査区である。分布範囲はⅡ式と同じであるが、Ⅱ式では第2次調査区周辺に比較的集中する傾向が窺えたのに対し、当該期では数軒単位で散在し小群を形成する。また、カマドを有する住居跡数は微増して4軒となり、わずかであるが朝鮮半島系土器の出土も確認される。半島系土器は次のⅢ式新段階以後に豊富に出土し、当該期は萌芽段階といえる。半島系土器は西側に偏って点在し、カマドだけでみると緑辺部の住居跡だけにみられ、まだ在地文化の中に積極的に取り込まれたとはいい難い。

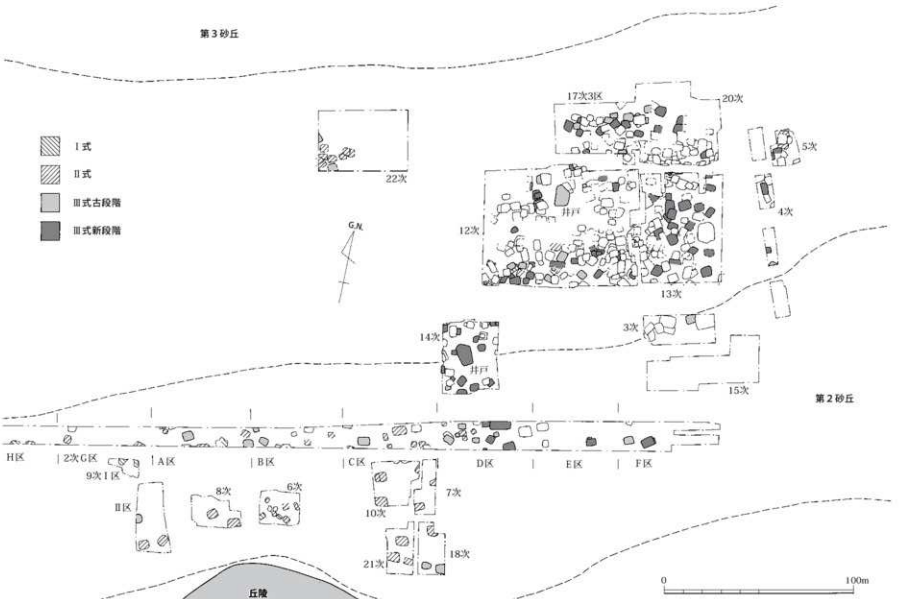
Ⅲ式新段階　時代は古墳時代へと移り変わり、住居跡数は89軒と倍増する。住居跡は第2・4・5・12～14・17・20次調査区で発見され、第14次調査区と第2次D調査区の群、第12次調査区南側と第13次調査区にかけての群、第17･20次調査区の群がまとまりをみせ、その近辺に数軒が点在する。全体的に東半部に偏在し、集落域が東へ移動する。さらに第二砂丘の北側斜面（海側）の砂丘間低地を積極的に利用する傾向がみえる。なお、カマドや半島系土器の事例数が増加し活発な交流の様相が顕著になってくるが、Ⅲ式古段階にくらべるとその分布は集落内で偏在する傾向はみられず、とくにカマドは在地文化の構成要素の1つとしてある程度定着し始めた様子が窺える。

Ⅳ式古段階　住居跡数はさらに増加し112軒となる。第2・4・5・12～14・17・20次調査区で確認でき、分布域はⅢ式新段階と変わらず、居住域が固定された感がある。前段階に引き続き砂丘間低地を利用する傾向がある。ただ、Ⅲ式新段階では幾つかの群を形成していたが、当該期ではその境界が不明瞭となる。

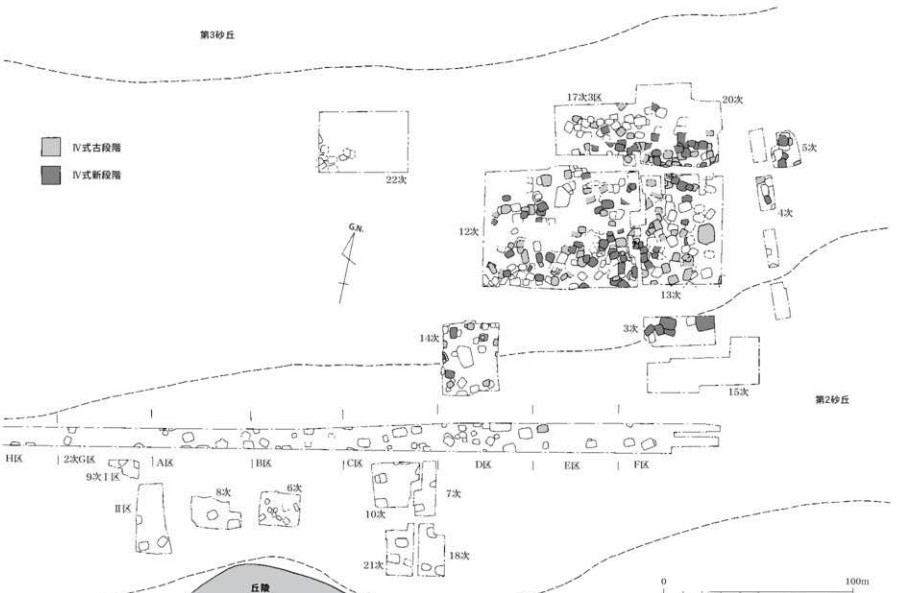
なお、この段階のカマド事例は112軒中36軒で全体の3割を超え、炉やカマドが不明な事例を除くと、事例数は炉の2倍にもなる。半島系土器も40軒から出土している。

Ⅳ式新段階　住居跡数は88軒を数え、依然として盛況である。第3～5・12～14・17・20次調査区で確認できる。遺跡全体でみた分布範囲には変化がなく、東側の調査区に集中し、当該期も住居群の単位を見出すことは困難である。カマドは38軒で全体の4割を超え、半島系土器は41軒から出土する。ただ、こうして盛行した集落もⅣ式新段階以後には突如消滅してしまう。あるいは本章第1節で述べられたようにⅣ式新段階の土器様式が今後細分されるならば、もう少し緩やかな衰退の過程が導かれる可能性もある。

以上が、これまでの発掘調査の成果に基づく集落変遷の概要で、Ⅳ式新段階以降は集落は消滅して



第79図　西新町遺跡竪穴住居跡の時期別分布図1（1/2,000）



第 80 図　西新町遺跡竪穴住居跡の時期別分布図２（1/2,000）

しまう。ちなみに、福岡県教育委員会の調査では、Ⅲ式新段階～Ⅳ式新段階に位置づけられる住居跡が7割を超え、逆にそれより遡る時期の住居跡は1割に満たない（第78図）。（下原）

第3項　変遷の画期とその背景

前項での変遷をみると、いくつかの画期を設けることができる。まず画期1は弥生時代中期新段階で、集落が成立する段階である。画期2はⅡ式で、弥生時代後期に途絶えていた集落形成がⅠ式になって再び動き出し、その動きが活性化する段階である。画期3はⅢ式新段階で、住居跡数がそれまでよりも倍増し、半島系遺物が豊富に出土し、カマドが多くの住居で採用されるようになるなど、外来文化の流入と受容が顕著となる。

これらの諸画期に基づき分期すれば以下のようになる。

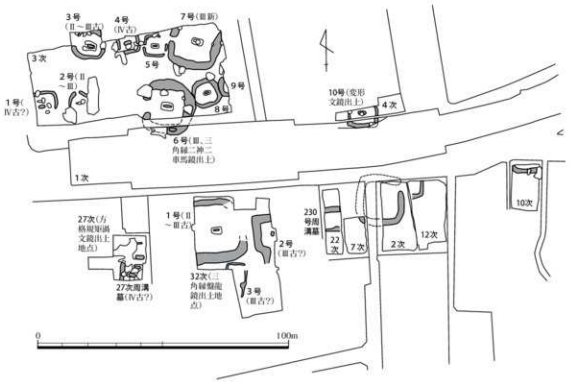
1期〔弥生時代中期後半～Ⅰ式〕　今回は分析の対象から除外したので時間幅が長く、さらに細分することは可能である。それはともかく、西新の砂丘上に集落が形成されはじめる段階で、甕棺墓群の形成もみられる。ただし弥生時代後期には集落は途絶し、Ⅰ式になって再び住居が営まれるようになる。あるいはⅠ式は2期の萌芽段階といえるかもしれない。

2期〔Ⅱ式～Ⅲ式古段階〕　低調であった1期新段階と比べると突如集落の形成が活発になる。2期になると、数例ではあるがカマドの採用がみられ、半島系土器も数点出土するようになるが、それらの分布傾向をみると縁辺部に位置する傾向があり、在地社会に取り込まれたとするのは躊躇される。排他的ではないにしろ、渡来系集団との住み分けがあったのだろうか。なお、住居跡は第2砂丘上を中心に営まれるが、徐々に海側にも進出しはじめ、幾つかの小群をなす。

3期〔Ⅲ式新段階～Ⅳ式新段階〕　2期には既に活発な集落形成が進んでいたが、3期になると遺構数は飛躍的に増加し、拠点的な集落へと変貌を遂げる。半島系土器の出土量では博多湾沿岸地域では最多となり一大交流拠点になったことが窺える。カマドの採用も急激に増加しⅣ式新段階には4割に達する。一方で、住居跡は遺跡の東側に集中して営まれるようになり、それまで形成されていた群も見出し難くなる。さらに、半島系遺物やカマドも遺跡の中での偏在傾向がなくなり、国内外を問わず出自の異なる集団の雑居状態ともいえる状況となる。

さて、近年博多湾周辺の国際交流に対しては白井克也氏により「博多湾貿易」という考えが提唱され（白井2003）、さらに久住猛雄氏が「前期」（弥生時代終末期後半～古墳時代初頭）と「後期」（古墳時代前期）に分ける案が提示した（久住2008）。これを上記の変遷に当てはめると、概ね2期が「前期博多湾貿易」期、3期が「後期博多湾貿易期」となる。久住氏によれば「前期」段階では西新町遺跡は博多湾沿岸の砂丘上に営まれた集落の1つに過ぎず、「後期」の段階になって福岡平野の勢力が主体的に関与して「対外交易の一大拠点」化が図られたという。前項でみた集落様相はこの「貿易」の段階とも概ね合致し、2期のころから半島系の要素がみられはじめることは交易との関係が生じ始めたことを物語る。また、Ⅲ式新段階以降に住居跡が東側へ移動し、その後分布域に変化がなくなる点、住居の群の把握が困難になり、渡来系遺物やカマドが偏在しなくなる（縁辺部だけに分布しなくなる）点などは、交易港へと発展したことにより自ずと居住域が定まったことや、国内外の人々の活発な往来により雑居状態になった、あるいは外来文化で溢れていたことなどが推測される。

しかし、一躍国際交易の舞台に姿をみせた西新町遺跡も、古墳時代中期になると急激に衰退し消滅する。大きな要因は畿内政権が直接対外交易を掌握したことにあろう（久住2008）。（下原）



第 81 図　藤崎遺跡方形周溝墓配置図（1/1,500、池田 2004 を改変）

第 4 項　西新町遺跡と藤崎遺跡

西新町遺跡に対応する墓地として、隣接する藤崎遺跡がある。西新町遺跡と同一の砂丘上に位置し、東西 200 mの範囲が、福岡市教育委員会による各種の開発事業に伴って発掘調査が実施されている。発掘調査の結果、これまで 18 基の方形を基調とする周溝墓が確認されている（第 81 図）。方形周溝墓は第 2 ・ 3 ・ 4 ・ 10 ・ 12 ・ 22 ・ 27 ・ 32 次調査で主として検出されており、墓地は西新町Ⅱ式に遡る可能性がある。今のところ確認されている下限はⅣ式古段階で、おおよそ西新町遺跡の古墳時代集落の展開と一致する。

このうち、第 3 次調査 6 号方形周溝墓（濱石他 1981）では三角縁二神二車馬鏡 1 面、素環頭刀 1 点などが出土している。墓地全体を見渡しても、規模が大きく、盟主的な存在のひとつである。この第 3 次 6 号方形周溝墓の他に、平面規模から盟主的な存在を探すならば、第 3 次 3 号、第 32 次 1 号があげられる。第 32 次 1 号方形周溝墓（池田他 2004）は 1912 年に三角縁複波文帯盤龍鏡 1 面を出土した箱式石棺（島田 1925）に相当すると考えられている。第 3 次 6 号方形周溝墓出土三角縁二神二車馬鏡は岡山県湯迫車塚古墳と山梨県銚子塚古墳と同型同范関係にあり、1912 年出土の三角縁複波文帯盤龍は滋賀県雪野山古墳と同型同范関係にあり、畿内から配布されたものと考えられる（奈良県立橿原考古学研究所編 2000）。藤崎遺跡のような前方後円墳でない比較的小規模な古墳に三角縁神獣鏡等の大形鏡が副葬されることはまれであり、朝鮮半島との交易に占める西新町遺跡の重要性を示している。

しかし、藤崎遺跡では西新町遺跡でみられたような朝鮮半島系土器はきわめて少なく、朝鮮半島系の埋葬施設なども発見されていない。朝鮮半島系土器が出土しないことを根拠に渡来人が埋葬されなかったとするのは短絡的であるが、少なくともこれまで発見された周溝墓は列島の古墳墓制の範疇に位置づけられる。ただ、藤崎遺跡の調査範囲は断片的であり、今後、朝鮮半島系の遺物、埋葬施設等

が検出される可能性も皆無ではない。また、西新町遺跡Ⅳ式新段階に相当するような周溝墓がみつかっておらず、墓地の範囲もさらに広がる可能性が高い。今後、藤崎遺跡の墓地の解明が進み、集落である西新町遺跡の展開との対比、朝鮮半島からの渡来人の墓地の問題について論ずる資料がさらに充実されることを期待したい。（重藤）

第５項　おわりに

ここでは時期別の住居跡分布等から古墳時代の西新町遺跡に対して検討を加え、集落全体の変遷過程を探ってきた。残念ながら、住居跡の構造的考察や周辺の集落遺跡との関係などにまでは及ぶことがなく、表面的な観察にとどまってしまった。しかし、博多湾を介した国際交易の拠点としての姿や、そこで活躍した人々の葬送の一端を垣間見ることができた。

なお、藤崎遺跡出土の鏡は、九州大学准教授辻田淳一郎氏に御教示を賜った。（下原）

〔参考文献〕
池田裕司・久住猛雄他　2004 『藤崎遺跡』15　福岡市埋蔵文化財調査報告書第 824 集
久住猛雄　1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ
久住猛雄　2007 「「博多湾貿易」の成立と解体－古墳時代初頭前後の対外交易機構－」『考古学研究』第 53 巻第４号
島田寅次郎　1925 「藤崎の石棺」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第１輯
白井克也　2003 「弥生・古墳時代における日韓の交易と移住」国学院大学 COE 研究プロジェクトシンポジウム
武末純一　1996 「西新町遺跡の竈」『碩皙尹容鎭教授停年退任記念論叢』
武末純一　2000 「北部九州の百済系土器－４・５世紀を中心に－」『福岡大学総合研究所所報』第 240 号
武末純一　2004 「伽耶と倭の交流－古墳時代前・中期の土器と集落－」『国立歴史民族博物館研究報告』第 110 集
濱石哲也・池崎譲二　1982 『藤崎遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 80 集

第８節　まとめにかえて

第１項　古墳時代の西新町遺跡

第１次調査より 60 年余りが経過し、その間に行われた数々の発掘調査で弥生時代中期～古墳時代前期に至る集落の状況が明らかになってきた。弥生時代終末期～古墳時代前期に該当する竪穴住居跡は総数 485 軒にのぼり、砂丘上に拠点となる集落が展開することが判明した。

集落の形成は弥生時代中期にさかのぼり、その時点で既に漁撈具を伴うなど漁撈との関わりが窺え、漁撈のみが生業であったとはいわないまでも、漁村的景観が復原できる。

弥生時代終末期ごろに発展の契機を迎えるが、集落全体としてのまとまりはなく、漁撈活動も行う集団が比較的大きな海浜集落を形成し、航海技術を有していたこともあって博多湾を介した交易網に組み込まれていたと考えられる。この段階では住居跡が幾つかの単位ないし群を形成しており、一般的な集落がみせる景観と大差はなく、一部の住居跡で列島内で最古段階に位置づけられる造り付けカマドが採用され、朝鮮半島系土器も何例か出土するという点に特徴が見出せる。

ところが、古墳時代前期になると、従来よりも東寄りの場所に居住域の中心が移り、住居の件数が倍増する一方で、住居跡の群が不明瞭になり集住的な様相へと変化する。この頃の住居跡からは百済（馬韓）系・伽耶系など多様な朝鮮半島系土器が出土し、カマドを採用する住居跡は３割から４割を占めるようになる。

また、列島内に目を向けると山陰系・吉備系・畿内系の土器も搬入され、とくに山陰系については模倣品を含めて主要な器種構成要素になるなど、他地域とは異なる様相を示し、列島各地からの搬入品とその模倣品が一定の割合を占める特異な土器様式が形成されたと考えられる。

この古墳時代の様相変化は、畿内政権が強く関与する中で、北部九州勢力が対外交易の中心拠点として浜辺の「集落」を「港町」へと整備したことによる。住居跡群の単位が明確でなく、一定の範囲内に住居群が固定されることなども、元々の居住集団が有していた既存の紐帯や規範をある程度崩し、あるいは再構築し新規に交易の場を形成したものと考えられる。ただし、その経営主体はあくまで在地集団であり、その統括者も藤崎遺跡を見る限り在地の首長であった。

以上をみると、古墳時代の西新町遺跡は国際的な交易拠点として華やかな光を放ち、人や物が行き来する文化の集積地として隆盛したのである。

第２項　今後の課題

最後に西新町遺跡の調査・研究について、いくつかの課題を挙げておく。

既述のとおり西新町遺跡の発掘調査は、学校の改築や国道 202 号線から南側の商業地区の開発などに伴い行われ、未調査の地区も多い。全貌を掴めない現状は集落遺跡の解明には大きな障害である。しかし、既存の資料も十分に議論されているわけではなく、改めて精査する必要がある。。

また、西新町遺跡には交易活動を支えた集団が居住しており、本章第５節や第６節などで取り上げた漁撈具や製塩土器などをはじめとした日常生活に関連する遺物についての考察もさらに深めることで、当時の遺跡の景観をより鮮明に蘇らせることができるだろう。

なお、今回は考察することができなかったが、周辺の集落遺跡の動向を合わせて検討することで、地域の歴史の中に西新町遺跡を位置づけることも必要な作業である。　（下原）

第２章　近世・近代篇

第１節　西新町遺跡出土の土器・陶磁器

（１）　高取焼

高取焼窯は慶長年間に直方市鷹取城の近辺に創業された陶器窯である。藩営の御用窯はその後、東峰村小石原を経て、福岡城下早良郡龍原村へ移転している。御用窯の置かれた地域では、御用窯が移転した後も民窯が存続しており、直方市周辺では「上野焼」、東峰村では「小石原焼」と呼ばれ、福岡城下では「高取焼」として継承されている。ここでいう「高取焼」は、早良郡龍原村の製品を指すものとする。

龍原村は現在の高取・藤崎・西新町一帯にあたり、まず享保元（1716）年に御用品を焼く東皿山が築かれ、寛保元（1741）年には民用品を焼く西皿山が置かれている。東皿山窯は西新町５丁目10番地付近に推定されており、その北側に広がる西新町遺跡からは多量の高取焼が出土している。一方、西皿山窯は高取２丁目５・11番地付近に推定されていたが、平成17（2005）年に福岡市教育委員会が行った藤崎遺跡35次調査（福岡市教育委員会2006）で物原を掘削した整地面が確認されたことで窯の位置がほぼ明らかになった。

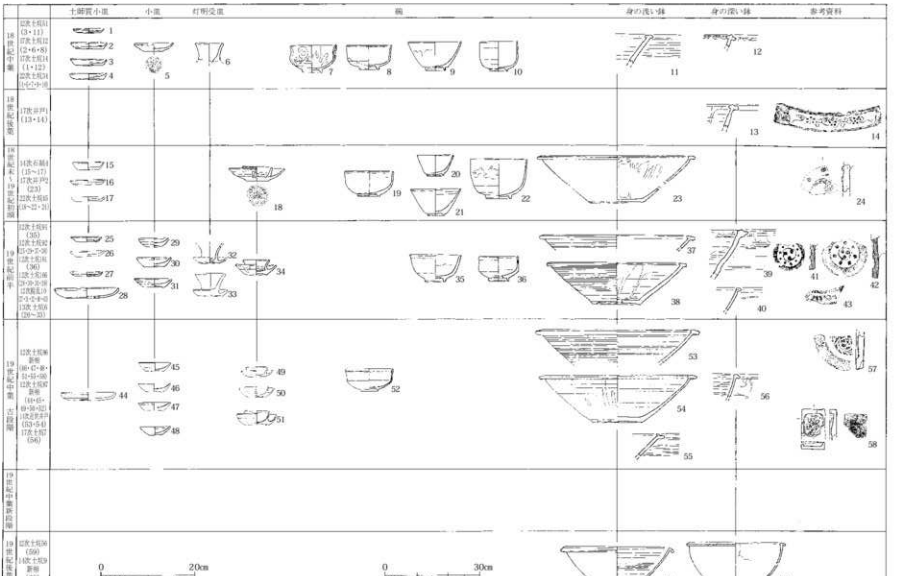
では、龍原村で焼かれていた「高取焼」はどのようなものだったのだろうか。製品を特定するためには生産地資料が必要だが、西皿山窯の製品は藤崎遺跡35次調査出土資料で特定することができた。東皿山窯の製品については、西新町遺跡は消費地遺跡であるものの、施釉前の１次焼成品が多量に出土しており、それらについては東皿山窯で生産された高取焼の可能性が高い。まず多量に出土する器種について編年を行い、同一形式の時期差を除いたうえで、器種・器形を提示したい。

高取焼の編年

西新町遺跡からは単に多量の高取焼が出土しただけでなく、時期を特定しうる肥前系磁器が共伴した一括資料が得られた。このため、器形のバリエーションが少なく出土量の多い器種によってはその変遷を捉えることが可能である。そこで第82～84図にこれらの器種について共伴する碗・小皿と共に編年を作成した。図中の一括資料出土遺構とその時期比定根拠は以下の通りである。

18世紀中葉	12次土坑51（コンニャク印判家紋文半球碗）　17次土坑10（無文碗）
	17次土坑12（波佐見二重網目５寸皿・せんじ碗・花唐草文鉢）22次土坑34（本書第37図）
18世紀後葉	12次P270（朝顔形碗透明釉・退化した氷裂文丸碗・やや退化した蛸唐草・広東碗見込みに寿字文）
	17次土坑29（見込みに牡丹文）　17次井戸１（現用焼・若杉文半球碗）
18世紀末～19世紀初頭	14次石組４（第Ⅵ集第115・116図）　17次井戸２（腰の丸くなったせんじ碗・波佐見五寸皿）
	20次土坑２古相（見込み帆掛け船文碗・端反碗）　22次土坑45（本書第39図）
19世紀前葉	12次土坑86古相（第Ⅲ集第393・394図）　12次土坑87古相（第Ⅲ集第395図・山水文皿）　12次土坑91（山水文皿）
	12次土坑92（第Ⅲ集第396図）12次土坑161（唐草文鉢・花唐草文鉢）
	12次土坑166（広東碗見込みに寿字文・変形格子文碗・環状松竹梅文皿・蛸唐草文鉢）
	12次撹乱10（湯飲み）　13次土坑６（第Ⅴ集第72図）　14次石組２（第Ⅵ集第115図）
19世紀中葉	12次土坑86新相（第Ⅲ集第393・394図）　12次土坑87新相（第Ⅲ集第395図）　14次土坑９古相（近世井戸上面）
古　段　階	14次近世井戸（第Ⅵ集第118～120図）
19世紀中葉新段階	13次土坑５（第Ⅴ集第70・71図）
19世紀後葉	12次土坑56（第Ⅲ集第392図）　14次土坑９新相（近世井戸上面・コバルト染付漢詩文小杯）

第14表　一括資料出土遺構の時期比定根拠

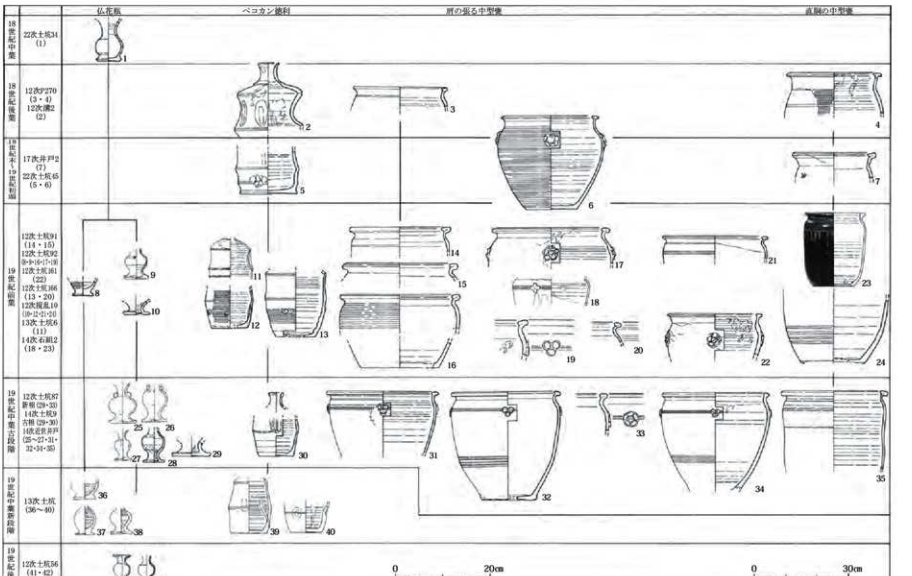


第82図　土師質小皿・高取焼小皿・碗・鉢編年図（23・37～40・53・～56・59・60は1/12、他は1/8）

灯明受皿は受け部が高くなるタイプと皿部の径が小さくなるタイプの２系統があり、鉢は身の深いものと浅いものがある。深いものは完形品が少ないため口縁部装飾の退化しかわからない。身の浅い

	出土遺構・地点	器　種	胎の種類・材質	釉薬・色調	特記事項
第82図1	17次1区土坑14	小皿	土師質	内外橙色　内面変色　墨書の可能性有り	外面2段ナデ　底部糸切り
第82図2	17次1区土坑12	小皿	土師質	内外橙色　変色なし	外面2段ナデ　底部糸切り
第82図3	12次3区土坑51	小皿	土師質	内外橙色　変色なし	外面1段ナデ　底部糸切り
第82図4	22次土坑34	小皿	土師質	本書掲載第37図1	
第82図5	22次土坑34	小皿	土師質	本書掲載第37図2	
第82図6	17次1区土坑12	灯明皿台	土師質(1次焼成)	内外橙色　変色なし	接合面に糸切り　接合後剥離　未使用
第82図7	22次土坑14	拳骨形碗	陶器	本書掲載第37図6	
第82図8	17次1区土坑12	腰折碗	陶器	外面灰釉（緑灰色）の上に藁灰釉（緑灰白色）上掛け　内面口縁部のみ灰釉（緑灰色）口縁下に藁灰釉（緑灰白色）	畳付釉剥ぎ　砂目付着
第82図9	22次土坑34	椀（朝顔形）碗	陶器	本書掲載第37図7	
第82図10	22次土坑34	呉器形碗	陶器	本書掲載第37図4	
第82図11	12次3区土坑51	鉢	土師質(1次焼成)	内外橙色　変色なし	外面ケズリ状ナデ
第82図12	12次1区C－7土坑14	鉢	土師質(1次焼成)	内外橙色　変色なし	内面の口縁部刻みは指腹施文
第82図13	17次1区井戸1掘り方	鉢	陶器	鉄釉（濃茶褐色）の上に鉄釉（黒＋茶褐色）	内面ケズリ状ナデ
第82図14	14次1区井戸1掘り方	軒平瓦	瓦質	灰黒色	半欠
第82図15	14次区石組遺構4	小皿	土師質	第VI集掲載第116図46	
第82図16	14次区石組遺構4	小皿	土師質	第VI集掲載第116図44	内面ケズリ状ナデ
第82図17	14次区石組遺構4	小皿	土師質	第VI集掲載第116図45	半欠
第82図18	22次土坑45	灯明受皿	陶器	本書掲載第39図8	
第82図19	22次土坑45	腰折碗	陶器	本書掲載第39図2	
第82図20	22次土坑45	椀形碗	陶器	本書掲載第39図1	
第82図21	22次土坑45	朝顔形碗	陶器	本書掲載第39図4	
第82図22	22次土坑45	大型呉器形碗	陶器	本書掲載第39図5	
第82図23	17次1区井戸2掘り方	鉢	陶器	灰釉（緑灰色）の上に口縁に褐釉（暗褐色）と藁灰釉（灰白色）掛け流し	見込みに胎土目跡　外底釉剥ぎ 外面ケズリ状ナデ　図上接合
第82図24	22次土坑45	軒丸瓦	瓦質	本書掲載第40図20	
第82図25	12次3区土坑92	小皿	土師質	内外橙色　変色なし	外面1段ナデ　底部糸切り
第82図26	13次土坑6	小皿	土師質	第V集掲載第72図5	
第82図27	12次3区北1区攪乱10	小皿	土師質	焼成不良のため黄灰褐～黒灰色	外面2段ナデ　底部糸切り
第82図28	12次3区中2区西土坑166	皿	土師質	内外にぶい暗黄灰色	外面2段ナデ　底部回転ヘラ切り　底部黒斑
第82図29	12次3区土坑92	小皿	陶器	外面露胎・内面灰釉（緑灰色）	外面ケズリ　底部回転ヘラ切り
第82図30	12次3区中2区西土坑166	皿	陶器	外面露胎・内面灰釉（暗緑灰色）	貫入あり　内面に融着痕あり 口縁に焼け歪みあり　完形
第82図31	12次3区北1区攪乱10	小皿	陶器	外面露胎・内面鉄釉（黒＋茶褐色）	外面ケズリ　底部回転ヘラ切り
第82図32	12次3区北1区攪乱10	灯明皿台	陶器	外底露胎・内外灰釉（暗緑灰褐色）	外底釉剥ぎで砂目付着
第82図33	13次土坑6	灯明皿台	陶器	第V集掲載第72図6	
第82図34	12次3区中2区西土坑166	灯明受皿	陶器	外面露胎・内面鉄釉（茶褐色）	外面ケズリ　底部回転ヘラ切り　口縁に焼け歪みあり
第82図35	12次3区土坑91	端反碗	陶器	内外褐釉（暗黒茶褐色）の上に紫灰色に窯変する灰釉上掛け	
第82図36	12次3区土坑161	腰折碗	陶器	内外木灰釉（暗緑灰色）に藁灰釉（灰白色）の上掛け	
第82図37	12次3区土坑92	鉢	土師質(1次焼成)	内外橙色　変色なし	外面ケズリ状ナデ
第82図38	12次3区土坑92	鉢	陶器	外底露胎・内外面灰釉（黄緑灰色）の上に口縁に灰釉（暗緑色）と藁灰釉（灰白色）掛け流し	見込みに胎土目跡　外底釉剥ぎ　外面ケズリ状ナデ　図上接合
第82図39	12次3区中2区西土坑166	鉢	陶器	内外面褐釉（外面暗灰茶褐色、内面黒褐色）の上に口縁に藁灰釉（灰白色）掛け流し	
第82図40	12次3区北1区攪乱10	鉢	陶器	発色不良で内外灰釉（にぶい暗緑灰色）の上に口縁に褐釉（暗褐色）と藁灰釉（灰白色）掛け流し	
第82図41	12次3区北1区攪乱10	軒丸瓦	瓦質	第II集掲載第404図3	
第82図42	12次3区北1区攪乱10	軒丸瓦	瓦質	第II集掲載第404図2	
第82図43	12次3区北1区攪乱10	軒平瓦	瓦質	第II集掲載第404図4	
第82図44	12次3区土坑87	皿	土師質	第II集掲載第395図3	
第82図45	12次3区土坑87	小皿	陶器	第II集掲載第395図24	
第82図46	12次3区土坑86	小皿	陶器	第II集掲載第393図24	
第82図47	12次3区土坑86	小皿	陶器	第II集掲載第393図25	
第82図48	12次3区土坑86	小皿	陶器	内面灰釉（緑灰白色）　口縁部と外面露胎　外底ヘラ切り	
第82図49	14次近世井戸	灯明受皿	陶器	第VI集掲載第118図17	
第82図50	14次近世井戸	灯明受皿	陶器	第VI集掲載第118図16	
第82図51	12次3区土坑86	灯明受皿	陶器	第II集掲載第393図26	
第82図52	12次3区土坑87	腰折碗	陶器	第II集掲載第395図11	
第82図53	14次近世井戸	鉢	陶器	第VI集掲載第119図23	
第82図54	14次近世井戸	鉢	陶器	第VI集掲載第119図24	
第82図55	12次3区土坑86	鉢	陶器	内外灰釉（緑灰色）の上に口縁に 褐釉（暗褐色）と藁灰釉（灰白色）掛け流し	
第82図56	17次土坑7	鉢	陶器	内外灰釉（緑灰色）の上に藁灰釉（灰白色）掛け流し	
第82図57	12次3区土坑86	軒丸瓦	瓦質土器	藤巴文　黒田家家紋瓦	
第82図58	12次3区土坑86	硯	片岩製	表面の線刻は意味を成さない　裏面線刻「江守西…」「文久二年…」	
第82図59	12次1区B北拡張区 土坑43	鉢	陶器	内外茶褐色の鉄釉	外面ケズリ状ナデ　外底露胎　見込みに台形目跡7ヶ所　ほぼ完形
第82図60	14次土坑9	鉢	陶器	灰釉（黄緑灰色）の上に藁灰釉（灰白色）-褐釉（茶褐色）を掛け分けて上掛け	

第15表　第82図掲載土器・陶磁器観察表

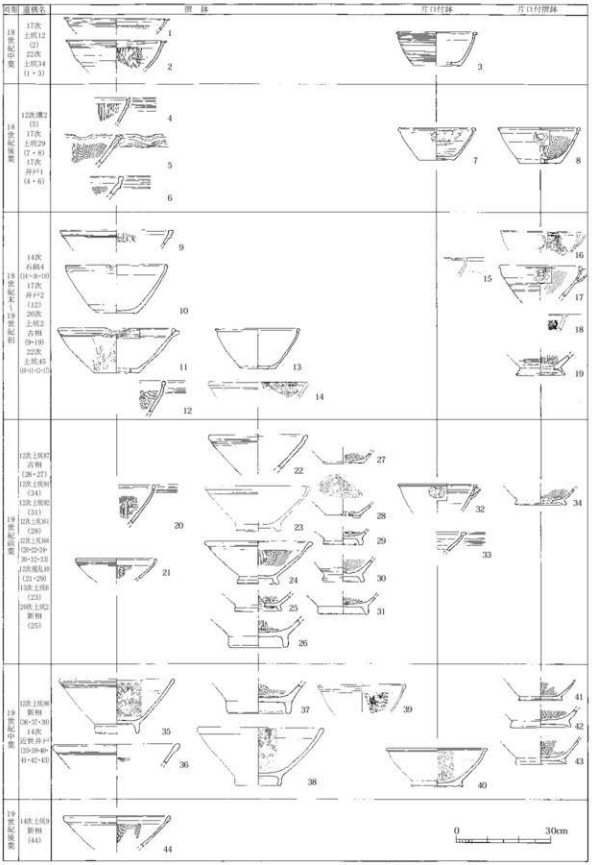


第83図　高取焼仏花瓶・ペコカン徳利・中型甕編年図（2・5・19・33は1/8、他は1/12）

ものは口縁部がT字から逆L字になり外傾する。仏花瓶は胴部の最大径が小さくなり、底部は浅く高くなる。また、耳部が退化して消滅する。ペコカン徳利は窪みの位置が下がり、胴部の凹凸が小さくなる。中型甕は肩の張るタイプと直胴タイプの2系統があり、両者とも口縁部の折り返しが小さくなり、肩部の張りが緩やかになり、五弁花浮文は退化する。擂鉢は高台の有無とサイズによって形態変

	出土遺構・地点	器種	胎の種類	釉薬・色調	特記事項
第83図1	22次区土坑34	仏花瓶	土師質（1次焼成）	本書掲載第37図15	
第83図2	12次1区溝2D4	瓶（ペコカン徳利）	陶器	鉄釉（茶褐色）	内面ケズリ　胴部と肩部の接合後調整が粗い
第83図3	12次中区2区P270	甕	土師質（1次焼成）	橙色　使用変色なし	外面肩部ケズリ状ナデ
第83図4	12次中2区P270	甕	陶器	外面灰釉（緑灰色）と藁灰釉（灰白色）の掛け流し 内面鉄釉（暗茶褐色）の上に口縁部に飴釉（暗褐色）の掛け流し	口縁内側に肥厚　外面片部カキ目
第83図5	22次土坑45	瓶（ペコカン徳利）	陶器	本書掲載第40図16	
第83図6	22次土坑45	甕	土師質（1次焼成）	橙色　使用変色なし	肩部に輪状花弁形の浮文
第83図7	17次1区井戸2上面	甕	陶器	外面飴釉（茶褐色）・内面飴釉（黒+茶褐色）の上に口縁部に灰釉（緑灰色）の掛け流し	肩部に菊花状のスタンプ
第83図8	12次3区土坑92	仏花瓶	土師質（1次焼成）	橙色　使用変色なし	外面体部カキ目　底部糸切り
第83図9	12次3区土坑92	仏花瓶	陶器	第Ⅲ集掲載第396図17	
第83図10	12次3区北1区攪乱10	仏花瓶	陶器	外底露胎・内外面灰釉（黄緑色）	底部糸切り　釉拭き取り
第83図11	13次土坑6	瓶（ペコカン徳利）	陶器	第V集掲載第72図10	
第83図12	12次3区北1区攪乱10	瓶（ペコカン徳利）	陶器	外面鉄釉（発色不良で黄緑灰色）内面鉄釉（紫褐色）外底露胎	外面カキ目　指圧による窪み
第83図13	12次3区土坑166	瓶（ペコカン徳利）	陶器	外面鉄釉（発色不良で黄緑灰色）内面鉄釉（紫褐色）外底露胎	外面胴下位カキ目　指圧による窪みと浮文　外底板状圧痕　焼成後穿孔
第83図14	12次3区土坑91	甕	土師質（1次焼成）	橙色　使用変色なし	
第83図15	12次3区土坑91	甕	土師質（1次焼成）	橙色　使用変色なし	口縁部から内面に使用による摩滅あり
第83図16	12次3区土坑92	甕	土師質（1次焼成）	橙色　使用変色なし	外面肩部ケズリ状ナデ　胴下位に○に一のスタンプ　外底未調整
第83図17	12次3区土坑92	甕	陶器	外面灰釉(緑灰色)内面鉄釉(暗茶灰色)の上に灰釉(緑灰色)	手捏ね5弁花浮文貼り付け
第83図18	14次区石組遺構2	甕	陶器	第Ⅵ集掲載第115図9	
第83図19	12次3区土坑92	甕	陶器	内外面鉄釉（緑黄茶褐色）の上に灰釉（暗緑灰色）流し掛け	3円浮文貼り付け
第83図20	12次3区土坑166	甕	土師質（1次焼成）	橙色　使用変色なし	外面カキ目
第83図21	12次3区北1区攪乱10	甕	陶器	外面飴釉（茶褐色）の上に口縁部に藁灰釉（緑灰白色）の掛け流し　内面鉄ショウの上に鉄釉（暗灰茶褐色）	肩部に2条沈線
第83図22	12次3区土坑161	甕	陶器	外面木灰釉（にぶい緑灰色）に藁灰釉（灰白色）上掛け 内面口縁部のみ木灰釉（濃青緑色）	5弁花浮文貼り付け　内面ケズリ 口唇部輪調ぎ
第83図23	14次区石組遺構2	甕	陶器	第Ⅵ集掲載第115図11	
第83図24	12次3区北1区攪乱10	甕	土師質（1次焼成）	外面暗黄緑灰色　使用変色で内面にぶい黄橙色から黒灰色	外面ナデ　内面ケズリ状ナデ
第83図25	14次近世井戸	仏花瓶	陶器	第Ⅵ集掲載第118図11	
第83図26	14次近世井戸	仏花瓶	陶器	第Ⅵ集掲載第118図12	
第83図27	14次近世井戸	仏花瓶	陶器	第Ⅵ集掲載第118図10	
第83図28	14次土坑9	仏花瓶	陶器	外底露胎・内外面灰釉（淡緑灰色）の上に口縁に褐釉（暗褐色）と藁灰釉（灰白色）掛け流し	底部糸切り
第83図29	12次3区土坑87	仏花瓶	土師質（1次焼成）	黄橙色　使用変色なし	底部糸切り
第83図30	14次土坑9	瓶（ペコカン徳利）	陶器	外面鉄釉（茶褐色）の上に口縁部に褐釉（茶灰褐色）の上掛け　内面ケズリ　外底胎土目付着側面の窪みと浮文は竹のモチーフ	底部ヘラ切り
第83図31	14次近世井戸	甕	陶器	第Ⅵ集掲載第119図21	
第83図32	14次近世井戸	甕	陶器	第Ⅵ集掲載第119図19	
第83図33	12次3区土坑87	甕	土師質（1次焼成）	内外（黄橙色）　使用変色	外面カキ目状ナデの上に5弁花浮文
第83図34	14次近世井戸	甕	陶器	第Ⅵ集掲載第119図20	
第83図35	14次近世井戸	甕	陶器	第Ⅵ集掲載第119図22	
第83図36	13次土坑5	仏花瓶	陶器	第V集掲載第71図20	
第83図37	13次土坑5	仏花瓶	陶器	第V集掲載第71図21	
第83図38	13次土坑5	仏花瓶	陶器	第V集掲載第71図19	
第83図39	13次土坑5	瓶（ペコカン徳利）	陶器	第V集掲載第71図23	
第83図40	13次土坑5	瓶（ペコカン徳利）	陶器	第V集掲載第71図22	
第83図41	12次土坑56	仏花瓶	陶器	第Ⅲ集掲載第392図6	
第83図42	12次土坑56	仏花瓶	陶器	第Ⅲ集掲載第392図7	

第16表　第83図掲載土器・陶磁器観察表



第 84 図　高取焼摺鉢・片口付鉢・片口付摺鉢編年図（1/12）

	出土遺構・地点	器　種	胎の種類	釉薬・色調	特記事項
第84図1	22次区土坑34	碗類	陶器	本書掲載第37図14	
第84図2	17次1区土坑12	碗類	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	削り目上端ナデ調え　削り目9本以上単位　輪厚碗け
第84図3	22次区土坑34	片口型碗類	土師質（1次焼成）	本書掲載第37図13	
第84図4	17次1区井戸1掘り方	碗類	陶器	内外発色不良の鉄釉（暗茶褐色）	削り目上端ナデ調え　削り目8本以上単位
第84図5	12次1区溝2D4	碗類	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	削り目上端ナデ調え　削り目12本以上単位 1本の目が広く、目間の幅狭い　輪光沢あり　器壁厚い
第84図6	17次1区井戸1掘り方	碗類	土師質（1次焼成）	内外暗橙灰色　変色なし	削り目上端ナデ調え
第84図7	17次3区土坑29	こね鉢	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	底部露胎
第84図8	17次3区土坑29	碗類	土師質（1次焼成）	内外橙色　変色なし	削り目上端ナデ調え　削り目9本以上単位　器壁厚い
第84図9	20次土坑2	碗類	陶器	内外鉄釉（暗茶褐色）	削り目上端ナデ調え　削り目7本以上単位
第84図10	22次区土坑45	碗類	陶器	本書掲載第40図14	
第84図11	22次区土坑45	碗類	陶器	本書掲載第40図13	
第84図12	17次1区井戸2掘り方	碗類	陶器	内外橙色	注口調整　削り目8単位 焼成後底面に穿孔し、植木鉢として利用
第84図13	22次区土坑45	碗類	陶器	本書掲載第40図12	
第84図14	14次区石組遺構4	碗類	陶器	第Ⅵ集掲載第116図39	
第84図15	14次区石組遺構4	こね鉢	陶器	第Ⅵ集掲載第116図41	
第84図16	14次区石組遺構4	碗類	陶器	第Ⅵ集掲載第116図38	
第84図17	22次区土坑45	碗類	陶器	本書掲載第40図11	
第84図18	14次区石組遺構4	碗類	陶器	第Ⅵ集掲載第116図43	
第84図19	20次土坑2	碗類	陶器	内外鉄釉（暗茶褐色）	外面腰下位ヵキ目調整痕高台貼り付け 高台内に砂目付着　削り目4本単位
第84図20	12次3区西土坑166	碗類	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	外面ヵキ目調整　削り目8本以上単位
第84図21	12次3区北1区 撹乱10	碗類	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	胎緑灰色で精良　輪厚碗け
第84図22	12次3区西土坑166	碗類	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	削り目上端ナデ調え　削り目11本以上単位　器壁厚い
第84図23	13次土坑6	碗類	陶器	第Ⅴ集掲載第73図12	
第84図24	12次3区西土坑166	碗類	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	外底ヘラ切り　沓付軸調ぎ　見込みは使用のため摩滅
第84図25	20次土坑2	碗類	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	沓付軸調ぎ　見込みに重ね焼き痕　削り目10本以上単位
第84図26	12次3区土坑87	碗類	陶器	第Ⅲ集掲載第305図26の改変	
第84図27	12次3区土坑87	碗類	土師質（1次焼成）	内外黄灰白色　変色なし	外面ケズリ・ナデ調整　削り目7本以上単位
第84図28	12次3区土坑16 1	碗類	陶器	内外鉄釉（暗茶褐色）	外面ナデ　外底に粘土目付着　見込みに粘土目痕 削り目11本単位
第84図29	12次3北1区 撹乱10	碗類	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	沓付軸調ぎ　見込みに重ね焼き痕 削り目8本以上単位　輪厚碗け
第84図30	12次3区西土坑166	碗類	土師質（1次焼成）	内外橙色　変色なし	外面ヵキ目調整　削り目10本以上単位
第84図31	12次3区土坑92	碗類	陶器	内外鉄釉（暗茶褐色）	沓付軸調ぎ　高台砂目付着　見込みに重ね焼き痕 削り目13本以上単位
第84図32	12次3区西土坑166	こね鉢	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	手捏ねの注口部貼り付け後調整想い
第84図33	12次3区西土坑166	こね鉢	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	外面ヵキ目調整　口縁部軸調ぎ
第84図34	12次3区土坑91	碗類	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	沓付露胎　削り目12本以上単位で細く浅い 高台内底の目痕状3取り
第84図35	14次近世井戸	碗類	陶器	第Ⅵ集掲載第119図26	
第84図36	12次3区土坑86	碗類	陶器	内外鉄釉（暗茶褐色）	削り目上端ナデ調え　削り目15本以上単位
第84図37	12次3区土坑86＋87	碗類	陶器	内外鉄釉（暗茶褐色）	沓付軸調ぎ　高台砂目付着　見込みに重ね焼き痕 削り目12本以上単位　輪厚碗け
第84図38	14次近世井戸	碗類	陶器	第Ⅵ集掲載第119図25	
第84図39	12次3区土坑86	碗類	陶器	第Ⅲ集掲載第304図32	
第84図40	14次近世井戸	碗類	陶器	第Ⅵ集掲載第119図27	
第84図41	14次土坑9 （近世井戸上位）	碗類	陶器	内外鉄釉（焼成不良で暗茶褐色）	沓付胎土目痕　外底ヘラ切り・軸抜き取り 削り目10本以上単位　輪厚碗け
第84図42	14次土坑9 （近世井戸上位）	碗類	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	沓付胎土目痕　外底ヘラ切り・軸抜き取り 削り目12本以上単位　輪厚碗け
第84図43	14次土坑9 （近世井戸上位）	碗類	陶器	内外鉄釉（暗茶褐色）	沓付胎土目痕　外底ヘラ切り・軸抜き取り 削り目15本以上単位　輪厚碗け
第84図44	14次土坑9 （近世井戸上位）	碗類	陶器	内外鉄釉（暗茶褐色）	外面ヵキ目　削り目上端ナデ調え　削り目5本以上単位 輪光沢あり

第17表　第84図掲載土器・陶磁器観察表

化が異なっており、大型品は口縁と高台の形態が変化する。中型の片口を貼り付けるタイプの擂鉢・鉢はバリエーションがあるが、多くは高台が低く横に開くもので高台形態に大きな変化がない。

参考器種として提示した、一括資料と共伴する小皿と碗について説明する。土師皿については19世紀中葉以後ほとんど見られなくなる。これに替わって、内面に施釉する陶質小皿が多くなる。灯明受皿の皿部は、小皿と同じ製法であることから、小皿と変遷が灯明受皿の変遷に影響を与えている。碗は湯飲み形と端反碗については肥前系磁器碗の器形変化に連動したものといえる。枡（朝顔）形は時代が下がると高台が低くなり、猪口形に近くなる。

西新町遺跡と東西皿山の関係

西新町遺跡からは使用痕のある焙烙や提炉が出土しており、工房でなく生活空間といえる。生活空間でありながら1次焼成品や焼成不良品が多数出土するのはなぜだろう。また、正確な統計ではないが、陶器について産地別に分類すると、およそ7～8割は高取焼であろう。同じ福岡市内でも、博多遺跡や福岡城跡からこれほどの高率では出土していない。

また、1次焼成品をそのまま使用したものや、焼成時の破損品に穿孔して植木鉢として再利用したものなど、通常流通しない製品が存在することや、銘入りの土能（第87図1）などの存在から、窯場に勤める工人が居住した集落であった可能性を示している。『筑前国続風土記付録』（中巻）（文献出版1977）では西皿山には陶工の家が20軒ほどあったとされており、東皿山でも窯に近い場所に同様の集落が形成されていたのではないだろうか。

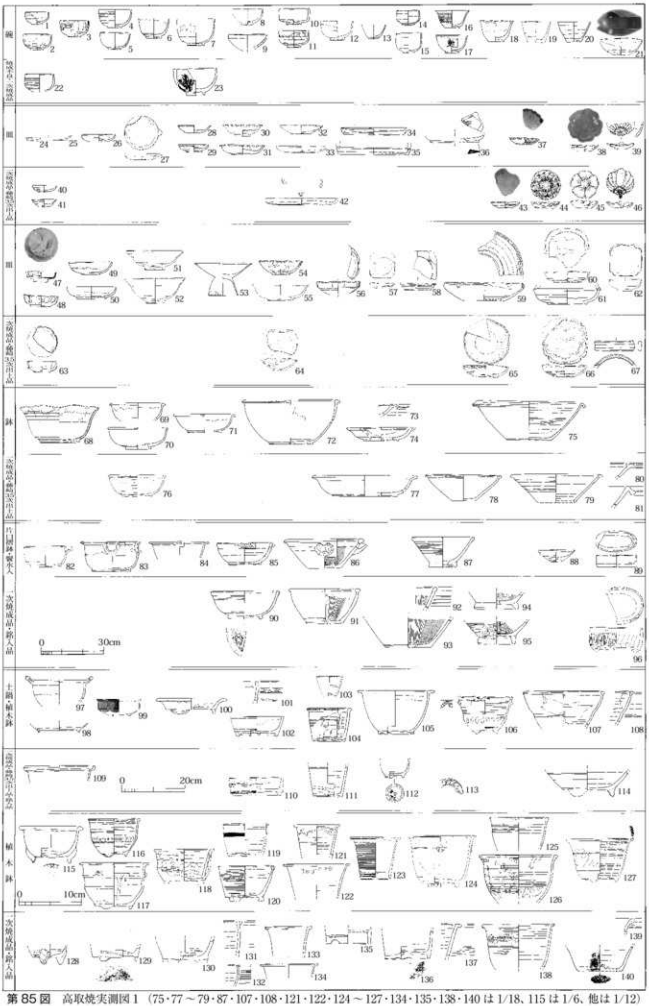
また、一括資料から確実に近世のものといえる瓦があり、1点のみだが黒田家の家紋瓦（第82図55）もある。窯跡に近い遺跡南部にはこれらの瓦が葺かれていたと考えられる礎石建物跡（14次4号石組遺構）があることから、東皿山窯に付随する藩の公的な施設が置かれていた可能性がある。明治になって公立学校が置かれたことも無関係ではないだろう。

高取焼と見られるもののうち器形のわかるものを第85・86図に挙げた。土から見て高取焼の窯場で作られている可能性が高い。

（2）土師質土器

土師質土器は、小規模経営の場合、実態がわからないものが多い。『福岡市史』によると明治期の福岡城下では野間村の「野間焼」があり、博多には瓦町の「瓦町焼」をはじめ上新川端町・社家町・下祇園町に17戸の陶器窯があったと記されている。（山村信榮 1988）

瓦町焼は、圓平造の製作した博多七輪が有名で、『福岡藩民政誌略』によると、瓦町焼は「白焼」と呼ばれ、野間・高宮の白土で作られたとあり、「白焼」の名前の由来である精良な灰白色の胎土を特徴としている。灰白色の胎土は第87図28～34・36～39で、これらは高取焼にはない器形である。また、第87図34は圓平造の銘を持ち、表面に粒子を含んだ緑がかった黄色の灰釉が内面のみ薄く施釉されていることから、施釉された瓦町焼の存在が明らかになった。同じ釉薬の掛かる灰白色の胎土を持つものに第87図26・38がある。これに対して、第87図27は灰白色の胎土でないが「平造」銘のある七輪である。これは黄灰白色で砂粒を含む胎土で、同じ胎土で施釉されたものもある。第87図25・36・39がこれにあたり、これらは瓦町焼の粗製品か、あるいは瓦町焼に近い博多の工房の製品であろう。第87図21の土瓶蓋は1次焼成品だが胎は黄灰白色で高取焼の釉薬とは異なる。1次焼



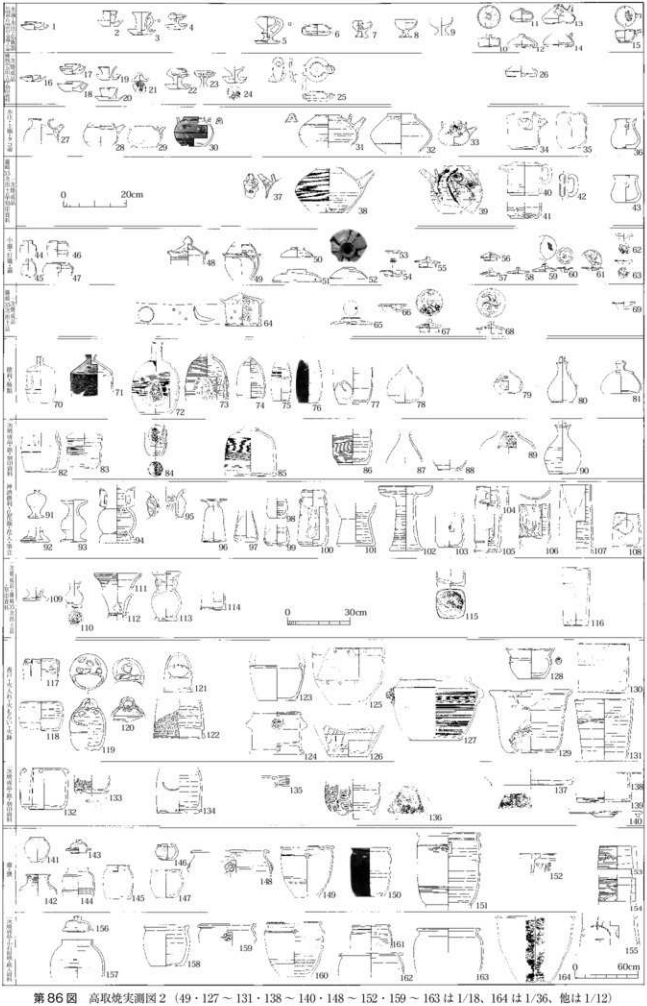
第85図　高取焼実測図1（75・77～79・87・107・108・121・122・124～127・134・135・138・140は1/8、115は1/6、他は1/12）

	出土遺構・地点	器　種	胎の種類	釉薬・色調	特記事項
第85図1	12次1区溝2E3	腰張形碗	陶器	鉄釉（暗茶褐色）の上に灰釉（緑灰色）と藁灰釉（灰白色）の掛け分け	畳付釉剥ぎ
第85図2	12次2区土坑84	腰張形碗	陶器	内外中位まで鉄釉　内面下位に鉄ショウ（茶褐色）の上に灰釉（暗緑灰色）が僅に掛かる遊焼釉	外面ケズリ　低火度で目跡なし
第85図3	17次2A区土坑16上面	拳骨形碗	陶器	鉄釉（黒褐色で部分的に茶褐色）の上に藁灰釉（緑色～灰白色）	胴部を窪ませて凹凸をつくる
第85図4	12次1区B6区近世包含層	丸碗	陶器	白化粧土の刷毛目文の上に内外透明釉で黄灰色を呈する	畳付にアルミナ付着　ほぼ完形
第85図5	12次西拡張区土坑138	丸碗	陶器	内外灰釉（暗緑灰色）	高台内削出ヘラ彫り　畳付に砂目付着　一部釉剥離　ほぼ完形
第85図6	12次西拡張区遺構面	丸碗	陶器	内外鉄釉（褐色）　口縁部は2度掛け	畳付にわずかに砂目付着
第85図7	22次土坑45	呉器形碗	陶器	本書掲載第39図5	
第85図8	13次2区南2北側攪乱	せんじ碗	陶器	第Ⅴ集第65図89	
第85図9	13次2区P120	口錆形碗	陶器	内外天目釉	
第85図10	12次西拡張区溝72	筒碗	陶器	内外藁灰釉（緑灰色）厚掛け	外面下位露胎　畳付釉剥ぎ
第85図11	17次3区土坑27	筒碗	陶器	内外藁灰釉（灰白褐色）の上に鉄釉（褐色）	畳付欠損か釉剥ぎか不明
第85図12	22次土坑45	腰張形碗	陶器	本書掲載第39図3	
第85図13	22次土坑45	杉形碗	陶器	本書掲載第39図1	
第85図14	13次2区南3攪乱	腰折碗	陶器	内外灰釉（青緑灰色）　外面下位露胎	外面下位ケズリ
第85図15	22次土坑34	呉器形碗	陶器	本書掲載第37図4	
第85図16	17次1区土坑13	端反碗	陶器	外面白化粧上の刷毛目の上に鉄釉（灰茶褐色）	外面下位露胎
第85図17	12次1区鶴香時	端反碗	陶器	内外不明な釉（発色不良でにぶい淡灰褐色）で口縁部2度掛け　外面にイッチンで花文	外面下位露胎　高台外端ケズリ
第85図18	17次3区P424	花弁口縁碗	陶器	内外濃緑灰色の灰釉に透明釉上掛け	畳付にアルミナ付着
第85図19	13次1区北3攪乱	猪口	陶器	第Ⅴ集第65図92	
第85図20	12次土坑140	猪口	陶器	内外透明釉（黄灰白～黄橙灰白色）	外底まで施釉　畳付は釉剥ぎでわずかに砂目付着
第85図21	22次土坑34	角形向付	陶器	本書掲載第37図8	
第85図22	12次1区土坑32E5	半筒形碗	陶器	外面不明な釉（発色不良でにぶい灰茶褐色）	外面釉薬の濃淡意匠のためのケズリ　内面ナデ
第85図23	17次3区遺構面	天目形碗	土師質（1次焼成）	内外黄橙色で、墨書で外面に若松文、内面に〇文を描く	1次焼成品を使用している
第85図24	12次土坑2	小皿	陶器	第Ⅲ集第368図4	
第85図25	12次土坑103	小皿	陶器	第Ⅲ集第398図2	
第85図26	12次1区C－7土坑14	小皿	陶器	内面淡緑灰色の灰釉　外面露胎	外底ヘラ切り
第85図27	藤崎遺跡35次	小皿	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図28	12次2区中2区P270	小皿	陶器	内外緑黄灰色の灰釉	外底釉拭き取り　高台釉剥ぎ
第85図29	12次3区土坑108	小皿	陶器	外面濃緑灰色の灰釉の上に灰白色の藁灰釉 内面灰白色の藁灰釉	畳付釉剥ぎ
第85図30	藤崎遺跡20次SK10	花形皿	陶器	『藤崎遺跡8』掲載	
第85図31	12次3区土坑109	花形皿	陶器	内外藁灰釉（灰白色）花弁部に灰釉（緑灰色）	高台釉剥ぎ砂目付着　見込みにハリ目跡　完形
第85図32	12次土坑2	皿	陶器	第Ⅲ集第368図6	
第85図33	12次土坑103	皿	陶器	第Ⅲ集第398図5	
第85図34	12次1区土坑3	皿	陶器	内外発色不良の鉄釉	外面ケズリ　見込みオキ目　外底釉剥ぎ・中央削り出し
第85図35	13次2区P83	皿	陶器	内外褐釉（黒色＋褐色）の面に灰釉 （灰白色）のかけ流し	把手部欠損　外底釉剥ぎ
第85図36	12次3西拡張攪乱	皿	土師質（1次焼成）	内外黄灰色	見込みに櫛り目　外底に墨書　素焼皿にしては 硬質なので、このまま使用した可能性もある
第85図37	13次土坑5	変形皿	陶器	内外灰釉（緑灰色）　内面口縁部に鉄釉（褐色）	型押し成形　外底ヘラ切り露胎
第85図38	22次土坑41	変形皿	陶器	本書掲載第36図11	
第85図39	13次P12	変形皿	陶器	内外灰（釉黄緑灰色）	型押し成形　うちわ形
第85図40	17次3D区P561	小皿	土師質（1次焼成）	内外黄白色　変色なし	外面体部下位ヘラケズリ上位ミガキとナデ 外底ヘラ切り　ほぼ完形
第85図41	17次3C区P590	小皿	土師質（1次焼成）	内外黄白色　変色なし	外面体部下位ヘラケズリ上位ナデ　外底ヘラ切り　完形
第85図42	藤崎遺跡35次	中皿	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図43	12次3区北1区攪乱10	小皿	土師質（1次焼成）	内外明黄灰色　変色なし	型押し成形　外面体部下位ヘラケズリ上位ナデ
第85図44	藤崎遺跡35次	変形皿	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図45	藤崎遺跡35次	変形皿	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図46	藤崎遺跡35次	変形皿	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図47	12次土坑87	小皿	陶器	第Ⅲ集第395図5を改変	
第85図48	12次3区北1区攪乱10	変形皿	陶器	内外灰白色の藁灰釉	菊花形　低火度　高台削り出し　外底釉剥ぎ
第85図49	12次2区南P268	皿	陶器	内外緑灰褐色の灰釉の上に灰白色の藁灰釉上掛け	高台削り出しで露胎
第85図50	12次1区B-7P180・181＋ 1区西6排水路	皿	陶器	内外暗緑灰褐色の灰釉の上に灰白色の藁灰釉上掛け	高台削り出し　外面下位から外底露胎
第85図51	20次土坑82	皿	陶器	第Ⅷ集第117図13	二彩掛け分けで肥前陶器を模したもの
第85図52	22次土坑45	皿	陶器	本書掲載第30図9	
第85図53	17次2区溝11No.2	台付皿	陶器	外面灰釉（暗緑灰色）　内面藁灰釉（灰白色）	高台削り出し　外底釉剥ぎ　東峰村低尾城跡に近似例あり
第85図54	12次1区B北拡張区遺構面	皿	陶器	鉄釉（茶褐色）の上に褐釉（茶褐色）と藁灰釉（暗緑灰色）の流し掛け	花弁口縁　外底釉剥ぎ
第85図55	22次土坑45	皿	陶器	本書掲載第39図7	
第85図56	17次2A区遺構面	変形皿	陶器	内外灰釉（青緑灰色）	型造りによる花弁口縁
第85図57	12次土坑45	隅切方形皿	陶器	第Ⅲ集第390図6	
第85図58	12次1区遺構面	隅切方形皿	陶器	第Ⅲ集第403図8	
第85図59	13次土坑？	変形皿	陶器	外面は外底まで鉄釉、内面鉄釉の上に藁灰釉（緑灰白色）	背から5ヶ所を窪ませた花弁形に復元できる 底部に板状圧痕
第85図60	12次土坑45	隅円方形皿	陶器	第Ⅲ集第390図10	
第85図61	12次拡張区土坑124+3区中 3区攪乱	把手付皿	陶器	外面淡緑灰色の灰釉　内面淡緑灰色の灰釉の上に褐釉掛け流し	外底露胎
第85図62	13次P4	把手付 隅折方形皿	陶器	第Ⅴ集第80図37	
第85図63	藤崎遺跡35次	花形小皿	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図64	藤崎遺跡35次	角形向付	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図65	藤崎遺跡35次	花形小皿	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図66	藤崎遺跡35次	隅折方形皿	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図67	12次西拡張区土坑129	把手付皿 把手部	土師質（1次焼成）	内外黄白色　被熱変色なし	丁寧なナデ
第85図68	12次土坑129	花弁口縁鉢	陶器	第Ⅲ集第399図7	
第85図69	13次2区P83	鉢	陶器	内外黄緑灰色の灰釉の上に青緑灰色の藁灰釉上掛け	
第85図70	17次1区土坑12	鉢	陶器	内外緑灰色の灰釉	高台削り込み　外面下位露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ
第85図71	20次土坑21	鉢	陶器	内外青緑灰色の灰釉の上に灰緑白色の藁灰釉上掛け	外底露胎　畳付釉剥ぎ　見込み目跡
第85図72	14次土坑9	鉢	陶器	青緑灰色の灰釉の上に褐釉と茶褐色の褐釉の上掛け	胴上下半部接合　外底部釉剥ぎ

第18表－1　第85図掲載土器・陶磁器観察表

	出土遺構・地点	器種	胎の種類	釉薬・色調	特記事項
第85図73	12次1区攪乱	碗	陶器	外面黄緑灰色の灰釉　内面黄緑灰色の上に濃緑灰色の灰釉上掛け	外面ケズリか
第85図74	12次3区土坑93	碗	陶器	外面暗褐色の鉄釉の上に暗緑灰色の灰釉上掛け	外底露胎　畳付釉剥ぎ
第85図75	12次1区北側拡張区土坑43	碗	陶器	本書掲載第84図59	外面ケズリ状ナデ　外底露胎 見込みに台形目跡7ヶ所　ほぼ完形
第85図76	藤崎遺跡35次	碗	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図77	13次2区P93	碗	土師質（1次焼成）	内外灰白色　使用変色なし	外底回転ヘラ切り　内外ナデ
第85図78	12次3区西拡張区土坑103	碗	土師質（1次焼成）	内外黄橙色　使用変色なし	口縁部折り曲げ　外面不均一なナデと部分的なミガキ
第85図79	20次土坑22	碗	土師質（1次焼成）	内外黄橙色　使用変色なし	内外ケズリ状ナデ
第85図80	12次3区土坑63	碗	土師質（1次焼成）	外面暗茶褐色　内面黄橙色　縁端部で内外の色調が異なるのは伏せ焼きのため	内外ナデ
第85図81	17次1区排土	碗	土師質（1次焼成）	外面黄橙色　内面黄白色　内外の色調が異なるのは伏せ焼きのため	内面ナデ　外面ハケ状ナデ
第85図82	20次土坑36	片口鉢	陶器	第壱集第117図14	
第85図83	12次1区東拡張区土坑43＋遺構面	片口鉢	陶器	内外緑灰色の灰釉　口縁部に青緑灰色の銅緑釉を上掛け	外面下位釉剥ぎ　注口部のみ欠損
第85図84	12次3区中3区遺構面	片口鉢	陶器	外面茶灰褐色の灰釉　内面は青緑灰色の銅緑釉を上掛け	口縁部に押さえによる突起
第85図85	12次3区中5区攪乱	片口鉢	陶器	内外黄緑灰色の灰釉	外面下位釉剥ぎ
第85図86	12次2区中5区P300	擂鉢	陶器	内外鉄釉（発色不良でにぶい暗灰褐色）	擂り目上端ナデ揃え　擂り目15本以上単位 外底板状圧痕・端部に胎土目跡か
第85図87	12次3区中1区西土坑85	擂鉢	陶器	内外鉄釉（発色不良で暗茶褐色）	擂り目上端ナデ揃え　擂り目12本以上単位 体部外面上位カキ目
第85図88	22次土坑1	擂鉢	陶器	本書掲載第36図12	
第85図89	20次土坑41	鬢盥	陶器	外面灰釉（暗緑褐色）	手捏ね成形　外底露胎
第85図90	17次3区土坑28	碗	陶器	内外灰釉（緑灰色）	外面体部下位露胎　底部穿孔の有無は欠損のため不明 外底に◯に「豊」のスタンプ
第85図91	17次3区近世包含層2	擂鉢	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	擂り目上端ナデ揃え　擂り目6本以上単位　外底ヘラ削り
第85図92	12次西拡張区土坑151	擂鉢	土師質（1次焼成）	内外黄橙色	擂り目上端ナデ揃え　擂り目11本以上単位　外面カキ目
第85図93	17次3区土坑27	擂鉢	土師質（1次焼成）	内外にぶい黄橙色	外面墨らしいものが付着しているが、意図的なものか不明　擂り目8本以上単位
第85図94	12次西拡張区攪乱18	擂鉢	土師質（1次焼成）	内外にぶい橙褐色	擂り目10本以上単位
第85図95	12次3区中1区西土坑84	擂鉢	陶器	内外鉄釉（暗赤茶褐色）	畳付釉拭き取り　擂り目13本以上単位　外面カキ目　◯に「一」のスタンプ　見込みに重ね焼き痕
第85図96	22次3B区攪乱	鬢盥	土師質（1次焼成）	本書掲載第42図10	
第85図97	12次3区中3区攪乱	土鍋	陶器	内外鉄釉（茶褐色）	外面体部上位のみ施釉
第85図98	13次2区西6区攪乱	土鍋	陶器	外面灰釉（緑灰色）　内面鉄釉（茶褐色）	胴下位から外底露胎　見込みに目跡　ハリ目でなく、別個体の脚か
第85図99	22次溝4	土鍋	陶器	本書掲載第42図9	
第85図100	12次1区遺構面	植木鉢	陶器	外面鉄釉（茶褐色）内面灰釉（黄緑灰色）の上に藁灰釉（灰白色）上掛け	外底露胎　見込みに目ハリ跡　胎土手捏器　白泥接合痕
第85図101	12次3区中遺構面	植木鉢	陶器	灰釉（緑灰白色）の上に褐釉（褐色）上掛け	胎土手捏器　縁部でヘラ彫り沈線を施した突帯で縁を表現
第85図102	20次土坑31	植木鉢	陶器	第壱集第117図26	
第85図103	13次1区中3攪乱	植木鉢	陶器	第V集第85図91	
第85図104	12次2区南攪乱	植木鉢	陶器	内外鉄釉（褐色）の上に飴釉（褐色）と藁灰釉（灰白色）を掛け流し	口唇部に拭き取り　畳付に砂目付着　見込みに砂目跡
第85図105	13次P25	植木鉢	陶器	白化粧土の上に透明釉（灰白色）	低火度
第85図106	20次土坑108	植木鉢	陶器	第壱集第119図29	側面に押さえによる窪みは東峰村中野上の原窯跡に近似例あり
第85図107	12次2区37号住居覆土下層＋3区土坑87	植木鉢	陶器	内外面鉄釉（茶褐色）の上に外面灰釉（暗緑灰色）内面藁灰釉（緑灰白色）の上に藁灰釉（灰白色）上掛け	中位に削り出し突帯
第85図108	20次土坑60	植木鉢	陶器	外面褐釉（茶褐色）内面藁灰釉（黄灰白色）上掛け	中位に削り出し突帯　口唇部内縁は押さえで波状
第85図109	12次3区中5区攪乱	土鍋	土師質（1次焼成）	内外黄橙色	
第85図110	藤崎遺跡35次	植木鉢	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第85図111	13次1区中2遺構面	植木鉢	土師質（1次焼成）	内外黄橙色	胴外面中位沈線　下位ケズリ
第85図112	12次3区攪乱	小型植木鉢	陶器	鉄ショウ（茶褐色）の上に灰釉（暗緑灰色）が斑に掛かる退化釉 内面露胎で使用変色あり	低火度で外底に墨書で「北遊亀」と書かれる　穿孔は上下両方から
第85図113	13次3区西拡張土坑103	植木鉢把手部	土師質（1次焼成）	内外黄橙色	表面は接合のための格子目沈線　接合部のナデがあるので剥離したもの
第87図114	12次3区中区攪乱	植木鉢	土師質（1次焼成）	内外黄橙色　使用変色なし	外面ケズリ　内面ナデ
第85図115	12次1区北拡張区溝28	小型植木鉢	陶器	内外黒釉（黒褐色）	外底に◯内に「高」のスタンプ　外底と見込みにアルミナ付着
第85図116	17次3区土坑29	植木鉢	陶器	内外灰釉（暗緑褐色）口縁部藁灰釉（海鼠釉状に窯変）の重ね掛け	側面つまみ出しによる突帯　外底に砂目跡
第85図117	12次3区土坑107	植木鉢	陶器	内外面灰釉（にぶい暗緑灰色）	外面胴下位から外底と内面胴中位は露胎　外底に焼き台の痕跡
第85図118	12次3中区攪乱	植木鉢	陶器	外面褐釉（褐色）の上に灰釉（暗緑灰色）上掛け　内面露胎で暗黄灰色	輪接合痕が残る　側面に押さえによる窪みは東峰村中野上の原窯跡に近似例あり
第85図119	12次土坑2	植木鉢	陶器	第Ⅲ集第368図3	
第85図120	17次3区土坑29	植木鉢	土師質	内外灰褐色	外面カキ目の上に沈線で波状文　口縁部指押さえで花弁状をなす 外底に円柱状脚3あり
第85図121	12次1区土坑3203	植木鉢	陶器	褐釉（茶褐色～黒色）の上に藁灰釉（緑灰白色）上掛け	胴上位に凹線5条
第85図122	12次3区中2区遺構面	植木鉢	陶器	内外鉄ショウの上に藁灰釉（緑灰白色）と灰釉（灰白色）を上掛けする退化釉	
第87図123	13次土坑5	植木鉢	土師質	第V集第71図25	
第87図124	20次土坑48	植木鉢	土師質	第壱集第118図27	
第87図125	12次3区土坑86	植木鉢	陶器	外面灰釉（暗灰褐色）の上に藁灰釉（暗灰白褐色）　内面灰釉（暗灰褐色）	口縁下4条凹線
第85図126	12次1区土坑2	植木鉢	陶器	外面鉄釉（暗茶褐色）の上に藁灰釉（黒色）・褐釉（暗褐色）　内面鉄釉（暗褐色）の上に褐釉（暗褐色）	外面胴中位にオサエによる窪み　側面に押さえによる窪みは東峰村中野上の原窯跡に近似例あり
第87図127	22次土坑45	植木鉢	陶器	本書掲載第46図19	
第85図128	12次3区北攪乱	小型植木鉢	土師質（1次焼成）	内外淡橙色	外面・底部ヘラケズリ　内面粘土積み上げ痕あり
第85図129	17次3D溝18北半	植木鉢	陶器	外面灰釉（緑灰白色）　内面・外底露胎	外面胴下位にカンナ痕　外底の花形スタンプは藤崎遺跡35次に近似例あり
第85図130	12次1区C-7土坑13	植木鉢	土師質（1次焼成）	内外黄白色から黄橙色	内面ケズリ　外面ナデ
第85図131	12次1区土坑2	植木鉢	土師質（1次焼成）	外面黄橙色　内面暗灰黄橙色	口唇部の剥落は使用痕
第85図132	22次土坑34	植木鉢	土師質（1次焼成）	内外淡橙色	外面カキ目　内面ケズリ状ナデ
第85図133	12次1区北拡張溝28	植木鉢	土師質（1次焼成）	内外淡茶橙色	内外ナデ
第85図134	12次西拡張区土坑129	植木鉢	土師質（1次焼成）	内外淡黄橙色	内外ナデ
第85図135	12次3区中区攪乱	植木鉢	土師質（1次焼成）	外面橙灰白色　内面灰橙色	欠損部が摩滅しており上下逆にして使用した可能性あり
第85図136	12次3区土坑92	植木鉢	陶器	外面鉄ショウの上に灰釉（濃緑灰色）が斑に掛かる内面黄白色	低火度　外底に「笹」の刻印と焼台痕あり
第85図137	17次1区井戸2	植木鉢	土師質（1次焼成）	内外淡黄橙色	外面中位凹線　内面にケズリ
第85図138	12次西拡張区土坑134	植木鉢	土師質（1次焼成）	内外淡黄橙色	外面胴下部に4本単位の櫛目波状文　内外ケズリ状ナデ
第85図139	12次3中区遺構面	植木鉢	土師質（1次焼成）	内外淡黄橙色	内面の器壁の荒れは使用痕
第85図140	17次3D区遺構面	植木鉢	陶器	内外黒釉（黒色）	体部外面と外底に連続◯文のスタンプ　見込みに重ね焼き砂目痕あり

第18表－2　第85図掲載土器・陶磁器観察表



第86図　高取焼実測図2（49・127～131・138～140・148～152・159～163は1/18、164は1/36、他は1/12）

	出土遺構・地点	器　種	胎の種類	釉薬・色調	特記事項
第86図1	12次3区撹乱6	灯明受皿	陶器（半磁器質）	外面露胎　内面灰釉（緑白灰色）	外底ヘラ切り　口唇部釉拭き取り　定形
第86図2	17次3D区溝40	灯明皿台	陶器	下面露胎　上面灰釉（淡黄緑灰色）	外底糸切り
第86図3	17次3区土坑24	灯明皿台	陶器	内外灰釉（暗緑灰色）	外底ヘラケズリ
第86図4	12次土坑92	秉燭	陶器	第Ⅲ集第396図18	
第86図5	12次西拡張区土坑132	秉燭	陶器	内外鉄釉（暗褐色）	注口部欠損　腰部に半截竹管状の工具で連6形のスタンプ　外底糸切り
第86図6	17次2A区遺構面	秉燭	陶器	内外面灰釉（緑灰色）	口唇部釉拭き取り　注口部・把手欠損
第86図7	12次3区撹乱	台付たんころ形秉燭	陶器	内外面鉄釉（暗茶褐色）＋褐釉（暗褐色）	定形　外底糸切り
第86図8	12次土坑140	仏飯器	陶器	内外藁灰釉（にぶい灰白色）で鉄紋が重掛されている	外底高台ケズリ出し　ほぼ定形
第86図9	17次1区P17	仏飯器	陶器	内面と外面口縁部に褐釉（黒褐色）	外底糸切り
第86図10	17次1区土坑8	髪油壺	陶器	外面灰釉（緑灰白色）の上に灰釉（濃緑灰色）と藁灰釉（灰白色）を花弁状に交互に上掛け	
第86図11	17次3区土坑23	髪油壺	陶器	外面灰釉（緑灰白色）の上に藁灰釉（灰白色）上掛け	定形　外底ヘラ切り
第86図12	12次P270	髪油壺	陶器	第Ⅲ集第402図8	
第86図13	12次土坑87	髪油壺	陶器	第Ⅲ集第395図4	
第86図14	12次3区土坑91	水滴・水注	陶器	内外灰釉（黄緑灰色）	注口部は接合後穿孔　高台釉剥ぎ
第86図15	17次2区土坑17	小型水注	陶器	内外灰釉（黄灰色）	外面下位ケズリ　蓋は型押し成形　胴下位から外底露胎
第86図16	12次3区中1区遺構上面	灯明受皿	土師質（1次焼成）	内外面黄白色　煤付着は使用痕	外面下位ケズリ、上位ナデ
第86図17	17次3区土坑28	灯明受皿	土師質（1次焼成）	内外面黄橙白色　使用変色なし	体部外面ケズリ　外底ヘラ切り　定形
第86図18	12次1区土坑（C−7）	灯明受皿	土師質（1次焼成）	内外面黄白灰色　使用変色なし	体部外面ケズリ　外底ヘラ切り　定形　胎土精良硬質
第86図19	17次3区近世包含層5	灯明皿台	土師質（1次焼成）	内外面黄白灰色　使用変色なし	体部外面ケズリ　外底糸切り・板状圧痕
第86図20	出土地不明	灯明皿台	土師質（1次焼成）	内外面黄白橙色　煤付着は使用痕	体部外面ナデ　外底糸切り
第86図21	13次土坑5	秉燭	土師質（1次焼成）	内外面黄白橙色　使用変色なし	体部外面ケズリ　外底ヘラ切り・○に一のスタンプあり
第86図22	12次3中1区土坑85	秉燭	土師質（1次焼成）	内外面黄橙色　使用変色なし	体部外面ナデ　外底ヘラ切り
第86図23	12次1区土坑35	秉燭	土師質（1次焼成）	内外面黄橙白色　使用変色なし	体部外面ナデ
第86図24	12次3区土坑84	秉燭	土師質（1次焼成）	内外面黄橙色　使用変色なし	体部外面ケズリ　外底ヘラ切り・○に一のスタンプあり
第86図25	番崎遺跡35次	家形秉燭	陶器	『番崎遺跡17』掲載	
第86図26	12次3区P336	水滴・水注	土師質（1次焼成）	内外面黄橙白色　使用変色なし	体部外面ケズリ　外底ヘラ切り
第86図27	12次3区土坑91	中型水注	陶器	内外褐釉（褐色）の上に灰釉（緑灰褐色）上掛け	
第86図28	12次3区土坑166	中型水注	陶器	外面鉄釉（褐色）・内面灰釉（緑灰色）の上に飴釉（茶褐色）上掛け	
第86図29	12次土坑2	土瓶	陶器	第Ⅲ集第388図7	
第86図30	12次3中2区遺構面	急須	陶器	外面灰釉（緑青灰色）の上にイッチン・鉄絵による蔓文・草花文　口唇部は白泥上掛け　内面鉄釉（暗茶褐色）	外面下位カキ目　胴下位から外底露胎
第86図31	12次西拡張区土坑129	土瓶	陶器	外面灰釉（暗緑灰色）の上に藁灰釉（灰白色）　内面口縁部は灰釉（緑灰色）、体部は鉄釉（灰茶褐色）	口縁部は釉剥ぎ
第86図32	14次土坑9	土瓶	陶器	外面灰釉（黄緑褐色）の上に藁灰釉（灰白色）　内面露胎	口唇部は釉剥ぎしており蓋目付き　蓋と重ね焼き
第86図33	12次103号土坑	土瓶	陶器	第Ⅲ集第403図11	
第86図34	12次土坑129	中型水注	陶器	第Ⅲ集第399図5	
第86図35	22次10C区遺構面	中型水注	陶器	本書掲載第42図15	
第86図36	17次3C区東側撹乱	イイダコ壺	陶器（焼締）	内外暗茶褐色	ほぼ定形で穿孔は1ヶ所　外底糸切り　底と体部との接合部ケズリ
第86図37	12次3区中1区土坑80	土瓶	陶器	透明釉の上に灰釉（にぶい灰白色）上掛け	外面に○に一のスタンプあり
第86図38	14次近世井戸	土瓶	土師質（1次焼成）	第Ⅵ集第120図31	
第86図39	番崎遺跡35次	土瓶	陶器	『番崎遺跡17』掲載	
第86図40	番崎遺跡35次	中型水注	陶器	『番崎遺跡17』掲載	
第86図41	12次3区北1区撹乱	中型水注	土師質（1次焼成）	内外面明橙色　使用変色なし	外面ケズリ　内面ケズリ後ナデ　底部穿孔の可能性あり
第86図42	12次西拡張区土坑129	中型水注把手	土師質（1次焼成）	内外面黄橙色　使用変色なし	欠損部は沈線をもつ接合面
第86図43	12次1区北拡張区	イイダコ壺	土師質（1次焼成）	内外面黄橙色　使用変色なし	穿孔あり　外底糸切り
第86図44	12次1区遺構面	小壺（茶入）	陶器	第Ⅲ集第403図12	
第86図45	12次3区撹乱	小壺（茶入）	陶器	第Ⅲ集第403図13	
第86図46	12次1区黒色土包含層	小壺（茶入）	陶器	第Ⅲ集第403図10	
第86図47	12次1区B7区P131−100	小壺（茶入）	陶器	内外面鉄釉（暗茶色）、外面は灰釉（暗緑灰色）上掛け	片面に円形浮文貼り付け
第86図48	12次3中区撹乱・遺構面	灯篭	陶器	内外面鉄釉（暗茶褐色）	宝珠部接合
第86図49	12次2区北区近世包含層	灯篭	陶器	内外面鉄釉（暗茶褐色）	隅丸方形の窓と側面に三日月の透かし穴
第86図50	17次2A区溝11	蓋	陶器	内外灰釉（暗灰白色）	
第86図51	12次土坑45	蓋	陶器	第Ⅲ集第390図8	
第86図52	12次1区B−7押塁3	蓋	陶器	内外面飴釉（黒茶−茶褐色）、外面は藁灰釉（灰白色）と灰釉（暗緑灰色）を交互に上掛け　内面は灰釉（暗緑灰色）のみ上掛け	つまみ部接付釉剥ぎ
第86図53	13次2区北7遺構面	蓋	陶器	第Ⅴ集第86図102	
第86図54	12次西拡張区遺構面	蓋	陶器	外面灰釉（黄緑灰色）	内面釉拭き取り　定形
第86図55	12次西拡張区土坑	蓋	陶器	外面灰釉（暗緑灰色）の上に藁灰釉（灰白色）上掛け	内面釉剥ぎ　定形
第86図56	12次3区土坑84	蓋	陶器	外面褐釉（茶褐色＋黒色）の上に灰釉（暗緑灰色）	内面釉剥ぎ　つまみ部のみ欠損
第86図57	13次1区東4基礎	蓋	陶器	第Ⅴ集第86図112	
第86図58	12次3区南3区撹乱	蓋	陶器	外面褐釉（暗緑灰褐色）　内面露胎	外底回転糸切り　定形
第86図59	17次3区溝18北半	蓋	陶器	外面灰釉（暗灰白色）　内面露胎	鉄絵で木葉格子文
第86図60	12次3区土坑108	蓋	陶器	露胎の上に灰釉（緑灰白色）の流し掛け	外底回転ヘラ切り　定形
第86図61	12次3区北1区撹乱10	蓋	陶器	褐釉（茶褐色＋黒色）の上にイッチンを掛けた後灰釉（暗緑灰色）上掛け	外底糸切り
第86図62	13次1区南4酒樽埋	蓋	陶器	第Ⅴ集第86図100	
第86図63	13次1区北3基礎	蓋	陶器	第Ⅴ集第86図101	
第86図64	17次3区土29	灯篭	土師質（1次焼成）	内外面にぶい黄橙色　天井内面に煤付	天井部とつまみ部で接合　月と星の透かし穴がある
第86図65	番崎遺跡35次	鍋蓋	陶器	『番崎遺跡17』掲載	
第86図66	番崎遺跡35次	土瓶蓋	陶器	『番崎遺跡17』掲載	
第86図67	番崎遺跡35次	土瓶蓋	陶器	『番崎遺跡17』掲載	
第86図68	番崎遺跡35次	土瓶蓋	陶器	『番崎遺跡17』掲載	
第86図69	番崎遺跡35次	蓋	陶器	『番崎遺跡17』掲載	
第86図70	12次土坑2	瓶（ペコカン徳利）	陶器	第Ⅲ集第388図9	
第86図71	17次3区P407	徳利	陶器	外面肩部白泥刷毛→黒釉刷毛目　上位黒釉→ヘラ彫り→イッチンの上に呉須　中位白泥刷毛→ヘラ彫り　最後に全体に透明釉　内面透明釉のみ	藩内に作られていることから、献上品と思われる
第86図72	22次土坑45	人形（布袋）徳利	陶器	本書掲載第40図36	
第86図73	12次3区中区撹乱	人形（布袋）徳利	陶器	外面鉄釉（茶褐色）　内面露胎	外面カキ目　胴中位を窪ませて型造りの布袋を貼り付け
第86図74	22次ピット30	瓶	陶器	本書掲載第42図14	
第86図75	13次1区北3撹乱	瓶	陶器	第Ⅴ集第86図120	
第86図76	14次近世井戸	瓶	陶器	第Ⅵ集第118図14	米峰村金蔵様墓1号墓跡に類例あり
第86図77	13次2区南3撹乱	瓶	陶器	外面イッチンの上に灰釉（暗緑灰色）上掛け　内面灰釉（発色悪く暗緑灰白）	外面胴下位は露胎で釉掛け時の指跡あり　外底糸切り・墨書あり（判読不明）
第86図78	22次土坑45	瓶	陶器	本書掲載第40図35	
第86図79	12次土坑129	瓶	陶器	第Ⅴ集第86図119	
第86図80	12次1区遺構面	油徳利	陶器	内外面褐釉（褐色）	胴下位に蓋目付着　把手欠損　外底糸切り　口縁は番崎例と異なり水平
第86図81	12次土坑129	花瓶	陶器	第Ⅲ集第399図5	
第86図82	12次土坑103	瓶（ペコカン徳利）	土師質（1次焼成）	第Ⅲ集第398図12	
第86図83	13次土坑7	瓶	土師質（1次焼成）	第Ⅴ集第75図4	
第86図84	17次1区排土	人形（布袋）徳利	陶器（焼締）	光沢ある部分は自然釉が掛かる	外底に「日」のスタンプ　胴中位を窪ませて型造りの布袋を貼り付け
第86図85	14次近世井戸	瓶	陶器	第Ⅵ集第120図33	
第86図86	12次1区北拡張区遺構面	瓶	土師質（1次焼成）	内外黄橙色	外面カキ目　内面ケズリ後ナデ　外底未調整
第86図87	22次遺構面	瓶	土師質（1次焼成）	内外黄橙色	内外ナデ

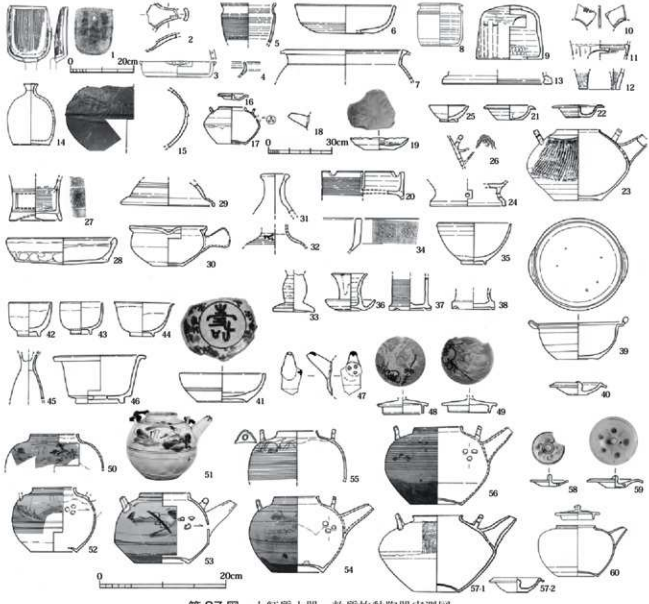
第19表−1　第86図掲載土器・陶磁器観察表

成段階で流通したものであろう。第87図22は21の型式が施釉されたもので、第87図23とセットを成す。21も本来このタイプの土瓶とのセットであろう。23は野間焼に比定されている第87図57－1と同じ飛鉋文だが、底部形状とセットになる蓋の形状が異なっているので野間焼ではない。

	出土遺構・地点	器　種	胎の種類	釉薬・色調	特記事項
第86図88	22次土坑34	瓶	土師質（1次焼成）	内外橙色	外底ヘラケズリ　外面ケズリ
第86図89	12次西拡張区土坑149	壺	土師質（1次焼成）	外面不明（発色不良でにぶい暗青緑色）　内面露胎	釜は焼成後の粗いヘラ彫り
第86図90	17次1区土坑7	油徳利	土師質（1次焼成）	内外黄白色	外底面未調整
第86図91	12次2区中2区P270	神酒徳利	陶器	灰釉（緑灰色）の上に灰釉（灰白色）上掛け　内面不明	外底ヘラケズリ　定形
第86図92	13次2区南3攪乱遺構面	仏花瓶	陶器	灰釉（緑灰色）　内面・底面露胎	底面未調整
第86図93	12次3区南3遺構面上面	仏花瓶	陶器	内外灰釉（緑灰色）の上に口縁に灰釉（灰白色）上掛け　底面露胎	外底糸切り　定形
第86図94	14次表採	仏花瓶	陶器	内外灰釉（緑灰色）、外面上半は2重掛け	内面ケズリ状ナデ
第86図95	13次2区西1攪乱	仏花瓶	陶器	内外鉄釉（茶褐色）の上に灰釉（濃緑灰色）掛け流し	
第86図96	12次3区西拡張区攪乱	仏花瓶	陶器	外面銅緑釉（発色不良で青緑色）	外底釉剥ぎ　外底糸切り　ほぼ定形
第86図97	22次土坑34	壺	陶器	内外灰釉（暗茶灰褐色）の上に藁灰釉（灰白～緑灰褐色）掛け	外底糸切り　口縁部は灰落としとして使用されたため打ち欠かれている
第86図98	12次土坑103	壺	陶器	内外鉄釉（茶褐色）　外底鉄ショウ	外底糸切り
第86図99	13次2区南2攪乱	壺	陶器	内外鉄釉（暗茶褐色）に灰釉（濃緑～淡緑色）上掛け	高台削り出し　畳付は釉剥ぎ
第86図100	17次3区P405	花生	陶器	内外灰釉（緑灰～暗茶灰褐色）	外底釉剥ぎ　ほぼ定形
第86図101	17次1区土坑2東一括	花生	陶器	内外鉛釉（暗黒褐色）	外底釉剥ぎ
第86図102	17次3区土坑27上層	花生	陶器	内外灰釉（淡緑灰色）に灰釉（青灰白色）の上掛け	外底ヘラケズリ　内外ケズリ
第86図103	14次土坑9	花生	陶器	内外灰釉（淡緑灰色）	外面の沈線は浮文接合のため　外底糸切り・外縁釉剥ぎ
第86図104	12次3区土坑78	花生	陶器	内外黒釉　口縁部に灰釉（灰白色）上掛け	胴面の突帯は竹を模したもの　平坦にした面に穿孔があることから壁掛けとわかる
第86図105	13次1区南9遺構面	花生	陶器	内外灰釉（濃緑灰色）に灰釉（灰白色）上掛け	胴面の突帯と窪みの間の浮文は竹を模したもの　外底砂目付着・釉剥ぎ
第86図106	12次3区土坑57	掛花生	陶器	内外灰釉（暗緑灰色）に灰釉（灰緑白色）上掛け	胴面の突帯と窪みの間の浮文は竹を模したもの　背面楕円形であることから壁掛け
第86図107	13次P4	花生	陶器	外面灰釉（暗緑黄灰色）に木灰釉（濃緑灰色）上掛け　内面鉄ショウ	内面ケズリ状ナデ
第86図108	20次土坑14	筆立	陶器	第Ⅷ集第117図24	
第86図109	12次土坑67	神酒徳利	土師質（1次焼成）	内外黄橙色	外底糸切り
第86図110	22次土坑34	仏花瓶	土師質（1次焼成）	本書掲載第37図15	
第86図111	13次土坑3	仏花瓶	土師質（1次焼成）	内外黄橙色	外面カキ目　内面ケズリ状ナデ
第86図112	12次1区攪乱D－5	仏花瓶	土師質（1次焼成）	内外黄橙色	内外ナデ　浮文貼り付け痕
第86図113	藤崎遺跡35次	仏花瓶	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第86図114	17次3区P414	仏花瓶	土師質（1次焼成）	内外淡黄橙色	外面ナデ　内面ケズリ状ナデ　外底糸切り
第86図115	13次土坑5	花生	陶器	第Ⅴ集第70図18の改変	
第86図116	藤崎遺跡35次	花生	陶器	『藤崎遺跡17』掲載	
第86図117	12次3区西拡張土坑103	香炉・火入れ	陶器	外面灰釉（黄緑灰色）に灰釉（濃緑灰色）上掛け　内面は口縁部のみ外面と同じ施釉	外面縦沈線による区画の口縁部に円形浮文　内面ケズリ
第86図118	22次土坑45	香炉・火入れ	陶器	本書掲載第40図10	
第86図119	17次1区土坑10	火もらい	陶器	外面灰釉（黄緑灰色）口縁灰釉（灰白色）上掛け　内面は上半のみ灰釉（黄緑灰色）	内面ケズリ　胴下位釉剥ぎ　外底糸切り後ナデ　蓋1透かし穴3
第86図120	17次耕土	火もらい	陶器	外面褐釉（茶褐色）の上に天井部のみ灰釉（緑灰色）上掛け　内面は褐釉（茶褐色）	内面ケズリ　蓋1透かし穴1
第86図121	12次土坑45	火もらい	陶器	第Ⅲ集第390図7	
第86図122	13次2区南3攪乱	火もらい	陶器	内外褐釉（暗褐色）を対面に斜めに掛けて山形に露胎部を残しそこにイッチンの水玉を貼り付け、高台部に施釉	高台に円形穿孔あり　畳付は施釉で外底に重ね焼き痕　内面ケズリ
第86図123	12次P180・181	火もらい	陶器	第Ⅲ集第402図7	
第86図124	14次近世井戸	火鉢	陶器	第Ⅵ集第120図38	
第86図125	13次土坑6	火鉢	陶器	第Ⅴ集第72図11	
第86図126	12次土坑93	火鉢	陶器	第Ⅲ集第397図7	
第86図127	13次1区北3攪乱	火鉢	陶器	第Ⅴ集第88図131	
第86図128	17次3区土坑29	火鉢	陶器	内外灰釉（暗緑褐灰色）の外面に藁灰釉（灰白色）	内面の割れ目に穿孔して植木鉢に再利用
第86図129	12次3区西土坑166	火鉢	陶器	内外鉄釉（茶褐色）の上に灰釉（緑灰色）、その上に藁灰釉（灰白色）を波状に上掛ける流し釉	外底ヘラ切り　外面にヘラ彫りがあるが欠損のためモチーフ不明
第86図130	13次1区東7攪乱	火鉢	陶器	第Ⅴ集第88図133	
第86図131	12次1区B7P180・181	火鉢	陶器	内外灰釉（黄緑灰色）に藁灰釉（灰白～緑灰色）上掛け	桶形を模しており、ヘラ彫り沈線を施した突帯で脚を表現
第86図132	12次土坑129	香炉・火入れ	土師質（1次焼成）	第Ⅲ集第399図4	
第86図133	出土地不明	香炉・火入れ	土師質（1次焼成）	内外黄灰白色	外面横位カンナ上にイッチン（灰白色）　外底に「か」の線刻
第86図134	12次2区南2区攪乱	火もらい	土師質（1次焼成）	内外黄橙色　使用変色なし	高台に円形穿孔が2つ並び、対面にもある　外底ヘラ切り
第86図135	12次溝25	香炉・火入れ	土師質（1次焼成）	内外黄白色　使用変色なし	外面カキ目　内面ナデ
第86図136	12次3北1区攪乱10	香炉・火入れ	陶器	外面灰釉（緑灰色）・内面外底露胎	外面にヘラ彫りの竜目文　内ヶ磯窯出土の同種文様に近い　外底□に「キ」のスタンプ
第86図137	12次1区土坑42	火鉢	陶器	内面灰釉（にぶい黄緑色）　外面露胎	外底ヘラ切り　○のスタンプ　見込みにヘリ打痕
第86図138	12次3区中区攪乱	火鉢	土師質（1次焼成）	内外黄橙色　使用変色なし	内外ナデ
第86図139	13次2区P80	火鉢	土師質（1次焼成）	内外黄白色　使用変色なし	桶形を模しており、ヘラ刺突で沈線を施した突帯で脚を表現
第86図140	12次3区西拡張攪乱	火鉢	土師質（1次焼成）	内外黄橙白色　使用変色なし	桶形を模しており、ヘラ刺突で沈線を施した突帯で脚を表現
第86図141	12次3区南11	小型壺	陶器	第Ⅲ集第403図9	
第86図142	12次西拡張区土坑156	小型壺	陶器	内外鉄釉（暗茶褐色）の上に灰釉（緑灰白色）、内面口縁部は鉄釉（暗茶褐色）口縁下露胎	外面口縁下ケズリ
第86図143	17次3区近世包含層5	壺蓋	陶器	外面灰釉（緑灰色）に藁灰釉（淡黄緑灰色）上掛け　内面露胎	内外ナデ
第86図144	12次土坑86	壺	陶器	第Ⅲ集第394図30	
第86図145	12次溝70	壺	陶器	第Ⅲ集第401図8	
第86図146	17次1区P42付近攪乱中	小型壺	陶器	内外面灰釉（緑灰色）に藁灰釉（灰白色）上掛け　内面露胎	外面肩部に花弁形のワラ灰釉イッチン掛け　外底釉剥ぎ　定形
第86図147	12次土坑2	小型壺	陶器	第Ⅲ集第388図1	
第86図148	12次3区土坑92	中型甕	陶器	本書掲載第85図17	
第86図149	12次土坑42	中型甕	陶器	第Ⅲ集第389図8	
第86図150	14次石組2	中型甕	陶器	第Ⅵ集第115図11	
第86図151	20次土坑89	中型甕	陶器	内外面灰釉（緑灰色）に外面は口縁部に藁灰釉（灰白色）上掛け	肩部と胴下位に沈線　5弁花浮文とヘラ彫り唐草文　内面肩部に鎹着痕あり
第86図152	22次遺構面	大型甕	陶器	内外鉄ショウ（暗茶褐色）	外面縦ハケ　外面口縁部から内面ナデ
第86図153	12次2区攪乱	窯道具（天秤）	陶器（焼き締め）	内外にぶい灰褐色	外面カキ目　内面ケズリ状ナデ　文字の線刻があるが判読できない
第86図154	12次3区土坑87	窯道具（天秤）	陶器（焼き締め）	外面暗茶褐色　内面にぶい暗黄灰色	外面カキ目　内面ケズリ状ナデ　「八」字の線刻　上下欠損
第86図155	17次3区土坑23	窯道具（天秤）	陶器（焼き締め）	外面赤茶褐色　内面黄灰色	外面カキ目状ナデ　内面ナデ　文字の線刻があるが判読できない
第86図156	12次1区東側調査時	壺蓋	土師質（1次焼成）	内外黄橙色　使用変色なし	外面上半ヘラケズリ下半ナデ　内面ナデ
第86図157	22次P77	壺	土師質（1次焼成）	内外暗橙灰色　使用変色なし	外面ナデ　内面ケズリ
第86図158	17次2A区遺構面	壺	土師質（1次焼成）	内外橙色　使用変色なし	外面ケズリ状ナデ　内面ケズリ　底部に焼成前穿孔あり植木鉢として使用
第86図159	12次西拡張区土坑129	中型甕	土師質（1次焼成）	外面黄橙色　内面使用変色で橙褐色	外面沈線上に5弁花を指頭圧痕で押さえ
第86図160	22次P64	中型甕	土師質（1次焼成）	本書掲載第43図23	
第86図161	17次1区土坑13	小型甕	土師質（1次焼成）	外面黄橙褐色　内面暗茶褐色　使用変色なし	外面カキ目状ナデ　内面ケズリ状ナデ
第86図162	12次西拡張区土坑148	中型甕	土師質（1次焼成）	内外面橙褐色　使用変色なし	内外ナデ
第86図163	17次3区P202	中型甕	土師質（1次焼成）	外面にぶい暗黄灰褐色　内面黄橙色　使用変色なし	内外ナデ
第86図164	一本松2号窯跡	大型甕	土師質（1次焼成）	『一本松2号古窯跡』掲載	

第19表－2　第86図掲載土器・陶磁器観察表

次に野間焼だが、安政３（1856）年に藩主の命で、京都の陶工佐々木興三らを招いて興起したとされており、汽車土瓶や土瓶、行平などの雑器を焼いている。京都の陶工が製作したためか、土瓶は関西系の山水文土瓶と飛び鉋装飾の伊賀土瓶に加えて郷土色の強いイッチン描きのものがあるという。『福岡藩民政誌略』には野間焼について、「須恵の陶人を招いて野間の土で作った」としている。第87図51・57は春日市門田遺跡（福岡県教育委員会1978）出土の土瓶で、野間焼に比定されている。これらの野間焼とされる土瓶は型作りであるため、器壁が薄く、底部・胴部に同じ型を用いているので形状に共通する特徴がある。また、山水文土瓶の場合、野間焼の土瓶に特徴的で口縁下の唐草文の文様帯は他の山水文土瓶には見られない。この他、窯の製品とされている仏飯器の口縁部の一部を摘まみだして作り出す注口もほかでは見られない。（太宰府市教育委員会1992）　これらの要素から、西新町遺跡の資料を検討すると、第87図50～52・54の土瓶に口縁下の唐草文文様帯が見られる。口縁をつまみ出す技法は第87図46に見られ、これと同じ釉をもつのが第87図43～47である。いずれも黄色の灰釉であるが釉薬がガラス化しており胎は陶質に近い。同様の高い焼成温度で焼かれ



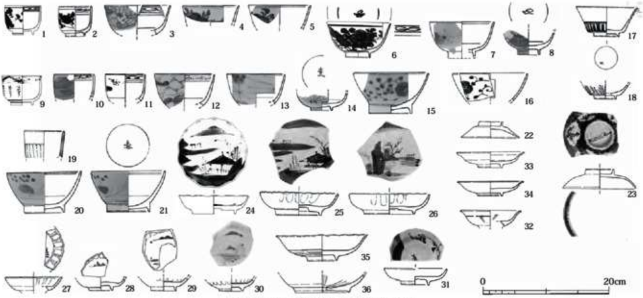
第87図　土師質土器・軟質施釉陶器実測図
（1～5・7・9～13・16・18・19・24・27は1/12、17は1/18、他は1/6）

挿図番号	出土遺構・地点	種　別	器　種	色調・釉	特記事項
第87図1	12次3区西拡張区攪乱	土師質土器	十能	第8集報掲載第401図7	
第87図2	12次3区中1区土坑45	土師質土器	十能把手	内外にぶい黄橙褐色	内外ナデ　底部は粗いナデ
第87図3	12次27号住居	土師質土器	焙烙	第Ⅴ集報掲載第88図3	
第87図4	12次3区土坑3	土師質土器	焙烙	内外橙茶褐色　使用変色なし	内外ナデ　底部は粗いナデ
第87図5	12次3区土坑46・住居37覆土下部	土師質土器	中甕	内外黄橙色	外面肩部以下カキ目、上段ナデ　内面ケズリ
第87図6	22次1A-2校舎基礎	土師質土器	鉢	内外黄橙色	外面下段ケズリ　外底ヘラ切り
第87図7	12次3区南11区P329	土師質土器	大甕	内外橙色	内外摩滅著しく調整不明
第87図8	12次土坑149	土師質土器	壺	第8集報掲載第401図6	
第87図9	14次土坑9	土師質土器	行火	内外黄橙褐色　使用変色なし	窓の裏に方形透かしが簾状に入る　天井部で接合　底部と天井部内面にオサエ痕　外面丁寧なミガキ状ヘラナデ
第87図10	12次3区土坑89	土師質土器	焜炉	内外黄橙褐色　使用変色なし	窓の上にヘラ彫りの文字があるが判読できない　外面ケズリ内面ナデ
第87図11	12次土坑89	土師質土器	焜炉	内外橙色　使用変色なし	外面楕円形の窓の周囲は幅の広いケズリ　内面ハケ　サナを支える突帯貼付
第87図12	12次3区北区攪乱10	土師質土器	焜炉	内外にぶい黄橙褐色　使用変色なし	外面オサエ、内面横ハケ　下端部は内外ケズリ
第87図13	12次3区中区攪乱	土師質土器	火鉢	内外黄橙褐色　使用変色なし	内外ナデ　底部は粗いナデ
第87図14	12次土坑103	土師質土器	小型壺	第8集報掲載第398図3	
第87図15	14次土坑9	軟質施釉陶器	土瓶	外面鉄釉（赤褐色）　内面灰釉（発色悪く緑灰白色）	外面の文様は鉄釉を模倣したもので、外面の鉄釉は色調を再現している　胎は明灰色で土師質
第87図16	17次P467	軟質施釉陶器	土瓶蓋	上面柿釉（黄橙褐色）下面橙色	下面は焼成のため器面が摩滅している　胎は明灰色で土師質
第87図17	17次P467	軟質施釉陶器	土瓶	外面上半柿釉（黄橙褐色）外面下半から内面橙色	外底は煤付着　注口過焼　把手は型造り　ほぼ完形
第87図18	14次土坑9	陶器（土師質）	土瓶注口部	釉胎（発色悪く明灰白色）内面黄橙色	内外ナデ
第87図19	12次3区北1区攪乱10	土師質（1次焼成品）	小皿	本書掲載第36図11	
第87図20	20次A6区攪乱	土師質	窯道具（匣鉢）	内外明黄灰色	外面カキ目　半円形と方形の透かし孔　精良な胎土で硬質
第87図21	12次3区南1区遺構面	土師質（1次焼成品）	土瓶蓋	上下黄橙色　使用変色なし	上面ナデ　下面・底部回転ヘラケズリ
第87図22	12次土坑56	軟質施釉陶器	土瓶蓋	第8集報掲載第392図12	
第87図23	12次土坑56	軟質施釉陶器	土瓶	第8集報掲載第392図13	
第87図24	12次1区土坑32E5	土師質（1次焼成品）	火鉢	外面橙白色内面黄白色　使用変色なし	外面カキ目状ナデ　内面ナデ　円形穿孔は胴部から3ヶ所
第87図25	13次2区南3区攪乱遺構面	軟質施釉陶器	小杯	内外灰釉（黄緑灰色）　軟質で土師質で黄灰白色	外面下半露胎　高台内ケズリ
第87図26	12次3区土坑87	軟質施釉陶器	土瓶	内外灰釉（黄緑灰色）	軟質で土師質で黄灰白色　内面露胎　把手型押しによる印刻
第87図27	17次3区近世包含層2	土師質土器	七輪	外面にぶい黄灰色　内面暗黄灰色　サヤ部赤化	外面ナデ内面ヨコハケ　外面に楕円内「平蔵」のスタンプ　高台の透かしは孤状で3ヶ所
第87図28	17次3区P364	土師質	鉢	内外黄灰色	外面ナデ下段オサエ　内面ナデ　口縁部を内側に折り曲げ　外底板状圧痕未調整　歪みがあり、調整粗い
第87図29	12次3区土坑87	土師質	土瓶蓋か	内外黄白色　使用変色なし	内外ナデで外面中段に沈線
第87図30	17次3区東部遺構面	軟質施釉陶器	行平	内外黄橙灰色　内面体部透明釉掛けだが使用により灰色に変色　把手上面に褐釉（茶褐色）掛け	把手は中空で穿孔あり　外底ヘラ切り
第87図31	12次西拡張区土坑149	土師質	瓶	内外にぶい黄白色	口縁部ナデ内面回転シボリ
第87図32	12次3区土坑87	土師質	瓶	内外灰白色	外面ミガキ状のヘラナデ　内面ナデ　外面に墨書
第87図33	12次1区西6排水路	土師質	器種不明製品	内外灰白色　変色なし	外面ケズリ　底面ヘラ切り　中実
第87図34	12次1区東拡張攪乱土	軟質施釉陶器	蓋か	外面露胎（黄白色）　内面灰釉（黄灰色）	外面ナデの上に「博多五町田平造」「一級試験済―博多物産」のスタンプ
第87図35	13次P133	軟質施釉陶器	碗	内外灰釉（黄白色）　高台内露胎　高台内外接合後ケズリ	釉薬が他のものとやや異なる
第87図36	13次2区P93	軟質施釉陶器	灯明皿台	外面灰釉（黄緑色）の上に灰釉掛け（濃緑色）	外面・外底・内面は露胎　外底ケズリ出し　内外面ケズリ　口唇部に煤付着
第87図37	17次3区近世包含層2	軟質施釉陶器	筆立か	内外灰白色	外面カキ目　内面ナデ　高台に孤状透かし孔3
第87図38	12次3区土坑86	土師質（1次焼成品）	筆立か	外面灰釉（黄緑白色）　内面　胎は黄灰白色　軟質で黄灰白色	外底に墨書らしいものがあるが判読不明
第87図39	12次3区土坑56	軟質施釉陶器	土鍋	内面から外面口縁部灰釉（明黄灰色）	外面口縁下露胎　見込みにハリ目跡5あり　外面ケズリ、外底ヘラ切り　外底煤付着　完形
第87図40	12次1区遺構面	軟質施釉陶器	土瓶蓋	外面露胎黄灰色に変色本来灰白色　内面灰釉（黄白色）	
第87図41	17次5区土坑20	陶器	鉢	内面灰釉（黄灰白色）の上に鉄絵の寿字と書と朝顔の花	外面露胎　外面ケズリ　砂を多く含む胎土
第87図42	12次3区土坑89	陶器	湯呑み	内外灰釉（明黄灰色）口縁部に銅緑釉上掛け	畳付釉剥ぎ
第87図43	12次3区土坑89	軟質施釉陶器	湯呑み	内外灰釉（明黄灰色）口縁部にグラデーションのない銅緑釉上掛け	外面胴下位にカンナ痕　畳付内外両端から釉剥ぎ
第87図44	12次3西拡張区	軟質施釉陶器	碗	内外灰釉（灰白色）口縁部に灰釉（黄緑灰色）釉上掛け	高台露胎
第87図45	12次3区土坑89	軟質施釉陶器	燗徳利	外面から内面口縁部灰釉（黄灰白色）	口縁をつまんで注口を成形
第87図46	12次3区西拡張区遺構面	軟質施釉陶器	植木鉢	外面から内面口縁部は灰釉（黄灰白色）	内面胴と外面高台部は露胎　ほぼ完形
第87図47	12次1区北拡張区溝35	陶器	土瓶	外面は白泥の上に筒描で施文した後透明釉　内面も透明釉だが褐色は使用変色	
第87図48	13次P83	陶器	土瓶蓋	上面鉄絵の梅樹文の上に白泥刷毛目を施し、最後に透明釉	下面露胎　砂の多い胎土で46と同じ
第87図49	13次1区中1道路跡	陶器	土瓶蓋	上面灰釉（緑灰色）に鉄絵の梅樹文を描き、その上に白泥刷毛目を施し、最後に透明釉	下面露胎
第87図50	14次土坑9	陶器	土瓶	外面灰釉（暗黄灰色）の上ににじんだ鉄絵の山水文　その上にタンパン（濃緑色）掛け　内面透明釉　口唇部は釉剥ぎ	
第87図51	門田遺跡25号近世墓	軟質施釉陶器	土瓶	山陽新幹線第9集掲載図版96-26	
第87図52	12次1区北側拡張区土坑	軟質施釉陶器	土瓶	外面灰釉（暗黄灰色）の上に繊細の鉄絵による山水文　その上にタンパン（濃緑色）掛け　内面露胎で使用変色	外面下段露胎　口唇部釉剥ぎ
第87図53	12次3区南3区P313	軟質施釉陶器	土瓶	外面灰釉（暗黄灰色）の上に鉄絵による簡略化した山水文　その上にタンパン（濃緑色）掛け　内面透明釉	外面下段露胎　口唇部釉剥ぎ
第87図54	22次P83	軟質施釉陶器	土瓶	本書掲載第42図17	
第87図55	12次1区D6土坑16	陶器	土瓶	外面の灰釉（灰白色）を薄く掛け、灰釉（灰白色）を流し掛け、最後ににじんだ鉄絵の山水文　内面口縁部灰釉（黄灰褐色）厚掛け	胴部以下は露胎　口唇部は釉剥ぎ　把手は型造り
第87図56	22次P5	軟質施釉陶器	土瓶	本書掲載第42図16	
第87図57-1	門田遺跡25号近世墓	軟質施釉陶器	土瓶	山陽新幹線第9集掲載第103図29	
第87図57-2	門田遺跡25号近世墓	軟質施釉陶器	土瓶蓋	山陽新幹線第9集掲載第103図29	
第87図58	13次P28	軟質施釉陶器	急須蓋	外面白泥の上に灰釉（濃緑色）の掛と鉄絵	内面露胎　外底糸切り
第87図59	13次1区23-北3包含層	軟質施釉陶器	急須蓋	外面白泥の上に灰釉（濃緑色）の掛と鉄絵	内面露胎　外底糸切り
第87図60-1	12次土坑56	軟質施釉陶器	土瓶蓋	第8集報掲載第392図9	
第87図60-2	12次土坑56	軟質施釉陶器	土瓶	第8集報掲載第392図9	

第20表　土師質土器・軟質施釉陶器観察表

たものに第87図47・55・56がある。

第87図47は41と同様に文様に呉須を使用しており、須恵焼の工人との関係が深い野間焼の製品である可能性がある。第87図55は鉄絵の滲みの特徴が第87図41・50に近い。第87図56は52・54と器形が一致しており、同じ型で作られた可能性が高い。これに対してモチーフの異なる第



第88図　須恵焼実測図（1/6）

	出土遺構・地点	器　種	胎の種類	釉薬・色調	特記事項
第88図1	須恵窯跡採集品	湯飲み	磁器	『筑前の磁器　須恵焼』掲載	
第88図2	12次3区土坑86	湯飲み	磁器	第Ⅱ集第395図2	
第88図3	13次土坑5	端反碗	磁器	透明釉	呉須染付により外面芙蓉文、内面口縁部網状文
第88図4	17次3区近世包含層2	端反碗	磁器	透明釉	コバルト染付により外面芙蓉文
第88図5	20次土坑65	端反碗	磁器	透明釉	コバルト染付により外面芙蓉文
第88図6	12次大土坑	端反碗	磁器	第Ⅱ集第401図2	
第88図7	12次3区土坑？	端反碗	磁器	透明釉	コバルト染付により外面芙蓉文
第88図8	17次遺構面上層包含層	端反碗	磁器	透明釉	コバルト染付により外面芙蓉文　発色不良
第88図9	須恵窯跡採集品	湯飲み	磁器	『筑前の磁器　須恵焼』掲載	
第88図10	12次3区中1区土坑85	湯飲み	磁器	透明釉	発色不良の呉須染付により外面山水文、内面口縁部網状文
第88図11	12次3区西拡張攪乱	湯飲み	磁器	やや暗い透明釉	呉須染付により外面崩れた蝶と花文
第88図12	17次2A区溝13	端反碗	磁器	透明釉	コバルト染付による外面葉花文と変形氷裂文、内面口縁部雷文
第88図13	12次3区土坑87	端反碗	磁器	やや暗い透明釉	呉須染付により外面麻葉文
第88図14	12次3区土坑87	丸碗	磁器	やや暗い透明釉	発色不良の呉須染付により外面麻葉文、見込み寿字文
第88図15	17次1区排土	広東碗	磁器	やや暗い透明釉	呉須染付により外面雪輪花文
第88図16	17次1区遺構面	広東碗	磁器	やや暗い透明釉	発色不良の呉須染付により雪輪花文
第88図17	12次3区北区攪乱10	朝顔形碗	磁器	青味がかった透明釉	呉須染付により外面白抜き変形文、外底に記号化された「スエ」銘
第88図18	17次土坑15	端反碗	磁器	青味がかった透明釉	呉須染付により外面草文
第88図19	12次3区土坑86	湯飲み	磁器	第Ⅱ集第393図28	
第88図20	17次1区排土中	広東碗	磁器	やや暗い透明釉	呉須染付により外面蕪文
第88図21	12次3区北区攪乱10	広東碗	磁器	青味がかった透明釉	呉須染付により側面に蕪文、見込みに寿字文
第88図22	17次1区P17	朝顔形碗蓋	磁器	青味がかった透明釉	
第88図23	12次1区大土坑1（E－6）	碗蓋	磁器	透明釉	コバルト型紙摺り染付により外面に光琳文と窓に蝶と菊文、内面口縁部に瓔珞文、つまみ部に記号化された「スエ」銘
第88図24	須恵窯跡採集品	5寸皿	磁器	『筑前の磁器　須恵焼』掲載	
第88図25	17次2A区遺構面	5寸皿	磁器	透明釉	コバルト染付による見込みに山水文　口唇部染付による口錆
第88図26	13次1区溝3遺構面	5寸皿	磁器	透明釉	コバルト染付による見込みに山水文
第88図27	12次2区中5区攪乱	小皿	磁器	青味がかった透明釉	発色不良の呉須染付により見込みに山水文　菊花形口縁
第88図28	出土地不明	小皿	磁器	暗い緑青灰色の透明釉	発色不良の呉須染付により見込みに山水文　菊花形口縁
第88図29	12次3区土坑86	小皿	磁器	暗い青みがかった透明釉	発色不良の呉須染付により見込みに山水文　菊花形口縁　見込みにハリ目跡
第88図30	12次3区1区攪乱10	小皿	磁器	やや暗い青みがかった透明釉	発色不良の呉須染付により見込みに山水文　菊花形口縁
第88図31	12次3区土坑65	小皿	磁器	灰白色の透明釉	内外面横半分に金錆掛け、透明釉側と見込み中心にコバルト染付による蝶と草文　見込みに蛇ノ目釉剥ぎの上にエナメル塗布
第88図32	12次P366	小皿	磁器	暗い透明釉	内外面横半分に金錆掛け　見込みに蛇ノ目エナメル付着
第88図33	22次土坑45	小皿	磁器	本書掲載第39図6	
第88図34	12次2区土坑166	小皿	磁器	暗い透明釉	見込みに蛇ノ目エナメル付着
第88図35	17次1区排土中	5寸皿	磁器	暗い透明釉	口縁花弁状　見込みに蛇ノ目エナメル付着
第88図36	17次3区溝18南半	5寸皿	磁器	青味がかった透明釉	型押し成形による菊花皿　蛇ノ目高台

第21表　須恵焼観察表

87図53は胴下位に屈曲があり、器形からも判別できる。前述の41は特徴的な底部形状と砂を多く混入する胎をもつものだが、第87図48はこれと同じ胎を持つ。モチーフは第87図49と同じだが、49は高取焼の胎土と同じであり、まったく異なっているので、第87図48は高取焼を模倣した野間焼の可能性がある。

野間焼に比定されている第87図57の飛鉢を施す土瓶とセットになる蓋と同形の第87図39の胎土は焼成温度が低く、胎土が灰白色の土師質である。瓦町焼が野間・高宮の白土を使ったとしているので、野間焼の胎土も同様の灰白色と考えられることから、これも野間焼であろう。

このように瓦町焼をはじめとする博多の製品・野間焼・高取焼の土師質土器を胎土・釉薬で判別してみると、器形上にも差異が見られる。例えば、博多の製品とした行平（第87図30）は野間焼の生産地資料とはまったく異なるものである。土瓶は型作りなので、産地が同じであれば器形の特徴が共通するはずである。野間焼の山水文は球形胴に特徴があり、関西系と思われる第87図53とは器形が異なる。53は釉薬や山水文の描き方も異なっており、同じ釉薬をもつ第87図58・59とともに関西地方からの搬入品だろう。

（3）須恵焼

西新町遺跡から出土する陶磁器のうち、高取焼の陶器は多いものの碗・皿類は磁器が優位を占めている。この磁器が肥前系であることはまちがいないが、肥前産とするには、呉須の滲みや透明釉の青味の強いものが多く見られ、これらの中には福岡の磁器窯である須恵焼の製品が含まれている可能性が高い。

現在、須恵焼は裏銘に窯名が明記されているものと窯跡採集・出土品のみが須恵焼と認定されているため、消費地における須恵焼の判別は裏銘によっている。しかし、大量生産品は裏銘の入らないものがほとんどであるため、無銘のものは須恵焼として認定されてこなかった。

そこでここでは無銘のものを須恵焼と認定するため、肥前製品にはなく、かつ、須恵焼と認定されているものに多く見られるモチーフに着目した。大量生産品には同じモチーフが使用されるため、簡略の仕方に特徴がみられる。裏銘が明記されているものと窯跡採集・出土品（須恵町教育委員会1981）のモチーフから、肥前製品には無い特徴を抽出し、そのモチーフを持つものを須恵焼と判定したい。

まず、第88図19と33は記号化された「スエ」の裏銘があり、第88図34～36は金錆釉という須恵焼に特有の釉を持つので、これについては須恵焼と認定してよい。次に、モチーフの特徴だが、採集品の第88図1と2は本遺跡出土のまったく同じモチーフである。端反碗では第88図3・6が外面文様と口縁部内面の崩れた連続雲文が同じである。花文のみが一致するものが第88図4・5・7・8である。口縁部内面の崩れた連続雲文は肥前製品にも見られるが、須恵焼の場合は楕円が大きく内面口縁部に限定されることで判別できる。第88図12は氷裂文の崩れたもので、氷裂の交点にできる三角形に＋を入れる点で採集品に類例があった。第88図13～16・18・20～22は採集品に類例があった。

第88図3は皿の見込みに描かれる山水文は、横に長い三角形の山と格子と巌形に略された樹木文、傭面から突出する幅の広い帯状の波文に特徴がある。窯跡採集の菊花口縁5寸皿の第88図30と31はまったく同じで、第88図32はモチーフが左右逆配置である。第88図27～30は窯採集品の小皿とほぼ同じものであり、菊花皿の口縁部の屈曲が大きく、発色不良で呉須が暗緑色を呈するところが

特徴的である。

このほか、採集品には白磁の菊花皿があったが、見込みに釉剥ぎ前にアルミナを蛇ノ目に厚く塗布するところに特徴があり、第88図33・34はこれにあたる。見込みにアルミナを塗布する例は肥前産にもあるが、釉剥ぎした上に行っており、釉剥ぎしないまま塗布する例は実見していない。第88図35は小さい波状口縁に、第88図36は間隔の広い菊花文に肥前産にはみられない特徴がある。

現段階で須恵焼と判別できるのは以上だが、これ以外にも須恵焼の可能性の高いものは出土している。現在、須恵町教育委員会によって須恵焼窯跡の確認調査が行われており、今後の生産地資料の充実により新たに確認されるものが出てくるだろう。

第2節　その他の近世・近代遺物

巻頭図版1・Fig. 1・2は肥前系陶磁器だが、完形に近いものと文字資料のあるものを掲載した。

Fig. 1－3は外面に小野小町の和歌が赤絵で書かれたもので、「花の」を起点にすると左回りに「よにふる」「□（い）□（ろ）は」「なかめ」「うつりに」「せし」「けりな」「また」「いたつらに」「ワか身」と配されている。本来の句は「花のいろは　うつりにけりないたつらに　ワか身よにふる　なかめせしまに」の順なので、1つ飛びに配置されている。

Fig. 1－4は外面に3つの和歌が呉須で染付られている。口縁部が欠損しているため欠けた部分が多いが、本来は「小野小町」を起点にして左回りに、「色見えて」「うつろうものハ」「世の中の人の」「心のはなそ」「ありける」「大伴黒主」「思いい出て」「恋しき時は初」「めや」「人知るら」「雁のなきて」「わたると」「在原業平」「月やあらぬ」「春やむかしの」「春ならぬ」「我身」「ひとつはもとの」「身にして」の配置である。大伴黒主の句は「思いい出て　恋しき時は初雁の　なきてわたると人知るらめや」なので順番がずれている。「在原業平」から書き始めて、最後になって場所が足りなくなり、余白を埋めたものと考えられる。見込みには「神歌」とあり、佐賀県有田町年木谷3号窯跡（九州近世陶磁学会2000）に近似例がある。

第90図・Fig. 3～7は土製品・陶磁器製品・土人形である。1～12・17・19・20・22は胎土の特徴が前述の博多産の土師質土器・軟質施釉陶器と一致する。博多出土の素焼人形については山村信榮の研究が詳しい。（山村信榮1988）『福岡藩民政誌略』によると、瓦町焼では文政年間に「土偶人」も作ったとある。また、1866～71年の『博多店運上帳』によると博多には21戸の素焼人形のみの工房があり、素焼陶器を作る工房も含めると26戸にのぼる。素焼人形は型合わせで小型であることから、通常の陶器に比べてロクロを使わず、窯が小さくてすみ、製作・焼成が簡易であったため、器や調理具より

Fig. 1　その他の近世陶磁器1

Fig. 2　その他の近世陶磁器2

第89図
その他の近世陶磁器実測図（1/4）

図版番号	出土遺構・地点	器種	釉質	特記事項	所見
Fig 1－1	12次P336	合子蓋	磁器	高台小さく低いタイプ　呉須染付　見込み文なし　縁部と受け部がほぼ平坦　完形	肥前Ⅴ期
Fig 1－2	17次3区近世包含層4	碗蓋	磁器	呉須染付　見込みに火炎文　側面は湾曲小さく反りなし　完形	肥前Ⅴ期
Fig 1－3	17次1区土坑9	小碗	磁器	２首の和歌を交互に赤絵で施文	肥前系・時期不明
Fig 1－4	13次土坑5	端反碗蓋	磁器	３首の和歌を染付　見込みに「神歌」　年木谷３号窯に近似例あり	肥前Ⅴ期
Fig 1－5	17次3区近世包含層8	大碗	磁器	側面に１対の蝶文　呉須染付　完形	波佐見Ⅴ－４期
Fig 1－6	12次西拡張区土坑140	大碗	磁器	高台小さく低いタイプ　呉須染付　見込み文なし　完形	肥前Ⅳ期
Fig 1－7	12次西拡張区土坑140	大碗	磁器	高台小さく低いタイプ　呉須染付　見込み文なし　貫入あり　完形	肥前Ⅳ期
Fig 1－8	17次3区溝18南半	碗蓋	磁器	見込みに菊花文　縁に反りあり　一部欠損	肥前Ⅴ期
Fig 1－9	12次土坑45	端反碗	磁器	内外貫入を意匠した透明釉　内外無文　完形	肥前系か　19世紀前葉
Fig 1－10	17次3区土坑27上層	せんじ碗	陶器（半磁器）	内外黄灰釉　外面口縁部に鉄絵の竹笹文　完形	肥前系か
Fig 1－11	17次3区P316	朝顔形碗	陶器	内外面白泥の打刷毛目文の上に透明釉　完形　山川地区に類例あり	現川焼　18世紀前半
Fig 1－12	12次北拡張区溝35	大碗	陶器	内外面白泥の打刷毛目文の上に透明釉　完形	現川焼　18世紀前半
Fig 2－1	12次3区北1区攪乱10	小型猪口	磁器	見込み文・裏銘なし　同じモチーフの３回繰り返し　完形	肥前・19世紀前葉
Fig 2－2	12次3区北1区攪乱10	小型杯	磁器	呉須染付　見込み文なし　同じモチーフの繰り返し　完形	肥前Ⅴ期
Fig 2－3	12次3区中2区遺構面	湯飲み	磁器	呉須染付　裏銘・見込み文なし　渦丸文手描き　完形　遺物番号826	波佐見Ⅴ－４期
Fig 2－4	12次3区中2区遺構面	湯飲み	磁器	呉須染付　裏銘・見込み文なし　渦丸文手描き　完形　遺物番号825	波佐見Ⅴ－４期
Fig 2－5	17次3区近世包含層4	小型杯	磁器	呉須染付　完形	肥前Ⅴ期
Fig 2－6	12次1区B－5埋甕2内	小型変形皿	磁器	呉須染付　裏銘なし　完形	肥前Ⅴ期
Fig 2－7	17次3区近世包含層5	湯飲み	磁器	呉須染付　裏銘・見込み文なし　完形	肥前Ⅴ期
Fig 2－8	17次3区近世包含層2	湯飲み	磁器	呉須染付　裏銘・見込み文なし　源氏香文・蝶文あり　完形	肥前Ⅴ期
Fig 2－9	12次西拡張区遺構面	小型変形皿	磁器	呉須染付側面に花文　裏銘「大明年製」　口唇部口錆　ほぼ完形	肥前系・時期不明
Fig 2－10	17次1区P17	筒碗	磁器	呉須染付　裏銘なし　見込みに五弁花文手描き　完形	肥前Ⅴ期
Fig 2－11	12次北拡張区溝37	仏飯器	磁器	内外無文　透明釉　ほぼ完形	肥前系・時期不明
Fig 2－12	17次3区土坑24	筆立	磁器	呉須染付　裏銘なし　一部欠損	肥前系・時期不明
挿図番号	**出土遺構・地点**	**器種**	**釉・材質**	**特記事項**	**所見**
第91図1	12次1区遺構面E－6付近	碗	軟質施釉陶器	肥前系京焼写し　内外灰釉（黄白色）　高台部露胎　見込みに呉須山水文　外底に円形沈線と「林金」銘か	肥前
図版番号	**出土遺構・地点**	**器種**	**釉質**	**特記事項**	**所見**
巻頭4・1－1	12次3区土坑80	湯飲み	陶器	内外面透明釉（飴色から黄灰色）に青緑～緑色の銅緑釉上掛け　高台釉拭き取り　完形　写真のみ掲載	高取か
巻頭4・1－2	17次3区土坑27	腰折れ碗	陶器	外面鉄ショウの上に灰白色の藁灰釉を掛け、その上に口縁部に黄緑褐色の灰釉流し掛け　本書掲載第85図11	高取・時期不明
巻頭4・1－3	12次西拡張区土坑138	大碗	陶器	内外面緑灰色の灰釉　高台釉剥ぎ・砂目付着　外底に螺旋彫り　ほぼ完形　本書掲載第85図15	高取・時期不明
巻頭4・1－4	12次1区I6区近世包含層	大碗	陶器	内外面透明釉（飴色から黄灰褐色）　高台釉剥ぎ・砂目付着　ほぼ完形　本書掲載第85図14	高取か
巻頭4・1－5	12次3区南1区遺構上面	朝顔形碗	陶器	内外藁灰を意匠した灰白色の灰釉　3/4残存　写真のみ掲載	高取・18世紀後葉～19世紀初頭
巻頭4・1－6	12次西拡張区土坑140	朝顔形碗	陶器	内外緑灰色の灰釉　2/3残存　写真のみ掲載	高取・18世紀後葉～19世紀初頭
巻頭4・2－1	17次3区土坑29	鉢	陶器	暗褐色の褐釉の上に緑灰白色の藁灰釉掛け流し　外底板状圧痕と焼き台の融着あり・発色不良の褐釉　底部に焼成時のヒビあり　口縁部1/3欠損　写真のみ掲載	高取・時期不明
巻頭4・2－2	17次3区近世包含層4	火入れ・香炉	陶器	緑灰色の灰釉の上に青緑灰色の上掛け　高台露胎　高台ケズリ出し　口縁部1/2欠損　写真のみ掲載	高取・時期不明
巻頭4・2－3	17次3区土坑29	鉢	陶器	暗緑褐色の褐釉の上に灰白色の藁灰釉掛け流し　外底露胎で略方形の砂目痕3箇所あり　弧状の脚は型造りで3つ付く　側面にオサエによる窪み列　底部の焼成時のヒビに穿孔して植木鉢として使用　ほぼ完形　本書掲載第85図116	高取・時期不明
巻頭4・3－1	12次3区中1区土坑87	水差し	陶器	第Ⅱ集掲載第395図4	
巻頭4・3－2	17次3区土坑23	水差し	陶器	外面緑灰色の灰釉に灰白色の藁灰釉上掛け　底部釉剥ぎ　4/5残存　本書掲載第85図11	
巻頭4・3－3	12次3区北1区攪乱2	花瓶	陶器	内外鉄釉の上に暗緑灰色の灰釉の抜掛け　底部糸切り　口縁部3/4欠損　写真のみ掲載	高取・18世紀中葉～後葉
巻頭4・3－4	20次土坑14	筆立	陶器	第Ⅷ集掲載第117図24	
巻頭4・3－5	12次土坑56	花瓶	陶器	第Ⅱ集掲載第392図6	
巻頭4・3－6	12次3中2区P270	花瓶	陶器	黄緑灰色の灰釉の上に灰白色の藁灰釉上掛け　外底露胎でヘラケズリ　ほぼ完形　本書掲載第86図91	
巻頭4・3－7	12次3西拡張区攪乱	花生	陶器	外面銅緑釉（発色不良で青緑色）　外底露釉剥ぎ　外底糸切り　ほぼ完形　本書掲載第86図96	
巻頭4・3－8	17次3区P405	花生	陶器	灰釉（黄緑灰色）の上に灰白色の藁灰釉上掛け　外底釉剥ぎ　口縁部1/2残存　本書掲載第86図100	
巻頭4・3－9	20次土坑35	ペコカン徳利	陶器	第Ⅷ集掲載第117図17	
巻頭4・3－10	17次3区土坑27	花生	陶器	黄緑灰色の灰釉の上に灰白色の藁灰釉上掛け　外底削り出し高台　底面に螺旋ケズリ　高台畳付釉剥ぎ　口縁部1/6残存　本書掲載第86図102	
巻頭4・4－1	22次土坑41	花形小皿	陶器	本書掲載第36図11	
巻頭4・4－2	12次1区土坑2	小皿	陶器	第Ⅱ集掲載第388図4	高取・時期不明
巻頭4・4－3	12次3区土坑109	5寸皿	陶器	オサエによる花弁口縁　内外面白灰色の藁灰釉の上に口縁に緑灰白色の藁灰釉上掛け　高台釉剥ぎ　見込みにハリ目5箇所あり　完形　本書掲載第85図31	
巻頭4・4－4	12次土坑87	変形小皿	陶器	第Ⅱ集掲載第395図5	高取・19世紀中葉
巻頭4・4－5	12次3区北1攪乱10	小皿	陶器	内面にの黒釉（黒褐色）　底部ヘラケズリ　完形　写真のみ掲載	高取・時期不明
巻頭4・4－6	12次西拡張区土坑129	小皿	陶器	内面に暗緑灰色の灰釉　底部ヘラケズリ　完形　写真のみ掲載	高取・時期不明
巻頭4・4－7	22次P154	5寸皿	陶器		高取・時期不明
巻頭4・4－8	17次3区近世包含層2	皿	陶器	内面褐釉　底面釉剥ぎ　見込みにハリ目5箇所あり 4/5残存　写真のみ掲載	高取・時期不明
巻頭4・4－9	17次2区溝11	高杯	陶器	外面褐釉　内面褐釉の上に灰白色の藁灰釉掛け流し　外面高台脚と内面露胎　口縁部1/3欠損　本書掲載第85図102	
巻頭4・4－10	12次2区南P268	5寸皿	陶器	内外面暗褐色の褐釉の上に灰白色の藁灰釉掛け流し　底面露胎　見込みにハリ目5箇所あり 4/5残存　本書掲載第85図49	高取・時期不明

第22表　その他の近世陶磁器（Fig. 1・2、第89図、巻頭図版4）観察表

多くの工房があったのだろう。実際、博多遺跡 104 次調査（福岡市教育委員会 1987・1992）で土人形の型が出土している。

高取焼の土師質土器と同じ胎土のものは 21 と 23・24 である。21 は底部の穿孔方法が他と異なり、23・24 は手捏ねで粗製品なので、他の土人形とは製作方法が異なる。23・24 は銃を持つ兵士で、17 は帽子の上に辮髪の表現があるので、清国軍兵士だろう。

Fig. 3 － 1 は泥面子で出土数は少ない。「博多おはじき」につながるものだろうか。2 は扁平な恵比寿像で型合わせだが空気抜き孔もない。摩滅しており財布などに入れたものだろう。8・9 は型合わせだが他のものより表現が細かい。土人形にもすでにこのような精巧なものが見られ、Fig. 5・6 のような写実的な土製品も見られる。fig. 6 － 1 は表現が直線的で彩色もないので現代の博多人形とは直接結びつかないが、土人形の製作技術の発展を示す資料である。Fig. 4 は大型の置物で、短毛と短く先端の丸い尻尾と背の曲がった表現から猿と思われ、これも胎土は博多のものである。fig. 6 － 2・3 は猿田彦神社で初庚申大祭に販売される猿面であろう。3 は現在のものに酷似している。

第 90 図 1 は泥面子の型だが、外面に焼成前に線刻した銘がある。般若面の型（第Ⅲ集第 392 図 17）も出土しているが、型の中に入っていた面の胎土は、高取焼の土師質土器とは胎土が異なっていた。第 90 図 2 は型押しで作った面で、男面の裏に線刻で女面を表現したものである。男面側には茶褐色の顔料が塗られており、女面は胎土の色調のままである。男面に彩色することで女面の色の白さを際立たせた工夫がみられる。

Fig. 7 はミニチュア製品であり、Fig. 7 － 9 は胎土が高取焼の 1 次焼成品と同じで、軟質施釉陶器の第 87 図 17 と同じ柿釉であることから、高取焼の窯で作られたものである。fig. 7 － 8 は釉の特徴から博多産である。

第 91 図・Fig. 8 ～ 11 は近代の遺物だが、文字を持つ資料など興味深いものを抜粋して掲載した。御用窯であった東皿山窯は明治になると廃窯となり、明治 33 年になると西新町に県立修猷館高校の前身である旧制中学修猷館が移転してくる。調査区内には校舎跡の石組基礎遺構が残っており、近代の遺物はこれに関連するものであろう。

第 90 図　土製品実測図（1/4）

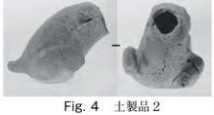


Fig. 4　土製品 2

Fig. 5　土製品 3

Fig. 3　土製品 1

Fig. 7　ミニチュア土製品

Fig. 6　土製品 4

第91図1・2の洋酒瓶は一般集落で出土するものではなく、新橋停車場が置かれた東京都汐留遺跡（東京都埋蔵文化財センター2003）に類例が見られる。

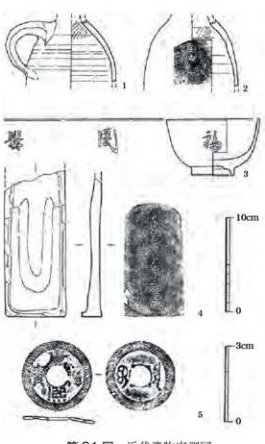
石硯は多く出土しているが、第91図4の赤間関製硯は、多く出土する「赤間関」銘の小豆色を呈するものではなく、緑灰色を呈し、工人銘が入るもので珍しい。また、石硯には裏面に所有者名や購入価格を記したものも多く出土しており、（第Ⅴ集図版47）Fig.10－1・2は生徒の出身小学校がわかる例である。fig.10－2の「草江」やfig.10－1の「姪浜」は福岡市内の地名だが、「夜明村」は現在の大分県日田市である。

修猷館中学には明治35年に寄宿寮が竣工しており、遺跡から出土する薬瓶や貯金壺などは、この寄宿寮の寮生の所有物だろうか。

Fig.8・9の貯金壺は福岡市吉塚本町遺跡（福岡市教育委員会1993）などでも出土しているが、墨書のあるものは珍しい。2点とも貯金開始日が近いが、fig.9－1はカタカナで、2は平仮名であり、書いた内容が異なるので別の人物の所有物である。

銅銭では、西新町遺跡から寛永通宝が多く出土しているが、第91図5は清銭であり、方孔でありながら、鋳造後に正円孔が穿たれた珍しい例なので掲載した。

Fig.11－7は使用された痕跡のある薬爽であり、Fig.11－4～6は磁器製の学生服の釦である。物資不足で金属製品を陶磁器に置き換えた物と考えられるので、これらについては戦時資料として掲載した。



第91図　近代遺物実測図
（5は2/3、他は1/4）

Fig.8　貯金箱1

Fig.9　貯金箱2

Fig.10　ガラス瓶

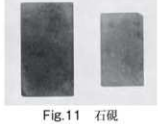


Fig.11　石硯

Fig.12　その他の近代遺物

挿図番号	出土遺構・地点	器　種	胎・材質	特記事項
第90図1	20次土坑46	泥面子の型か	土師質	手捏ね　底面ハケの後ケズリ　「壽」の陰刻あり　黄白色　完形
第90図2	12次3区中3区南遺構面	土製人面	土師質	型押し成形　外面薄い鉄ショウ掛けで焼けた肌を、内面黄白色で白い肌を表現
Fig 3-1	13次1区東4基礎	泥面子	土師質	型押し成形　黄白色　完形　写真のみ掲載
Fig 3-2	17次1区P16	土人形	土師質	型合わせ成形の恵比寿像　扁平で底部穿孔なし　表面摩滅　明橙色　完形　写真のみ掲載
Fig 3-3	17次3区東部遺構面	土人形	土師質	型合わせ成形の大黒天像　接合部ケズリ調整　底部穿孔あり　黄橙色　完形　写真のみ掲載
Fig 3-4	17次1区不明	土人形	土師質	型合わせ成形の大黒天像　接合部ケズリ調整　底部穿孔あり　黄橙色　完形　写真のみ掲載
Fig 3-5	17次3区P203	土人形	土師質	型合わせ成形の虚無僧像　接合部ケズリ調整　底部穿孔あり　橙色　完形　写真のみ掲載
Fig 3-6	17次1区遺構面	土人形	土師質	型合わせ成形の布袋像　接合部ケズリ調整　底部穿孔あり　黄白色　完形　写真のみ掲載
Fig 3-7	17次1区土坑13	土人形	土師質	型合わせ成形の神像　接合部ケズリ調整　底部穿孔あり　黄白色　完形　写真のみ掲載
Fig 3-8	17次遺構面	土人形	土師質	型合わせ成形の花籠を持つ女性像　接合部ケズリ調整　底部穿孔あり　黄橙色　頭部欠損　写真のみ掲載
Fig 3-9	17次出土地不明	土人形	土師質	型合わせ成形の毘沙門天像　接合部ケズリ調整　底部穿孔あり　橙色　頭部欠損　写真のみ掲載
Fig 3-10	17次土坑6	土人形	土師質	型合わせ成形の狛犬　接合部ケズリ調整　底部穿孔なし　黄白色　完形摩滅　写真のみ掲載
Fig 3-11	12次3区西拡張遺構面	土人形	土師質	型合わせ成形の恵比寿像　接合部ケズリ調整　底部穿孔なし　黄白色でざらつきある胎土　完形　写真のみ掲載
Fig 3-12	17次1B区P430	土人形	土師質	型合わせ成形の鳥（鳳凰か）　接合部ケズリ調整　底部穿孔あり　橙色　尾部欠損　写真のみ掲載
Fig 3-13	17次3区土坑19	土人形	陶器	手捏ね成形の人物像（服装から戊辰戦争時の官軍兵士か）　橙色の胎土で緑灰褐色の灰釉かけ一部窯変　脚部欠損　写真のみ掲載
Fig 3-14	12次3区南4区不明	芯押さえ	磁器	型押し成形で頭体別造り　唐人で頭部は鉄釉で体部は透明釉　ほぼ完形　肥前系写真のみ掲載
Fig 3-15	12次3区南4区不明	人面浮文	磁器	型押し成形で接合面は球形　青磁釉　肥前系
Fig 3-16	12次3区溝19	獣面浮文	土師質(1次焼成)	型押し成形で接合面は曲面　橙色
Fig 3-17	17次1区P39	土人形	土師質	手捏ね成形の人物像（帽子と辮髪から日清戦争時の清軍兵士か）　暗黄褐色　脚部欠損　写真のみ掲載
Fig 3-18	12次1区P176（B-7）	土鈴	土師質	手捏ね成形で下部に方形穿孔　内部に土球あり　暗黄橙色　完形　写真のみ掲載
Fig 3-19	17次3区P412	土製鳩笛	土師質	型合わせ成形の鳩で接合部ナデ調整　羽部に赤色顔料付着　黄白色　尾部欠損　写真のみ掲載
Fig 3-20	12次3区西拡張区土坑142	土人形	土師質	型合わせ成形の布袋像　接合部で剥離しており接合部調整不明　底部穿孔不明　黄橙色　写真のみ掲載
Fig 3-21	17次3区近世仮含層7	土人形	土師質	型合わせ成形の首輪をした犬像　接合部ケズリ調整　底部穿孔あり　橙色　完形　写真のみ掲載
Fig 3-22	17次出土地不明	土人形	陶器（土師質）	型合わせ成形の首輪をした小型犬を抱くおぼこ像　接合部ナデ調整　底部穿孔あり　黄白色の胎に黄釉掛け，犬の毛模様の表現で緑灰色の灰釉かけ　完形　写真のみ掲載
Fig 3-23	12次3区中1区土坑67	土人形	土師質	手捏ね成形の人物像（服装から日清戦争時の日本軍兵士か）　橙褐色　脚部欠損　写真のみ掲載
Fig 3-24	12次3区土坑66	土人形	土師質	手捏ね成形の人物像（服装から日清戦争時の日本軍兵士か）　橙褐色　頭部欠損　写真のみ掲載
Fig 4	12次3区土坑87	犬か狼の大型置物	土師質	手捏ね成形　残存高で30.5cm　頭部は接合部で剥落しており，腕と脚は欠損　体部は中空で脚は中実　毛を沈線で表現　黄白色
Fig 5	13次土坑5	土製仏像	土師質	内面はケズリでオサエの痕跡がないので手捏ね成形　脊付部で台座と上底部を接合している　台座は中空で上下に焼成用の穿孔2つ有り　上端部には格子目陽刻があり接合面とわかる　台座と脚部は別造りで接合している　台座上面後部の方形孔は光背部を挿し込むもの　黄白色　写真のみ掲載
Fig 6-1	20次土坑2	土人形	土師質	第Ⅷ集掲載第122図10
Fig 6-2	22次10A区遺構面	猿面	土師質	本書掲載第45図10
Fig 6-3	22次2A-1灰色細砂	猿面	土師質	本書掲載第45図11
Fig 7-1	12次1区近世包含層7	ミニチュア碗	磁器	第Ⅲ集掲載第406図11
Fig 7-2	12次1区E-5土坑28	ミニチュア碗	磁器	手捏ね成形　透明釉掛け　1/4欠損　写真のみ掲載
Fig 7-3	12次西拡張区土坑127	ミニチュア碗	磁器	第Ⅲ集掲載第406図13
Fig 7-4	12次1区土坑91	ミニチュア猪口	磁器	ロクロ水引き成形　透明釉掛け　1/2弱欠損　写真のみ掲載
Fig 7-5	12次1区C-1土坑14	ミニチュア壺	陶器	第Ⅲ集掲載第406図15
Fig 7-6	17次1区土坑8	ミニチュア瓶	陶器（土師質）	型合わせ成形の瓢箪形で接合部ナデ調整　緑灰白色の灰釉　胴下位から外底は露胎　露胎部は黄白色　ほぼ完形　写真のみ掲載
Fig 7-7	12次土坑92	ミニチュア鉢	陶器	第Ⅲ集掲載第406図14
Fig 7-8	12次3D区土坑35	ミニチュア土瓶	陶器（土師質）	上半は型押し成形、下半は底部糸切りからロクロ水引き　接合部はケズリ調整　上半に黄釉掛けその上に緑色の灰釉タンパン掛け　ほぼ完形　写真のみ掲載
Fig 7-9	12次3中区遺構面	ミニチュア瓶	陶器（土師質）	第Ⅲ集掲載第406図17

第23表　土製品・ミニチュア土製品観察表

挿図番号	出土遺構・地点	器種	胎・材質	特記事項	所　見
第91図1	14次土坑9	瓶	陶器	洋酒瓶で外面に「…R・FRCHINGER」のスタンプあり	ヨーロッパ製か
第91図2	13次P83	瓶	陶器	洋酒瓶で片耳付　内面に紫がかった変色があるのでワインボトルか	ヨーロッパ製か
第91図3	17次2A区表土	端反碗	磁器	コバルト手描きによる「福岡縣」銘あり	
第91図4	17次1区大土坑	石硯	凝灰岩製	裏面に「赤間関大原廣見」銘あり	
第91図5	17次2A区遺構面	康熙通宝	銅銭	鋳造後円孔を空けられている	清銭1662年初鋳
Fig 8	17次3区東部遺構面	貯金壷	土師土器	底部糸切り　黄灰白色　上面投入口が打ち割られている以外は完形　側面墨書「光論セザレバ打割ル可カラズ」「持主　乗龍勝」「大正八年九月十日始」底部墨書「乗龍勝」	
Fig 9	17次3区締土中	貯金壷	土師土器	底部糸切り　黄灰白色　上面投入口が打ち割られている　側面は拆欠　側面墨書「此ノ壷に手を接しタル者以後三年ニシテ神罰を受入」「大正八年九月十日より始」「・・一目・・食前」「・・寶・學年・・生」底部墨書「貯金壷」	
Fig 10-1	20次土坑30	瓶	ガラス	緑色　型合わせ成形　「美願水」の陽刻	
Fig 10-2	20次A5区黄茶土	瓶	ガラス	透明　型合わせ成形　「東京尾澤製」「全治水」の陽刻	
Fig 10-3	17次3区東部遺構面	瓶	ガラス	緑色　型合わせ成形　「肥前田代松讃松齢堂製」「特効めぐすり全治清眼水」と格子目の陽刻　コルク栓が残る	
Fig 10-4	17次3区東部遺構面	瓶	ガラス	緑色　型合わせ成形　「タムシトリ」の陽刻	
Fig 11-1	20次土坑107	硯	黒色の片岩製	表面は新欠著しい　裏面に線彫りで「原校地　夜明村夜明尋常高等小学校　尋六太郎良実」「新校地　新浜村新尋常高等小学校　尋六太郎良実」	
Fig 11-2	12次3区土坑122	硯	黒色の片岩製	表面は一部欠損　裏面に線彫りで「草江高等小学校　第貳學年　岡敦」	
Fig 12-1	13次1区東7攪乱	パレット	陶器	型造りに仕切り板を接合したもの　透明釉　外底露胎	
Fig 12-2	13次1区東7攪乱	パレット	陶器	型造り　透明釉　外底露胎　絵の具付着	
Fig 12-3	12次1区P88（E-4）	石筆	蝋石		
Fig 12-4	12次3北1区攪乱	ボタン	磁器	表裏に淡緑色の灰釉　三葉文に「福岡縣」を配した陽刻　遺物番号74	
Fig 12-5	12次3北1区攪乱	ボタン	磁器	表に淡緑色の灰釉　三葉文に「福岡縣」を配した陽刻　遺物番号74	
Fig 12-6	12次3北1区P412	ボタン	陶器か	表裏に淡緑色の灰釉　三葉文に「福岡縣」を配した陽刻　紐がなく鉄分付着　遺物番号76	
Fig 12-7	13次1区北攪乱	薬莢	真鍮製	線状痕と先端が開いていることから使用されたもの	

第24表　近代遺物観察表

参考文献

小畑弘己　1997 「清銭の流入と流通」『博多研究会誌』第５号　博多研究会
九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』
小石原村教育委員会　1993 『一本杉１号古窯跡　金敷様裏３号古窯跡』小石原村文化財調査報告書第４集
小石原村教育委員会　1996 『一本杉２号古窯跡』小石原村文化財調査報告書第７集
小石原村教育委員会　2002 『松尾城跡』小石原村文化財調査報告書第８集
佐賀県肥前古陶磁窯跡保存対策連絡会　1999 『肥前古陶磁窯跡』基礎調査・基本方針策定報告書（第１分冊）
佐賀県立九州陶磁文化館　1992 『福岡の陶磁展』佐賀県立九州陶磁文化館
須恵町立歴史民俗資料館　1981 『筑前の磁器　須恵焼』須恵町教育委員会
須恵町立歴史民俗資料館　2003 『筑前の磁器　須恵焼　資料集』久我記念館
太宰府市教育委員会　1992 『大町遺跡』太宰府市の文化財第 18 集
東京都埋蔵文化財センター　2003 『汐留遺跡Ⅲ（第６分冊）』東京都埋蔵文化財センター発掘調査報告第 125 集
福岡県教育委員会　1978 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第９集』
福岡県立修猷館高等学校　1984 『図録修猷館二百年記念』
福岡市教育委員会 1986 『藤崎Ⅳ』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 138 集
福岡市教育委員会 1987 『博多Ⅶ』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 147 集
福岡市教育委員会 1991 『藤崎７』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 260 集
福岡市教育委員会 1992 『博多25』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 280 集
福岡市教育委員会 1993 『藤崎８』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 338 集
福岡市教育委員会 1993 『吉塚本町遺跡２次調査の報告』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 320 集
福岡市教育委員会 2006 『藤崎遺跡 17』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 916 集
文献出版　1977 『筑前国続風土記付録』（中巻）
山村信榮　1988 「博多出土の素焼人形」『九州考古学』第 62 号九州考古学会

図　版

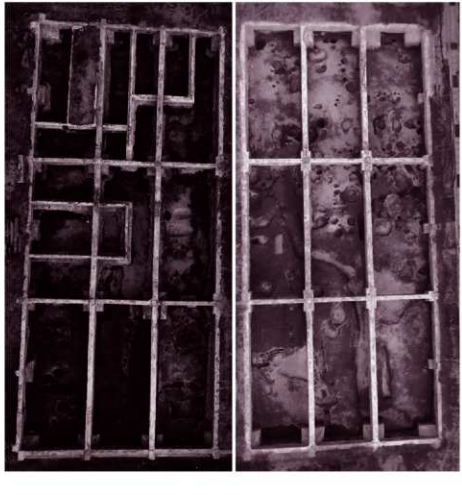
図版1

1．調査区遠景
（東から）

2．調査区近景
（南から）

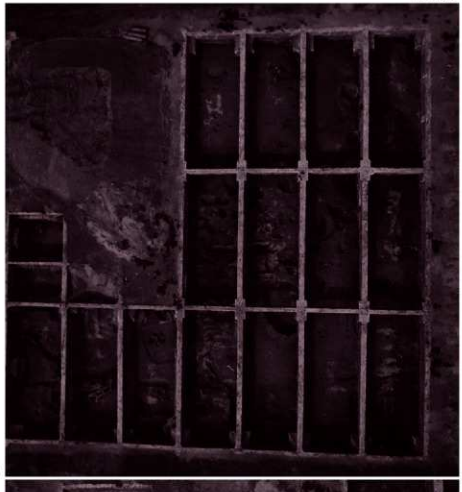
図版2

1．Ⅰ・Ⅲ区完掘状況
（上が北）



2．Ⅰ区全景（上が北）
〔左〕

3．Ⅲ区全景（上が北）
〔右〕



1．Ⅱ区全景（上が北）

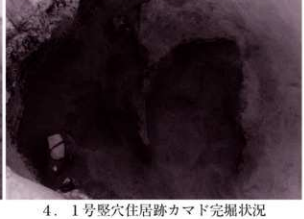
2．竪穴住居跡群全景
（上が北）

図版4

1．1号竪穴住居跡
検出状況
（南東から）

2．1号竪穴住居跡
カマド遺物出土
状況（南西から）

3．1号竪穴住居跡半島系
土器出土状況（南西から）



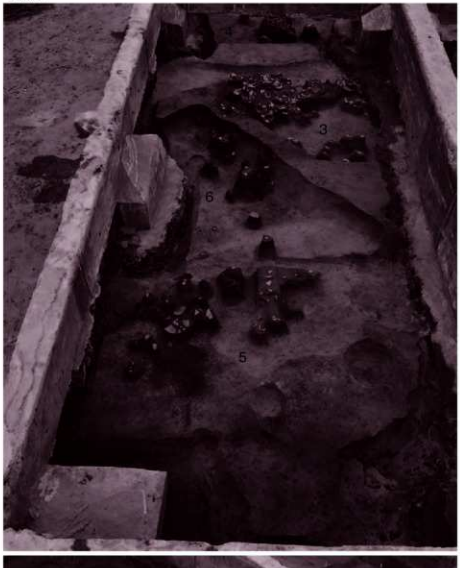
4．1号竪穴住居跡カマド完堀状況
（南西から）

1．２号竪穴住居跡
（北西から）

2．３･６号竪穴住居跡
（西から）

3．４号竪穴住居跡
（西から）

図版6



1．3・5・6号
竪穴住居跡
（南から）

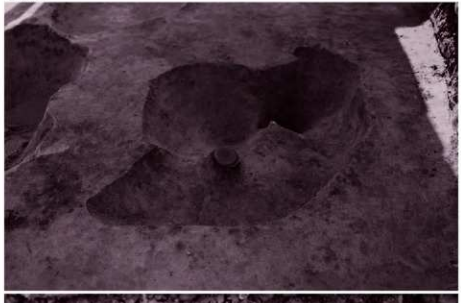
2．7号竪穴住居跡
（北東から）

1．8号竪穴住居跡
（南東から）

2．8号竪穴住居跡
カマド（南から）

3．9･10号竪穴住居跡
（南東から）

図版8



1．12 号土坑（北から）

2．15 号土坑（西から）

3．17 号土坑（北西から）

1．22 号土坑（西から）

2．23 号土坑（北から）

3．31 号土坑（南から）

図版 10

1．34 号土坑（南から）

2．42 号土坑（南西から）

3．45 号土坑（北から）

1．1・2号ピット
（北から）

2．3号ピット
（西から）

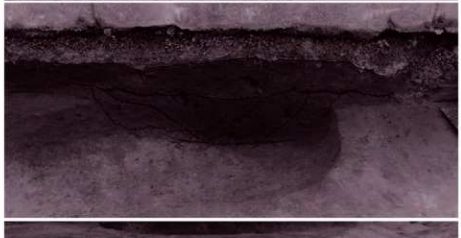
3．4号ピット（北から）

4．5号ピット（西から）

図版12

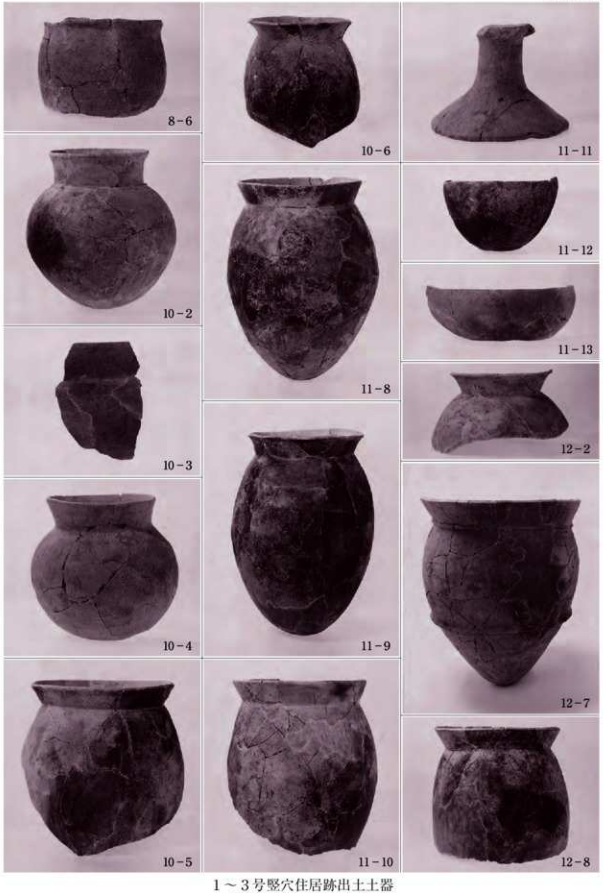
1．1号溝土層（西から）

2．2号溝土層（東から）



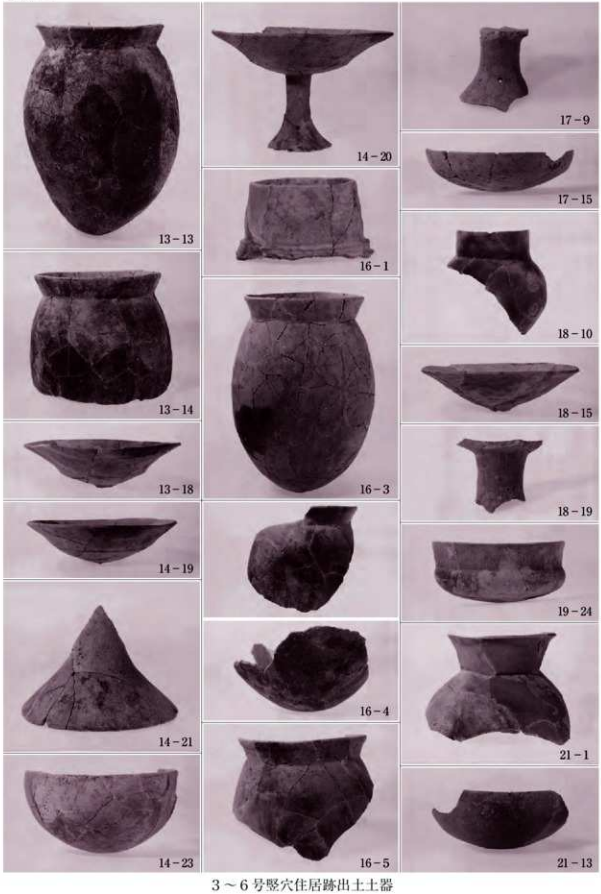
3．4号溝土層（西から）

4．6号溝土層（東から）

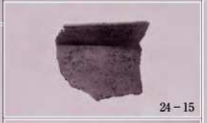


1～3号竪穴住居跡出土土器

図版 14

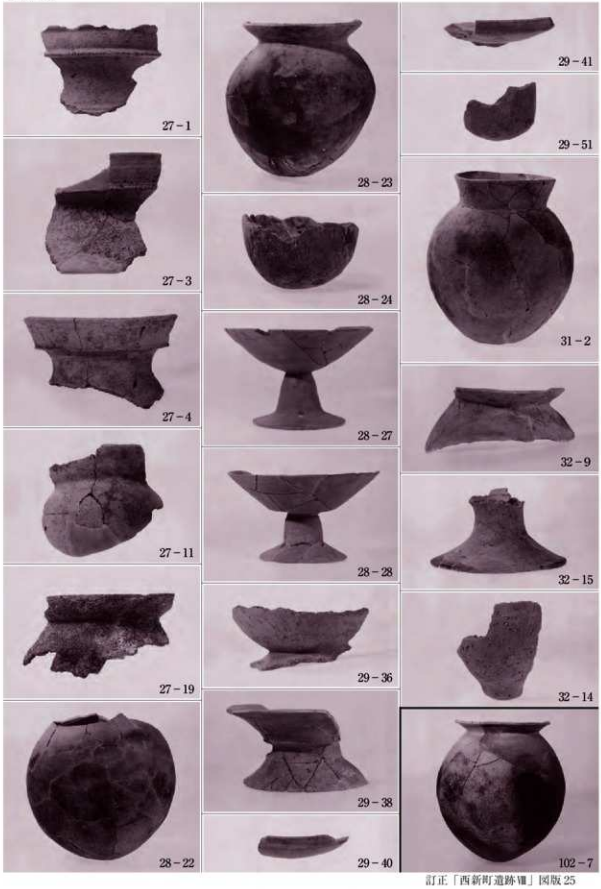


3～6号竪穴住居跡出土土器



6・7号竪穴住居跡出土土器

図版 16



訂正「西新町遺跡Ⅷ」図版 25

8・10 号竪穴住居跡及びその他の出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしじんまちいせき
書名	西新町遺跡Ⅸ
副書名	県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告
巻次	8
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第221集
編著者名	重藤輝行・吉村靖徳・秦 憲二・吉田東明・岡寺 良・大庭孝夫・平尾和久・下原幸裕
編集機関	福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）
所在地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7－7 TEL 092-651-1111 FAX 092-643-3878 E-mail kbunkazai@pref.fukuoka.lg.jp
発刊年月日	西暦 2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
西新町遺跡22次	福岡市早良区西新6-1-10	401307	0240	33°35′2″	130°21′18″	2007.11.28～2008.2.28	1,257	学校改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西新町遺跡22次	集落	弥生	竪穴住居跡8軒	土器・石器	
		古墳	竪穴住居跡2軒	土師器・飯蛸壺	カマド・半島系土器
		近世・近代	溝・井戸 土坑・ピット	陶磁器・土師器・窯道具・銭貨	地鎮遺構（慰衣埋納遺構）、高取焼関連窯道具

要約	弥生・古墳時代の竪穴住居跡群の発見により、北西部の集落域を推定する手掛りを得ることとなった。このうち古墳時代の住居跡からは畿内系・山陰系・半島系の土器が出土し、いずれも造り付けカマドを有するなど、国内外の諸地域との交流の痕跡が窺える。また、石錘・飯蛸壺などの漁撈関係遺物や、わずかながら製塩土器も出土し、日常生活の一端を垣間みることもできる。近世以降では高取焼関連の遺物が多数出土し、東皿山・西皿山との関連も想定できる。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年号 20	登録番号 7

西新町遺跡Ⅸ

福岡県文化財調査報告書　第221集

2009年(平成21年) 3月31日発行

発　行　福岡県教育委員会
〒812-8577　福岡市博多区東公園7－7
電話　092-651-1111

印　刷　久野印刷株式会社
〒812-0023　福岡市博多区奈良屋町3-1
電話　092-262-5726